博　多　85

－博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第711集

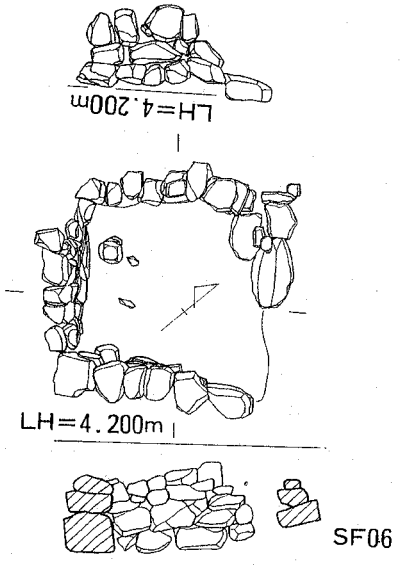
2002

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集「博多85」正誤表

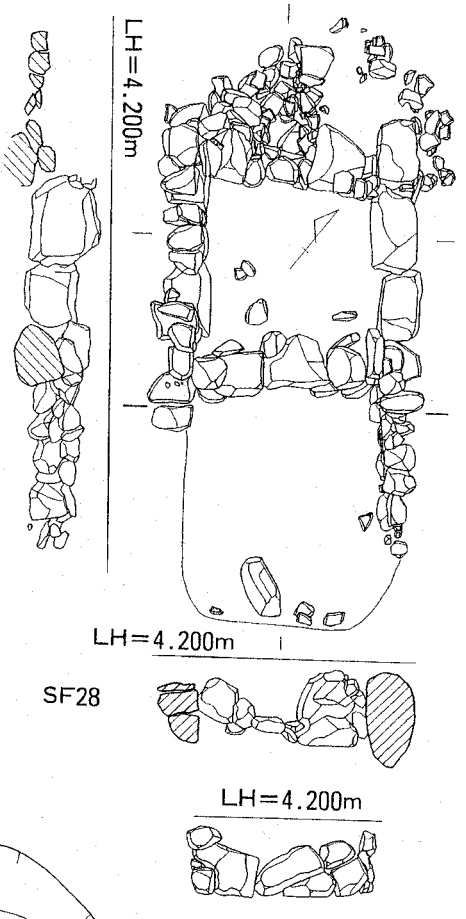
頁	行	誤	正
巻頭図版1		2. 石塁遺構A区(西から)	2. 石塁遺構B区(西から)
例言	8	石塁遺構A区の撮影は	石塁遺構B区の撮影は
67	2	第50図1は銅製の簪。頭の部分には耳かきが付き平打ちの部分には布の痕跡が残る。	第50図1は銅製で、刀子の装飾部品。部分的に布もしくは糸の痕跡が残る。
105	25	一部(A区)を博多小学校の	一部(B区)を博多小学校の

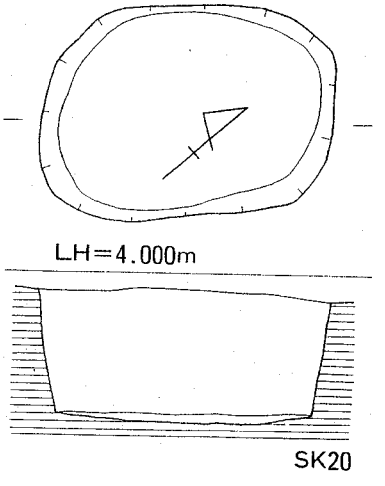
図版の訂正



38P

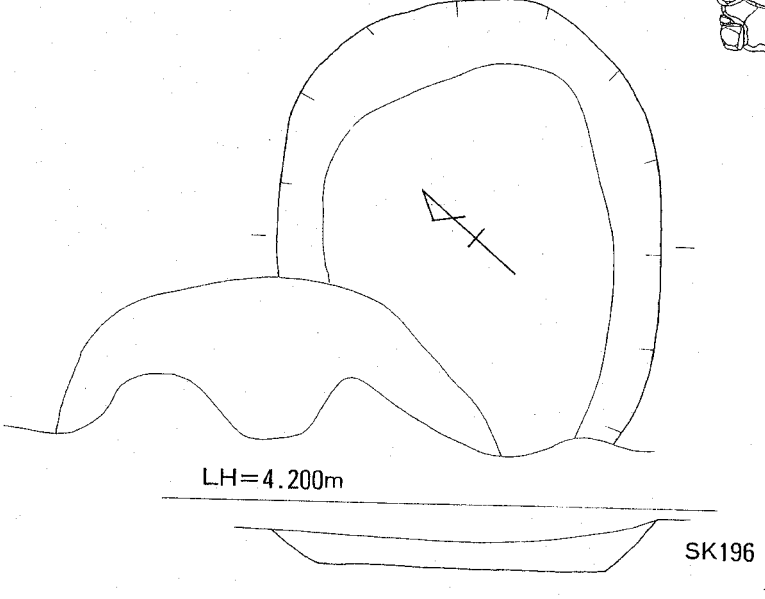
第28図　石積遺構実測図(1/40・1/60)





39P

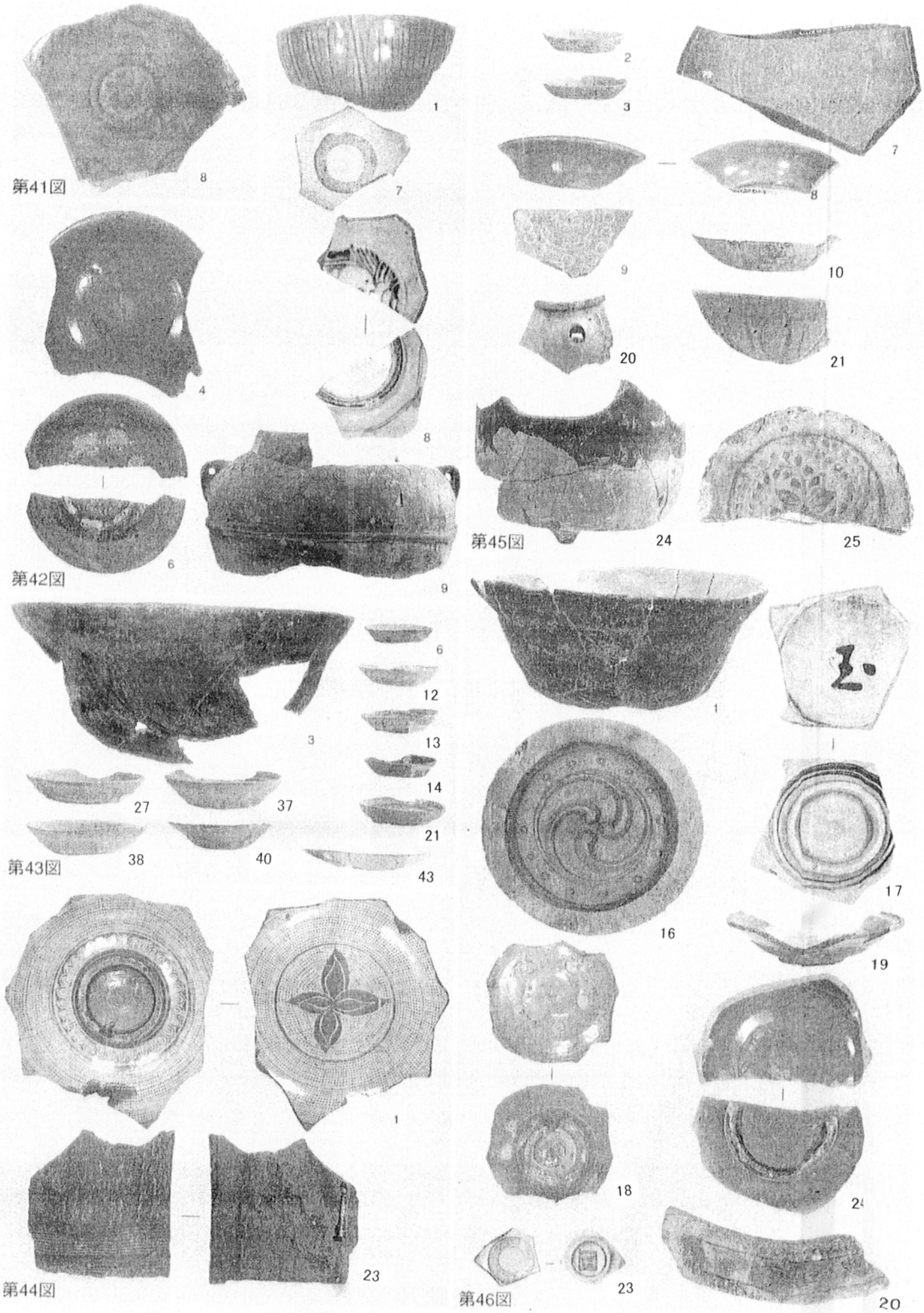
第29図　土壙実測図(1/40・1/20)



40P　第30図　SK196実測図(1/60)

83P　第64図　Ⅲ'区第1面・第2面遺構配置図(1/100)　上の図は第1面　下の図は第2面

88P　第68図　Ⅱ'区第1面・第2面遺構配置図(1/100)　左の図は第2面　右の図は第1面

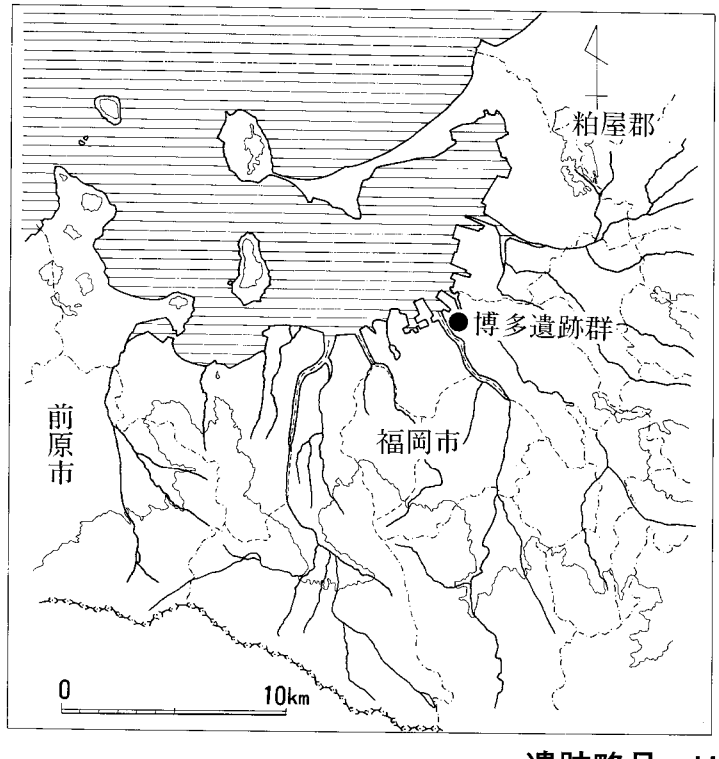


II区出土遺物(2)

博　多　85

－博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第711集



遺跡略号　HKT－111
遺跡調査番号　9836

2002

福岡市教育委員会

1．石墨遺構全景（南西から）

2．石墨遺構Ａ区（西から）

1．メダイ（表）

2．メダイ（裏）

3．メダイ・十字架鋳型

4．青花碗

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに130次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は福岡市立博多小学校建設に伴って実施された第111次調査を報告するものです。現在博多小学校が位置する息浜は鎌倉時代からその名がみえ、対外交渉の中心の一つとして、あるいはそれをめぐる度重なる戦乱の場として、歴史上非常に重要な地域です。

調査では往時の繁栄を偲ばせる輸入陶磁器や石築地などの建造物遺構が検出された他、文献で知られていた博多のキリシタンに関する遺物など多くの成果を収めることができました。遺構の一部は保存され、校内の展示室で間近に見ることができます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた関係諸機関の方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は博多小学校建設に伴い福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成10（1998）年度から翌平成11（1999）年度にかけて発掘調査を実施した福岡市博多区奈良屋町１所在の博多遺跡群第111次調査の報告である。

2．本書に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎、井上繭子の他、上野淳也、大坪滋、金子由利子、河原尚志、久保神代子、高嶋裕之、徳留大輔、土橋尚起、中井真木、西口貴志、野田経太、橋口真弓、長谷川泉、堀晴介、宮原邦江、山崎久美子、ゴチョオ・メネスが行い、石塁遺構等は株式会社パスコに委託した。撮影は空中写真を株式会社パスコ、有限会社空中写真企画に委託、他は佐藤、井上、巻頭図版の石塁遺構全景の撮影は力武卓治が行った。石塁遺構Ａ区の撮影は西園禮三氏にお願いし、撮影方法等についてご指導いただいた。遺物の実測は佐藤、井上の他、辻田淳一郎、石製品を朴性姫、文鍾根、閔ソリ、趙ウンジが行った。撮影は佐藤、井上が行った。

3．製図は、遺構・石製品を埋蔵文化財課の上角智希、遺構を石水久美子、前野みさき、谷直子、井上、Ⅰ区、Ⅳ区の土器・陶磁器を佐藤、Ⅱ区、Ⅲ区の遺物を山口とし子、井上が行った。

4．本書の執筆はⅢ－２～８を井上が、他と編集は佐藤が行った。また、附篇を九州産業大学教授河野忠臣先生、正栄建装株式会社にお願いした。

5．本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	９８３６		遺跡略号	ＨＫＴ－111	
調査地地籍	博多区奈良屋町１		分布地図番号	天神４９	
開発面積	9,000㎡	対象面積	4,800㎡	調査面積	4,800㎡
調査期間	1998年10月１日～1999年10月７日				

本文目次

Ⅰ．はじめに
1　調査にいたる経過……1
2　調査の組織……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……3
Ⅲ．遺構と遺物
1　Ⅰ区の調査……6
検出遺構……6
出土遺物……19
2　Ⅱ区・Ⅲ区の調査概要……31
調査経過……31
層　　序……33
3　Ⅱ区の調査……34
Ⅱ区の概要……34
第1面検出遺構……34
第2面検出遺構……40
第3面検出遺構……45
第1面検出遺構の出土遺物……45
第2面検出遺構の出土遺物……57
第3面検出遺構の出土遺物……63
その他の遺構出土遺物……63
包含層・その他出土遺物……67
4　Ⅲ区の調査……71
Ⅲ区の概要……71
第1面検出遺構……71
第2面検出遺構……75
Ⅲ区出土遺物……78
5　Ⅲ′区の調査……84
検出遺構……84
Ⅲ′区出土遺物……84
6　Ⅱ′区の調査……87
Ⅱ′区の概要……87
第1面検出遺構……87
第2面検出遺構……87
Ⅱ′区出土遺物……89
7　石塁遺構……96
概要……96
層序……96
各ブロックの概要……98
まとめ……101
出土遺物……101
8　小　　結……105
9　Ⅳ区の調査……115
検出遺構……115
出土遺物……119
小　　結……137
附篇
博多小学校敷地内発見の石塁遺構を構成する石質調査報告　九州産業大学工学部教授　河野忠臣　…147
石塁遺構保存処置施工記録　正栄建装株式会社……157

挿　図　目　次

第１図　博多遺跡群発掘調査地域図……2
第２図　博多遺跡群第111次調査地域周辺図（1/2000）……3
第３図　調査区域の設定（1/1000）……5
第４図　Ⅰ区Ⅱ層上面近世・近代遺構配置図（1/200）……7
第５図　Ⅰ区Ⅱ層下面遺構配置図（1/150）……8
第６図　Ⅰ区東南壁土層実測図（1/40）……9
第７図　石積遺構実測図〔１〕（1/40）……10
第８図　石積遺構実測図〔２〕（1/40）……11
第９図　石積遺構実測図〔３〕（1/40）……12
第10図　石積遺構実測図〔４〕（1/40）……14
第11図　石積遺構実測図〔５〕（1/40）……15
第12図　石基礎建物実測図〔１〕（1/40）……16
第13図　石基礎建物実測図〔２〕（1/40）……17
第14図　土坑実測図（1/20）……18
第15図　遺構出土遺物実測図〔１〕（1/3）……21
第16図　遺構出土遺物実測図〔２〕（1/3）……23
第17図　ＳＫ104出土遺物実測図（1/3）……25
第18図　包含層出土遺物実測図〔１〕（1/3）……26
第19図　包含層出土遺物実測図〔２〕（1/3）……27
第20図　石製品・土製品実測図（1/3・1/4）……28
第21図　軒丸瓦拓影・実測図（1/4）……29
第22図　Ⅱ区・Ⅲ区グリッド図（1/500）……31
第23図　調査区土層実測図〔１〕（1/100）……32
第24図　調査区土層実測図〔２〕（1/100）……33
第25図　Ⅱ区第１面遺構配置図（1/200）……35
第26図　Ⅱ区第２面遺構配置図（1/200）……36
第27図　Ⅱ区第３面遺構配置図（1/200）……37
第28図　石積遺構実測図（1/40・1/60）……38
第29図　土壙実測図（1/40・1/20）……39
第30図　ＳＫ196実測図（1/60）……40
第31図　集石遺構実測図（1/20・1/30・1/40）……42
第32図　井戸実測図（1/60）……43
第33図　土壙実測図（1/20・1/40）……44
第34図　掘立柱建物実測図（1/60）……45
第35図　溝実測図（1/60・1/100）……46
第36図　ＳＦ06出土遺物実測図（1/3）……48
第37図　ＳＦ26・ＳＦ27出土遺物実測図（1/3・1/4）……49
第38図　ＳＦ27・ＳＦ28出土遺物実測図（1/3・1/4）……50
第39図　ＳＦ28・ＳＦ56出土遺物実測図（1/3・1/4）……51
第40図　ＳＫ20出土メダイ・十字架鋳型実測図（1/1）……53
第41図　土壙出土遺物実測図（1/3・1/4）……54
第42図　ＳＫ64出土遺物実測図〔１〕（1/3）……55
第43図　ＳＫ64出土遺物実測図〔２〕（1/3）……56
第44図　ＳＫ196出土遺物実測図（1/3・1/4）……58
第45図　集石遺構出土遺物実測図（1/3・1/4）……59

第46図　ＳＫ938・井戸出土遺物実測図（1/3・1/4）……60
第47図　井戸・土壙・ピット出土遺物実測図（1/3・1/4）……61
第48図　溝出土遺物実測図（1/3）……62
第49図　遺構出土遺物実測図〔１〕（1/3）……64
第50図　遺構出土遺物実測図〔２〕（1/3）……65
第51図　遺構出土遺物実測図〔３〕（1/4）……66
第52図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）……68
第53図　遺構面出土遺物実測図〔１〕（1/3・1/4）……69
第54図　遺構面出土遺物実測図〔２〕（1/3）……70
第55図　Ⅲ区第１面遺構配置図（1/150）……72
第56図　Ⅲ区第２面遺構配置図（1/150）……73
第57図　集石遺構実測図（1/50・1/40）……74
第58図　土壙実測図（1/20・1/40）……75
第59図　石積遺構・土壙実測図（1/20・1/40）……76
第60図　土壙実測図（1/40）……77
第61図　集石遺構出土遺物実測図（1/3）……79
第62図　石積遺構・土壙出土遺物実測図（1/3）……80
第63図　包含層出土遺物実測図（1/3）……81
第64図　Ⅲ′区第１面・第２面遺構配置図（1/100）……83
第65図　遺構実測図（1/40）……84
第66図　Ⅲ′区出土遺物実測図〔１〕（1/3）……85
第67図　Ⅲ′区出土遺物実測図〔２〕（1/3・1/4）……86
第68図　Ⅲ′区第１面・第２面遺構配置図（1/150）……88
第69図　第１面遺構実測図（1/40）……89
第70図　石積遺構・土壙実測図（1/40）……90
第71図　遺構出土遺物実測図（1/3）……92
第72図　包含層出土遺物実測図〔１〕（1/3）……93
第73図　包含層出土遺物実測図〔２〕（1/3）……94
第74図　遺構面出土遺物実測図（1/3・1/2）……95
第75図　石墨遺構配置図（1/500）……96
第76図　石墨遺構実測図（1/100）……折り込み
第77図　石墨遺構関係土層実測図（1/80）……97
第78図　石墨遺構Ａ区実測図（1/60）……98
第79図　石墨遺構Ｂ区実測図（1/60）……99
第80図　石墨遺構Ｃ・Ｄ・Ｅ区実測図（1/60）……100
第81図　石墨遺構関係出土遺物実測図（1/3）……102
第82図　土層ベルト出土遺物実測図（1/3）……103
第83図　今津元寇防墨断面図（1/100）……105
第84図　Ⅳ区Ⅱ層上面遺構配置図（1/150）……109
第85図　Ⅳ区Ⅱ層下面遺構配置図（1/200）……110
第86図　Ⅳ区東北壁土層実測図（1/40）……111
第87図　ＳＤ156溝土層断面実測図（1/40）……112
第88図　井戸実測図（1/40）……113
第89図　土坑実測図〔１〕（1/20）……114
第90図　土坑実測図〔２〕（1/40・1/20）……116
第91図　柱列・掘建柱建物実測図〔１〕（1/60）……117
第92図　柱列・掘建柱建物実測図〔２〕（1/60）……118
第93図　遺構出土遺物実測図〔１〕（1/3）……121

第94図　ＳＤ156出土遺物実測図〔１〕(1/3) ……122
第95図　ＳＤ156出土遺物実測図〔２〕(1/3) ……123
第96図　ＳＤ156〔３〕・遺構〔２〕出土遺物実測図 (1/3) ……124
第97図　遺構出土遺物実測図〔３〕(1/3) ……125
第98図　遺構出土遺物実測図〔４〕(1/3) ……127
第99図　遺構出土遺物実測図〔５〕(1/3) ……129
第100図　包含層出土遺物実測図 (1/3) ……131
第101図　石製品・土製品・金属製品実測図 (1/3) ……132
第102図　軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図 (1/4) ……133

図　版　目　次

図版１　（１）Ⅰ区全景（空中写真）　（２）Ⅰ区全景（北東から）
図版２　（１）Ⅰ区全景（西から）　（２）ＳＦ26石積遺構（南東から）
（３）ＳＦ27石積遺構（北から）　（４）ＳＦ27石積遺構（西から）
図版３　（１）ＳＦ31石積遺構（南西から）　（２）ＳＦ31石積遺構（北西から）
（３）ＳＦ32・74石積遺構（南から）　（４）ＳＦ32石積遺構（南から）
図版４　（１）ＳＦ32石積遺構（東から）　（２）ＳＦ39石積遺構（南から）
（３）ＳＦ40石積遺構（北東から）　（４）ＳＦ40石積遺構（東から）
図版５　（１）ＳＦ41石積遺構（西から）　（２）ＳＦ55石積遺構（北東から）
（３）ＳＦ75・76・55石積遺構（南から）　（４）ＳＦ67・73石積遺構（南から）
図版６　（１）ＳＦ67石積遺構（西から）　（２）ＳＦ73石積遺構（南から）
（３）ＳＦ74石積遺構（南から）　（４）ＳＦ74石積遺構（東から）
図版７　（１）ＳＦ75石積遺構（南から）　（２）ＳＦ80石積遺構（南から）
（３）ＳＦ81石積遺構（南から）　（４）ＳＦ81石積遺構（東から）
図版８　（１）ＳＦ81石積遺構（西から）　（２）ＳＦ82石積遺構（南西から）
（３）ＳＦ82遺物出土状況（南西から）　（４）ＳＦ86石積遺構（南東から）
図版９　（１）ＳＦ87石積遺構（南東から）　（２）ＳＦ87石積遺構（北東から）
（３）ＳＦ88石積遺構（北東から）　（４）ＳＦ96石積遺構（北東から）
図版10　（１）ＳＦ99石積遺構（北から）　（２）ＳＦ99石積遺構（北東から）
（３）ＳＦ89石積遺構（南東から）　（４）ＳＦ106石積遺構（南東から）
図版11　（１）ＳＦ106石積遺構（北東から）　（２）ＳＦ110石積遺構（南東から）
（３）ＳＦ110石積遺構（南東から）　（４）ＳＦ110石積遺構（南西から）
図版12　（１）ＳＦ122石積遺構（北東から）　（２）Ⅰ区南東壁面Ｄ区土層（西から）
（３）ＳＥ126井戸（南から）　（４）ＳＥ127井戸（南東から）
図版13　（１）ＳＫ103土坑（南西から）　（２）ＳＫ104遺物出土状況（西から）
図版14　（１）ＳＢ16石基礎（南から）　（２）ＳＢ16石基礎掘り方（南から）
（３）ＳＢ16石基礎断面（北から）
図版15　（１）ＳＢ79石基礎・ＳＦ82石積遺構（北西から）
（２）ＳＢ79石基礎・ＳＦ82石積遺構（南西から）
図版16　（１）ＳＢ79石基礎断面Ａ（東から）　（２）ＳＢ79石基礎断面Ｂ（東から）
（３）ＳＢ79石基礎断面Ｃ（南から）　（４）ＳＢ79石基礎断面Ｄ（南から）
図版17　（１）Ⅳ区全景（南東から）　（２）Ⅳ区全景（空中写真）
図版18　（１）ＳＤ156溝（南東から）　（２）ＳＤ156溝土層（南東から）
（３）ＳＫ163土坑（南西から）　（４）ＳＸ193石積遺構（北東から）
図版19　（１）ＳＥ140井戸上面（南東から）　（２）ＳＥ140井戸土層（南東から）
（３）ＳＥ140井戸（東から）　（４）ＳＥ140井戸（南東から）

図版20　（1）ＳＥ141井戸（南西から）　（2）ＳＥ141井戸土層（南西から）
（3）ＳＥ147井戸（南東から）　（4）ＳＥ148井戸土層（北西から）
図版21　（1）ＳＥ155井戸上面（北から）　（2）ＳＥ155井戸（北から）
（3）ＳＥ162井戸上面（東から）　（4）ＳＥ162井戸（北東から）
図版22　（1）ＳＥ179井戸上面（北から）　（2）ＳＥ211井戸（北西から）
（3）ＳＦ149石積遺構（南東から）　（4）Ⅳ区南東壁面土層（西から）
図版23　（1）Ⅳ区掘立柱建物群（空中写真）　（2）Ⅳ区南側掘立柱建物群（空中写真）
図版24　（1）Pit202石積遺構（南西から）　（2）Pit292石積遺構（東から）
図版25　（1）ＳＸ195石積遺構（南東から）　（2）ＳＸ185石積遺構（東から）
図版26　（1）ＳＫ150土坑土層（南西から）　（2）ＳＫ151土坑（南西から）
（3）ＳＫ158a土坑土層（南西から）　（4）ＳＫ158b土坑（北東から）
図版27　Ⅰ区遺構出土遺物
図版28　Ⅰ区包含層出土遺物･石製品･土製品･金属製品
図版29　Ⅰ区出土石臼･瓦
図版30　Ⅳ区遺構（1）出土遺物
図版31　ＳＤ156（1）出土遺物
図版32　ＳＤ156（2）・Ⅳ区遺構（2）出土遺物
図版33　Ⅳ区遺構（3）出土遺物
図版34　Ⅳ区包含層出土遺物
図版35　Ⅳ区出土石製品
図版36　Ⅳ区出土石製品・土製品・金属製品
図版37　Ⅳ区出土瓦
図版38　Ⅳ区出土白磁
図版39　Ⅰ・Ⅳ区出土青花（1）
図版40　Ⅰ・Ⅳ区出土青花（2）・朝鮮王朝陶器
図版41　（1）Ⅱ区第1面全景（南東から）　（2）Ⅱ区第2面南西側（南東から）
（3）Ⅱ区第2面北東側（南東から）
図版42　（1）ＳＦ06（北東から）　（2）ＳＦ56（北東から）
（3）ＳＦ26（北西から）　（4）ＳＦ27（北東から）
（5）ＳＦ28（南東から）　（6）ＳＫ59（南から）
（7）ＳＫ64（北西から）　（8）ＳＫ63（南から）
図版43　（1）ＳＦ793（北東から）　（2）ＳＦ1019（南東から）
（3）ＳＸ853（南東から）　（4）ＳＸ1030（北西から）
（5）ＳＸ821（南西から）　（6）ＳＸ816（南西から）
（7）ＳＸ938（南西から）　（8）ＳＥ1083（南東から）
（9）ＳＥ1084（西から）　（10）ＳＥ811（北西から）
（11）ＳＥ1100（北から）
図版44　（1）ＳＫ876（北から）　（2）ＳＰ39（北西から）
（3）Ⅱ区第3面Ｈ・Ｉ－9・10区（南から）　（4）ＳＤ1071上面（南から）
（5）ＳＤ1071（北から）　（6）Ⅲ区第1面Ｄ－9・10区（北から）
（7）Ⅲ区第1面Ｄ－10・11区（北西から）　（8）Ⅲ区第1面Ｃ－10区（北から）
図版45　（1）Ⅲ区第2面Ｅ－10区（南東から）　（2）Ⅲ区第2面Ｄ－10・11区（南東から）
（3）Ⅲ区第2面Ｃ－10区（北から）　（4）Ⅲ区第2面Ａ・Ｂ－10区（南西から）
（5）ＳＸ23（南西から）　（6）ＳＸ90（南から）
（7）ＳＸ49（北から）　（8）ＳＫ79（南から）
図版46　（1）ＳＦ153（北東から）　（2）ＳＦ152（南東から）
（3）ＳＫ81（北から）　（4）ＳＥ27（東から）
（5）ＳＫ107（北西から）　（6）ＳＫ20（北西から）

（7）ＳＫ25（北西から）　（8）ＳＫ148（東から）
図版47　（1）Ⅲ′区第１面全景（南西から）　（2）Ⅲ′区第２面Ｃ－９区（北西から）
（3）Ⅲ′区第２面Ｄ－９区（北西から）　（4）ＳＸ15（南から）
（5）ＳＸ16（南東から）　（6）Ⅱ′区第１面全景（南西から）
（7）Ⅱ′区第２面全景（南西から）　（8）ＳＸ25（西から）
（9）ＳＫ101（南西から）　(10) ＳＫ22（西から）
図版48　（1）ＳＦ64（北西から）　（2）ＳＦ64（南西から）
（3）ＳＦ62（南西から）　（4）ＳＸ86（北東から）
（5）ＳＫ65（北西から）　（6）ｆ－ｆ′土層断面（南から）
（7）ｇ－ｇ′土層断面（北から）　（8）ｈ－ｈ′土層断面（北から）
（9）ｉ－ｉ′土層断面（北から）　(10) ｊ－ｊ′土層断面（南西から）
(11) ｋ－ｋ′土層断面（北から）　(12) ｌ－ｌ′土層断面（北から）
(13) ｍ－ｍ′土層断面（北から）
図版49　（1）石墨遺構（南西から）　（2）石墨遺構と遠景（南西から）
（3）石墨遺構（東から）
図版50　（1）石墨遺構Ａ（西から）　（2）石墨遺構Ａ（南東から）
（3）石墨遺構Ａ（南西から）　（4）石墨遺構Ａ階段状部分（北西から）
（5）石墨遺構Ａ（北東から）
図版51　（1）石墨遺構Ａ・Ｂ（東から）　（2）石墨遺構Ｂ（北東から）
（3）石墨遺構Ｂ（西から）　（4）石墨遺構Ｂ石積状況（西から）
（5）石墨遺構Ｂ（東から）
図版52　（1）石墨遺構Ｃ・Ｄ・Ｅ（東から）　（2）石墨遺構Ｃ・Ｄ・Ｅ（南西から）
（3）石墨遺構Ｃ（南東から）　（4）石墨遺構Ｃ（西から）
（5）石墨遺構Ｄ（西から）　（6）石墨遺構Ｅ（南東から）
図版53　Ⅱ区出土遺物（1）
図版54　メダイ・十字架鋳型顕微鏡写真
図版55　Ⅱ区出土遺物（2）
図版56　Ⅱ区出土遺物（3）
図版57　Ⅲ区・Ⅲ′区・Ⅱ′区出土遺物
図版58　Ⅱ′区・石墨遺構関係出土遺物

表　目　次

第１表　Ⅰ区出土土器計測表……30
第２表　メダイ・十字架出土地名一覧表 ……106
第３表　出土古銭一覧表（1）……107
第４表　出土古銭一覧表（2）……108
第５表　Ⅳ区出土土器計測表（1）……139
第６表　Ⅳ区出土土器計測表（2）……140
第７表　出土古銭一覧表（3）……141
第８表　出土古銭一覧表（4）……142
第９表　出土古銭一覧表（5）……143
第10表　出土古銭一覧表（6）……144
第11表　出土古銭一覧表（7）……145
第12表　出土古銭一覧表（8）……146
第13表　出土古銭一覧表（9）……140

Ⅰ はじめに

1　調査にいたる経過

1997年（平成９年）、教育委員会施設課から本課に対して博多区奈良屋町における小学校建築に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の北部にあたり、息浜に位置する。申請地の周囲ではビル建設に伴う発掘調査が行われている。埋蔵文化財課はこれを受けて1997年（平成９年）８月27日に試掘調査を実施した。試掘調査は旧校舎が解体される前に重機搬入が可能な校庭の一部を選定して行われた。調査の結果、現地表面下0.7～1.0ｍまでは撹乱が及び、その下層で遺物包含層、2.1ｍで基盤の砂層を確認した。申請地は戦国末の豪商神屋宗湛屋敷跡の周囲と考えられている場所である。申請部局と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、宗湛屋敷跡とされるグラウンド部分は除外し、校舎が新たに建設される部分を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

調査は翌1998（平成10）年10月１日から翌1999（平成11）年10月７日まで行われた。

2　調査の組織

調査委託　福岡市教育委員会

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
調査第２係長　　力武卓治

庶務担当　文化財整備課　谷口真由美（前任）　御手洗清（現任）

調査担当　試掘調査　杉山富雄　中村啓太郎
発掘調査　佐藤一郎　井上繭子

発掘調査・資料整理協力者　有田恵子・石川洋子・泉本タミ子・伊藤美知子・伊藤美伸・乾俊夫・大串綾・尾花憲吾・大崎宏之・笠置美奈子・金子由利子・木村真理・木山啓子・桑原美津子・高着一夫・坂下達男・指山歌子・志堂寺堂・柴田勝子・柴田春代・柴田博・嶋ヒサ子・杉村文子・田中トミ子・田原キヌエ・為房紋子・陳洪・土斐崎初栄・砥板春美・西尾タツヨ・西田文子・西牟田佳代・能美須賀子・林厚子・原幸子・播磨博子・平井和子・吹春憲治・藤井彰・藤原直子・北條こず江・堀川ヒロ子・松井フユ子・水野由美子・宮原邦江・持丸玲子・森田祐子・森本良樹・山口慶子・萬スミヨ・脇坂レイ子・土橋尚起・峯不二夫・三瀬大輔・門司弘子・吉田恭子・吉田米男・古田容子・相川和子・穴井加菜子・石水久美子・川田京子・桑野綾子・坂井かおり・佐々木涼子・藤信子・橋本麻里・前野みさき・牧野ミワ・山口とし子

その他、発掘調査に至るまで諸々の条件整備、調査中の調整等について関係部局の方々をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

第１図　博多遺跡群発掘調査地域図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

博多遺跡群は博多湾沿いに連なる古砂丘、那珂川右岸下流域に位置する弥生時代中期から近世にいたる複合遺跡である。その範囲は南北約1.5km、東西約0.8kmを測る。弥生時代中期から集落が営まれ、蒙古襲来以降は鎮西探題が設置され、大宰府にかわる九州の中心となる。その度重なる戦乱、復興を経て、近世初めに長崎に国際貿易都市の座を明け渡すまで繁栄を誇っていた。

調査地は那珂川下流右岸、博多遺跡群の北側に当たり、息浜（おきのはま）（沖浜）に位置する。息浜は那珂郡に属し、鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」にその名が初見する。博多湾沿岸の砂州が次第に発達し陸地化した、博多遺跡群の中では新興地である。1316（正和５）年には月堂宗規が禅宗寺院妙楽寺を創建した。1333（元弘３）年８月に鎮西探題攻略に功があった大友貞宗が建武政権から息浜を恩賞として与えられて以降、大友氏は対外貿易港として繁栄した博多に深く関わるようになる。1346（貞和２）年には鎮西管領一色範氏の愁訴により息浜を含む博多全体が鎮西管領在所に指定され、大友氏は替地となる。1350（貞和６）年３月には中国船が息浜津に着岸の記事がみえ、息浜も対外交渉の拠点の一つとなっている。妙楽寺は1452（宝徳３）年の遣明船派遣の際、博多における根拠地となっている。息浜は室町時代には再び大友氏領となり、戦国時代も引き続き領有するものの大内氏とは領有をめぐって抗争を度重ねていた。1555（弘治元）年の陶晴賢、1557（同３）年の大内義長の滅亡によって、大友氏は筑前一国をも領有し、博多全体を1587（天正15）年の秀吉の博多直轄領化まで支配することとなる。

第２図　博多遺跡群第111次調査地域周辺図（1/2000）

16世紀後半は1559（永禄２）年の筑紫惟門、1580（天正８）年の龍造寺氏、1586（天正14）年の島津氏などの相次ぐ侵入によって、博多は焼失、復興を繰り返してきた。発掘調査で度々確認されている焼土層はそれらの戦乱に因るものであろう。今後調査例の蓄積とともにその面的な広がりを追い、出土遺物の検討による時期決定等の過程を経て、その焼土層がいずれの乱に因るのものであるかキー層として把握されることとなるであろう。

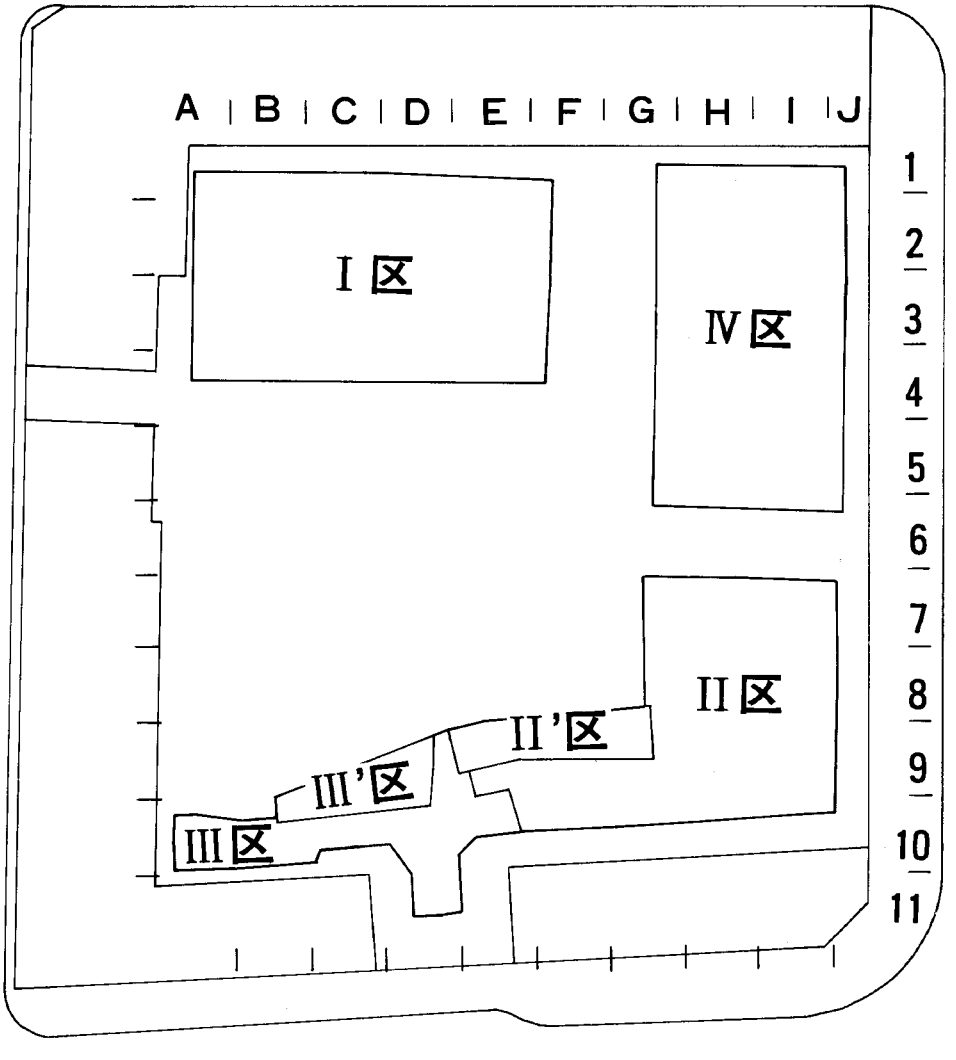
大友宗麟はキリシタン大名としてキリスト教を保護するとともに、博多においてもイエズス会に教会用地を寄進している。

1587（天正15）年、豊臣秀吉は島津氏平定後、戦乱で疲弊した博多の復興を命ずる。朝鮮出兵へ向けての兵站基地整備の性格が大きい。博多の豪商神屋宗湛、島井宗室らの援助によるところが大きい。

参考文献

川添昭二編「よみがえる中世Ⅰ　東アジアの国際都市」1988平凡社
川添昭二「中世九州の政治と文化」1981文献出版
川添昭二「対外関係の史的展開」1996文献出版
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典』四〇1988角川書店

調査区割の設定　博多遺跡群一帯は都市化が進み、基幹道路を中心に基本的にはN－45°－Wに方位を取る街区から構成されている。博多遺跡群第111次調査地は奈良屋町の街区の一つに属している。本調査地が位置する息浜東北部では「太閤町割り」を基本的に踏襲した現況の町割り方位の遺構が検出されることが今までの周辺の調査例から予想されることから、北西・南東辺に沿って西からアルファベットA～Jを、北東・南西辺に沿って北からアラビア数字1～11と10mグリットに分割し、包含層の遺物取り上げもそれに拠っている（第3図参照）。



第3図　調査区域の設定（1/1000）

Ⅲ　遺構と遺物

1　Ⅰ区の調査

検出遺構

SF26石積遺構（第７図　図版２）

Ⅱ層下面、Ｃ－４で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.25ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.75ｍを測る。腰石は40×30×20㎝ほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。南東隅はSF27構築の際に破壊を受けている。主軸の方位はＮ－30°－Ｗに取る。

SF27石積遺構（第７図　図版２）

Ⅱ層下面、Ｃ・Ｄ－４で検出した石積遺構で、長さ0.8ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.7ｍを測る。腰石は40×30×20㎝ほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。主軸の方位はＮ－25°－Ｅに取る。

SF31石積遺構（第７図　図版３）

Ⅱ層下面、Ａ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.45ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。10～20㎝の礫を３段積み上げている。南東隅は破壊を受けている。主軸の方位はＮ－37°－Ｗに取る。

SF32石積遺構（第７図　図版３・４）

Ⅱ層下面、Ａ－２で検出した石積遺構で、長さ0.75ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.7ｍを測る。20～30㎝の礫を６段積み上げている。主軸の方位はＮ－35°－Ｗに取る。

SF38石積遺構（第７図）

Ⅱ層下面、Ａ・Ｂ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.7ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.4ｍを測る。10～20㎝の礫を５段積み上げている。主軸の方位はＮ－31°－Ｗに取る。

SF39石積遺構（第７図　図版４）

Ⅱ層下面、Ｂ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.0ｍ、幅1.15ｍ、深さ0.4ｍを測る。腰石は40×20×10㎝ほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。主軸の方位はＮ－35°－Ｗに取る。

SF40石積遺構（第８図　図版４）

Ⅱ層下面、Ｂ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.2ｍ、幅0.95ｍ、深さ0.3ｍを測る。腰石は40×20×30㎝ほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。北東隅は破壊を受けている。主軸の方位はＮ－36°－Ｗに取る。

SF41石積遺構（第８図　図版５）

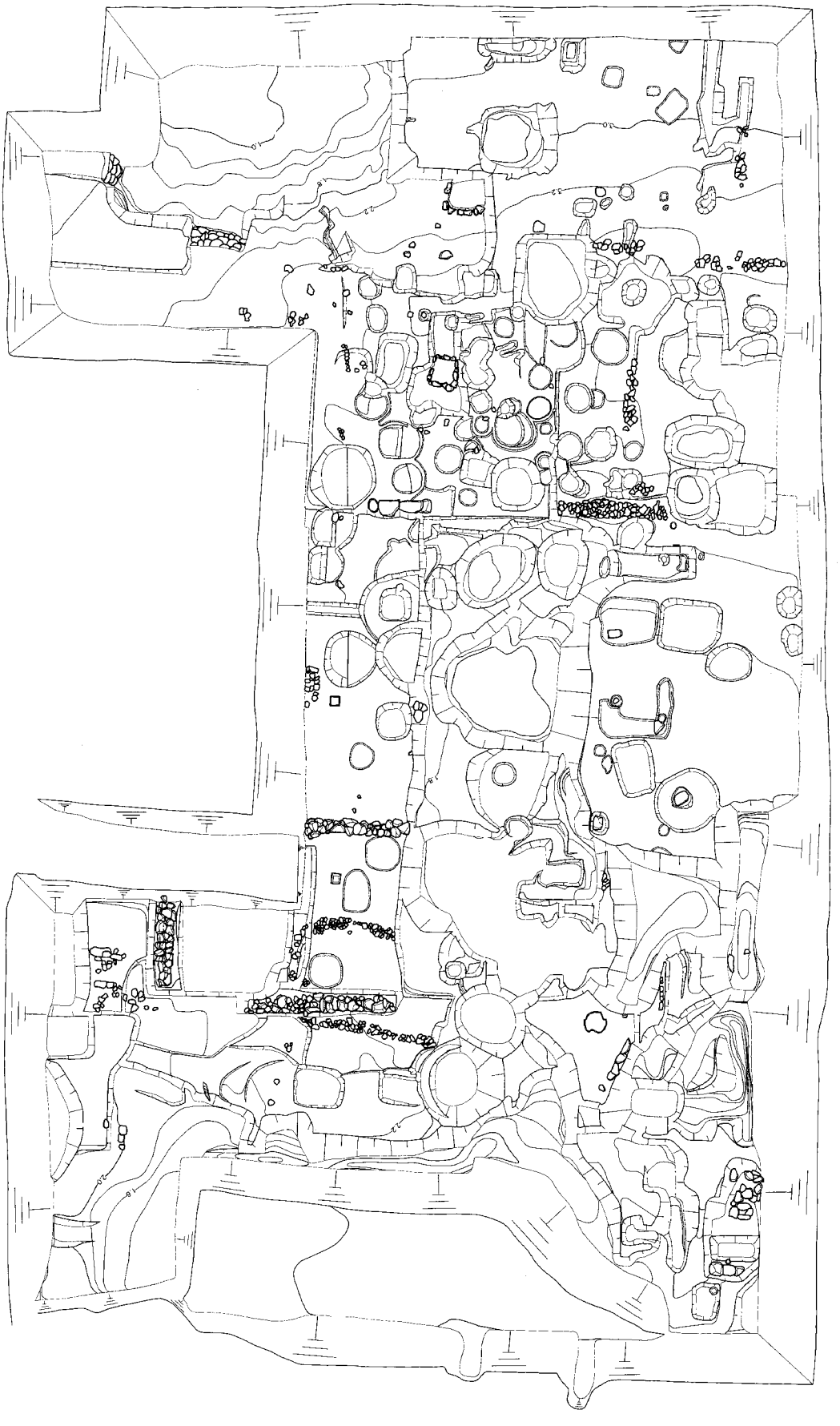
Ⅱ層下面、Ｂ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.9ｍ、幅1.05ｍ、深さ0.45ｍを測る。腰石は30×20×15㎝ほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。南西隅は撹乱を受けている。主軸の方位はＮ－42°－Ｗに取る。

SF65石積遺構（第８図）

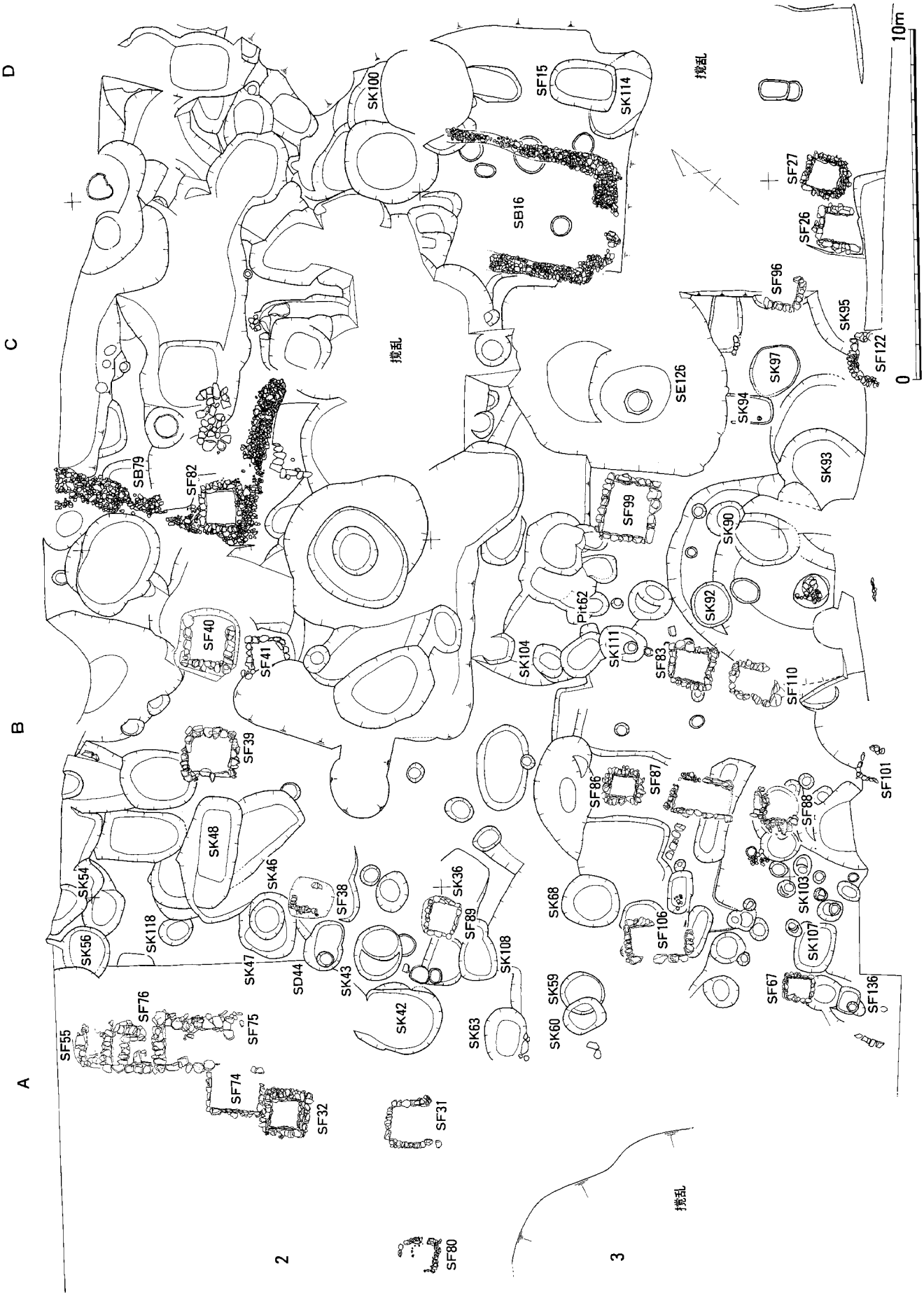
Ⅱ層下面、Ａ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.95ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.5ｍを測る。20～40㎝の礫を４段積み上げている。南東隅は撹乱を受けている。主軸の方位はＮ－32°－Ｗに取る。

SF67石積遺構（第８図　図版５・６）

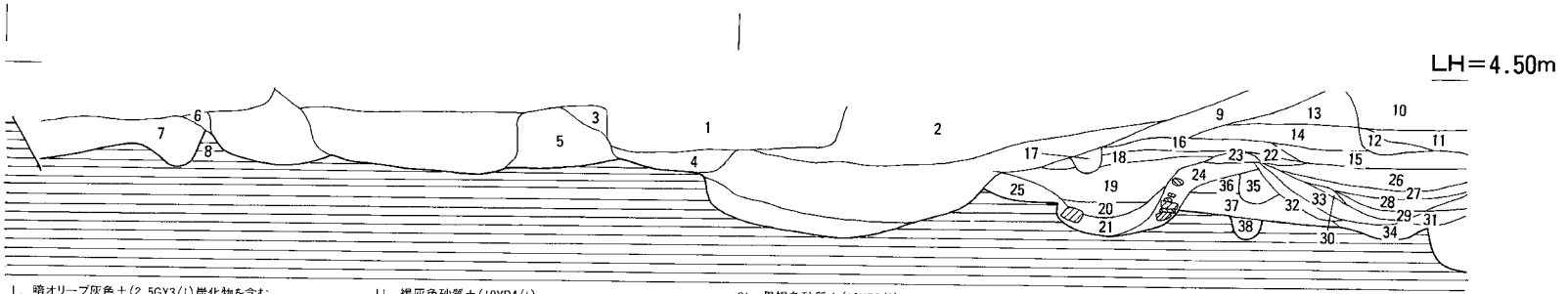
Ⅱ層下面、Ａ－３・４で検出した石積遺構で、長さ0.65ｍ、幅0.55ｍ、深さ0.3ｍを測る。10～15㎝の礫を３段積み上げている。主軸の方位はＮ－35°－Ｗに取る。



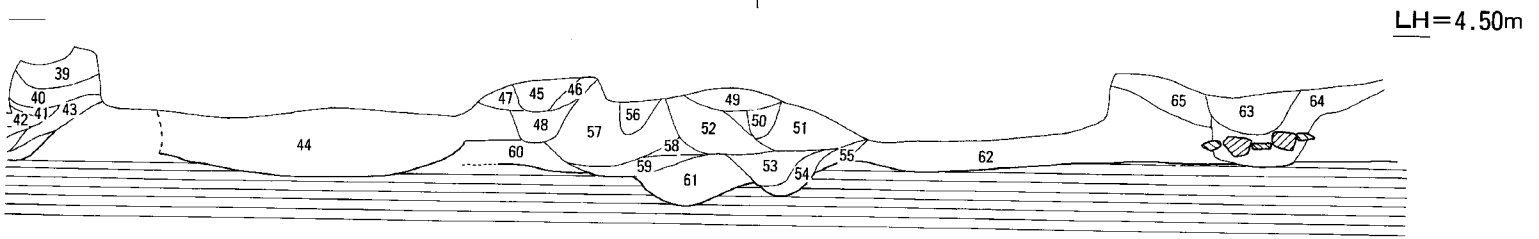
第４図　Ⅰ区Ⅱ層上面近世・近代遺構配置図（1/200）



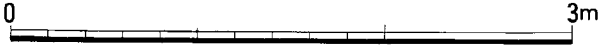
第５図　Ⅰ区Ⅱ層下面遺構配置図（1/150）



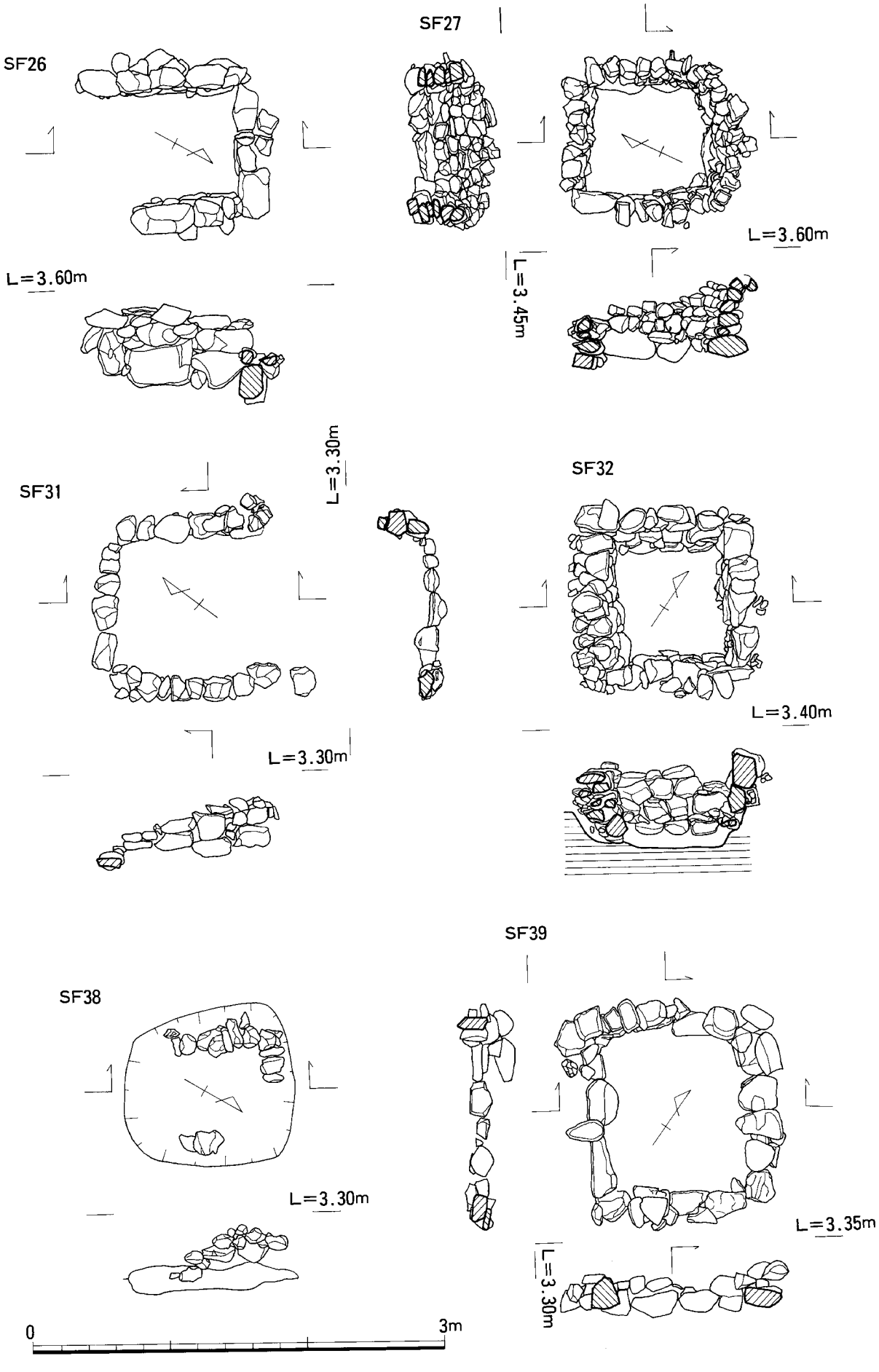
1. 暗オリーブ灰色土(2.5GY3/1)炭化物を含む
2. 灰オリーブ色砂質土(5Y5/2)
3. 灰オリーブ色砂質土(5Y5/2)
4. 灰オリーブ色砂質土(5Y5/2)
5. 灰色砂質土(5Y5/1)炭化物少量を含む
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)焼土・炭化物を含む
7. 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)
8. 灰色砂(5Y5/1)
9. 灰黄褐色土(10YR5/2)
10. 褐灰色土(10YR4/1)
11. 褐灰色砂質土(10YR4/1)
12. にぶい橙色粘質土(7.5YR7/3)
13. 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
14. 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
15. 褐灰色砂質土(10YR4/1)
16. 褐灰色砂質土(10YR6/1)
17. 13に同じ
18. 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
19. 灰褐色砂質土(7.5YR4/2)
20. 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
21. 黒褐色砂質土(10YR3/2)
22. 褐灰色砂質土(10YR5/1)
23. 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
24. 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
25. 黒色砂質土(10YR2/1)
26. 褐灰色砂質土(7.5YR6/1)にぶい橙色ブロック(7.5YR7/3)を含む
27. 褐灰色砂質土(10YR5/1)
28. 紫黒土(5P2/1)
29. 褐灰色砂質土(10YR5/1)炭化物を含む
30. 暗青灰色土(5BG4/1)



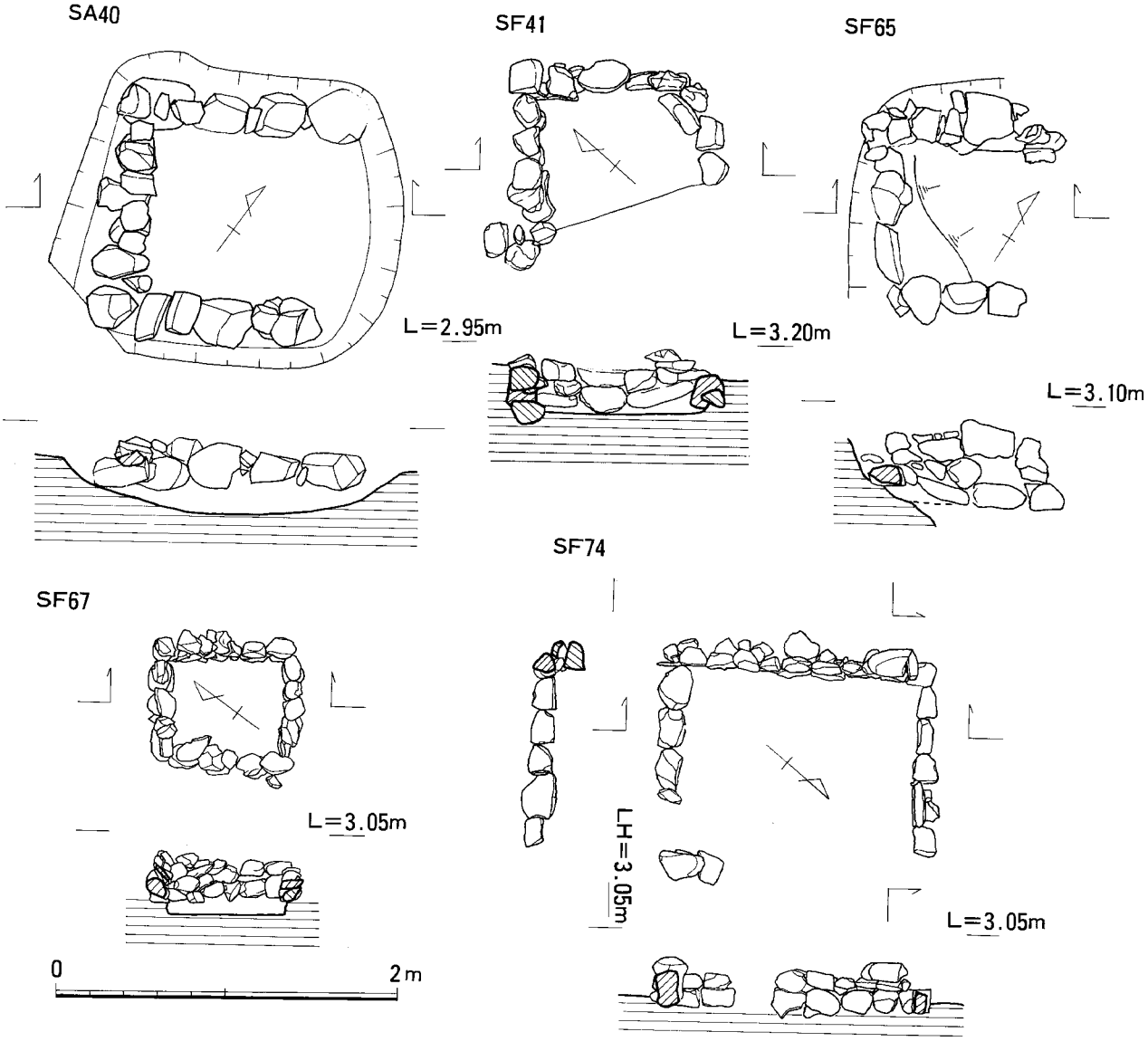
41. 灰黄褐色土(10YR6/2)
42. 褐灰色土(10YR6/1)
43. 褐灰色砂(10YR5/1)にぶい黄橙色土(10YR7/3)を含む
44. 黒褐色色砂質土(10YR3/2)
45. 褐灰色土(7.5YR5/1)礫を含む
46. 褐灰色土(7.5YR4/1)
47. 灰褐色粗砂(5YR5/2)
48. 灰褐色土(7.5YR6/2)炭化物を含む
49. 褐灰色土(10YR6/2)
50. 灰褐色砂質土(7.5YR6/2)浅黄橙色土粒(7.5YR8/6)を含む
51. 褐灰色砂質土(7.5YR5/1)炭化物を含む
52. 褐灰色土(10YR5/1)炭化物を含む
53. 黒褐色砂質土(7.5YR3/1)
54. 褐灰色砂質土(7.5YR6/1)にぶい橙色粘土(7.5YR7/4)を含む
55. 褐灰色砂質土(7.5YR6/1)
56. 褐灰色土(7.5YR6/1)にぶい黄橙色粘土(10YR6/3)炭化物を含む
57. 黒褐色砂質土(10YR3/2)
58. 黒褐色砂質土(7.5YR3/1)
59. 褐灰色砂(7.5YR5/1)
60. 褐灰色砂(7.5YR6/1)
61. にぶい黄褐色砂(10YR5/3)
62. 灰褐色砂質土(7.5YR4/2)
63. 褐灰色土(10YR5/1)
64. 灰黄褐色土(10YR5/2)
65. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
31. 褐灰色砂質土(7.5YR6/1)炭化物・にぶい橙色ブロック(7.5YR7/3)を含む
32. 褐灰色砂質土(10YR5/1)
33. 灰褐色砂質土(7.5YR5/2)
34. 灰色砂(5Y5/1)
35. 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
36. 灰黄褐色砂(10YR5/2)
37. 黒色砂質土(10YR5/2)
38. 灰黄褐色砂(10YR6/2)
39. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
40. 褐灰色土(10YR6/1)



第6図　I区東南壁土層実測図 (1/40)



第７図　石積遺構実測図〔１〕(1/40)



第8図　石積遺構実測図〔2〕(1/40)

SF74石積遺構（第8図　図版6）

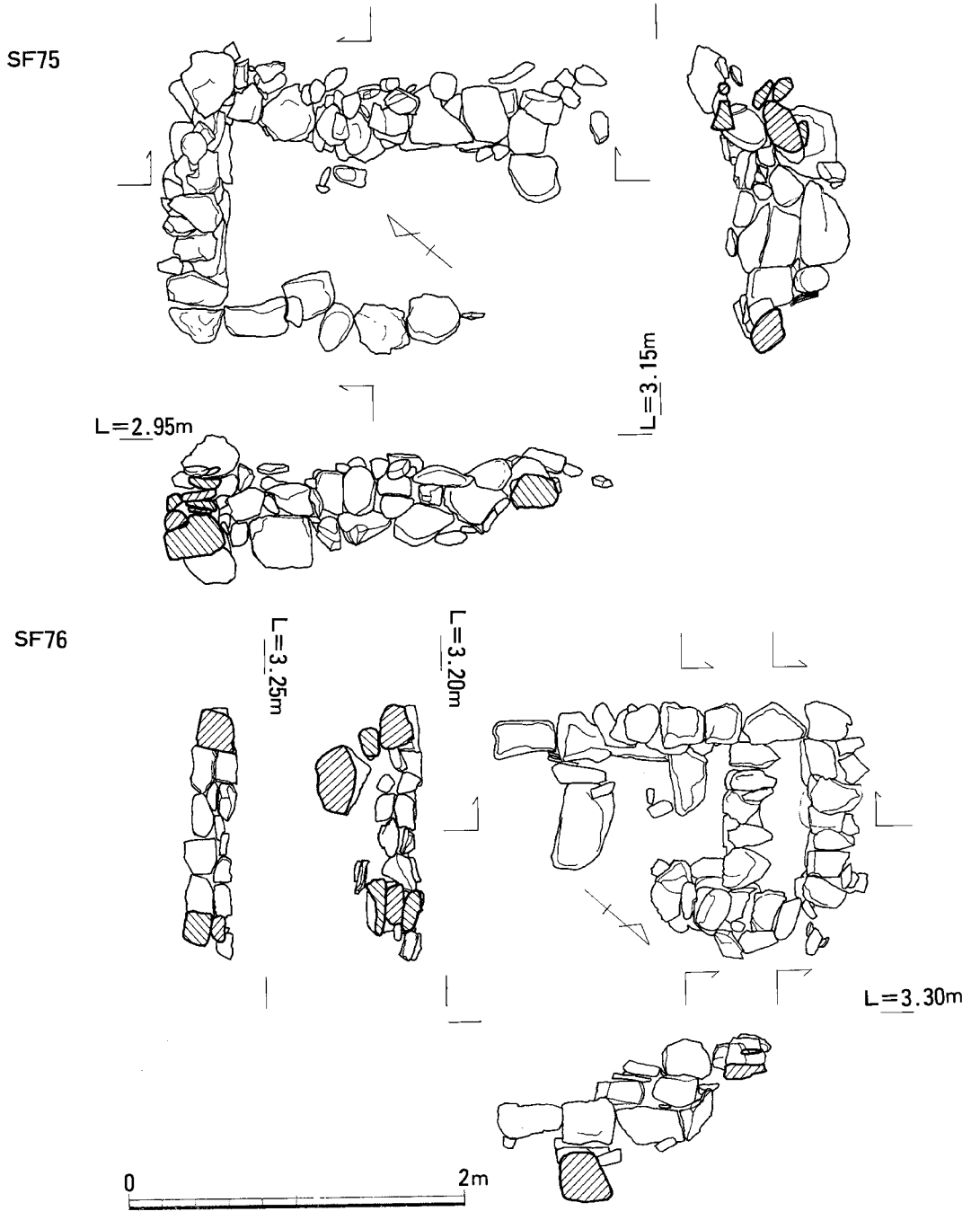
Ⅱ層下面、A－2で検出した石積遺構で、内側の面がきれいにそろえられている。残存部で長さ1.35m、幅1.0m、深さ0.35mを測る。腰石は20×20×10cmほどの切石に近い形状の石材を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。北東隅はSF75構築の際に破壊を受けている。主軸の方位はN－40°－Wに取る。

SF75石積遺構（第9図　図版7）

Ⅱ層下面、A－2で検出した石積遺構で、残存部で長さ2.25m、幅1.0m、深さ0.35mを測る。腰石は40×30×20cmほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。南西隅はSF74構築の際に破壊を受けている。主軸の方位はN－40°－Wに取る。

SF76石積遺構（第9図　図版5）

Ⅱ層下面、A－2で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.95mを測る。腰石は50×30×20cmほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。東南隅はSF75構築の際に破壊を受けている。主軸の方位はN－42°－Wに取る。



第９図　石積遺構実測図〔３〕(1/40)

SF80石積遺構（第10図　図版７）

Ⅱ層下面、Ａ－２で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.9ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。10～40cmの礫を２段積み上げている。北西隅は破壊を受けている。主軸の方位はＮ－43°－Ｗに取る。

SF82石積遺構（第10図　図版８）

Ⅱ層下面、Ｃ－２で検出した石積遺構で、長さ0.8ｍ、幅0.95ｍ、深さ0.65ｍを測る。腰石は20×

30×20cmを用い、その上に次第に板石を4段積み上げている。北西の壁面には60×30×20cmほどのさらに大きな立柱状の石材を据えている。主軸の方位はN－43°－Wに取る。

SF83石積遺構（第10図）

Ⅱ層下面、B－3で検出した石積遺構で、長さ0.9m、幅0.75m、深さ0.45mを測る。腰石は30×30×20cmほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を3段積み上げている。主軸の方位はN－25°－Wに取る。

SF86石積遺構（第10図　図版8）

Ⅱ層下面、B－3で検出した石積遺構で、長さ0.7m、幅0.55m、深さ0.55mを測る。腰石は10×20×20cmほどの大きな石を用い、その上に次第に小さな礫を3段積み上げている。主軸の方位はN－25°－Wに取る。

SF87石積遺構（第10図　図版9）

Ⅱ層下面、B－3で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.55m、幅0.8m、深さ0.55mを測る。10～30cmの礫を5段積み上げている。南東隅は破壊を受けている。主軸の方位はN－33°－Wに取る。

SF88石積遺構（第10図　図版9）

Ⅱ層下面、B－3・4で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.75m、幅0.75m、深さ0.6mを測る。10～40cmの礫を5段積み上げている。南東隅は破壊を受けている。主軸の方位はN－36°－Eに取る。

SF89石積遺構（第11図　図版10）

Ⅱ層下面、A－2・3で検出した石積遺構で、長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。10～20cmの礫を4段積み上げている。主軸の方位はN－26°－Wに取る。

SF96石積遺構（第11図）

Ⅱ層下面、C－3・4で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.55mを測る。10～30cmの礫を4段積み上げている。南東隅は撹乱を受けている。主軸の方位はN－24°－Wに取る。

SF99石積遺構（第11図　図版10）

Ⅱ層下面、B・C－3で検出した石積遺構で、長さ1.4m、幅1.15m、深さ0.45mを測る。10～40cmの礫を3段積み上げている。主軸の方位はN－32°－Wに取る。

SF106石積遺構（第11図　図版11）

Ⅱ層下面、A－3で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。10～30cmの礫を3段積み上げている。南東隅は撹乱を受けている。主軸の方位はN－45°－Wに取る。

SF110石積遺構（第11図　図版11）

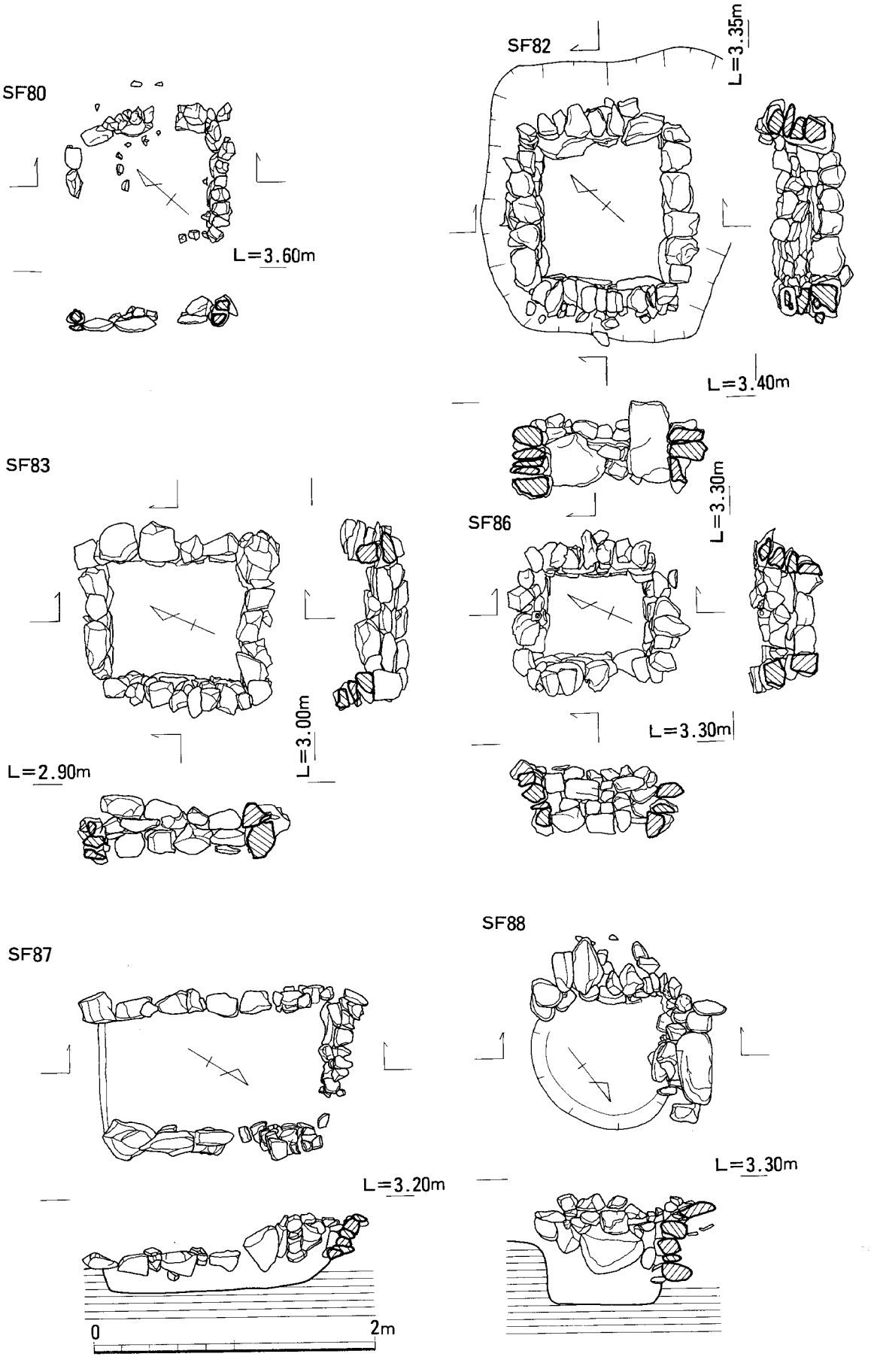
Ⅱ層下面、B－3で検出した石積遺構で、残存部で長さ1.0m、幅0.65m、深さ0.4mを測る。10～30cmの礫を3段積み上げている。南東隅は撹乱を受けている。主軸の方位はN－26°－Wに取る。

SF124石積遺構（第11図）

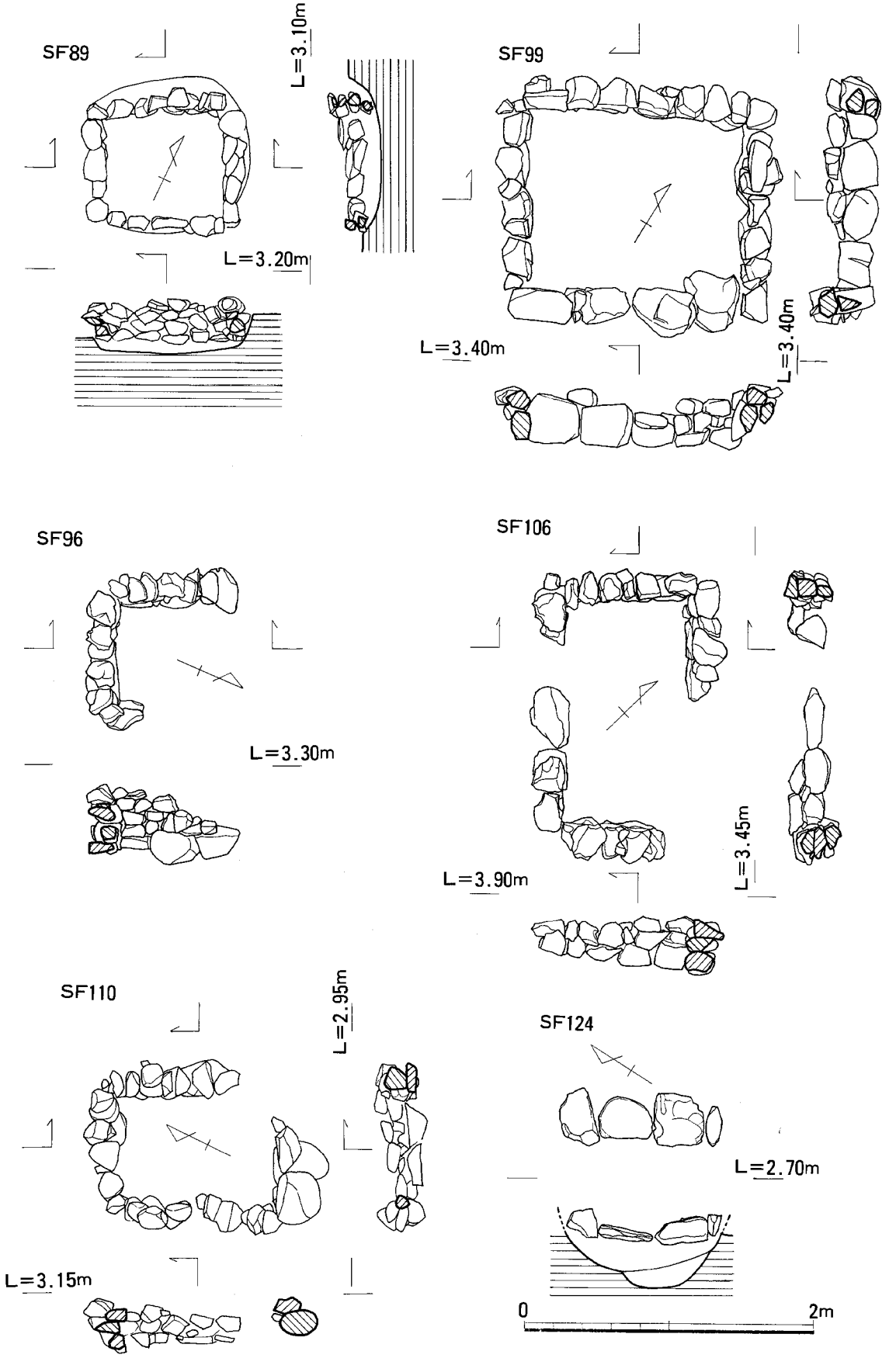
Ⅱ層下面、A－2で検出した石積遺構で、長さ1.1m、幅0.4mの範囲に扁平な30～50cmの礫を並べている。主軸の方位はN－32°－Wに取る。

SB16石基礎建物（第12図　図版14）

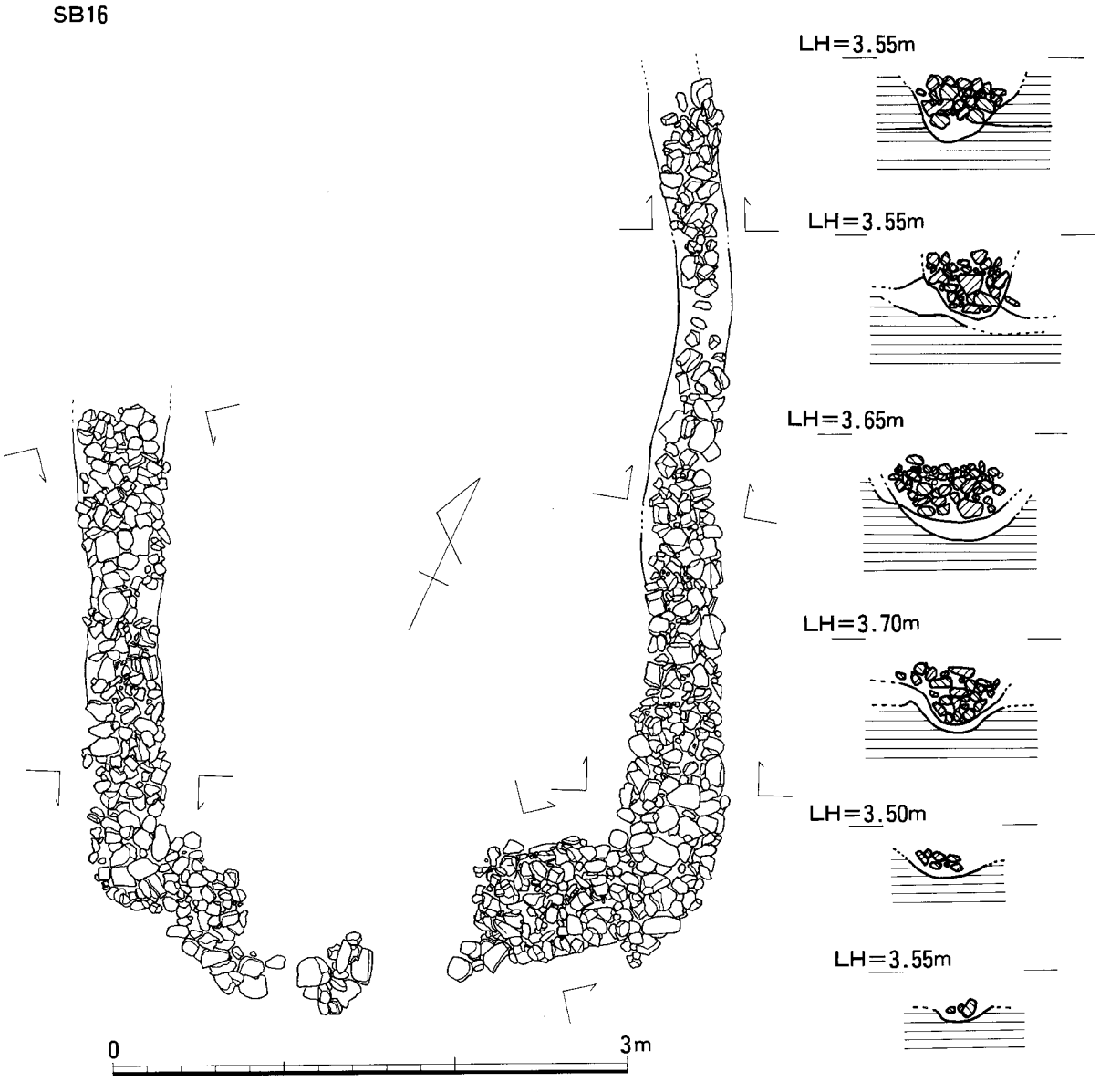
Ⅱ層下面、C・D－3で検出した建物の石基礎である。遺構の北西は旧校舎の基礎によって破壊を受けている。本来は方形に一周していたものが、コの字状に残る形となった。残存する長辺の長さ5.0m、短辺の長さ3.6mを測る。断面U字形の幅0.6m、深さ0.4mの溝の中に拳大の礫を充填して築造されている。主軸の方位はN－24°－Wに取る。



第10図　石積遺構実測図〔４〕(1/40)



第11図　石積遺構実測図〔５〕(1/40)



第12図　石基礎建物実測図〔1〕(1/40)

SB79石基礎建物（第13図　図版15・16）

Ⅱ層下面、C－1・2で検出した建物の石基礎である。遺構の北は調査区域外へのびるため、遺構の規模は不明である。L字状に検出した形となった。検出した長辺の長さ6.0m、短辺の長さ5.0mを測る。断面U字形の幅0.6m、深さ0.7mの溝の中に10～20cm前後の礫を充填して築造されている。主軸の方位はN－44°－Wに取る。遺構のコーナーで石積遺構SF82が取り込まれて築造されているが、前後関係は不明である。

SK103土坑（第14図　図版13）

Ⅱ層下面、B－3で検出した土師器を埋納した土坑である。長さ0.8m、幅0.6mの隅丸方形の土坑底面から30cmほど浮いた状態で、多量の土師器小皿・杯が出土した。小皿は10枚前後重ねられて埋納されていた。土師器が集中する範囲の大きさの腐朽しやすい容器に納められたものが、容器や他の埋

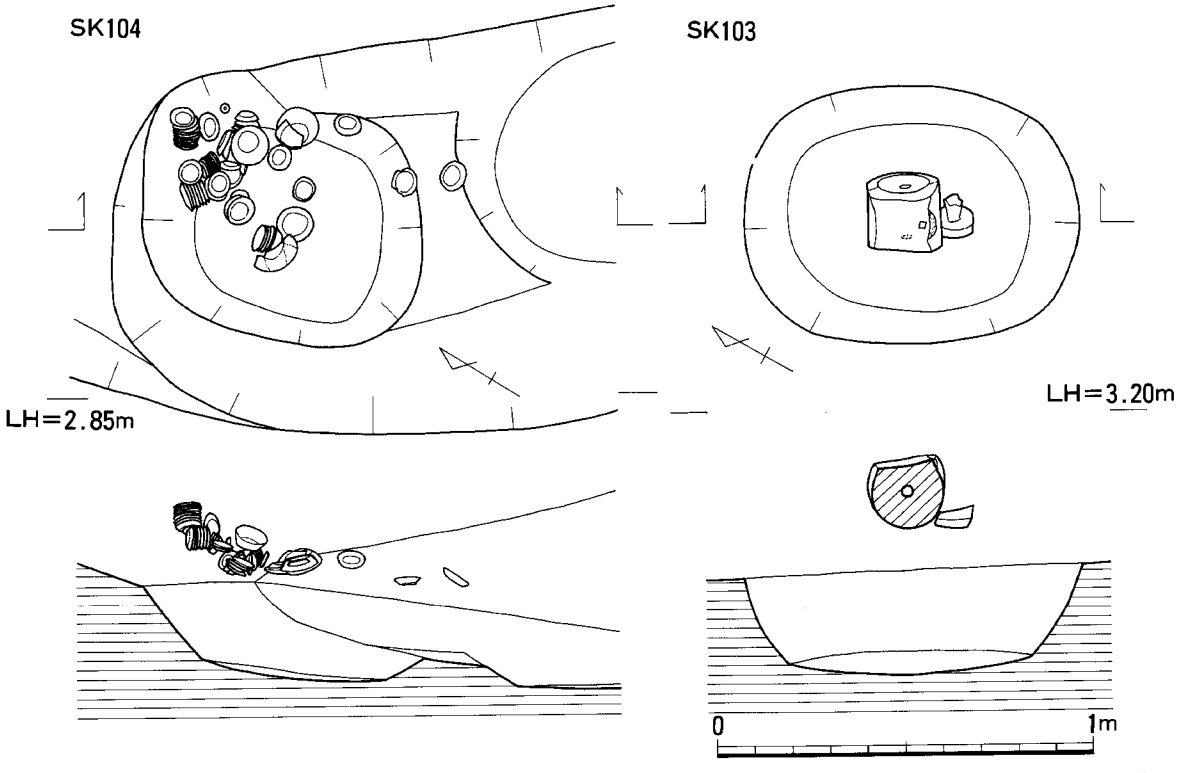
SB79

第13図　石基礎建物実測図〔２〕(1/40)

納物が腐朽することによって移動したと考えられる。主軸の方位はN－33°－Wに取る。

SK104土坑（第14図　図版13）

Ⅱ層下面、A・B－４で検出した破損した石臼（上臼）と鉛製燭台が廃棄された土坑である。長さ0.9m、幅0.7ｍの楕円形の土坑底面から40㎝ほど浮いた状態で出土した。主軸の方位はN－30°－Wに取る。



第14図　土坑実測図（1/20）

出土遺物

今回の調査では各遺構や包含層から15世紀後半から17世紀前半にかけての夥しい量の遺物が出土した。土器・陶磁器・瓦・銭貨・金属製品などからなり、遺存状態が良好なものを中心にその概要を報告する。今回の調査で出土した土師器杯・小皿の底部切り離し方法はすべて糸切り離しによる。個々の記述についてその点を略している。銭貨については別表を参照されたい。

SK01出土遺物（第15図）

土師器　小皿（1）　体部から内底まで回転横ナデされる。口径6.5cm、器高1.5cm、底径4.9cmを測る。

SK03出土遺物（第15図）

青花　碗（2）　饅頭心のE群の底部片で、見込に牡丹折枝文、高台内に「長命富貴」の字款を配する。景徳鎮窯系。

SK23出土遺物（第15図）

土師器　小皿（3）　内底まで回転横ナデされる。口径6.5cm、器高1.6cm、底径5.1cmを測る。口縁部に煤が付着している。

陶器　皿（4）　高台内側の削り出しは浅く、にぶい黄色（2.5Y6/3）の生地に暗オリーブ色（5Y4/4）の釉が体部外面下半まで掛けられている。

SK28出土遺物（第15図）

陶器　鉢（5）　唐津系の鉄絵片口で、灰黄色（2.5Y7/2）の生地に灰白色（5Y7/1）の釉が体部外面下半まで掛けられている。体部外面には鉄絵（10YR2/2）を施す。

SK29出土遺物（第15図）

青花　皿（6）　碁笥底のⅢC群Ⅰ類で、外面に波涛文帯と蕉葉文、内底見込にはねじ花を描く。景徳鎮窯系。

SK34出土遺物（第15図）

瓦質土器　鍋（7）　口縁部が横ナデ、体部内面が横方向のハケメ、外面は未調整、底部外面には格子目の叩き痕がみられる。

青花　碗（8・9）　8はD群Ⅳ類で、外面に波涛文帯とアラベスク文、平坦で広い見込には法螺貝を描く。景徳鎮窯系。9は口縁部、体部と底部の境の内外面に圏線のみを巡らせている。漳州窯系。

SK36出土遺物（第15図）

土師器　小皿（10）　体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.4cm、器高1.4cm、底径4.4cmを測る。

朝鮮王朝白磁　碗（11）　口縁部が大きく外反し、高台内側の削り出しは浅い。灰白色（2.5Y8/2）の生地に灰白色（7.5Y8/2）の釉が全面に掛けられている。

SK37出土遺物（第15図）

土師器　杯（12）　内底まで回転横ナデされる。口径9.3cm、器高2.0cm、底径7.0cmを測る。

SK48出土遺物（第15図）

土師器　小皿（13）　内底まで回転横ナデされる。口径7.2cm、器高1.7cm、底径5.5cmを測る。

SK54出土遺物（第15図）

陶器　皿（14）　高台内の削り出しは浅く、にぶい赤褐色（7.5Y4/3）の生地にオリーブ黒色（7.5Y3/1）の釉が体部外面下半まで掛けられている。

SF55出土遺物（第15図）

土師器　杯（15）　内底まで回転横ナデされる。口径10.2㎝、器高2.1㎝、底径7.4㎝を測る。

SK56出土遺物（第15図）

土師器　小皿（16）　内底まで回転横ナデされる。口径7.0㎝、器高1.4㎝、底径4.8㎝を測る。

SK68出土遺物（第15図）

陶器　皿（17）　口縁部は直線的に開き、高台内の削りは浅い。灰色（7.5Y6/1）の生地に、透明釉が全面に掛けられている。

SF76出土遺物（第15図）

土師器　小皿（18）　内底まで回転横ナデされる。口径7.2㎝、器高1.7㎝、底径5.2㎝を測る。

SF82出土遺物（第15図）

土師器　小皿（19）　口縁部は体部中位の屈曲部からほぼ直立してのびる。内底まで回転横ナデされる。口径7.3㎝、器高1.6㎝、底径5.9㎝を測る。

SF83出土遺物（第15図）

土師器

小皿（20）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.5㎝、器高1.5㎝、底径4.7㎝を測る。口縁部に煤が付着している。

杯（21）　内底まで回転横ナデされる。口径9.5㎝、器高2.2㎝、底径5.9㎝を測る。

青花

碗（22）　端反りのＢ２群で、外面に花文、口縁部内面に四方襷文を巡らせる。景徳鎮窯系。

皿（23）　碁笥底のⅢＣ群Ⅰ類で、外面に波涛文帯と蕉葉文、内底見込にはねじ花を粗雑に描く。漳州窯系。

SK84出土遺物（第16図）

土師器　小皿（24～27）　24･25は内底まで回転横ナデされる。口径6.6・6.7㎝、器高1.3・1.7㎝、底径5.2・4.8㎝を測る。26・27は内底がナデ、外底には板状圧痕が残る。27は口径7.1㎝、器高1.6㎝、底径5.9㎝、底部の厚さは0.5㎝と厚めである。

青花　皿（28）　端反りのやや大型の皿で、外面は唐草の間に法螺貝・宝瓶などの八宝を配し、内底見込には蓮華唐草文を描く。景徳鎮窯系。

SF86出土遺物（第16図、図版27）

白磁　碗（29）　口縁部は直線的に開き、断面台形の高台がつく。内側の体部と底部の境に沈線状の段がつく。灰白色（2.5Y8/2）の生地に、灰白色（5Y8/2）の釉が全面に掛けられている。

SK90出土遺物（第16図）

土師器　小皿（30）　内底まで回転横ナデされる。口径6.3㎝、器高1.2㎝、底径4.0㎝を測る。

SK92出土遺物（第16図）

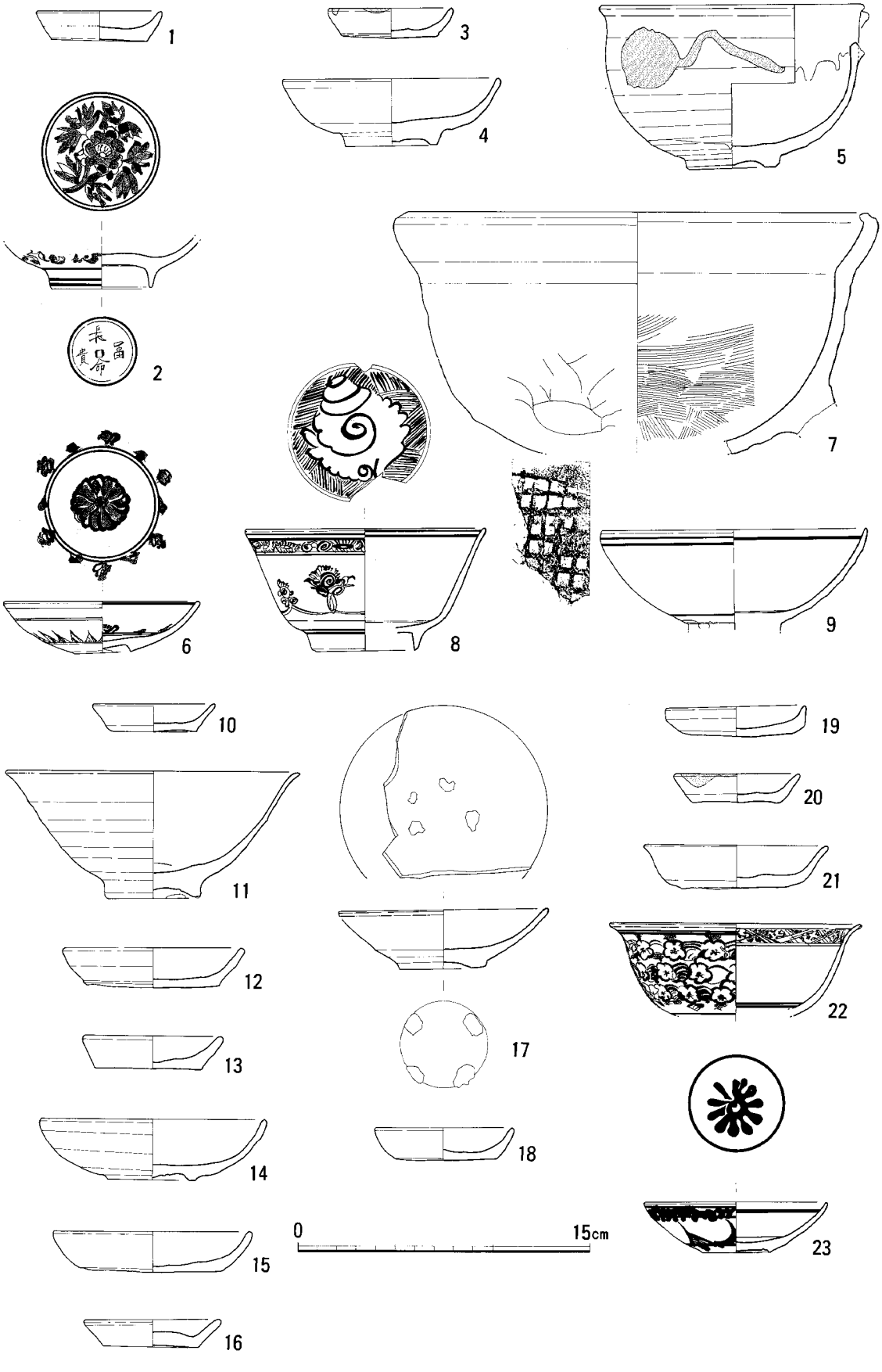
土師器　小皿（31）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.5㎝、器高1.2㎝、底径5.2㎝を測る。

SK93出土遺物（第16図）

朝鮮王朝白磁　碗（32）　体部はやや内湾し、断面台形の高台がつく。内側の体部と底部の境には沈線状の段がつく。灰白色（7.5Y7/1）の生地に、透明釉が全面に掛けられている。

SK94出土遺物（第16図）

土師器　杯（33）　内底まで回転横ナデされる。口径10.6㎝、器高2.4㎝、底径6.3㎝を測る。



第15図　遺構出土遺物実測図〔１〕(1/3)

SK95出土遺物（第16図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（34）　口径7.9㎝、器高1.7㎝、底径5.7㎝を測る。

杯（35）　口径9.3㎝、器高1.7㎝、底径6.4㎝を測る。

SK97出土遺物（第16図）

朝鮮王朝白磁　皿（36）　内湾気味の体部から端部直下で外反する口縁部がのびる。高台は断面台形で、見込と畳付には７カ所の砂目跡。灰白色（N8/）の生地に灰白色（7.5Y8/1）の釉が全面に掛けられる。

SK103出土遺物（第16図）

土師器　小皿（37）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.8㎝、器高1.7㎝、底径4.7㎝を測る。

SK104出土遺物（第17図）　土師器小皿が重ねられた状態で埋納されていた。他に土師器杯が５点出土している。各々の群単位で報告する。

土師器

小皿（１～68）

１群（１～12）　体部はほぼ直線的で、口縁部はやや外反する。体部下位で屈曲しゆるく稜をなすものが多い。底部は平坦である。１・３・４・６は内底まで回転横ナデされ、２・５・７～12は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.2～6.9㎝、器高1.3～1.6㎝、底径4.2～4.8㎝を測る。１・３・７～10は口縁部に煤が付着している。

３群（13～22）　１群とほぼ同じ形態をとる。14･16･17･19～21は内底まで回転横ナデされ、13･15･18･22は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.0～6.9㎝、器高1.4～1.6㎝、底径4.4～5.1㎝を測る。17の口縁部には煤が付着している。

４群（23～25）　23･24は１・３群とほぼ同じ形態をとる。内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.5・6.8㎝、器高1.4㎝、底径4.3・4.9㎝を測る。25は口径に比して底径が小さく、外反する口縁部が体部下位の屈曲部から大きく開く。底部は厚い。内底まで回転横ナデされ、口径7.4㎝、器高2.0㎝、底径4.1㎝を測り、やや大型で深めである。

５群（26）　体部はやや丸みをもち、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.3㎝、器高1.5㎝、底径4.4㎝を測る。

６群（27～30）　27は１・２群とほぼ同じ形態をとる。内底まで回転横ナデされ、口径6.5㎝、器高1.5㎝、底径4.7㎝を測る。28～30は内底部が盛り上がり一見へそ皿状を呈するが、外底部は丁寧に切り離しがなされ平坦である。体部下位で屈曲しゆるく稜をなす。内底まで回転横ナデされ、口径7.2～7.5㎝、器高1.6㎝、底径5.2～5.4㎝を測り、やや大型である。

８群（31）　体部はやや丸みをもち、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.8㎝、器高1.3㎝、底径5.6㎝を測る。口縁部に煤が付着している。

９群（32）　４群の25とほぼ同じ形態・法量をとる。内底まで回転横ナデされ、口径7.3㎝、器高1.9㎝、底径4.2㎝を測る。

10群（33）　口径7.6㎝、器高1.7㎝、底径4.2㎝を測り、４群25、９群32とほぼ同じ法量をとる。同様に口径に比して底径が小さく、外反する口縁部が体部下位の屈曲部から大きく開くが、底部は薄い。内底まで回転横ナデされる。

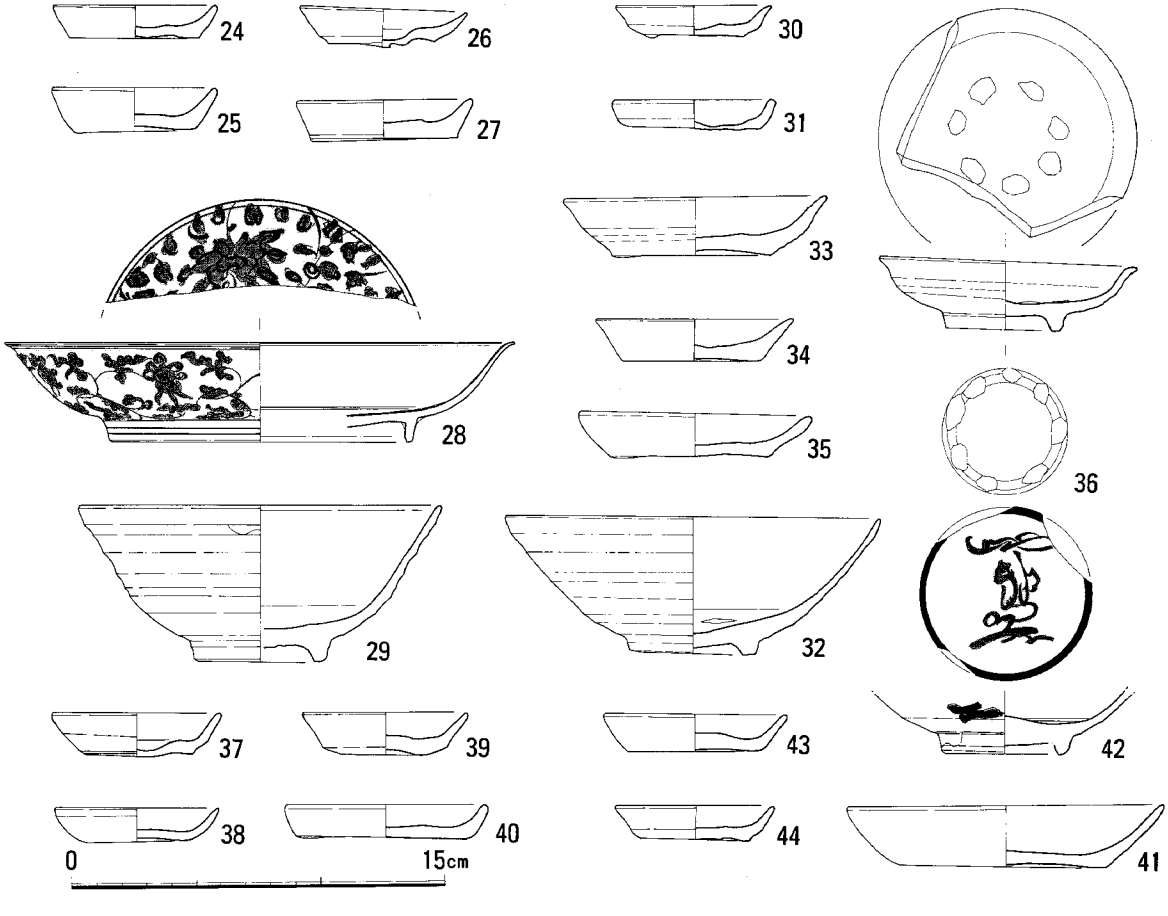
11群（34～38）　内底まで回転横ナデされる。34～36は１・３群とほぼ同じ形態をとり、口径6.4～

7.7㎝、器高1.4～1.7㎝、底径4.3～4.4㎝を測る。37は4群25、９群32とほぼ同じ形態・法量をとる。口径7.3㎝、器高2.3㎝、底径4.0㎝を測る。口縁部に煤が付着している。38は10群33とほぼ同じ形態・法量をとる。口径7.7㎝、器高1.7㎝、底径4.0㎝を測る。

14群（39）　６群28～30とほぼ同じ形態・法量をとるが、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.1㎝、器高1.6㎝、底径5.2㎝を測る。

15群（40～45）　１・３群とほぼ同じ形態をとり、41･43は内底まで回転横ナデされ、40･42･44･45は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.3～6.7㎝、器高1.5～1.6㎝、底径4.4～4.7㎝を測る。41･42は口縁部に煤が付着している。

16群（46）　１・３･15群とほぼ同じ形態をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.7㎝、器高1.5㎝、底径5.0㎝を測る。



第16図　遺構出土遺物実測図〔２〕(1/3)

17群（47～50）　1・3・15・16群とほぼ同じ形態をとり、47・48・50は内底をナデ、外底には板状圧痕が残り、49は内底まで回転横ナデされる。口径6.2～6.6cm、器高1.5cm、底径4.4～4.7cmを測る。

22群（51）　6群28～30、14群39とほぼ同じ形態・法量をとり、内底まで回転横ナデされる。口径7.4cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。

19群（52～54）　1・3・15・16・17群とほぼ同じ形態をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.4～6.6cm、器高1.4～1.5cm、底径4.2～4.7cmを測る。

20群（55～57）　55・56は1・3・15・16・17・19群とほぼ同じ形態をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.5・6.8cm、器高1.5cm、底径4.7cmを測る。57は6群28～30、14群39、22群51とほぼ同じ形態・法量をとり、内底まで回転横ナデされる。口径7.4cm、器高1.4cm、底径5.5cmを測る。

23群（58～68）　58～67は1・3・15・16・17・19・20群とほぼ同じ形態をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.3～6.7cm、器高1.4～1.7cm、底径4.1～4.7cmを測る。68は6群28～30、14群39、20群57、22群51とほぼ同じ形態・法量をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.0cm、器高1.5cm、底径5.5cmを測る。

杯（69～73）

7群（69）　直線的な口縁部が体部下位の屈曲部から開き、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径9.8cm、器高2.1cm、底径6.4cmを測り、杯としては浅めで小型である。

12群（70）　直線的な口縁部が体部下位の屈曲部から大きく開き、内底まで回転横ナデされる。復元口径11.6cm、器高2.5cm、復元底径6.2cmを測り、やや厚底である。

13群（71）　内底部が盛り上がり一見へそ皿状を呈するが、外底部は丁寧に切り離しがなされ平坦である。体部中位で屈曲しゆるく稜をなす。内底まで回転横ナデされ、口径10.6cm、器高2.6cm、底径7.2cmを測り、やや大型である。直線的な口縁部が体部下位の屈曲部から開く。小皿6群28～30、14群39、20群57、22群51、23群68とほぼ同じ形態をとる。

18群（72・73）　72は7群69とほぼ同じ形態・法量をとり、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。復元口径10.4cm、器高2.5cm、復元底径7.0cmを測る。73は丸みをもった体部から口縁部が外反して大きく開く。口径11.8cm、器高3.0cm、底径6.6cmを測る。

SK107出土遺物（第16図）

土師器　小皿（38）　内底まで回転横ナデされる。口径6.6cm、器高1.4cm、底径4.0cmを測る。

SF110出土遺物（第16図）

土師器　小皿（39・40）　内底まで回転横ナデされる。39は体部下位で屈曲しゆるく稜をなし、口径6.7cm、器高1.7cm、底径3.4cmを測る。口縁部に煤が付着している。40は口径8.1cm、器高1.3cm、底径7.0cmを測る。

SK111出土遺物（第16図）

土師器　杯（41）　内底まで回転横ナデされる。口径12.8cm、器高2.4cm、底径8.3cmを測る。

青花　碗（42）　見込に花卉文を配する底部片である。漳州窯系。

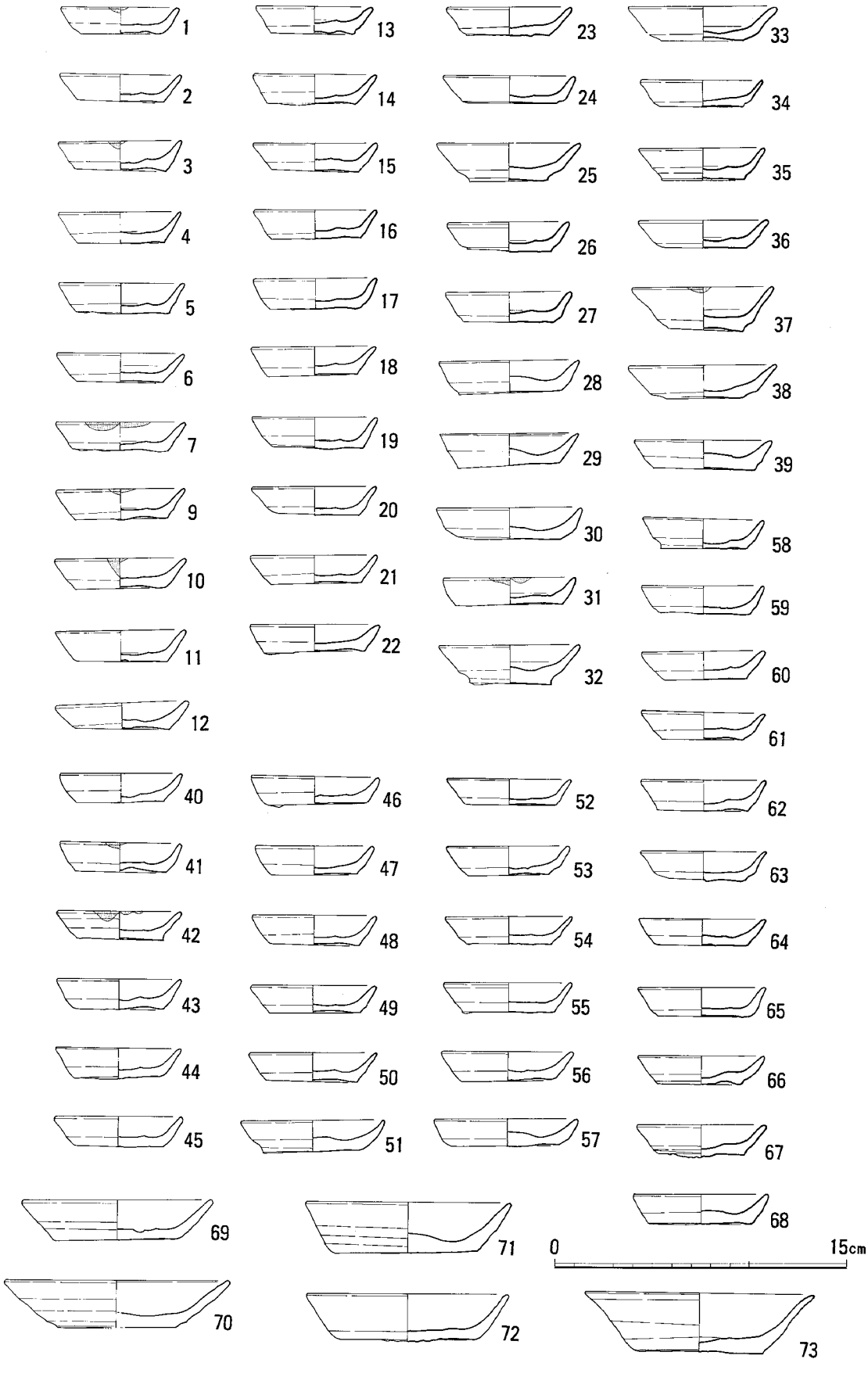
SK127出土遺物（第16図）

土師器　小皿（43）　内底はナデ。口径7.4cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。

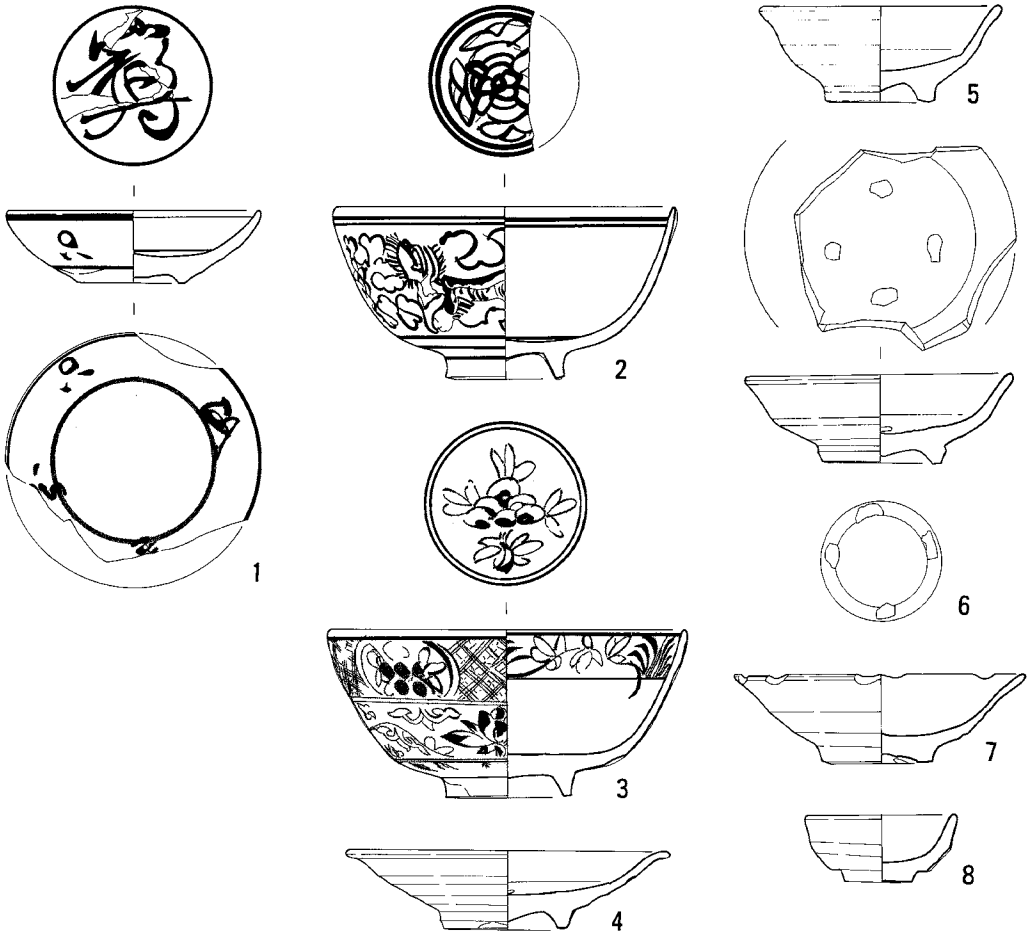
Pit62出土遺物（第16図）

土師器　小皿（44）　体部下位で屈曲しゆるく稜をなす。内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.4cm、器高1.4cm、底径4.4cmを測る。

包含層出土遺物（第18図）



第17図　SK104出土遺物実測図（1/3）



第18図　包含層出土遺物実測図〔1〕(1/3)

青花

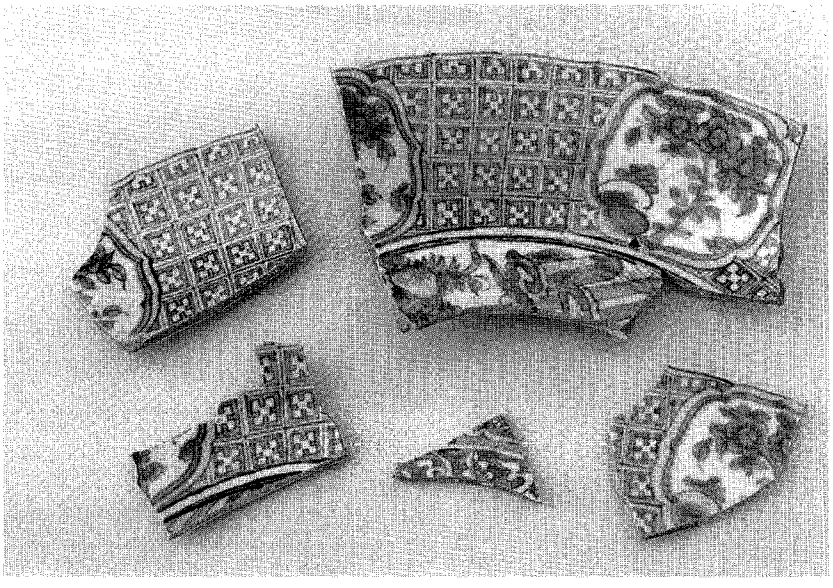
皿（1）　碁笥底の皿C群Ⅲ類で、外面に字を略したような文様を、見込には擬人化した文字を描く。外底は露胎である。漳州窯系。C－2、Ⅰ層出土。

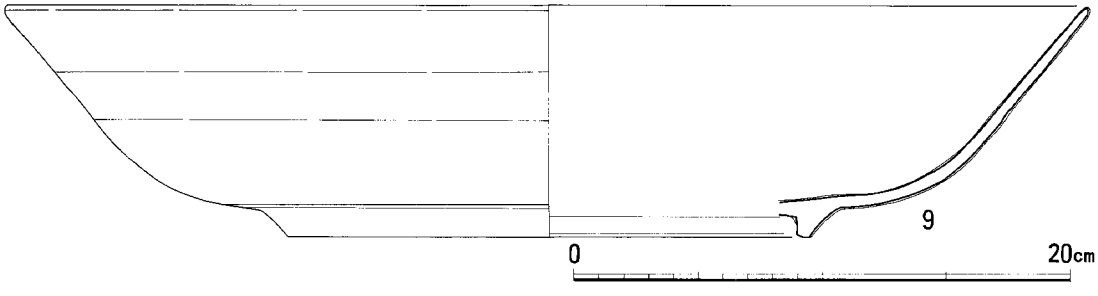
碗（2）　断面台形の高台はやや細めで、外に開く。体部外面に虎を描く。漳州窯系。D－4、Ⅰ層出土。

五彩　碗（3）　外面口縁部に瑞花文、体部に蓮華文、内面は口縁部に花卉文、見込に瑞花文を配する。漳州窯系。A－2、Ⅰ層出土。

朝鮮王朝白磁　皿（4～6）　4の口縁部は外反し、体部内面中位に沈線状の段がつく。胎土は灰白色（N7/）を呈し、内底見込と畳付に4ヵ所の胎土目跡がみられる。B－4、Ⅰ層出土。5・6は体部中位の屈曲部から口縁部が外反して開く。肥厚する口縁端部は丸くおさめられる。5の胎土は灰白色（2.5GY8/1）を呈し、畳付より内側は露胎である。D－3、Ⅰ層出土。6の焼成は甘く、胎土は灰白色（7.5Y7/1）を呈し、灰白色（7.5Y7/1）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に4ヵ所の砂目跡がみられる。D－3、Ⅰ層出土。

朝鮮王朝陶器　皿（7）　体部下位の屈曲部から口縁部が外反してのびる。口縁端部を輪花に仕上





第19図　包含層出土遺物実測図〔２〕(1/3)

げる。胎土は明オリーブ灰色（5GY7/1）～オリーブ灰色（5GY6/1）を呈し、透明釉が全面に掛けられている。高台内の削り出しは浅く、見込と畳付に５ヵ所の砂目跡がみられる。A－３、Ⅰ層出土。

陶器　小杯（８）　体部中位の屈曲部から口縁部がやや外反して直立気味に開く。胎土は黄灰色（2.5Y6/1）を呈し、暗オリーブ色（5Y4/3）の釉が平高台の部分を残し掛けられている。B－２、Ⅰ層出土。

青花（第19図）

大皿（９）　芙蓉手花卉文の大皿で、復元口径43.3㎝、器高9.2㎝、復元高台径20.8㎝を測る。漳州窯系。A－３、Ⅰ層出土。

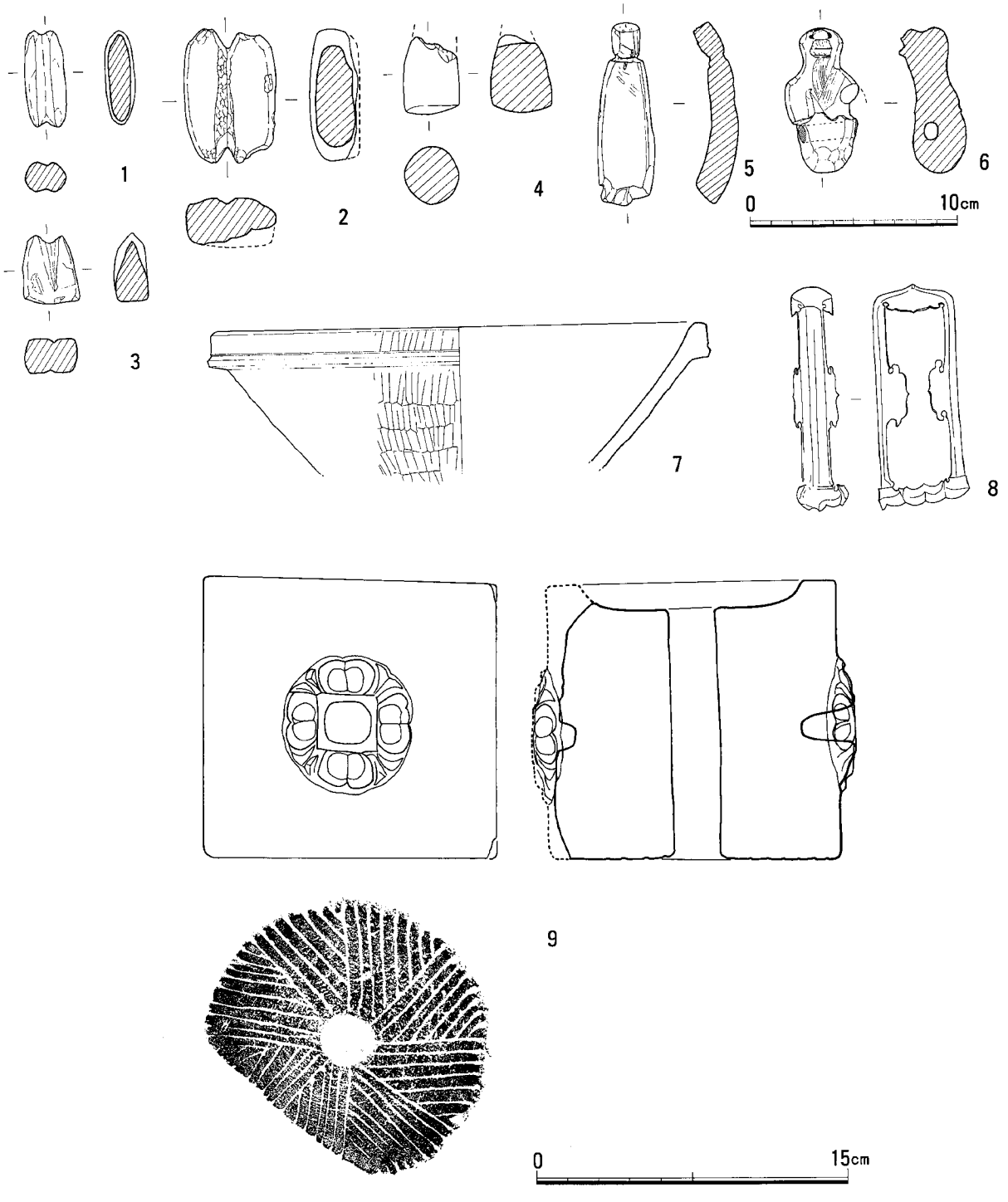
石製品（第20図）

石錘（１～５）　１はSK09、２はSK49、３はSK105、４はSF65、５はSK13からの出土。

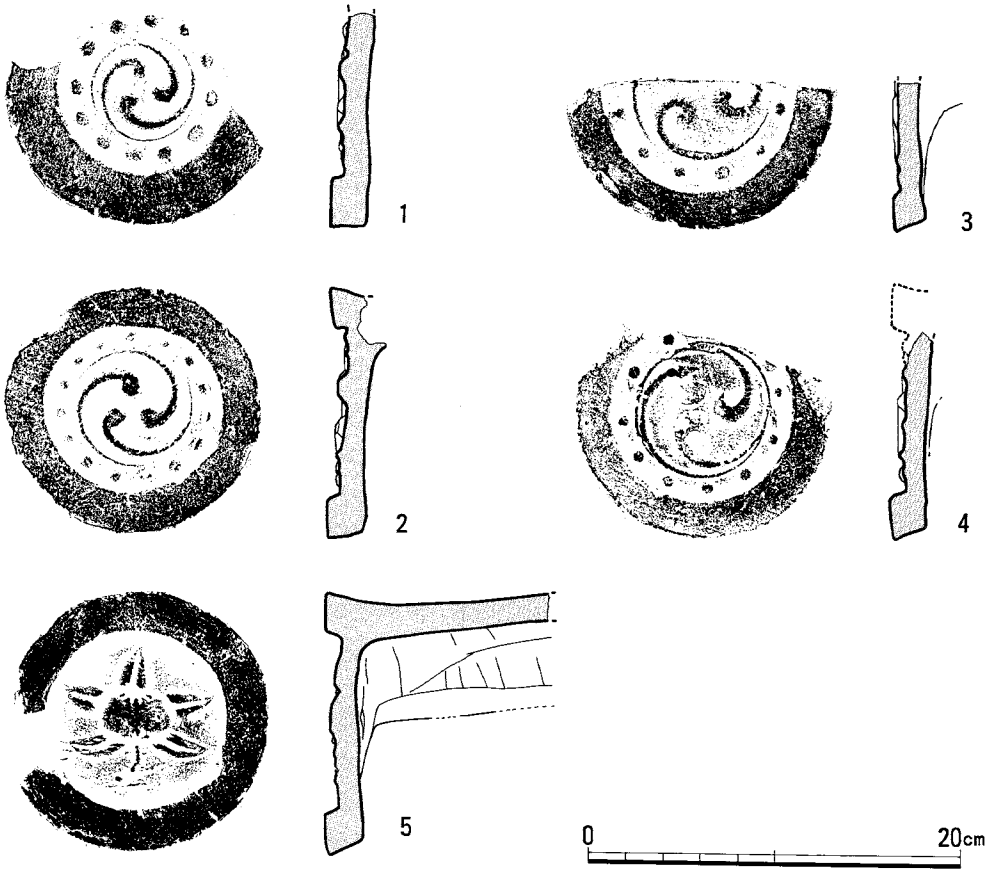
茶臼（９）　石材は花崗岩で、把手用の孔の周囲に蓮弁を刻む。SK103出土。

石鍋（７）　鍔が口縁部直下を巡る。SK130出土。滑石製。

土製品（第20図）（６）　土製の猿で、A－３、Ⅰ層からの出土。



第20図　石製品・土製品実測図（1/3・1/4）



第21図　軒丸瓦拓影・実測図（1/4）

瓦（第21図）

軒丸瓦（1～5）　1は瓦当径14.0cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味で、尾は1/3ほど廻って消える。外区には珠文12個を配し、周縁の幅2.5cmを測る。SK12出土。2は復元瓦当径13.5cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや丸みをおび、尾は半周ほど廻って消える。外区には珠文15個を配し、周縁の幅2.0cmを測る。SK23出土。3は瓦当径14.0cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味で、尾は1/3ほど廻って消える。外区には珠文12個を配するとみられ、周縁の幅2.0cmを測る。SK12出土。4は瓦当径13.5cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味で、尾は半周して他の巴に接している。外区には珠文15個を配するとみられ、周縁の幅2.0cmを測る。SK23出土。5は瓦当径14.0cmで、周縁の幅2.0cmを測り、内区に橘を配する。SK12出土。名島城跡第1次調査で出土している。

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
Ⅰ区 SK01			
土師器小皿			
1	6.5	1.5	4.9
Ⅰ区 SK23			
土師器小皿			
3	6.5	1.6	5.1
Ⅰ区 SK36			
土師器小皿			
10	6.4	1.4	4.4
Ⅰ区 SF37			
土師器杯			
12	9.3	2.0	7.0
Ⅰ区 SK48			
土師器小皿			
13	7.2	1.7	5.5
Ⅰ区 SF55			
15	10.2	2.1	7.4
Ⅰ区 SK56			
土師器小皿			
16	7.0	1.4	4.8
Ⅰ区 SF76			
土師器小皿			
18	7.2	1.7	5.2
Ⅰ区 SF82			
19	7.3	1.6	5.9
Ⅰ区 SF83			
土師器小皿			
20	6.5	1.5	4.7
土師器杯			
21	9.5	2.2	5.9
Ⅰ区 SK84			
土師器小皿			
24	6.6	1.3	5.2
25	6.7	1.7	4.8
27	7.1	1.6	5.9
Ⅰ区 SF87			
土師器小皿			
26	6.8	1.6	4.3
Ⅰ区 SK90			
30	6.3	1.2	4.0
31	6.5	1.2	5.2
Ⅰ区 SK94			
土師器杯			
33	10.6	2.4	6.3
Ⅰ区 SK95			
土師器小皿			
34	7.9	1.7	5.7
土師器杯			
35	9.3	1.7	6.4
Ⅰ区 SK111			
土師器杯			
41	12.8	2.4	8.3
Ⅰ区 SK127			
土師器小皿			
43	7.4	1.5	5.4
Ⅰ区 Pit62			
土師器小皿			
44	6.4	1.4	4.4
Ⅰ区 SK104			
土師器小皿			
1	6.2	1.4	4.2
2	6.3	1.4	4.4
3	6.4	1.4	4.7
4	6.4	1.6	4.5
5	6.5	1.6	4.9
6	6.6	1.5	4.5
7	6.7	1.5	4.7
9	6.7	1.6	4.8
10	6.8	1.6	4.6
11	6.8	1.6	4.6
12	6.9	1.3	4.8
13	6.0	1.4	4.4
14	6.4	1.5	4.5
15	6.4	1.4	4.5
16	6.4	1.5	4.6
17	6.4	1.6	4.8
18	6.5	1.5	4.6
19	6.5	1.6	4.9
20	6.6	1.5	4.3
21	6.6	1.5	4.7
22	6.7	1.4	5.1
23	6.5	1.4	4.3
24	6.8	1.4	4.9
25	7.4	2.0	4.1
26	6.3	1.5	4.4
27	6.5	1.5	4.7
28	7.2	1.6	5.2
29	7.2	1.6	5.3
30	7.5	1.6	5.4
31	6.8	1.3	5.6
32	7.3	1.9	4.2
33	7.6	1.7	4.2
34	6.4	1.4	4.3
35	6.5	1.7	4.3
36	6.7	1.4	4.4
37	7.3	2.3	4.0
38	7.7	1.7	4.0
39	7.1	1.6	5.2
40	6.4	1.5	4.5
41	6.3	1.5	4.7
42	6.4	1.5	4.5
43	6.4	1.5	4.7
44	6.5	1.6	4.4
45	6.7	1.5	4.5
46	6.7	1.5	5.0
47	6.2	1.5	4.4
48	6.4	1.5	4.6
49	6.5	1.5	4.6
50	6.6	1.5	4.7
51	7.4	1.6	5.2
52	6.4	1.4	4.7
53	6.4	1.5	4.2
54	6.6	1.4	4.4
55	6.5	1.5	4.7
56	6.8	1.5	4.7
57	7.4	1.4	5.5
58	6.3	1.5	4.5
59	6.3	1.4	4.7
60	6.4	1.4	4.7
61	6.4	1.5	4.2
62	6.5	1.6	4.7
63	6.5	1.5	4.1
64	6.5	1.4	4.7
65	6.6	1.5	4.6
66	6.6	1.5	4.6
67	6.7	1.7	4.6
68	7.0	1.5	5.5
土師器杯			
69	9.8	2.1	6.4
70	(11.6)	2.5	(6.2)
71	10.6	2.6	7.2
72	(10.4)	2.5	(7.0)
73	11.8	3.0	6.6

第1表　Ⅰ区出土土器計測表

2．Ⅱ区・Ⅲ区の調査概要

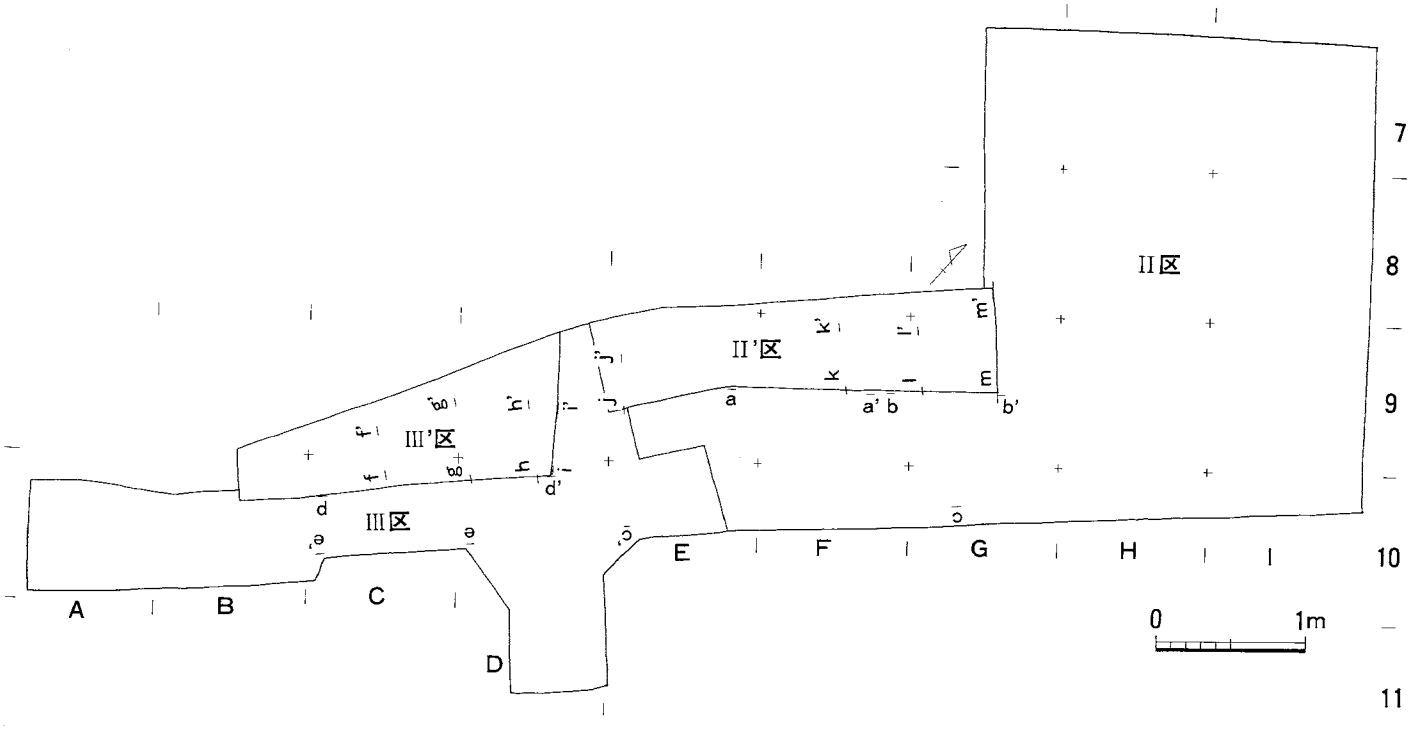
調査経過

Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅱ′区・Ⅲ′区は小学校敷地の南東側を占める。Ⅱ区は旧奈良屋小学校のプール跡地を含む南東コーナー、Ⅲ区は正門前と奈良屋幼稚園の南側を占める部分である。Ⅱ′区、Ⅲ′区はⅡ区、Ⅲ区の拡張区である。

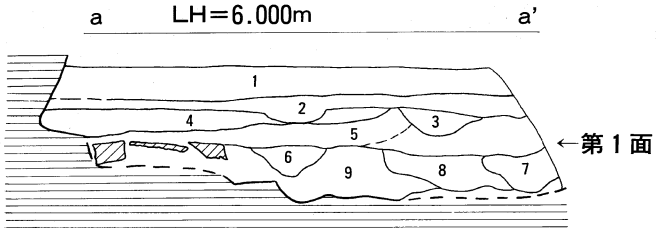
調査はⅡ区、Ⅲ区、Ⅲ′区、Ⅱ′区の順序で行った。Ⅱ区では、後に述べる石塁遺構の一部が検出され、Ⅱ区の調査終了後、石塁部分以外を埋め戻したのちⅢ区へ移行した。Ⅲ区はⅡ区の南西側を拡張する形で設定した。Ⅲ区では、Ⅱ区で検出された石塁遺構の南西側の続きと思われる遺構が、調査区の北西側壁に一部露呈して検出された。

この段階で石塁遺構が、13世紀の蒙古襲来の折りに築かれた元寇防塁である可能性が高くなり、確認のため、Ⅱ区とⅢ区の２カ所に試掘トレンチを入れた。その結果、両地点で石塁遺構の反対側の壁が検出された。Ⅲ区の北西側部分の石塁遺構の残りがかなり良いことが予想されたこと、また、この地点が博多小学校の建築の際、奈良屋幼稚園もあわせて改築される場所であることを受け、この石塁遺構の全容を解明するために、当初予定にはなかったⅢ区の北西側を拡張し、調査を行うこととなった。この拡張区がⅢ′区である。

Ⅲ′区の調査を進めたところ、予想通りに石塁遺構がきわめて残りの良い状態で検出された。しかしながら、幼稚園の建設が迫っていたために、この箇所は図面作成・写真撮影の後、直ちに保存処理を行い、建設工事に入った。続けて、石塁遺構の北東側の続きを確認するため、Ⅱ区の北側の拡張を行った。この拡張区がⅡ′区である。Ⅱ′区を砂層面まで掘り下げたが、予想に反して、石塁遺構の残りは良くなかった。Ⅱ′区で最も残りの良い部分は、Ⅲ′区との境目付近で、試掘トレンチを入れた箇所であった。この部分は北西側の面に３段の石積が残り、石積の様子が明確に現れていることから、

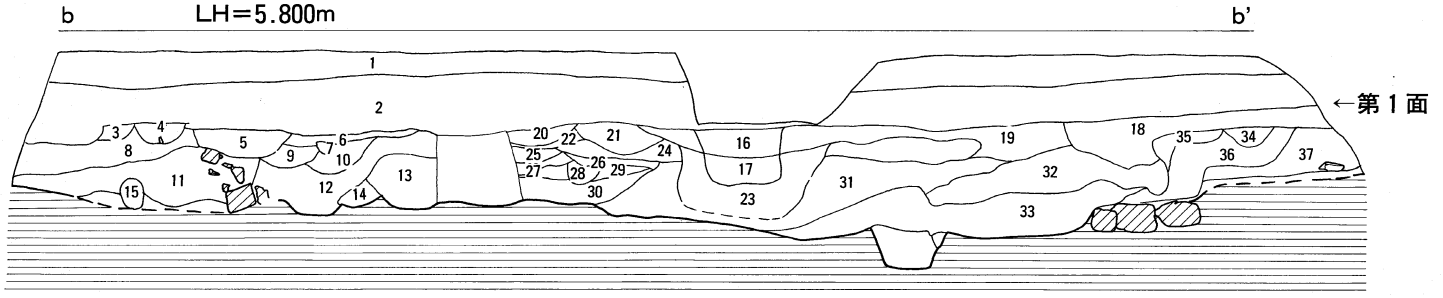


第22図　Ⅱ区・Ⅲ区グリッド図（1/500）

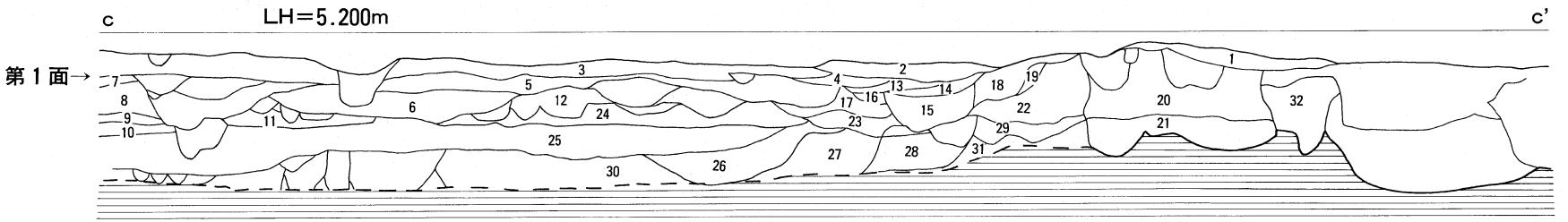


a–a'
1．表土
2．10YR3/1(黒褐)、10YR3/2(黒褐)混じる粘質土　礫含む
3．10YR4/2(灰黄褐)、10YR3/2(黒褐)粘質土　遺物、炭化物含む
4．10YR3/2(黒褐)粘質土
5．10YR4/2(灰黄褐)粘質土　礫、遺物含む
6．10YR4/2(灰黄褐)粘質土
7．10YR4/2(灰黄褐)、10YR3/2(黒褐)混じる　砂質混じり粘質土
8．10YR4/2(灰黄褐)粘質土
9．10YR4/2(灰黄褐)粘質土　礫含む

b–b'
1．表土
2．10YR4/3(にぶい黄褐)～2/2　礫、炭化物含む
3～5．遺構
6．10YR5/3(にぶい黄褐)　砂質混じりの粘質土
7．遺構
8．10YR4/3(にぶい黄褐)　砂質混じりの粘質土　礫混じる
9、10．遺構
11．10YR4/4(褐)～4/3(にぶい黄褐)砂質混じり粘質土　礫含む
12．10YR4/3(にぶい黄褐)～4/2(灰黄褐)下方に10YR3/2(黒褐)粘質混じり砂質土　礫含む
13．10YR3/4(暗褐)～4/4(褐)下方に10YR6/6(明黄褐)砂質混じり粘質土　炭化物、礫含む
14．10YR5/4(にぶい黄褐)～4/4(褐)礫含む
15～17．遺構



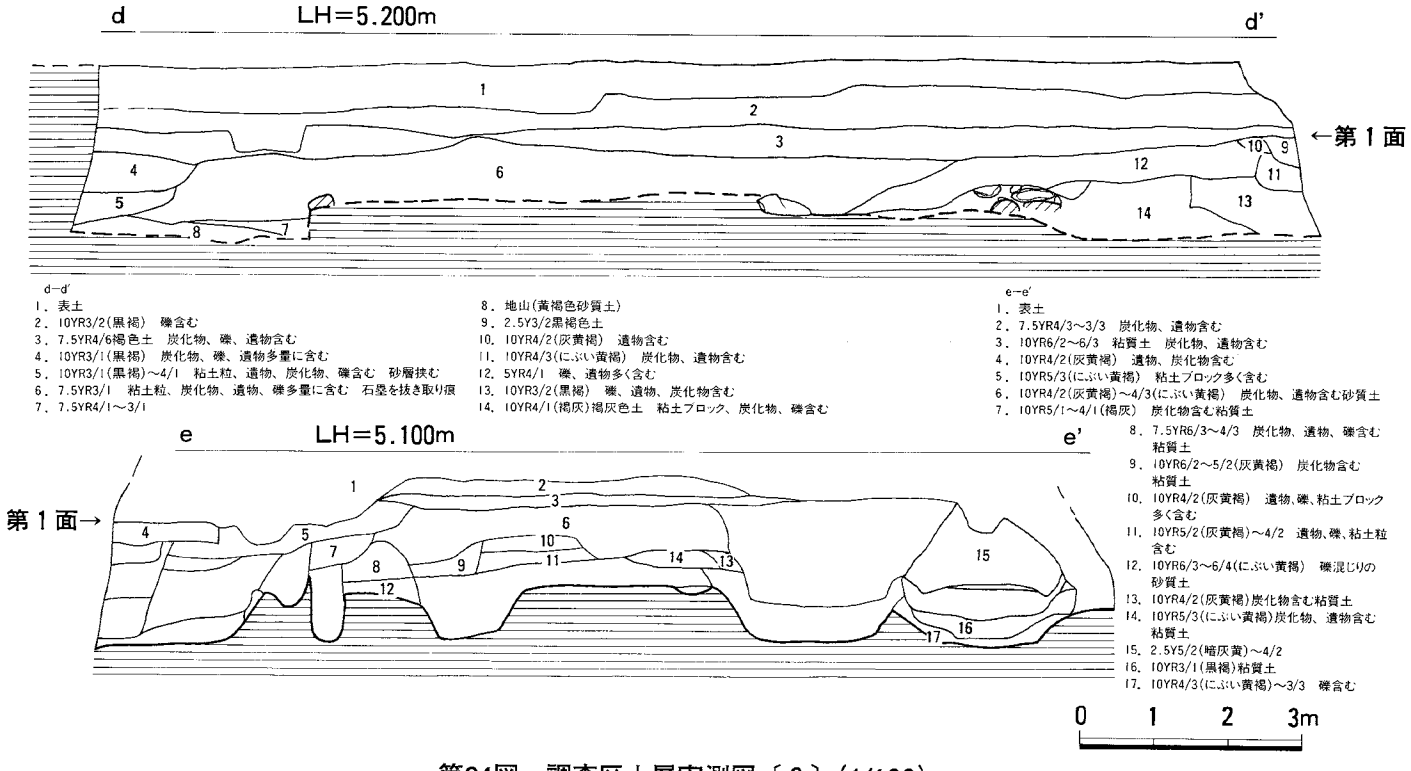
18．暗褐色土
19．暗褐色土　粘質土含む
20．10YR4/3(にぶい黄褐)　炭化物、礫含む
21．10YR3/4(暗褐)～3/3　炭化物、遺物含む
22．10YR4/2(灰黄褐)～5/2粘質土
23．10YR3/2(黒褐)
24．10YR5/3(にぶい黄褐)　粘質土と砂質土が混じる
25．10YR4/2(灰黄褐)　砂質混じり粘質土
26．10YR4/2(灰黄褐)下方に10YR1.7/1(黒)
粘質土と砂質土が混じる
27．10YR2/2(黒褐)　砂質混じり粘質土
28．遺構
29．10YR5/2(灰黄褐)砂質土
30．10YR6/4(にぶい黄橙)～5/4(にぶい黄褐)～
10YR4/4(褐)砂質土　炭化物、礫含む
31．明黄褐色土　礫含む
32．暗褐色土　炭化物、礫含む
33．暗黄褐色砂質土　礫含む
34．遺構
35．10YR5/2(灰黄褐)粘質土
36．10YR3/2(黒褐)　礫含む
37．10YR3/4(暗褐)　礫含む



c–c'
1．7.5Y2/2　粘質土
2．2.5Y3/1　炭化物、礫多量に含む
3．10YR4/1(褐灰)～3/1　砂質土
4．10YR4/2(灰黄褐)
5．2.5Y6/3　砂質含む粘質土
6．2.5Y4/2　暗褐色土　炭化物、粘土ブロック含む
7．5Y2/1
8．2.5Y4/3～5/2(暗灰黄)上部は2.5Y2/1　炭化層含む砂質土
9．10YR6/3粘質土
10．10YR4/1(褐灰)　炭化物含む砂質土
11．2.5Y5/2(暗灰黄)～10YR6/2　粘土ブロック、遺物含む
12．遺構
13．10YR4/2(灰黄褐)　遺物含む
14．10YR4/1(褐灰)～4/2(灰黄褐)　炭化物、遺物含む
15．10YR4/2(灰黄褐)　炭化物、礫、遺物含む砂質土
16．10YR1.7/1(黒)　炭化層
17．2.5Y4/1～4/2(灰黄褐)　炭化物含む
18．10YR4/1(褐灰)～4/2(灰黄褐)　炭化物多量に含む粘質土
19．10YR3/1(黒褐)　炭化物、遺物含む粘質土
20．2.5Y5/2(暗灰黄)～5/3　炭化物、遺物、礫含む粘質土
21．2.5Y4/1一部10YR4/3(にぶい黄褐)　粘質土と砂質土の互層
22．10YR4/1(褐灰)～2.5Y4/1　礫、炭化物含む粘質土
23．2.5Y5/1～5/2(暗灰黄)　遺物、炭化物含む粘質土
24．2.5Y6/2粘質土、10YR7/3砂質土、2.5Y5/1～4/1
25．2.5Y3/1～2/1　炭化物、遺物含む砂質土
26．2.5Y3/2～2/1　黒褐色砂質土
27．10YR4/1(褐灰)～4/2(灰黄褐)　炭化物少量含む
28．10YR4/4(褐)　鉄分含む砂質土
29．10YR4/3(にぶい黄褐)　炭化物含む砂質土
30．2.5Y3/2　黒褐色土　炭化物、遺物含む
31．10YR6/4(にぶい黄橙)　砂質土
32．2.5Y4/1　炭化物、遺物少量含む

0　1　2　3m

第23図　調査区土層実測図〔1〕(1/100)



第24図　調査区土層実測図〔2〕(1/100)

博多小学校で地下展示室として公開されることとなった。

以上述べたように、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅱ′区、Ⅲ′区は順次拡張しながらの調査となったため、最終的には一連の調査区となった。しかしながら、調査区がかなり広範囲になったため、煩雑さをさけるために各調査区ごとに遺物・遺構番号を付け、各々1調査区として独立した調査を行った。故に以下の遺構・遺物の説明も各調査区ごとに行う。なお、調査を行ったⅡ区、Ⅲ区、Ⅲ′区、Ⅱ′区の順に記述する。

層序

調査区全体の遺構面は基本的に2面であった。しかしながらこれはある程度遺構が明確に検出された面で設定したために、細分すれば2面以上の遺構面があった箇所もあると思われる。Ⅱ区の第1面は褐色砂質土の包含層上面、第2面は黄褐色砂質土上面及び南東端の暗褐色砂質土上面である。また、Ⅱ区は第3面も検出された。これは厳密に言うと、第2面の掘り残しと、南東端の暗褐色砂質土下層の黄褐色砂質土上面である。他の調査区はおおよそⅡ区に準じる2面の遺構面が検出された。

3．Ⅱ区の調査

Ⅱ区の概要

Ⅱ区は、小学校敷地の南東側コーナーに位置する。第１面を褐色砂質土包含層上面とし、表土の除去を行った。ところが、調査区の北側、旧奈良屋小学校のプールの跡地に当たる部分は、セメントミルク工法により、現地表下約1.5ｍまで掘削・地盤強化が行われていた。このため、この部分のみ上層の包含層部分は削平され、下面の黄褐色砂質土である地山面が露出していた。第１面は調査区南西側部分のみの検出となった。第２面は、第１面である褐色砂質土層を除去し、地山面である黄褐色砂質土層がほぼ検出された面を設定した。この面は調査区全体に広がる。ただ、この黄褐色砂質土層は南東端は急激に落ち、その部分は上部に暗褐色砂質土が堆積しており、上面には遺構が検出された。よって第２面は調査区南東端の暗褐色砂質土層上面も含む。

石墨遺構は重機で客土を除去している途中、第１面上面でその一部が検出された。Ⅱ区調査区の南端付近である。第１面の遺構を掘削していく段階で、いくつかの遺構の底部に一連のものと思われる石が確認され、石墨遺構の北東方向への延長が推定された。果たして、第１面を除去すると、地山である黄褐色砂質土層上面で、南西から北東へ向かい点々と石墨遺構が部分的に検出された。第１面で検出された部分ほど残りは良くなかったが、石積が３段残存している箇所もあり、これらが本来一連のものであったという可能性が高まった。

第１面検出遺構

①石積遺構

SF06（第28図　図版42）

Ｇ－10区に位置する。主軸の方位はＮ－43.7°－Ｅをとる。平面はほぼ正方形を呈し、一辺が約1.3ｍ、高さは40㎝を測る。上部は破壊されていると思われ、掘方も不明であるが、幅が20㎝前後のやや小振りの石を４段積み重ねて石室状に仕上げている。明青花、青磁、朝鮮白磁、土師皿、火鉢等が出土している。

SF26（第28図　図版42）

Ｈ－７区に位置する。主軸の方位はＮ－40.0°－Ｗをとる。平面は長方形を呈し、短辺は1.2ｍ、長辺は３ｍ以上を測る。残りは余り良くなく、２面の壁面のみの検出である。長辺の壁面は一段目に大きいもので長さ約50㎝ほどのやや大ぶりの石を並べ、その上部に小振りの石を隙間に並べるように積んでいる。裏込の石であろうか。明青花、すり鉢、土師皿、瓦等が出土している。

SF27（第28図　図版42）

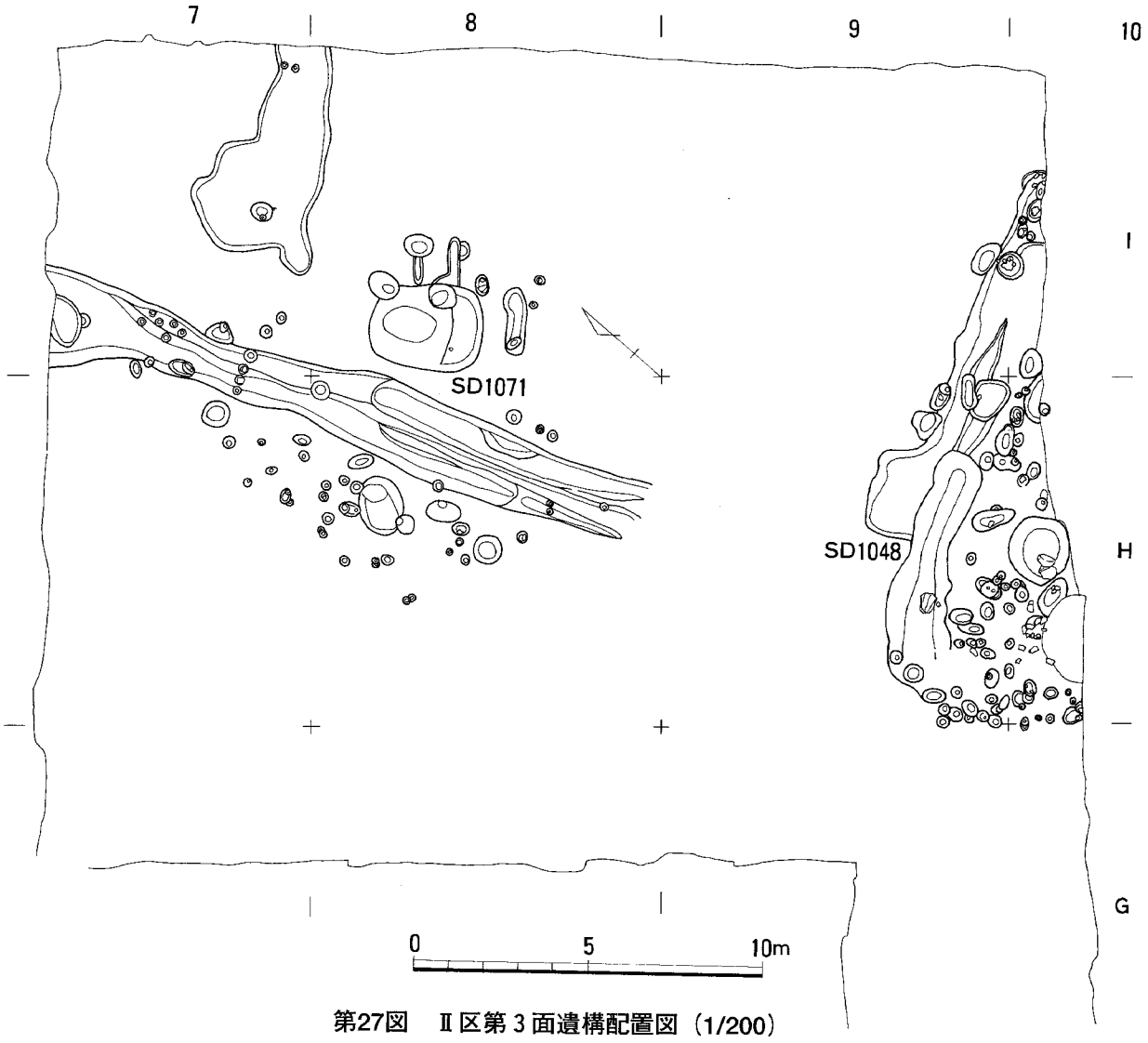
SF26の南側で検出された。主軸の方位はＮ－49.5°－Ｅをとる。平面は長方形を呈し、石積の残りは６基の中で最も良く、４段である。長辺は2.7ｍ、短辺は2.3ｍ、高さは1.1ｍを測る。長さが30～60㎝ほどの大きめの石を積み重ね隙間に小石や瓦片を詰め込んで裏込としている。また、西側壁の西には60㎝×30㎝ほどの広さの板石を小振りの石で支えるように立てて据え付けている。明青花、青磁香炉、すり鉢、土師皿、裏込の瓦が出土している。

SF28（第28図　図版42）

SF27の東側で検出され、Ｉ－８区に位置する。主軸の方位はＮ－39.0°－Ｗをとる。間仕切りが設置された形態である。石積の東壁は削平されて残存せず、残りの良い部分で２段の石積が残る。長辺が3.5ｍ以上、短辺が2.0mを測る。短辺が積まれている石の大きさはばらつきがあり、小さなものは

第25図　Ⅱ区第１面遺構配置図（1/200）

第26図　Ⅱ区第２面遺構配置図（1/200）



第27図　Ⅱ区第３面遺構配置図（1/200）

長さ20㎝、大きなものは70㎝×60㎝で、６基の石積遺構の中では最も大きな石が用いられている。この遺構で特徴的なのは、北西側壁面の中央には石が積まれず、かわりに大量の瓦片が散布していたことである。入口とも推定されるが、大量の瓦片が裏込として用いられていたものかどうかは不明である。明青花、青磁、白磁、備前焼、瓦が出土している。

SF56（第28図　図版42）

SF06の北西側で検出された。G－８区に位置する。主軸の方位はN－46.5°－Eをとる。SF06と形状、法量ともに類似する。1.1×1.0ｍの平面正方形を呈し、石積は多い部分で４段残る。長さ15㎝ほどの石を積み重ねる。高さは40㎝である。朝鮮王朝白磁、備前焼、瓦が出土している。

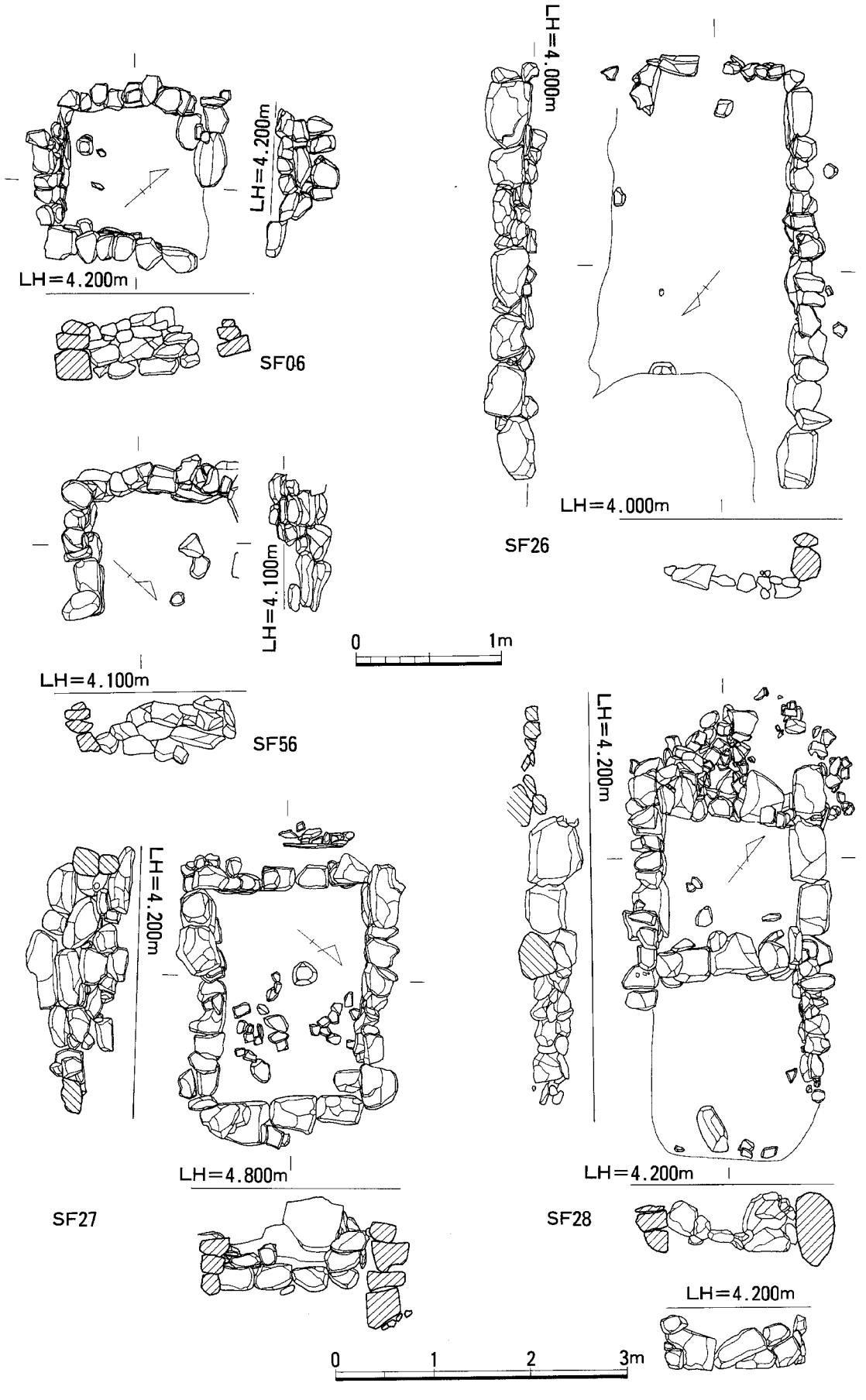
②土壙

SK20（第29図）

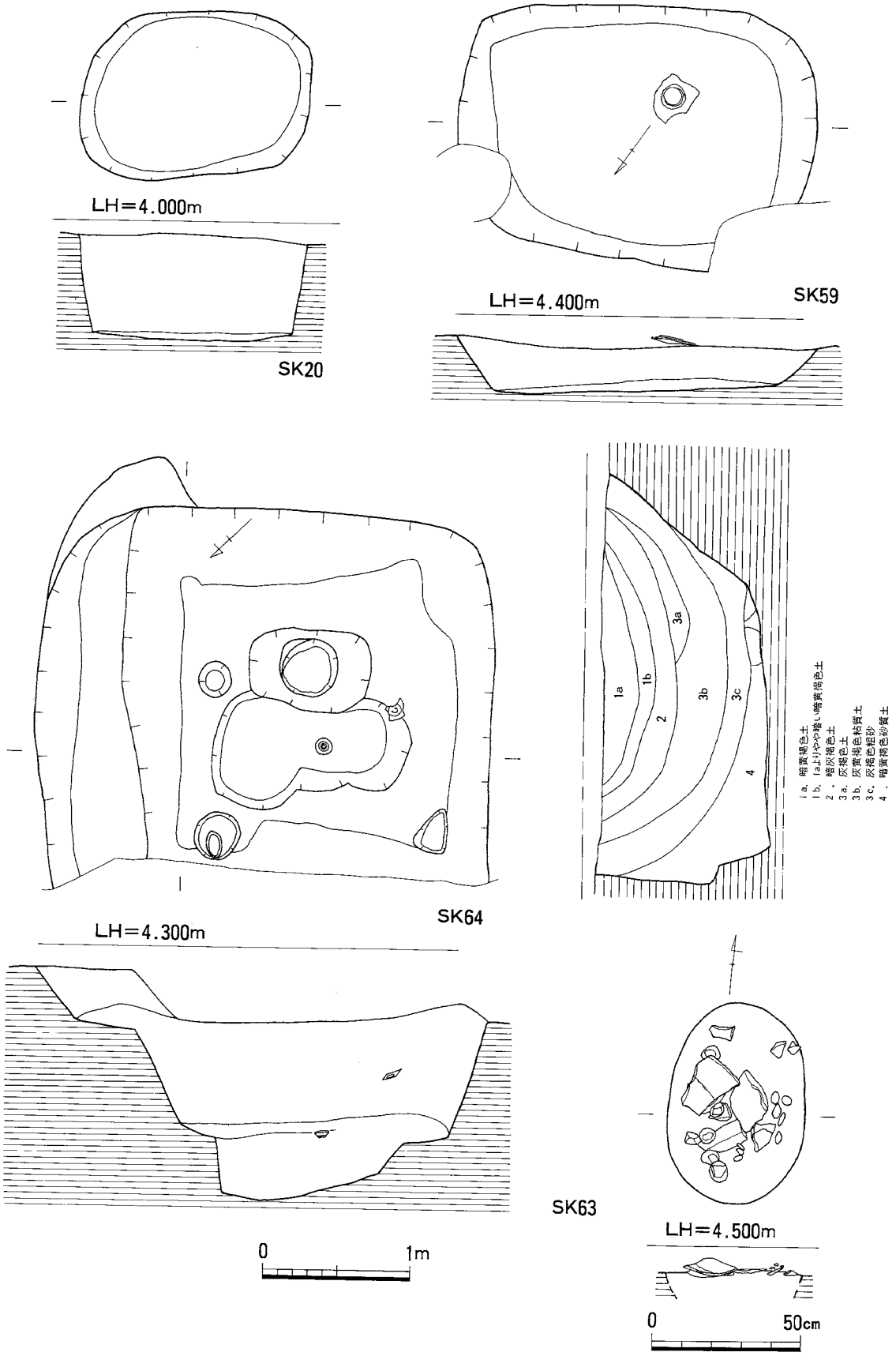
H－９区に位置する。長軸1.6ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.7ｍを測り、平面形は楕円を呈する。朝鮮王朝白磁、青磁、土師皿、瓦等が出土している。また、最も特徴的な遺物としてメダイと十字架の鋳型が挙げられる。

SK59（第29図　図版42）

G－９区に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長辺2.4ｍ、短辺1.7ｍ、深さ0.4ｍを測る。上面に青磁皿片が伏せられた状態で出土した。出土遺物としてはこの他に、小型青磁碗、朝鮮王朝白磁、土



第28図　石積遺構実測図（1/40・1/60）



第29図　土壙実測図（1/40・1/20）

師器蓋、釜が挙げられる。

SK63（第29図　図版42）

Ｇ－10区に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸0.68ｍ、短軸0.46ｍを測る。上面に瓦片、土師器、石が集中している。石は、河原石のような楕円形で平たい形態のものである。

SK64（第29図　図版42）

Ｇ－９区南東コーナーに位置する。平面は隅丸長方形を呈すると思われるが、北西側の壁が切られている。現状況で平面は2.4ｍ以上×3.0ｍ、深さは1.1ｍを測る。断面は逆台形を呈し、底面には３基のピットが検出されている。検出できなかったが、おそらくピットは四隅に１基ずつあったと考えられる。覆い屋があったのであろうか。また、底面中央部に土壙状の落ち込みが２カ所あり、浮いた状態で朝鮮王朝白磁皿と土師皿が検出された。SK64からはこの他に、青磁碗、白磁碗、両耳壷、火鉢、すり鉢、備前四耳壷・大甕、土鍋、多数の土師器坏・小皿が出土している。

SK196（第30図）

Ｉ－９区に位置する。調査区北東側の攪乱に切られていたが、平面は楕円形を呈する。残存状況で、3.6ｍ×3.0ｍを測る。深さは50㎝程である。人頭大の石が大量に投棄されていた。粉青沙器、青磁、白磁、備前大甕、丸瓦等が出土している。

第２面検出遺構

①集石遺構

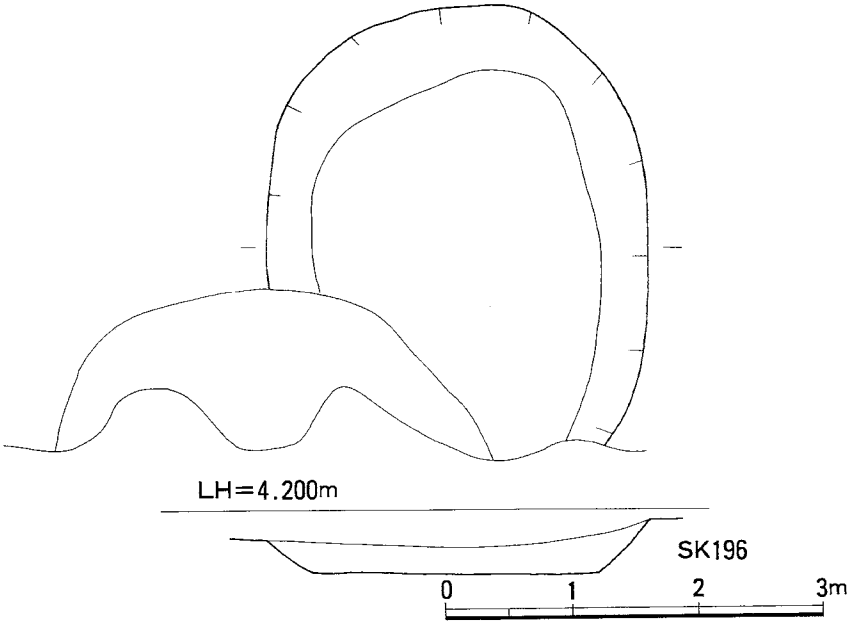
SF793（第31図　図版42）

Ｉ－８区に位置する。一辺が1.4ｍ程の掘方の一辺のみに20㎝×30㎝ほどの石が並べられている。おそらく石積遺構であろう。土師器小皿が出土している。

SF1019（第31図　図版43）

Ｇ－10区に位置する。残存状況は、1.0ｍ×0.9ｍである。20㎝×20㎝ほどの石を並べ、一部二段積みの状況であるが、ほとんど崩れている。これもおそらく石積遺構であろう。石の間や埋土中から、青磁皿、粉青沙器、土師器等が出土している。

SX853（第31図　図版43）



第30図　SK196実測図（1/60）

Ｉ－９、10区の境目付近に位置する。調査区の壁に切られているため、全容は不明である。楕円形の掘方の周辺に、大きいもので一辺が40cmの石を並べ、その中に小振りの石を詰め込んでいる。掘方から、土師器小皿、瓦質の円形加工品が出土している。

SX1030（第31図　図版43）

Ｉ－８区西よりに位置する。長軸0.86ｍ×短軸0.65ｍの平面楕円形の掘方に25cm×10cm程の石を掘方の周辺に並べ、中にも同じような石を詰めている。石と掘方底面の間には、細かな砂利が敷かれている。出土遺物はなかった。

SX944（第31図）

Ｈ－９区に位置する。35cm×10cmほどの細長い石、径15cmほどの石が、60cm×50cmの範囲によせられている。石の間やその下から、土師器、瓦が出土している。

SX916（第31図）

Ｇ－９区に位置する。大きいもので長さ20cmほどの石が70cm×60cmの範囲に集中している。石の間から土師器小皿が出土している。

SX907（第31図）

Ｆ－９区に位置する。SX916と類似した集石である。70cm×60cmの範囲。石の間から鉄製の刀子が出土した。

SX1067（第31図）

Ｉ－７区で調査区の壁際に位置する。大きいもので径20cmほどの石が90cm×70cmの範囲にぎっしりと詰め込まれている。深さは40cmほどである。掘方は検出できなかった。

SX821（第31図　図版43）

Ｈ－８区に位置する。径10cm前後の礫の集石遺構である。茶釜片が出土している。

SX816（第31図　図版43）

Ｈ－８区に位置する。石・瓦・土器溜である。径1.6×1.5ｍの変形楕円形の範囲に集中する。瓦、青磁、火鉢等が出土している。

SK938（第31図　図版43）

Ｈ－９、10区に位置する。幅30cm、延長2.7ｍの溝状遺構の上部に礫、土師皿が検出された。遺構の深さは20cmである。土鍋、土師皿が出土している。

③井戸

SE1083（第32図　図版43）

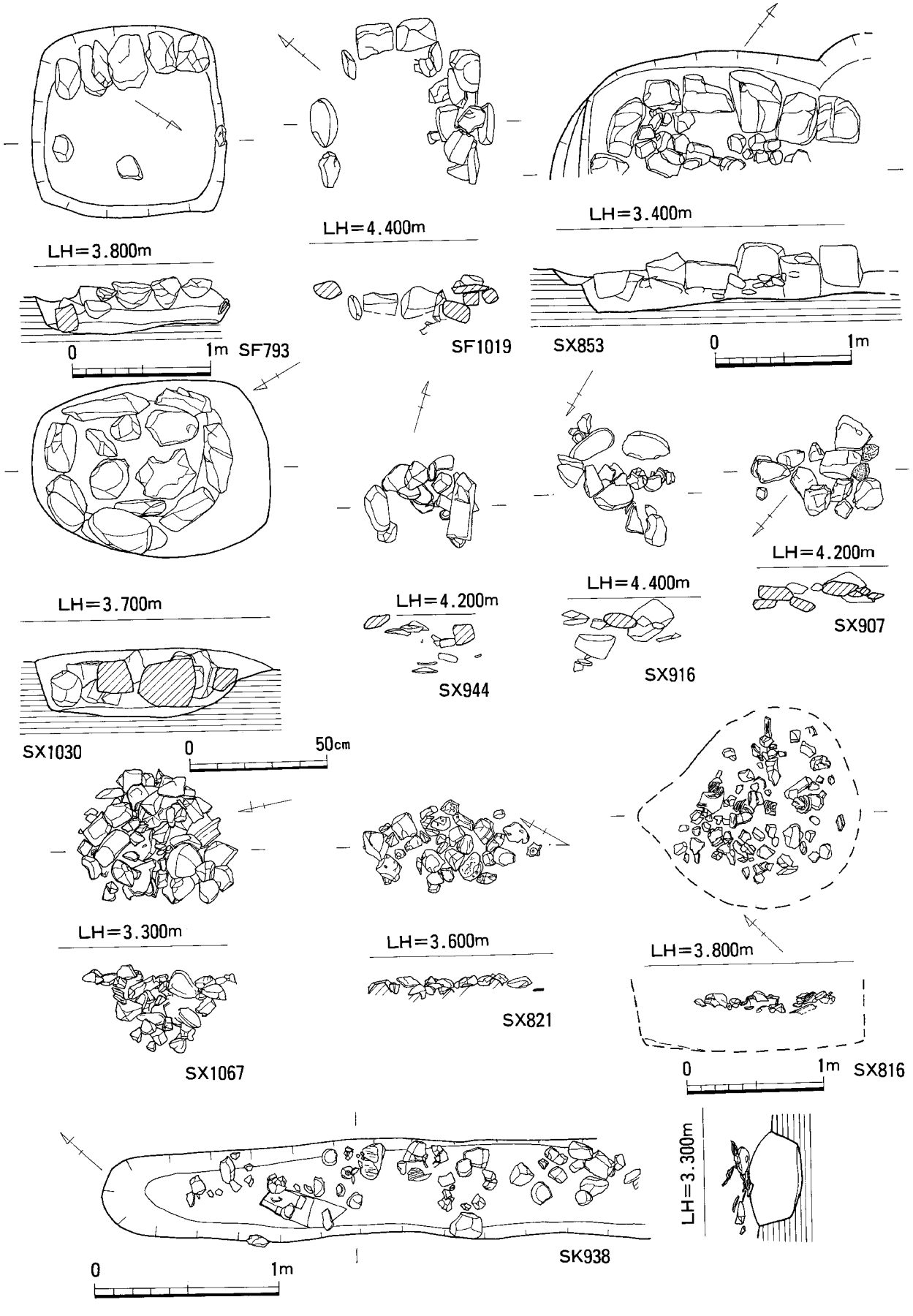
Ｇ－７区で検出された。この井戸の周辺は他にも井戸が集中しており、掘方を区分するのは困難であった。SE1083の井筒は木枠であったと思われるが、木枠そのものは残存していなかった。井筒の径は0.9ｍである。

SE1084（第32図　図版43）

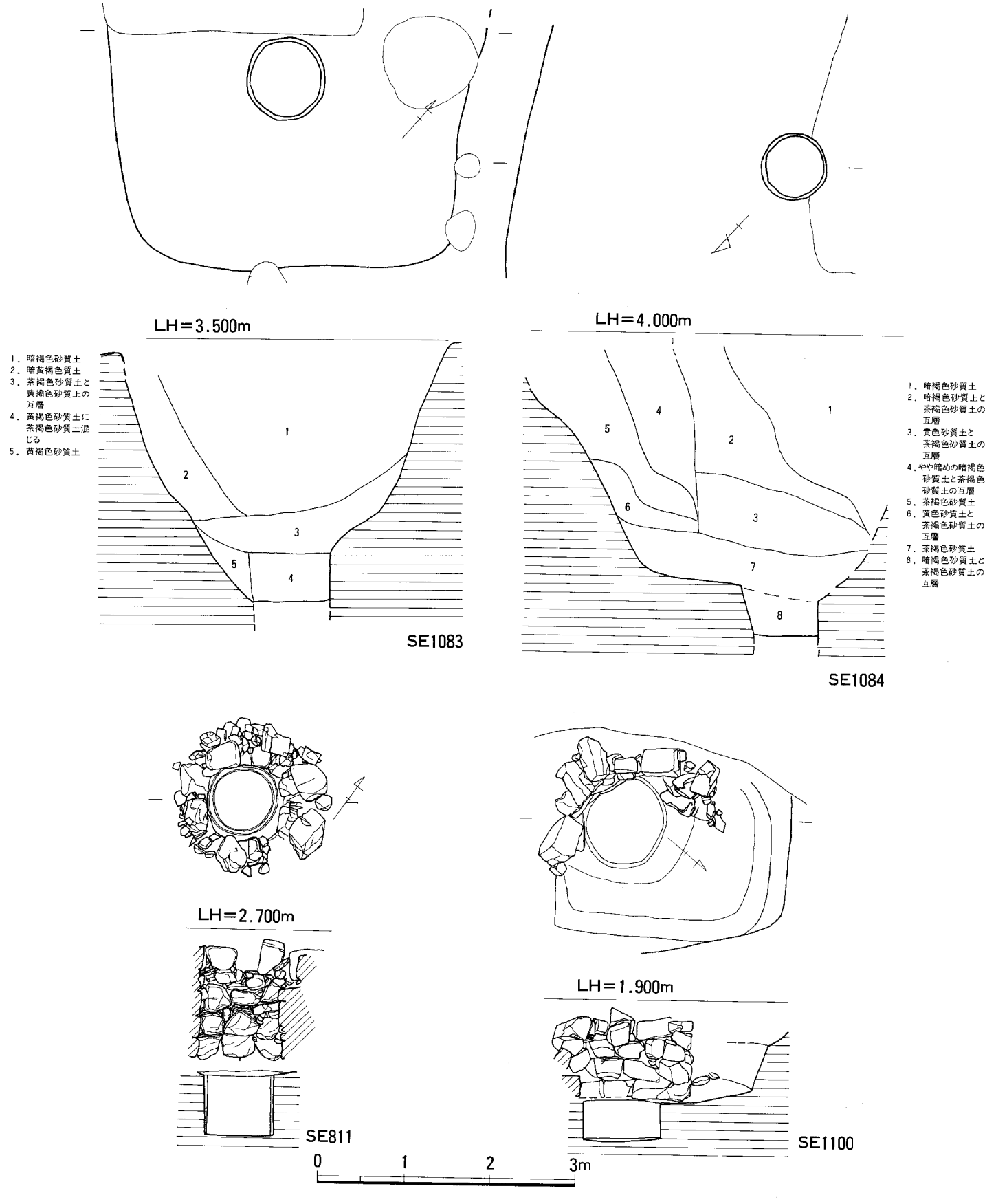
Ｈ－７区で検出された。SE1083の北側に位置する。同じく木枠の井筒であったと推定され、径は0.8ｍを測る。SE1100の掘方に切られている。土師小皿、軒丸瓦、銅製の釣り針、土錘が掘方から出土している。

SE811（第32図　図版43）

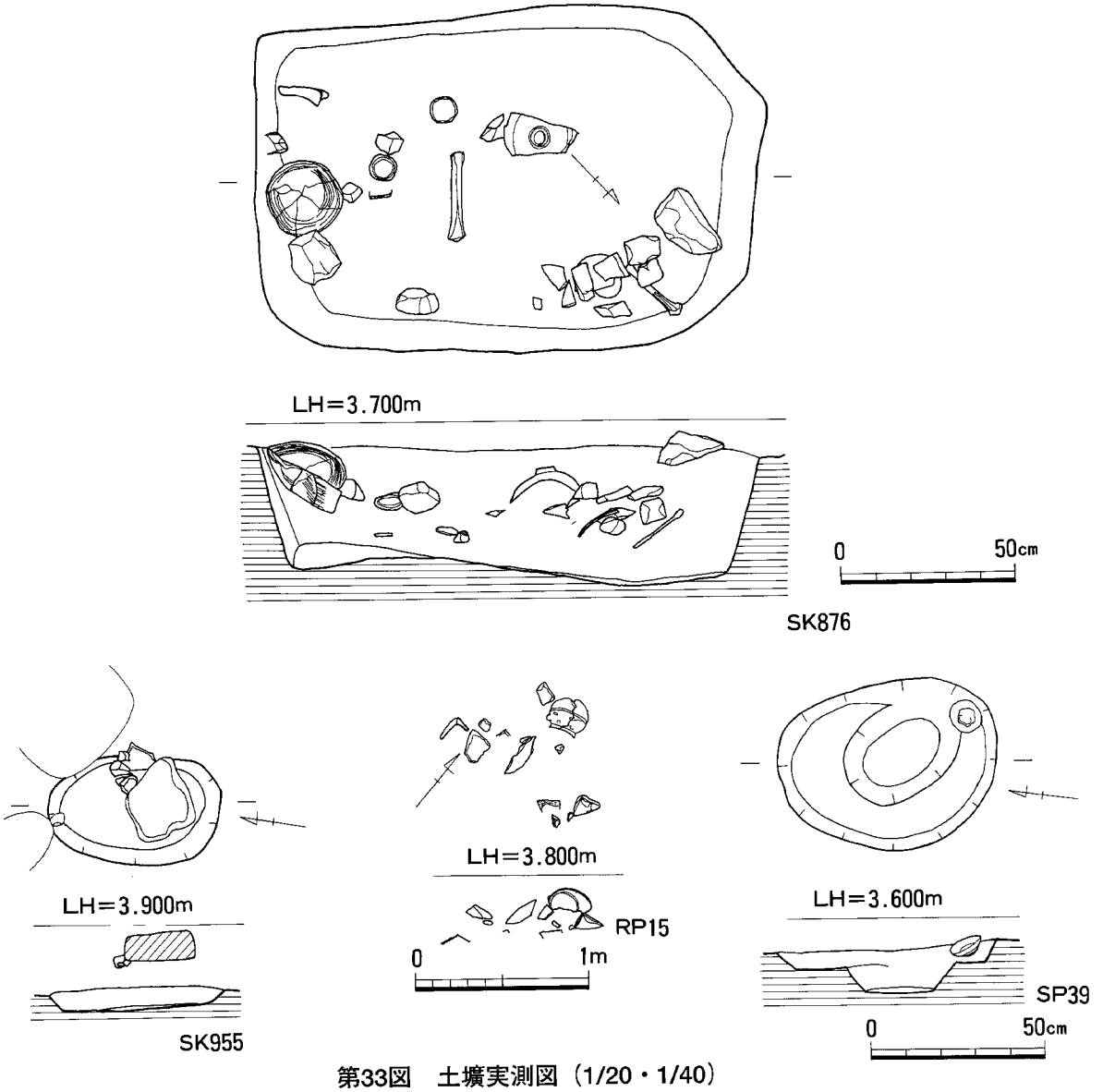
Ｉ－９区に位置する。攪乱の下から検出された。30cm四方ほどの石を５段、1.3ｍの深さまで積み重ね、井側となしている。その底面には瓦を二重に巻いた井筒が検出された。石積上面の径は1.7ｍ、



第31図　集石遺構実測図（1/20・1/30・1/40）



第32図　井戸実測図（1/60）



第33図　土壙実測図（1/20・1/40）

瓦井筒の外側の径は0.8ｍを測る。明青花、瓦等が出土している。

SE1100（第32図　図版43）

Ｇ－７区に位置する。SE1083の北西、SE1084の南西側に位置する。周辺井戸の掘方を重機で掘削中に検出した。2.8ｍ×2.6ｍの長方形の掘方内の南側よりに井筒が位置する。50㎝×20㎝の直方体の石を４段南側コーナーに積み上げるが、反対側は石積はない。石積の下には瓦組みの井筒が検出された。明青花、青磁碗が出土している。

④土壙

SK876（第33図　図版44）

Ｇ－８区に位置する。平面は2.9×2.0ｍの長方形を呈し、深さは73㎝を測る。脛骨、大腿骨片が出土したことから墓壙であると考えられる。南東側壁際に大型の鉢、陶器碗、北側コーナーには礫が散布していた。また、明青花碗、青磁・土師器皿の底部を丸く加工したもの、土師器小皿、火鉢片、肥前系紅皿等が出土しており、これらの副葬品から成人女性の墓壙であると推定される。

SK955（第33図）

Ｈ－８区に位置する。長径1.0ｍ、短径0.6ｍを測る平面楕円形を呈する。礫や土器が上部から検出された。遺物は小片で図示できない。

RP15（第33図）

G－7区に位置する。SE1083、1084、1100掘方の上面で礫とともに検出された。瓦質の両耳壷形の火鉢である。

SP39（第33図　図版44）

I－7、8区の境目に位置する。長径56cm、短径50cmの平面楕円形を呈し、柱痕が残る。深さは13cmである。ピットの南側端に明青花のⅢが据え置かれていた。

⑤掘立柱建物

SB01（第34図）

H－9、10区の境目で検出された。主軸をN－58.5°－Wにとる。1間×4間で梁行1.8m、桁行5.2mを測る。

第3面検出遺構

SD1071（第35図　図版44）

H・I－7・8区で検出された。主軸はN－20.5°－Wをとる。延長13m、最大幅2.3m、深さ30～63cmを測る。溝の上面には小礫が集中して分布していたが、溝の掘方は第2面で検出されている。土鍋、東播系のすり鉢等が出土している。

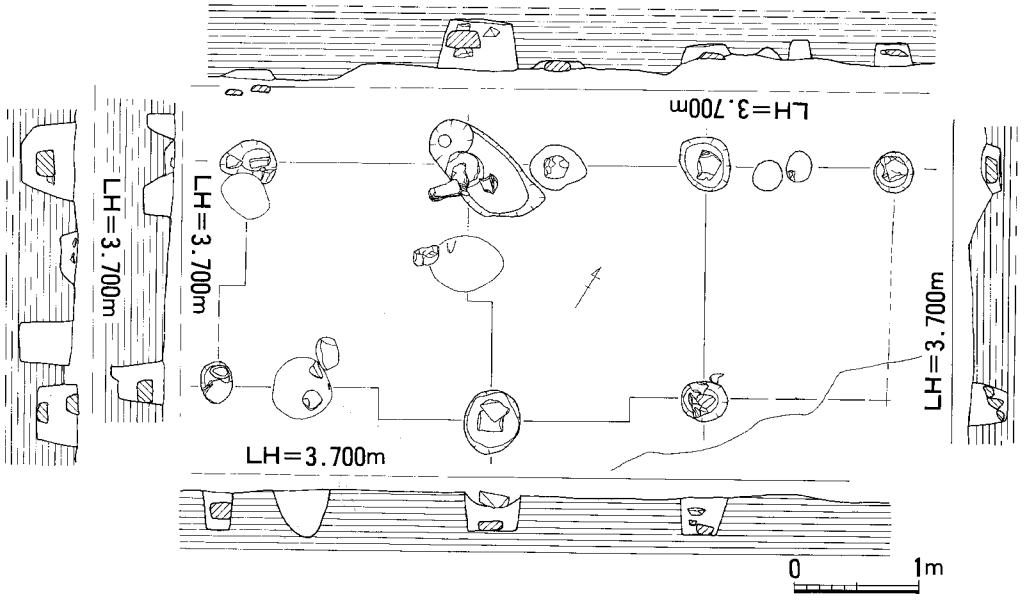
SD1048（第35図）

H－9区で検出された。主軸はN－69.0°－Eをとる。延長6.2m、最大幅1.8m、深さ65cmを測る。底面に長さ60cm、幅40cmの石が検出された。

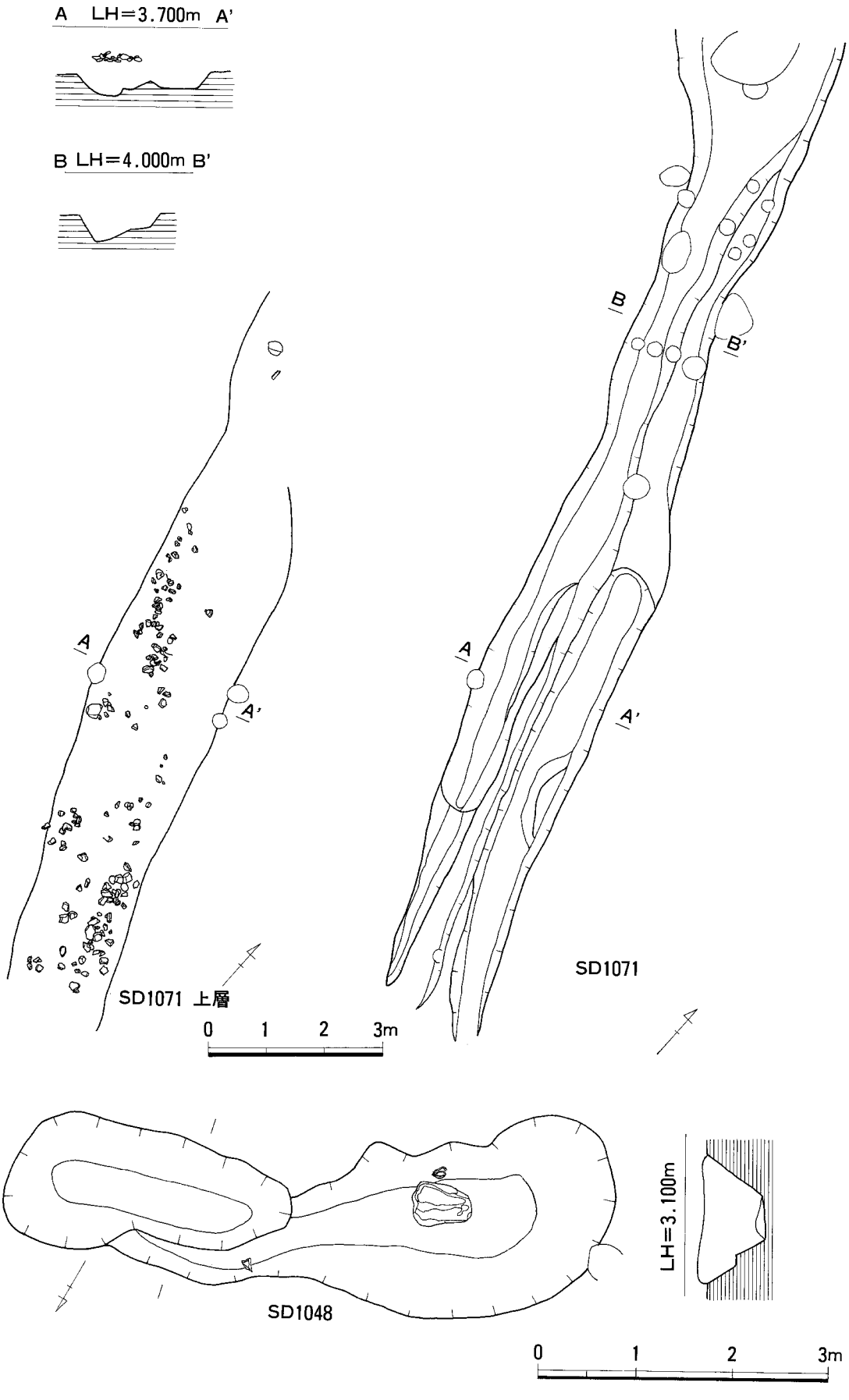
第1面検出遺構の出土遺物

SF06出土遺物（第36図　図版53）

1、2は青花碗C－Ⅲ類である。外面に省略された唐草文、見込には略化された唐草文と渦文を描く。2は端反りの口縁を呈し、内面の口縁部には圏線が、外面胴部には崩れた連弁文が描かれる。3



第34図　掘立柱建物実測図（1/60）



第35図　溝実測図（1/60・1/100）

は青磁皿で、口縁が大きく外反する。見込に瓢箪の中に十字を配したスタンプ文があり、外底の釉は輪状に削り取られる。4は端反りの白磁皿E－2類。全面に施釉される。5は朝鮮王朝陶器皿。見込には推定4カ所の胎土目跡、畳付には3カ所の胎土目跡がつく。高台の削り出しは浅く、灰褐色の胎土に全面に透明釉がかけられる。6～10は土師器の坏。いずれも底面は糸切り離しで、6～8は順に口径12.4cm、12.7cm、11.4cm、器高2.6cm、3.8cm、2.3cm、底径7.9cm、7.7cm、7.4cm。9は口縁部がやや外湾気味に開く。口径11.0cm、器高2.4cm、底径7.0cm。10は底部から大きく開く器形である。内面は強いナデのため段がつく。口径11.2cm、器高2.4cm、底径4.1cm。11、12は火鉢である。11は大型で口径30.2cm、器高13.8cm、を測り、推定3カ所に脚がつく。外面にミガキ、内面に細かなハケメが施される。12は小型で口径18cm、器高7.0cm、底径14cmを測る。短めの脚が推定3カ所つく。内面はハケメで調整される。13は硯であろうか。器高は5.7cmを測る。

SF26出土遺物（第37図　図版53）

1は端反りの青花皿B群。見込に蓮を描く。高台外面にも文様が描かれる。2は備前すり鉢V期。12条のスリ目を有する。3は土師器の坏。口径10.6cm、器高2.6cm、底径6.8cmである。4は瓦質の円形加工品、5は土錘である。6、7は平瓦である。いずれも両面にヘラナデ調整、布目痕が残る。

SF27出土遺物（第37・38図　図版53）

第37図8はV期の備前すり鉢。10条のスリ目を有する。9は土師器の坏、10、11は土師器の小皿である。いずれも糸切り離し底部。順に口径10.2cm、6.5cm、6.7cm、器高2.0cm、1.4cm、1.3cm、底径7.0cm、5.2cm、5.7cm。12は陶器の蓋である。外面に緑灰色の釉が施される。13は青磁香炉である。胴部には淡緑色の釉が施されるが底部は露胎である。アーチ形に抉り込んだ脚を3つ削り出す。14は碁笥底の青花皿C群。外面には圏線と波濤文、内面には圏線と見込に文字と思われる記号を描く。第38図1は土師質の皿である。底径は14.6cmを測り、内面にカエデ様の文様が線刻される。2、3は瓦である。2は軒丸瓦で、内区は右巻の三つ巴文である。頭部はやや大きく尾は1/4程めぐって消える。外区には小さな珠文を13か14個配すると思われる。周縁の幅1.5cmを測る。3は丸瓦である。凸面には縄目のタタキが、凹面には布目痕、抜き取り縄目痕が残る。4は土錘である。

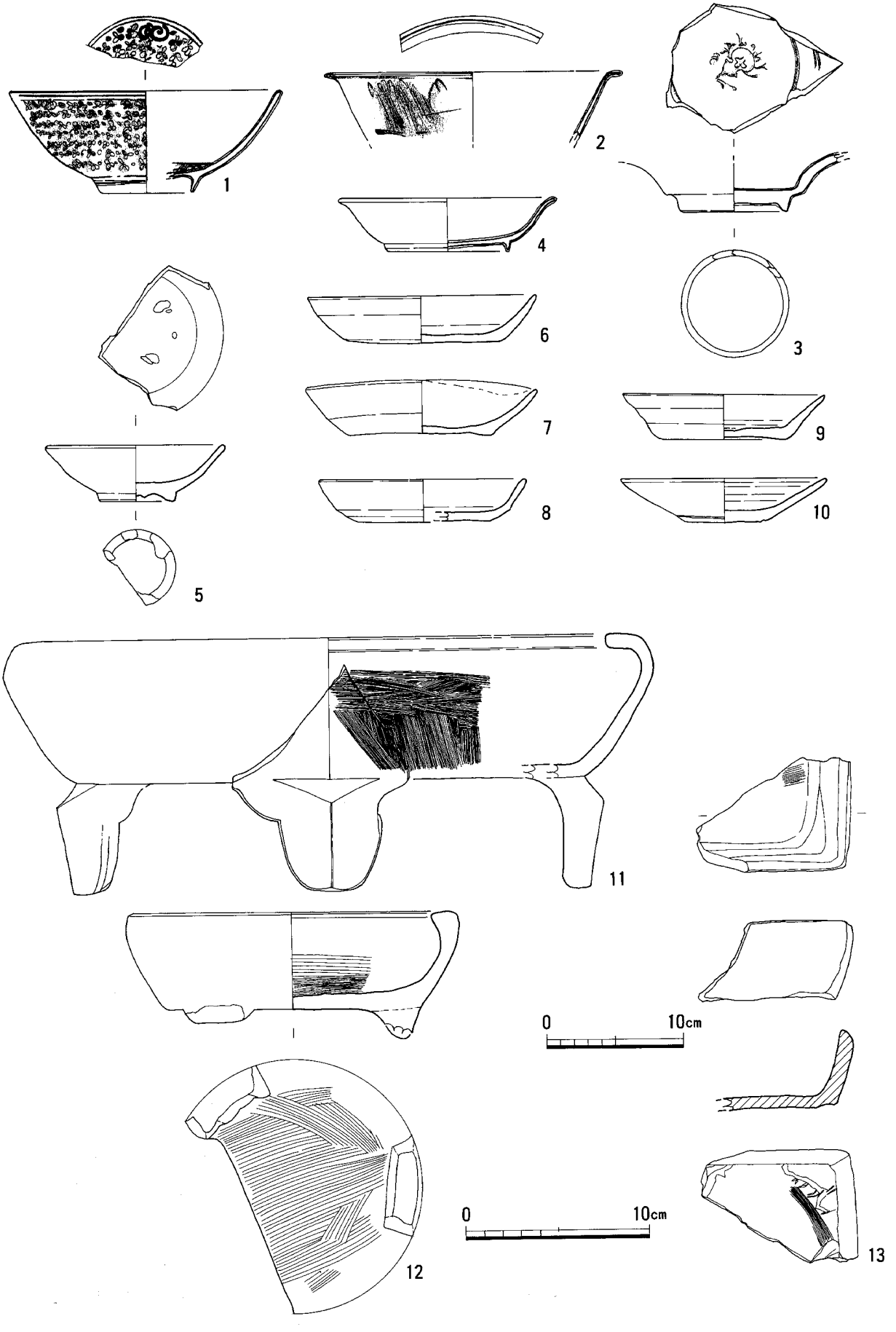
SF28出土遺物（第38・39図　図版53）

5は青花碗E群か。見込には圏線の中に如意雲を描き、外面には崩れた唐草文を描く。高台には字款が配されるが文字は不明である。6も青花碗でB－XⅡ類である。見込に「壽」の字款を配し、胴部には崩した芭蕉葉文を描く。7は青磁碗E類。オリーブ色の釉が施される。8は青磁碗の底部である。高台底面は露胎となる。9は白磁皿底部である。E－2類。10、11は土師質のすり鉢で口縁部が直線的に立ち上がる。6条のスリ目が入る。12は備前の甕底部である。13は瓦質火鉢の把手部分である。14は陶器の壷。第39図1、2は軒丸瓦である。瓦当径は13.2cmを測り、内区は左巻の三つ巴文である。巴の頭部はやや尖り気味で尾は半周して他の巴に接する。外区には小さな珠文が11個配される。周縁の幅は1.8cmを測る。2は瓦当径13.0cmを測り、内区は左巻の三つ巴文である。頭部はやや大きく尾は1/4以上めぐって消える。外区には小さな珠文が11個配される。周縁の幅は1.5cmを測る。3は軒平瓦である。中心飾りは宝珠、残存する右半分は3回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚さ4.4cmを測る。4は丸瓦である。長さ18.4cm、幅13.4cm、厚さ0.8cmを測る。凹面に布目痕が残る。

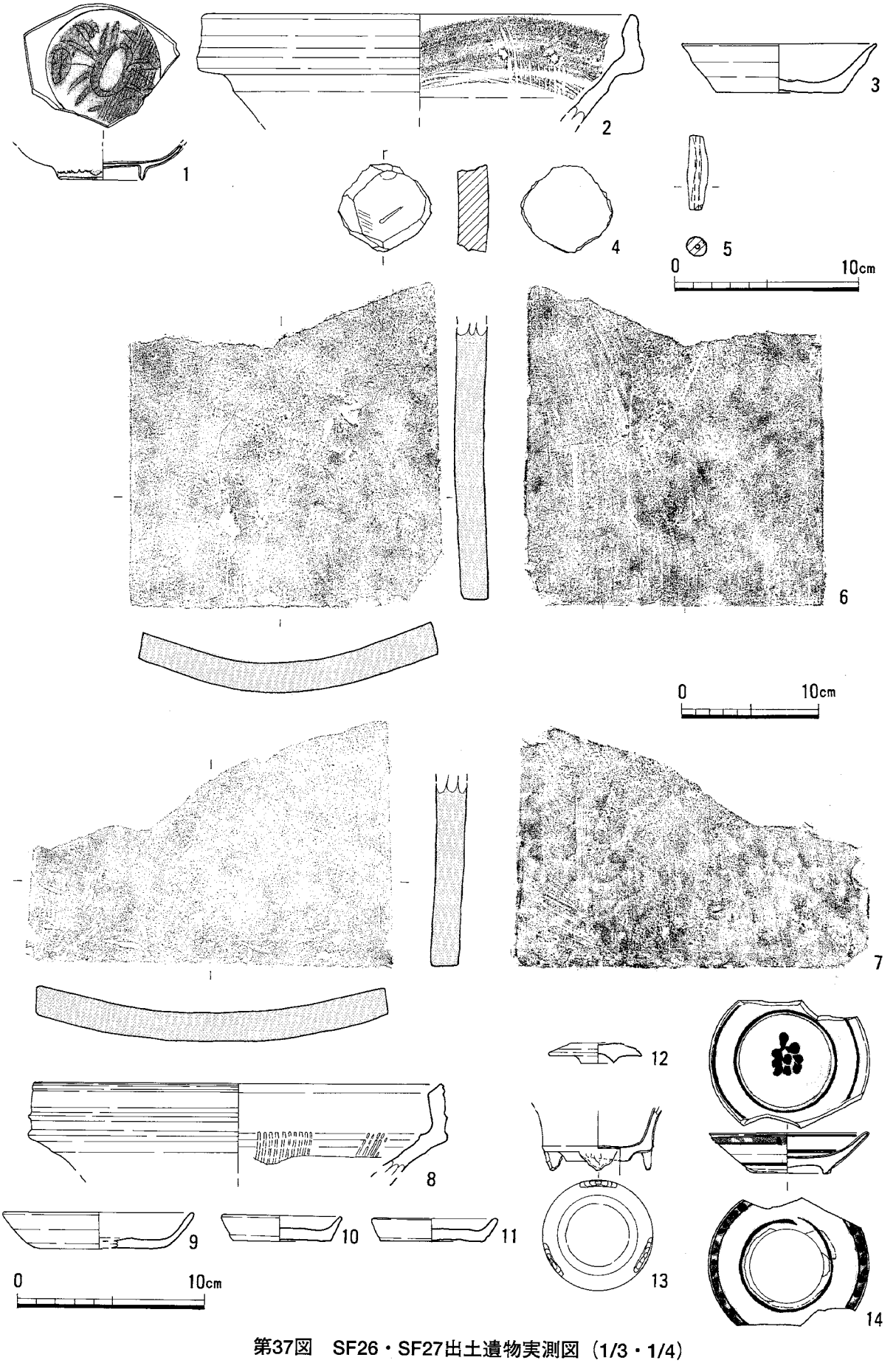
SF56出土遺物（第39図）

5は朝鮮王朝陶器皿。赤褐色の胎土で、高台内の削り出しは浅い。6～8は備前陶器である。6は小型壷である。底径4.7cmを測る。7は壷、8は甕である。底径はそれぞれ17.5cm、19.6cmを測る。

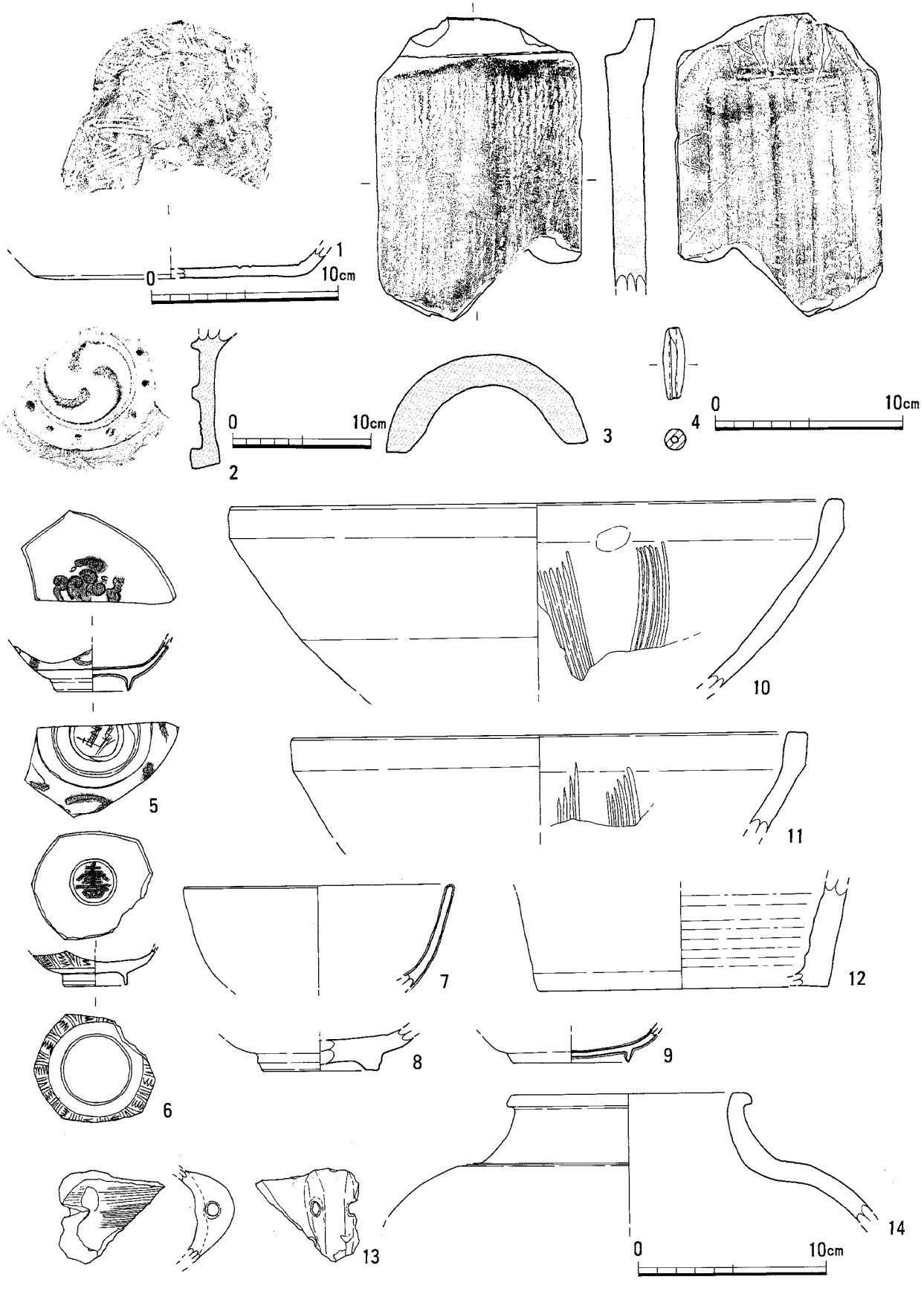
SK20出土遺物（第40・41図　図版53・54）



第36図　SF06出土遺物実測図（1/3・1/4）

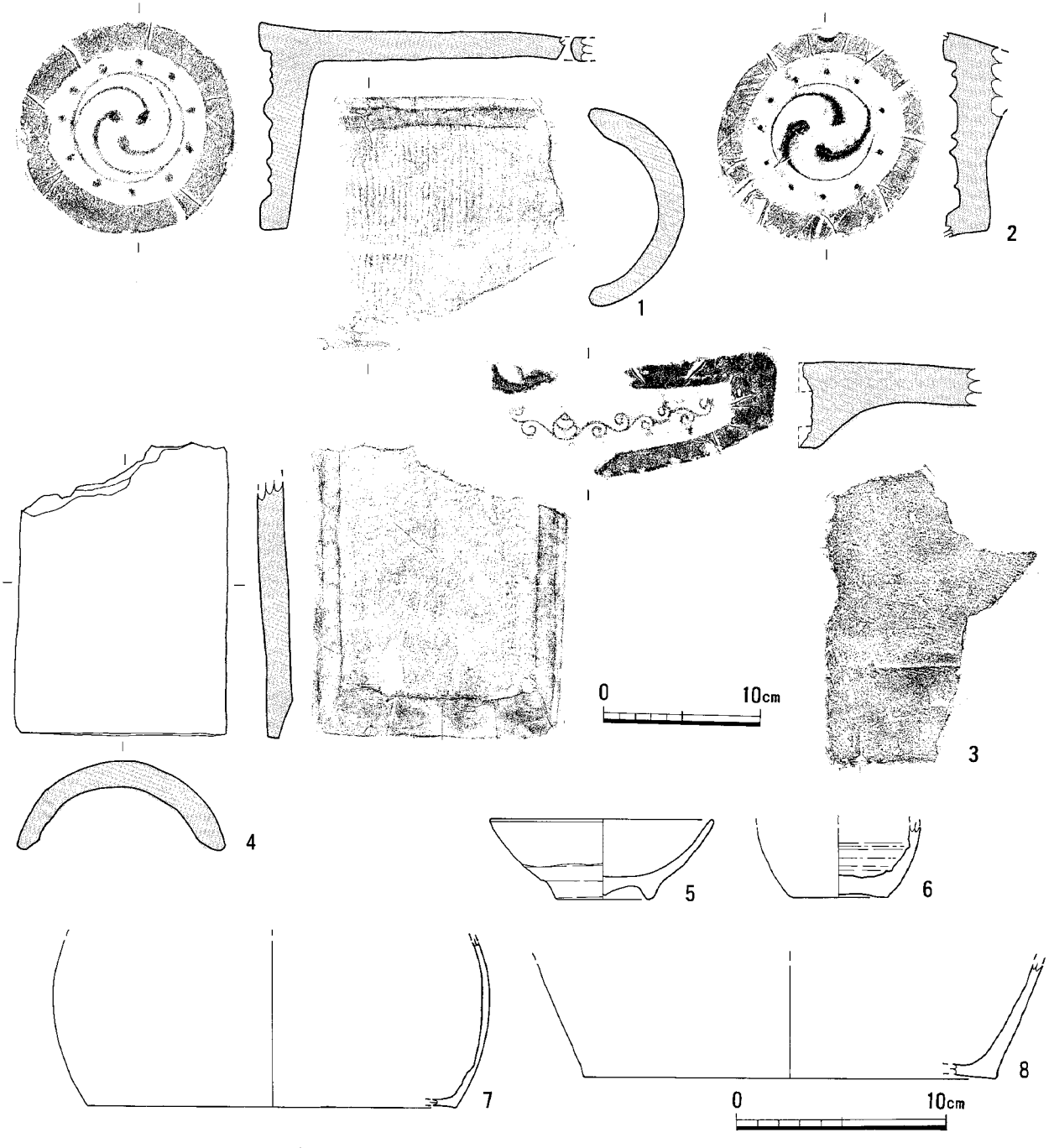


第37図　SF26・SF27出土遺物実測図（1/3・1/4）



第38図　SF27・SF28出土遺物実測図（1/3・1/4）

第40図１はメダイと十字架の鋳型である。残長4.0㎝、幅5.5㎝、厚さ1.4㎝を測る赤褐色粘土板の一面に正面から見て左にメダイ、右に十字架の型が配される。それぞれの鎖通しの環の上部には湯口が設けられる。十字架の環に通るように鎖もしくはひもの跡がつく。このことからこの鋳型は製品を粘土に押し当てて作られた踏み返し用のものと推定される。鎖もしくはひもは本来十字架に通っていたと思われるが、メダイにも通っていたのかどうかははく離のために明らかではない。メダイにはキリストの正面から見た顔が刻印される。中央に目鼻が配され、その上部にはイバラの冠が、下部にはひげがつけられる。顔の両側には布を表していると思われる線が刻まれる。一方十字架の方には、細い線刻が成されているが模様であるのかキリストの磔刑図であるのかは判然としない。しいていえば十字架の中央に顔のような円形が、その両側には磔にされた手、顔の下には胴と足が筋状に表してあるようにも見える。キリストの磔刑図であるとしてもその図柄はきわめて抽象化されたものであるとい



第39図　SF28・SF56出土遺物実測図（1/3・1/4）

えよう。

第41図２は唐津系の皿。胴部中程でやや段がつき口縁部は大きく開く。見込には棒状の目跡が放射状に推定４カ所つく。慶長年間の終わり頃の作であろうか。３は朝鮮王朝陶器である。釉下に白化粧土のハケメが施され、淡緑色の釉がかけられる。見込には９カ所、畳付には８カ所の砂目跡がつく。外面中程まで暗褐色釉が施される。高台の削り出しは浅い。４は唐津系の皿である。慶長年間の作であろうが、２よりは古い。内面と外面中程までに淡緑灰色の釉が施される。内面見込には４カ所の胎土目跡が残る。また、口縁部はおそらく12カ所つまみ出され、花弁状を呈する。５は備前で、底面に花文のスタンプが１カ所施される。外面の底部付近は幅広のヘラ状工具でかき取られた痕跡が残る。徳利か大ぶりの茶入れの可能性がある（２～５に関しては、堺市教育委員会埋蔵文化財センターの續伸一郎氏、永井正浩氏のご教示による）。６は土師器の坏。口径9.9cm、器高1.9cm、底径6.8cm。７は丸瓦。

SK59出土遺物（第41図　図版55）

８は青磁皿。高台内部は露胎となる。灰白色胎土に淡オリーブ色釉がかけられる。見込には唐草文、圏線の中に花文が施される。９は青磁碗である。高台外部まで施釉され、畳付と高台内部ははかき取り露胎とする。10は朝鮮王朝白磁碗。全面に施釉される。11は土師質の鍋である。外面全体にススが付着する。

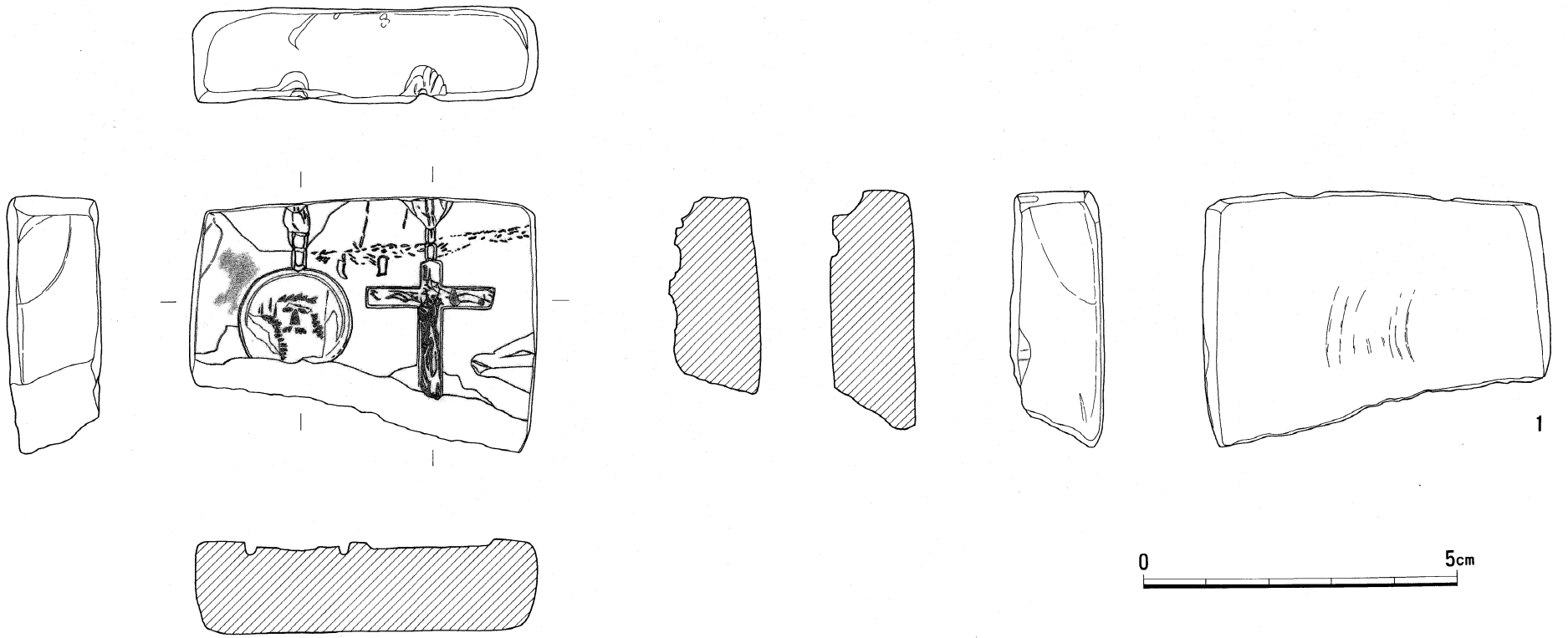
SK63出土遺物（第41図）

12は土師質の蓋である。口径14.6cmを測る。

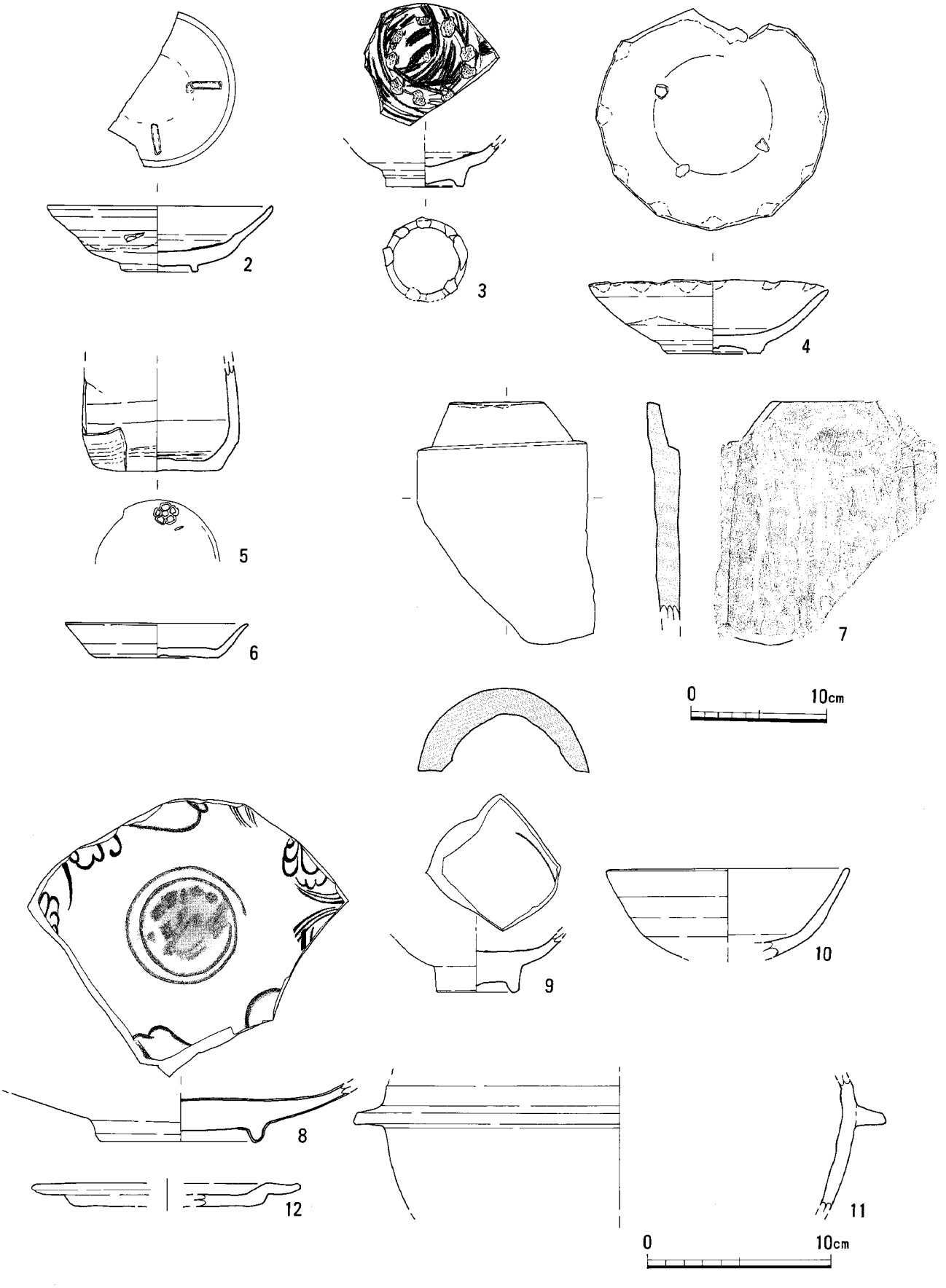
SK64出土遺物（第42・43図　図版55）

第42図１は青磁碗Ｂ－Ⅳ類。ヘラ先による細線の線描連弁文が施される。細線と剣頭とが連弁としての単位を意識して描かれるが、細線はやや乱れる。２～４は朝鮮王朝白磁皿。高台内の削り出しは浅く、高台外面から内面までは露胎となる。明灰色の胎土に淡緑色の透明釉がかかる。畳付に砂目跡が残る。３は底部付近の胴部と口縁部付近はやや陵を成して成形され、全面に青緑がかった透明釉が施される。畳付には４カ所の胎土目跡が残る。４は口縁端部をつまみ出すように成形する。高台内は浅く削り出し、高台部分は露胎となる。灰白色の釉がかかる。見込に３カ所の目跡が残る。６は朝鮮王朝陶器皿。底部から直線的に開き、灰褐色胎土に全面に緑がかった灰褐色釉が施される。５は青磁の小皿。見込に花文のスタンプが押される。やや黄みがかった釉がかけられる。見込と畳付に３カ所の目跡が残る。７は白磁の碗（皿か）。胴部はゆるく内湾して立ち上がる。見込は輪状に釉をかき取る。８は青花碗で、外面にはアラベスク文、見込には襷文が施される。畳付の釉はかきとられて露胎となる。９～13は瓦質の火鉢である。９、10、12は肩部に三重六角文が２列配され、９は把手が２カ所つく。内面はハケメが施される。11は三つ巴文が２列配される。13は二重凹線の間に菊花文が一列配される。14は備前のⅤ期すり鉢。７条のスリ目が配される。15は須恵器片。外面に格子目のタタキ痕、内面に重圏の当て具痕が残る。16～22は土錘である。

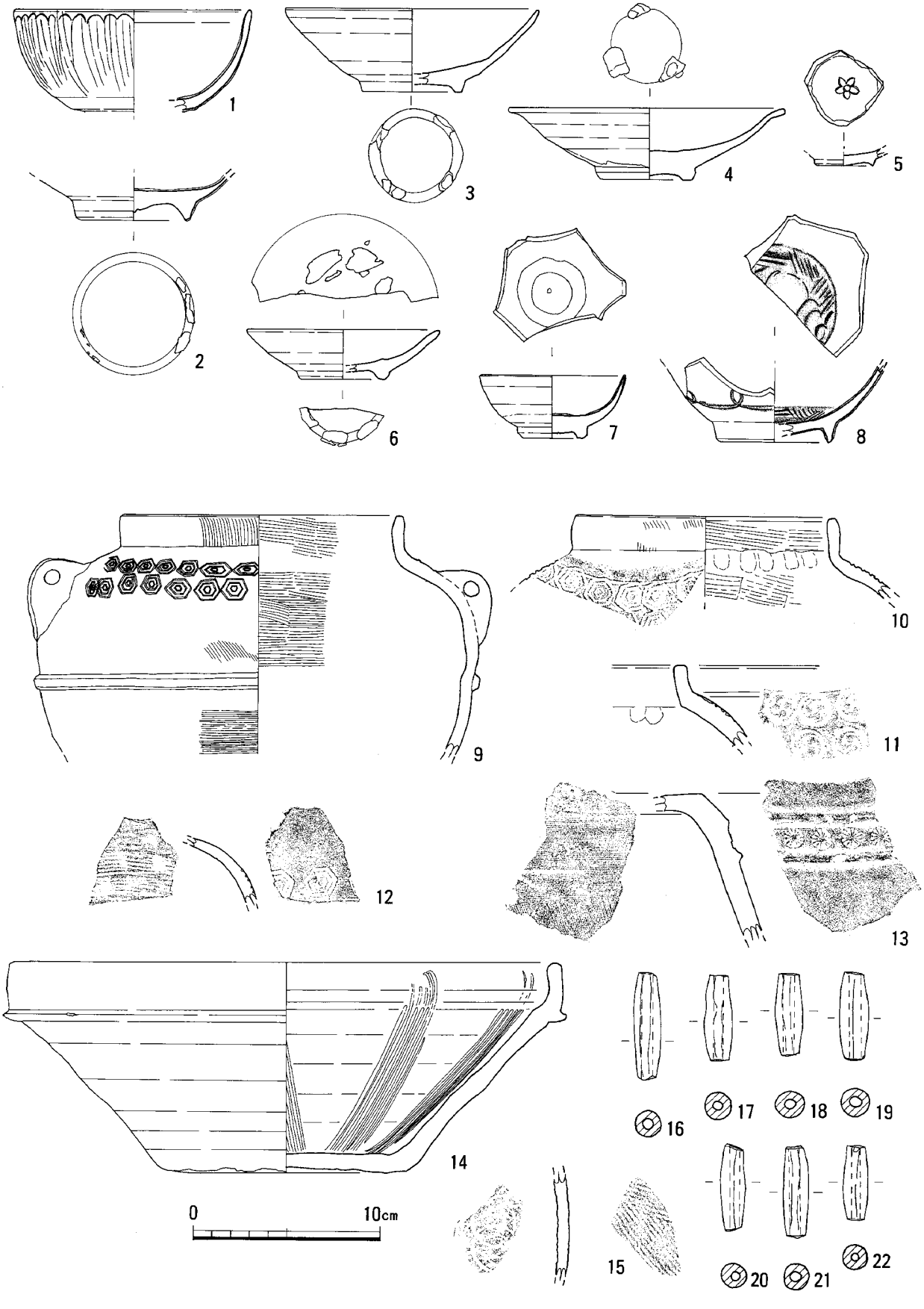
第43図１は備前の四耳壷でⅤ期。２は備前の甕の底部と思われる。３は土師質の鍋。口径32.6cmを測り、内外面にハケメ調整が成される。４～45は土師器。４～22は小皿である。いずれも底部は糸切り離しで板状圧痕が残るものもある（９、14、16）。口径は6.0～8.0cm、器高は1.3～1.8cm、底径は4.4～5.6cm。23～43は坏。そのうち39、40、42は底径が口径の1/2になる器形をとる。口径は11.0～11.6cm、器高は2.6～3.3cm、底径は4.6～4.8cm。また、43は底部から口縁部へなだらかに開き、器面が不定方向のナデで仕上げられ、精緻な作りとなる。その他の器形は口径10.2～12.0cm、器高1.9～2.6cm、底径6.8～8.6cm。44は蓋。口径6.6cm。45は口径8.0cm、器高4.0cm、底径4.4cm。坏の一種であろうか。



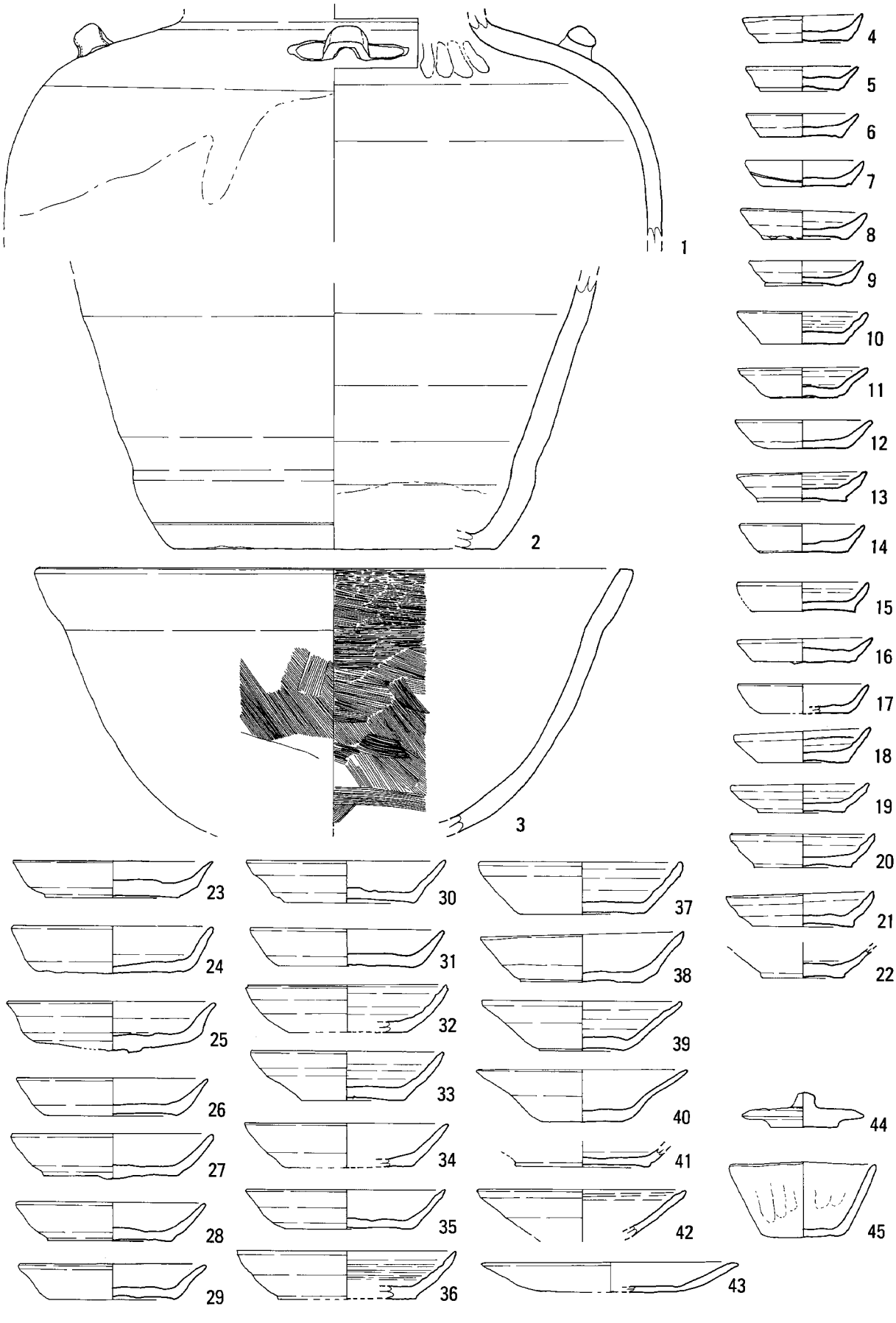
第40図　SK20出土メダイ・十字架鋳型実測図（1/1）



第41図　土壙出土遺物実測図（1/3・1/4）



第42図　SK64出土遺物実測図〔１〕(1/3)



第43図　SK64出土遺物実測図〔２〕(1/3)

SK196出土遺物（第44図　図版55）

1は朝鮮王朝粉青沙器。内外面に白化粧土による象嵌が施される。見込中央には花文の、外面高台周囲には連弁文のスタンプ文が施される。灰白色の釉が全面にかけられる。2は磁器碗の口縁部。3～7は青磁。3、5、7は碗。7は高台内面はかき取られて露胎となる。6は皿。畳付から高台内部までかき取られて露胎となる。8は白磁碗。9は肥前系の紅皿。10は肥前系の仏飯器である。口縁部下に唐草文を描く。11、12は肥前系の染付碗である。8～12は近世陶磁器である。13は端反りの青花皿。口縁部内面には圏線が施され、外面には圏線下に唐草文が施される。14、15は陶器甕の底部。16は土師質の円筒状容器。18は土師器の小皿。底部は糸切り離しである。口径7.5cm、器高1.3cm、底径6.0cm。17は不明土製品。19は亀形土製品である。1/2の残存で、前足、後足各1本と、甲羅が半分残る。薄く仕上げる。20は不明滑石製品。21は溝が縦に刻まれる土錘である。22、23は丸瓦である。凹面には縄目によるタタキが施され、ヘラナデで調整される。23は凹面に鉄が付着する。

第2面検出遺構の出土遺物

SF793出土遺物（第45図）

1は土師器の小皿。底部は糸切り離しで、口径6.7cm、器高1.6cm、底径4.7cm。

SF1019出土遺物（第45図　図版55）

2、3は土師器の小皿。いずれも底部は糸切り離し。順に口径は7.6cm、7.8cm、器高1.6cm、1.4cm、底径5.6cm、5.8cm。10は土師器の坏。底部は糸切り離しで、口径14.0cm、器高3.3cm、底径7.2cm。7、8は青磁である。7は胴部の開き具合から皿になると思われる。見込に花文が施される。8も皿で、胴部中位で屈曲して外反する。9は朝鮮王朝陶器粉青沙器。白化粧土でスタンプ文が施され、透明釉がかけられる。

SX853出土遺物（第45図）

4、5は土師器の小皿。いずれも底部は糸切り離しで、順に口径は7.2cm、器高1.7cm、1.5cm、底径4.9cm、5.2cm。11は瓦質の円形加工品である。

SX944出土遺物（第45図）

13、14は土師器の小皿。いずれも糸切り離しによる底部で、順に口径は7.7cm、器高1.7cm、1.6cm、底径5.7cm、6.0cm。16～18は土師器の坏。いずれも糸切り離し底部である。順に口径は13.4cm、12.1cm、13.3cm、器高2.8cm、2.4cm、2.8cm、底径9.1cm、7.0cm、8.6cm。

SX916出土遺物（第45図）

6、12、15は土師器の小皿。いずれも糸切り離し底部で、順に口径7.2cm、6.8cm、7.2cm、器高1.8cm、1.2cm、1.6cm、底径6.2cm、5.3cm、5.6cm。

SX907出土遺物（第45図）

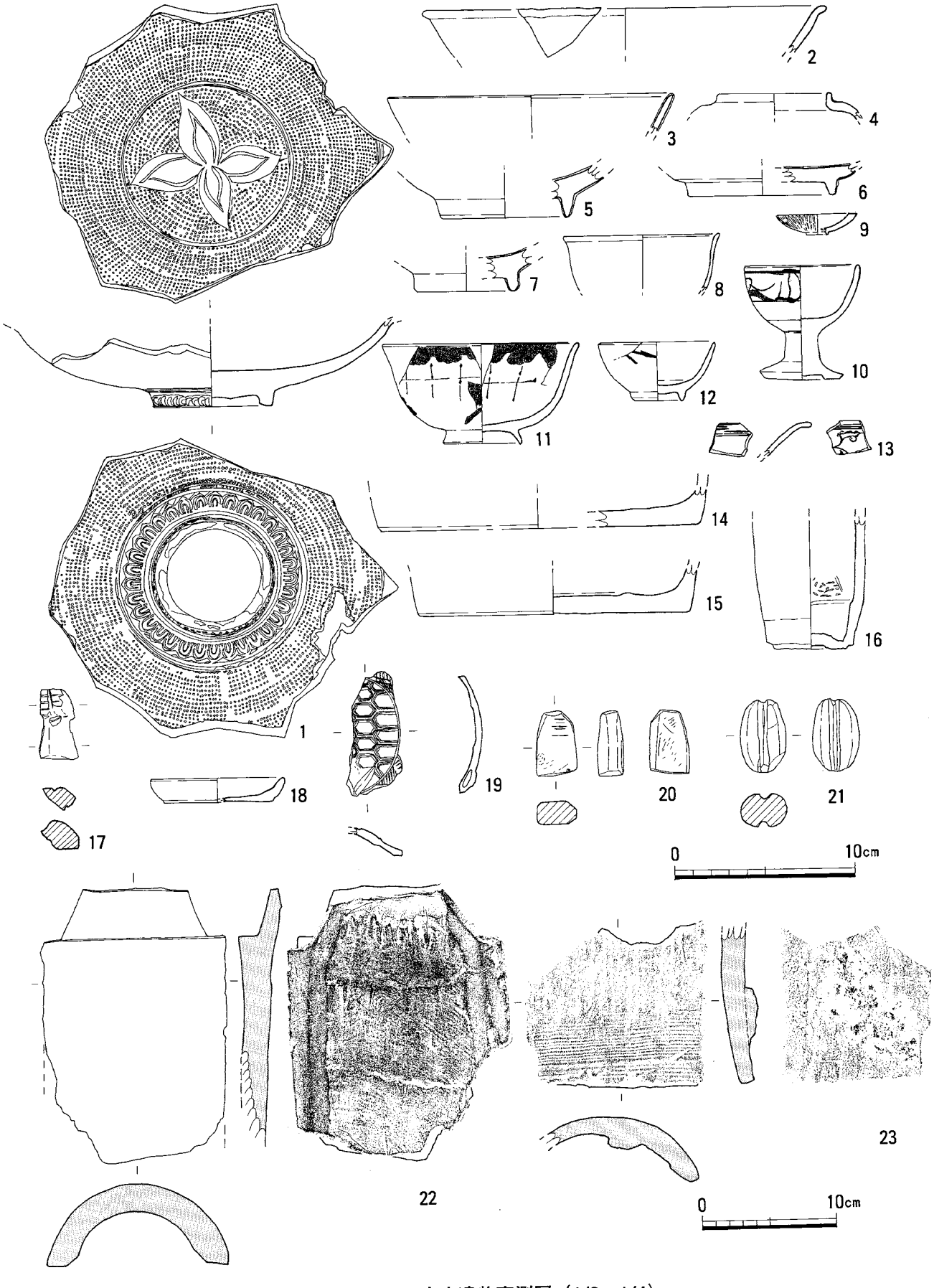
19は鉄製の刀子である。全長27.0cm、最大幅4.2cm、厚さ0.5cmを測る。

SX821出土遺物（第45図　図版55）

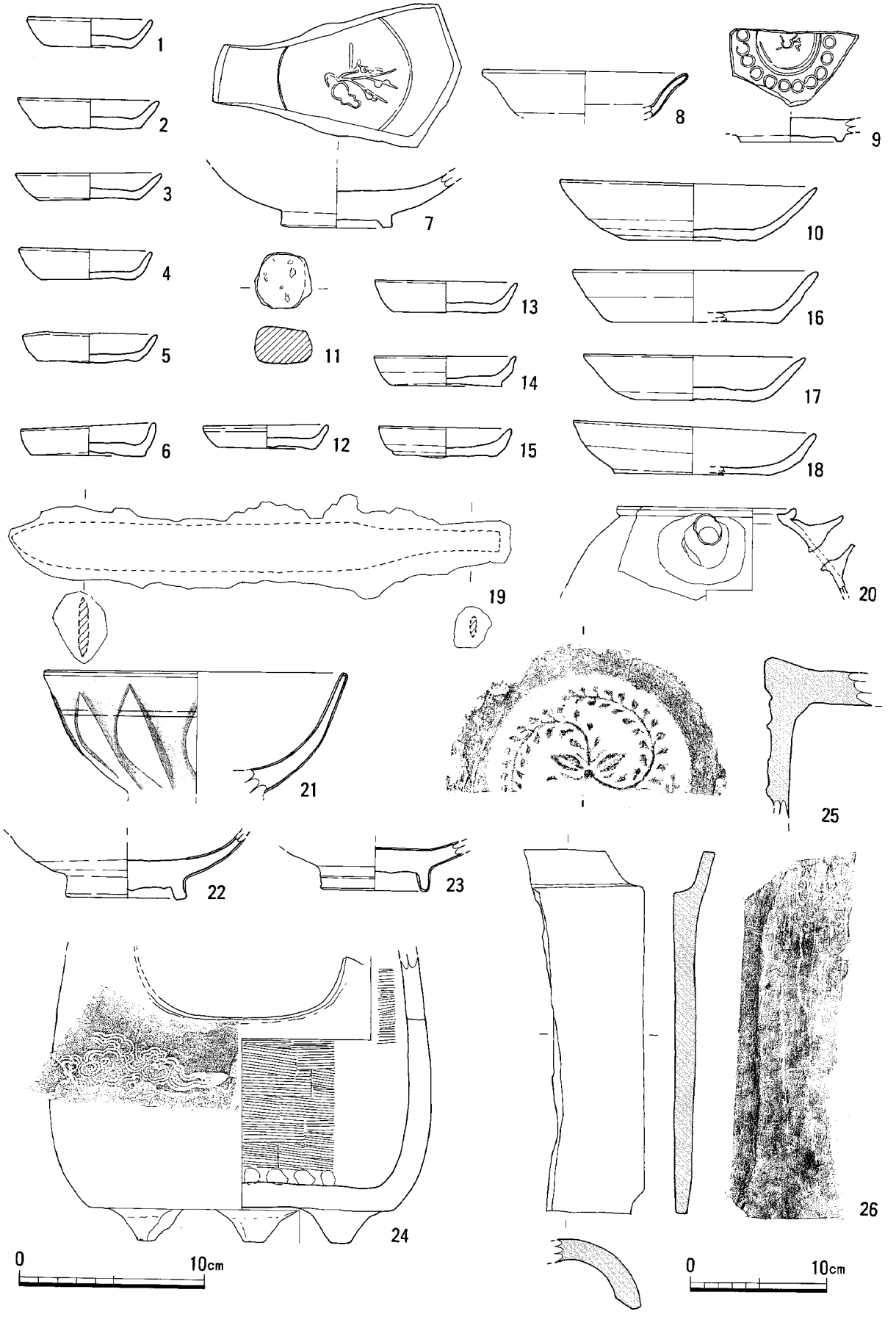
20は茶釜である。注口部が残る。

SX816出土遺物（第45図　図版55）

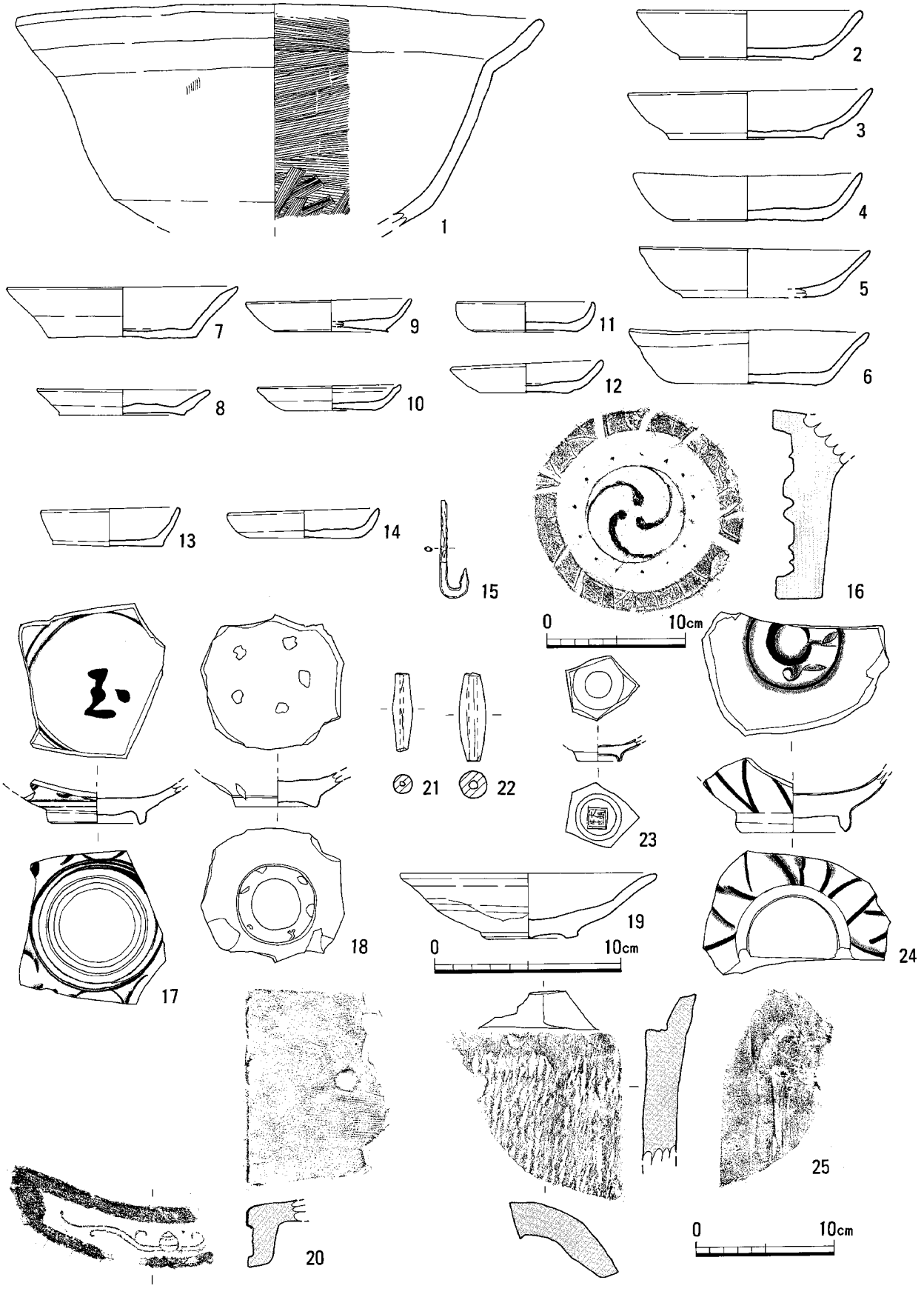
21～23は青磁。21はB－Ⅱ類である。片切り彫りの蓮弁文が描かれるが、蓮弁部分の盛り上がりは少ない。22は碗の底部で、オリーブ色の釉がかけられるが、見込と高台内部はかき取られて露胎となる。23は淡いオリーブ色の釉がかけられ、高台内部はかき取りのため露胎となる。24は瓦質火鉢。胴部上方に2カ所窓がつく。その下方に雲文が施文される。内面は横方向にハケメが施され、底部には



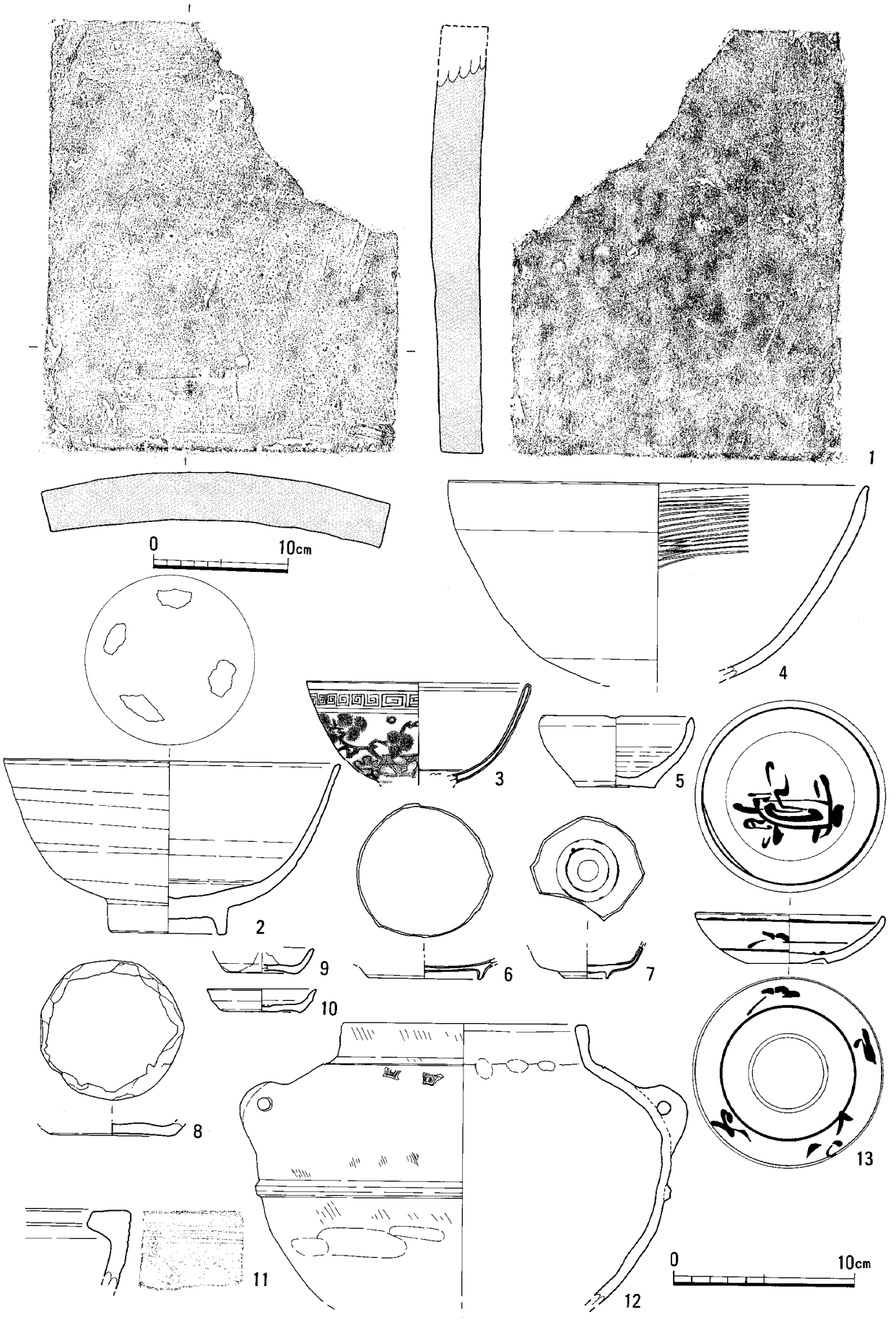
第44図　SK196出土遺物実測図（1/3・1/4）



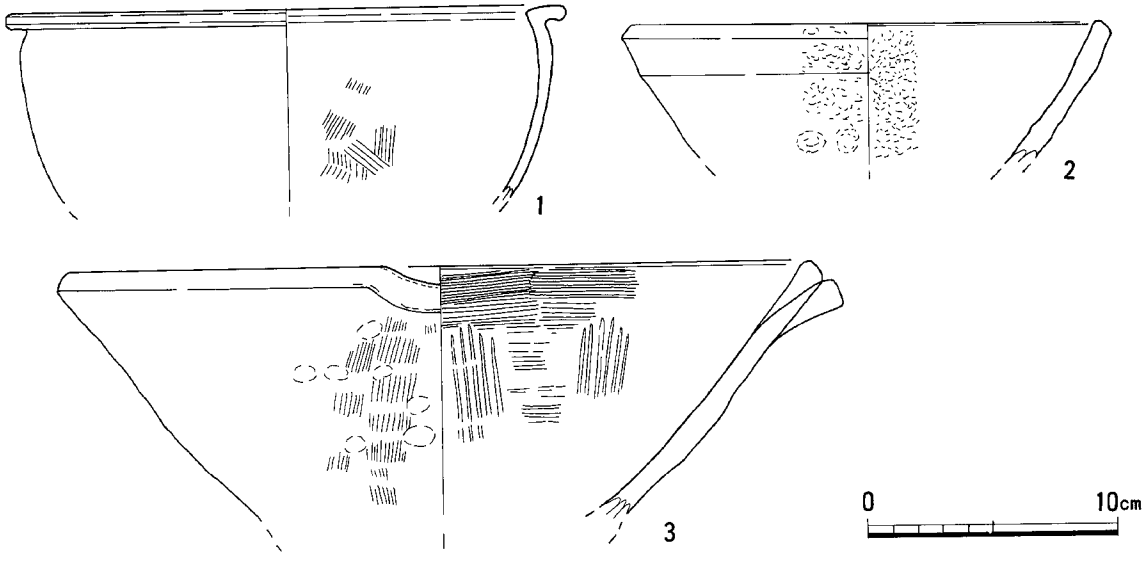
第45図　集石遺構出土遺物実測図（1/3・1/4）



第46図　SK938・井戸出土遺物実測図（1/3・1/4）



第47図　井戸・土壙・ピット出土遺物実測図（1/3・1/4）



第48図　溝出土遺物実測図（1/3）

3カ所脚がつく。25は軒丸瓦。瓦当径は20cm、周縁幅は2.2cmを測る。中央に三葉文を置き、左回りの藤巴文を配する。藤は三葉文の付け根から派生する。花房は20個前後あると思われる。この瓦当は福岡城跡で出土しており、17世紀前半頃である。26は丸瓦である。全長26.4cmを測る。凹面に布目痕が残る。

SK938出土遺物（第46図　図版55）

1は土師質の鍋。外面はハケメとナデで、内面はハケメで調整する。2～7は土師器の坏。6、7が糸切り離しのあと板状圧痕が残る以外は糸切り離し底部である。口径は12.1～13.1cm、器高は2.5～2.9cm、底径は7.0～8.2cm。7のみ底部から口縁にかけてやや外反気味に開く。

SE1083・1084出土遺物（第46図　図版55）

13、14は土師器の小皿。いずれも底部は糸切り離しで、順に口径は7.4cm、8.2cm、器高2.1cm、1.6cm、底径5.9cm、5.9cm。15は銅製の釣針である。長さ5.2cmを測る。16は軒丸瓦である。瓦当径は15.0cmを測り、内区には左巻の三つ巴文を配する。尾は半周して他の巴に接する。外区には小さな珠文を14個配する。周縁の幅は1.6cmを測る。

SE811出土遺物（第46図　図版55）

17は青花碗。見込には二重の圏線の中に「玉」の字を施し、外面には唐草文を配する。18は陶器皿。見込に5カ所の目跡、畳付に6カ所の目跡が残る。灰褐色の胎土に透明釉がかけられる。高台内部の削りは浅い。19は朝鮮王朝陶器皿か。胴部中程でやや段をつけて開き、緑がかった灰褐色釉が胴部中程までかけられる。高台内部の削り出しは浅い。20は軒平瓦。宝珠の中心飾りの左側は巻の弱い唐草文が伸びる。瓦当厚さは4.2cmを測る。また凹面に孔が穿たれている。21、22は土錘である。

SE1100出土遺物（第46図　図版55）

23は白磁小皿。見込は輪状に釉をかき取り露胎とする。高台内部には「大明年製」の字款が施される。24は青磁碗B－Ⅱa類。外面には片切り彫りによる連弁文が描かれ、見込には圏線の間に省略化した唐草文が施される。淡オリーブ色の釉がかけられるが、高台内部はかき取られて露胎となる。25は丸瓦。凹面に縄目タタキ痕が、凸面に布目痕が残る。第47図1は井筒に用いられた瓦である。31.4cm×26.0cm×3.8cmを測る。ヘラナデで仕上げる。

SK876出土遺物（第47図　図版56）

2は陶器碗。黄褐色胎土に白黄色の釉が全面にかけられる。見込に砂目跡が4カ所残る。3は青花碗C群。口縁部外面に雷文帯をめぐらせ、松枝文を下部に施す。内面には圏線がめぐる。4は土師質の鉢。外面はナデ、内面は粗いハケメ調整が成される。5は土師質の小型碗。口縁端に4カ所抉り込みが入る。6は青磁皿の底部のみを丸く加工したものである。7は白磁の紅皿である。見込は輪状に、高台内部のみをかき取り露胎とする。見込に紅が付着している。8は土師器坏の底部を丸く加工したもの。底径6.4cmを測る。9、10は土師器の小皿。いずれも糸切り離し底部で、順に口径5.6cm、6.6cm、器高1.4cm、1.2cm、底径3.9cm、4.2cm。11、12は瓦質の火鉢である。11は口縁部の沈線下に菊花文のスタンプが押される。12は口縁部がすぼまる両耳壷の器形をとり、胴部に突帯がめぐる。肩部にスタンプ文が施される。13は碁笥底の青花皿C－Ⅲ類。見込には擬人化した文字、外面には略化した文字のような文様を描く。

第3面検出遺構の出土遺物

SD1071出土遺物（第48図　図版56）

1は土師器の鍋である。内面にハケメ痕が残り、外面にはススが付着する。2は東播系須恵質のこね鉢である。摩耗が激しい。3は土師質のすり鉢である。内面に6条のスリ目がつく。

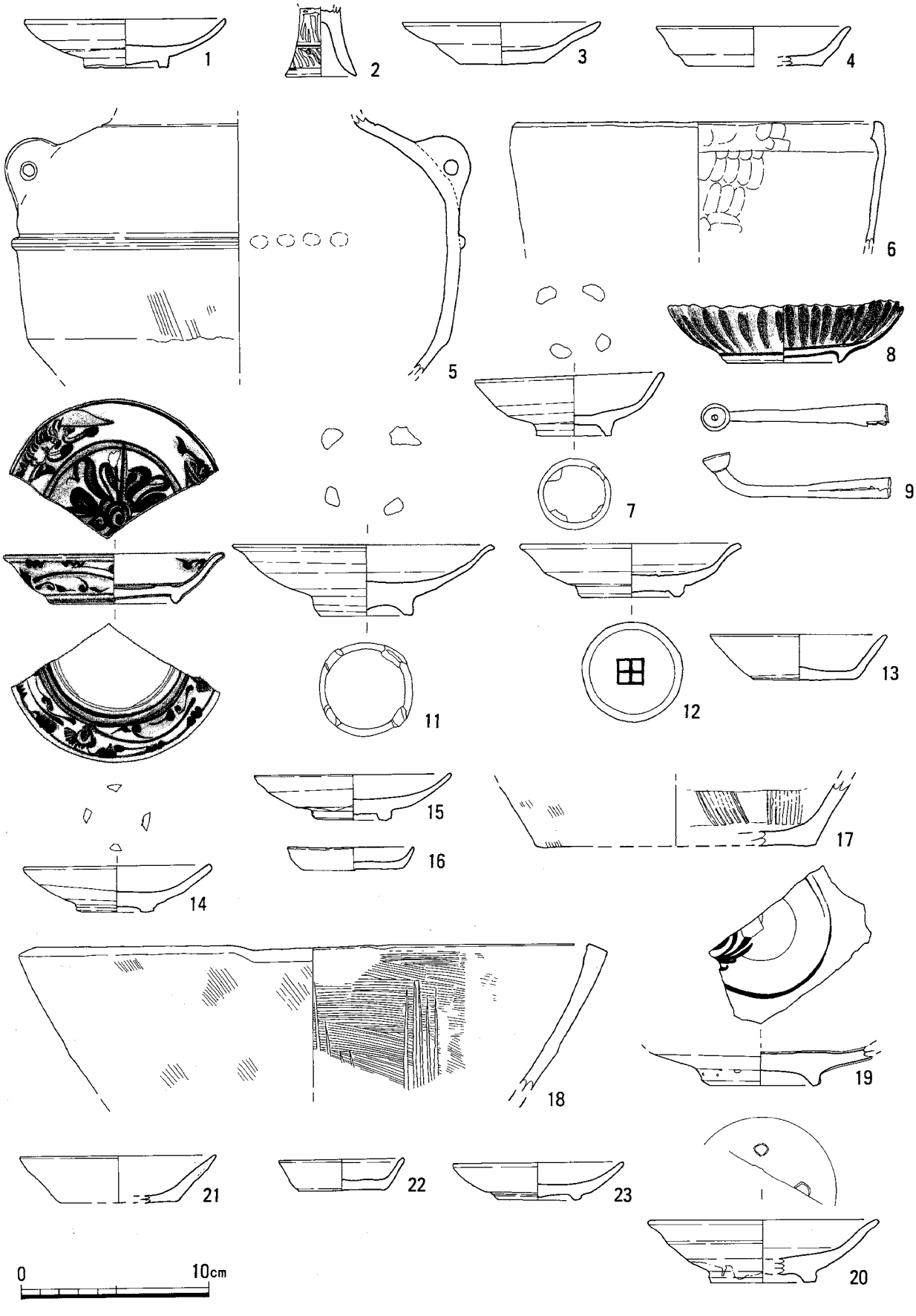
その他の遺構出土遺物

遺構出土遺物（第49～51図　図版56）

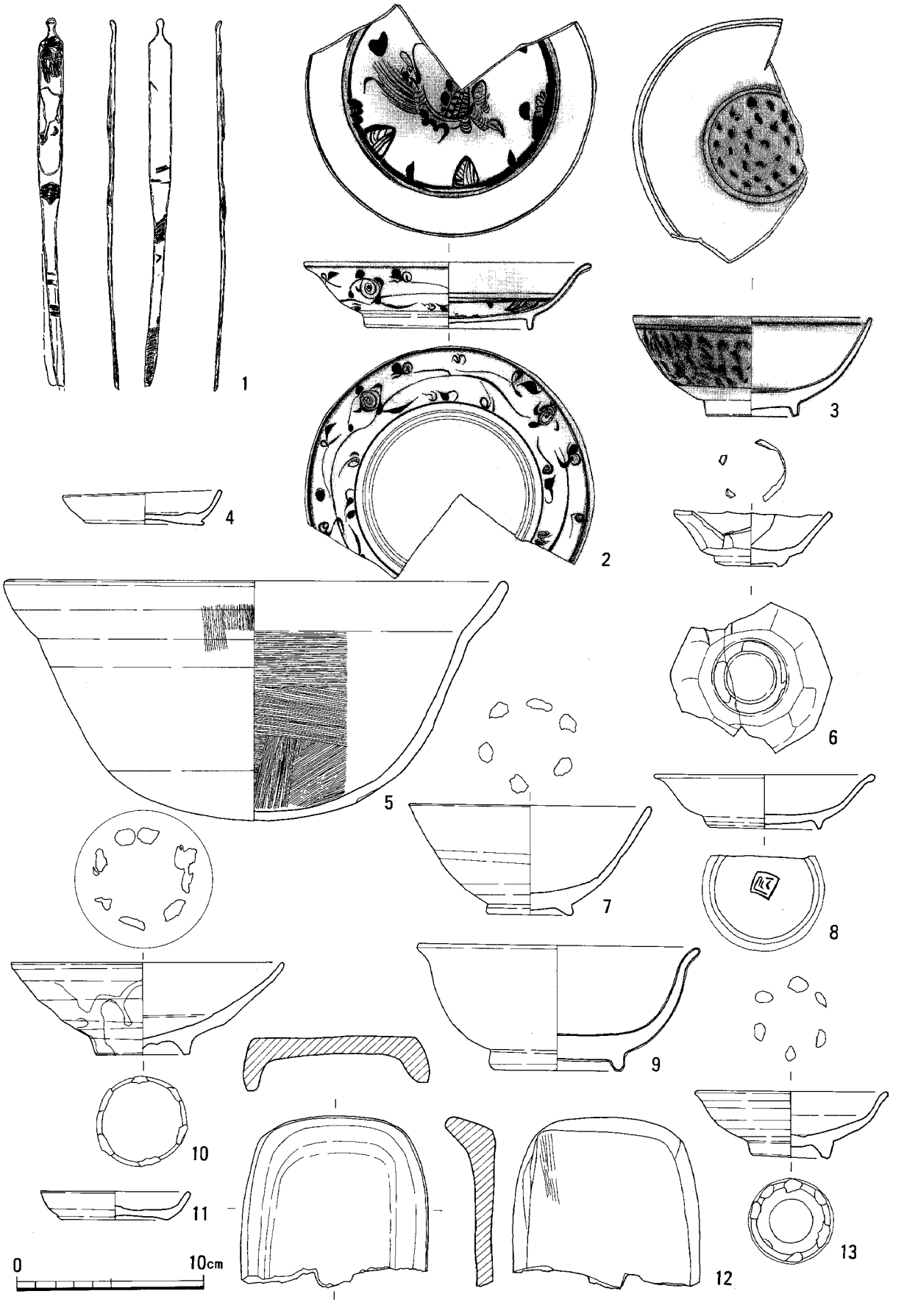
1～6はSK01出土。1は白磁皿D群。高台内部の削り出しは浅く、胴部外面下半から高台にかけて露胎となる。白灰色の釉がかけられる。2は朝鮮王朝粉青沙器の高坏脚部。白化粧土で象嵌を施した後白色の透明釉がかけられる。3、4は土師器の坏。いずれも糸切り離し底部で、順に口径10.6cm、10.4cm、器高2.2cm、底径4.6cm、7.2cm。5は瓦質の火鉢。把手が2カ所付き、頸部が締まる器形。6は土師質の鉢。

7はSK10出土。朝鮮王朝陶器皿。胴部中位でやや屈曲して開く。見込と畳付に胎土目跡が4カ所つく。灰褐色胎土にやや緑がかった灰褐色釉がかかる。8は青磁皿。丸のみ彫りされた連弁文が施された菊花状の口縁を持つ。全面に淡緑色の釉がかけられる。9はSK51出土。銅製のキセルである。10は青花皿B－Ⅵ類。見込中央に十字花文、その周縁に唐草文、外面胴部には唐草文が描かれる。11はSK61出土。朝鮮王朝陶器皿。胴部やや上位でゆるく屈曲し、口縁端部をやや反らせる。高台内部の削り出しは浅い。見込と畳付に4カ所胎土目跡がつく。12は青磁皿。やや端反りの口縁部で内面から胴部中位まで緑灰褐色釉がかかり、あとは露胎となる。高台内部に「田」の墨書がある。13はSK116出土。土師器の坏で、口径9.4cm、器高2.5cm、底径5.5cm。糸切り離し底部。14、15はSK122出土。いずれも白磁皿D群。14は淡灰褐色胎土に黄白色釉が胴部中位までかかり、あとは露胎となる。見込に目跡が4カ所残る。15は白灰色胎土に緑がかった透明釉が胴部下位までかかり、あとは露胎となる。

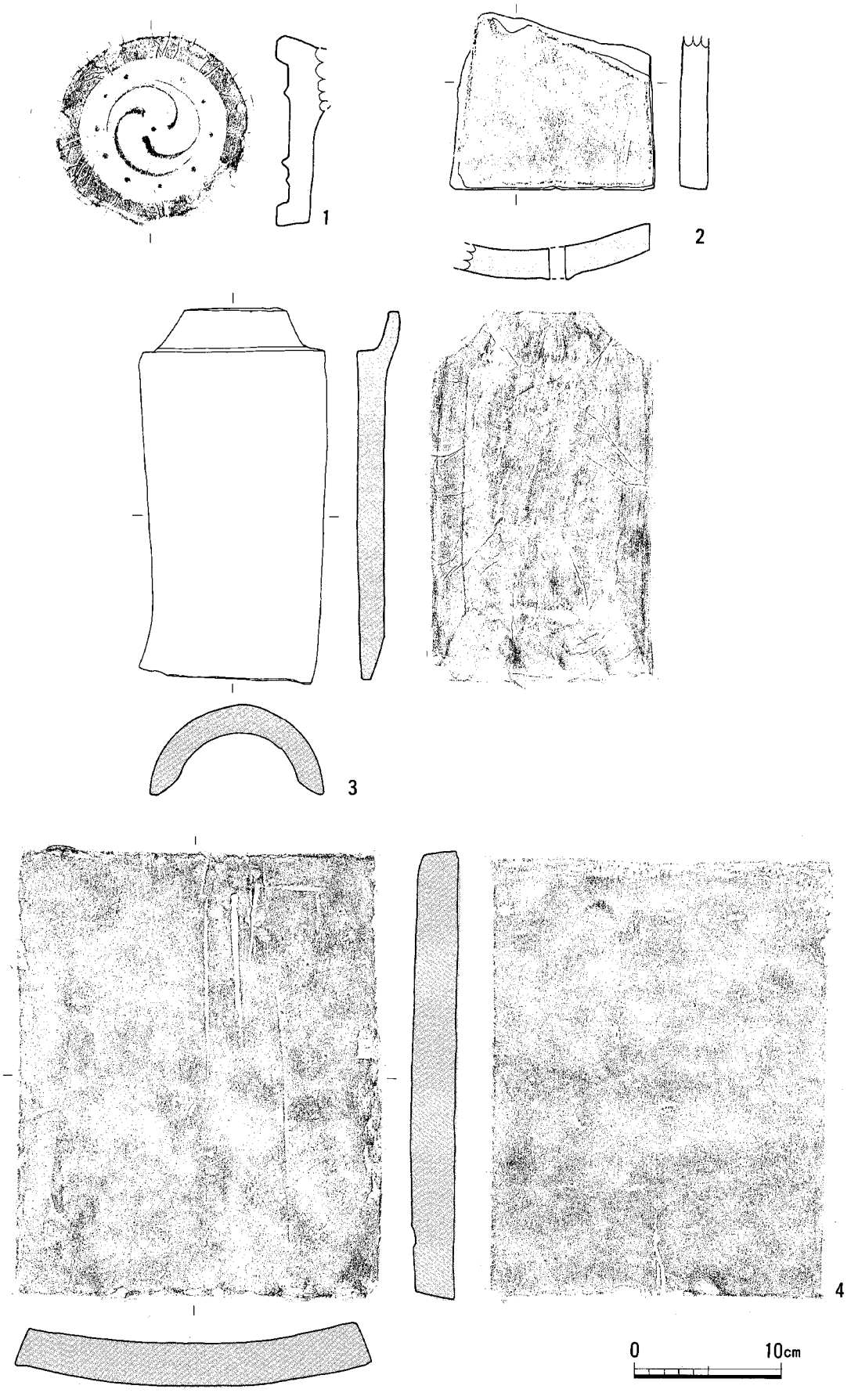
16～18はSK147出土。16は土師器の小皿で糸切り離し底部。口径6.7cm、器高1.3cm、底径5.4cm。17、18は土師質のすり鉢。17は5条のスリ目が入る。18は内面に全面ヨコハケを施した後5条のスリ目が入る。19～22はSK148出土。19は青花皿。高台から内部は露胎となる。見込に文様が施される。20は白磁皿E－2類。内面から外面胴部中位まで白色釉がかかる。胎土は灰白色。見込におそらく4カ所の目跡が残る。21は土師器の坏。口径10.4cm、器高2.5cm、底径6.2cm。22は土師器の小皿。口径6.8cm、器高1.6cm、底径4.6cm。いずれも底部は糸切り離し。23はSK224出土。白磁皿D群。白色胎土に透明



第49図　遺構出土遺物実測図〔１〕(1/3)



第50図　遺構出土遺物実測図〔２〕(1/3)



第51図　遺構出土遺物実測図〔３〕(1/4)

釉がかけられるが、見込部分は輪状にかき取り、高台部分は露胎となる。

第50図１は銅製の簪。頭の部分に耳かきが付き平打ちの部分には布の痕跡が残る。２はSE796出土。青花皿Ｂ－Ⅶ類。見込に玉取獅子文、胴部外面に牡丹唐草文が描かれる。３はSE857出土。青花碗Ｃ－Ⅲ類。見込と胴部外面には丸を結合したような文様が描かれる。４はSK935出土。土師器の坏。糸切り離し底部で、口径8.6cm、器高1.9cm、底径6.4cm。５はSK940出土。土師器の鍋。外面に一部、内面の胴部全体にハケメが施される。６はSK1017出土の多角坏Ｄ群。内面から胴部下位まで白色釉がかけられる。胎土は白色を呈する。７、８はSK1018出土。７は朝鮮王朝陶器碗か。灰褐色の胎土に灰褐色釉がかかる。見込に胎土目跡が６カ所残る。８は白磁皿Ｅ－２類。青花になるかもしれない。畳付は露胎となる。高台内部に字款が押される。９はSK1089出土。青磁碗Ｄ－Ⅱ類。全面にオリーブ色の釉がかかる。10は攪乱20出土。朝鮮王朝灰青陶器。灰褐色～赤褐色の胎土に緑灰褐色の釉が全面にかかる。さらに部分的に白い釉がかかる。見込に８カ所、畳付に６カ所砂目跡が残る。高台内部の削り出しは浅い。11はSK1104出土。土師器小皿である。糸切り離し底部で、口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.6cm。12は攪乱出土。硯。隅丸方形を呈する。13はSK1027出土。朝鮮王朝白磁皿。胴部屋や上位で屈曲し口縁部はわずかに外反する。見込に６カ所、畳付に７カ所の砂目跡がつく。

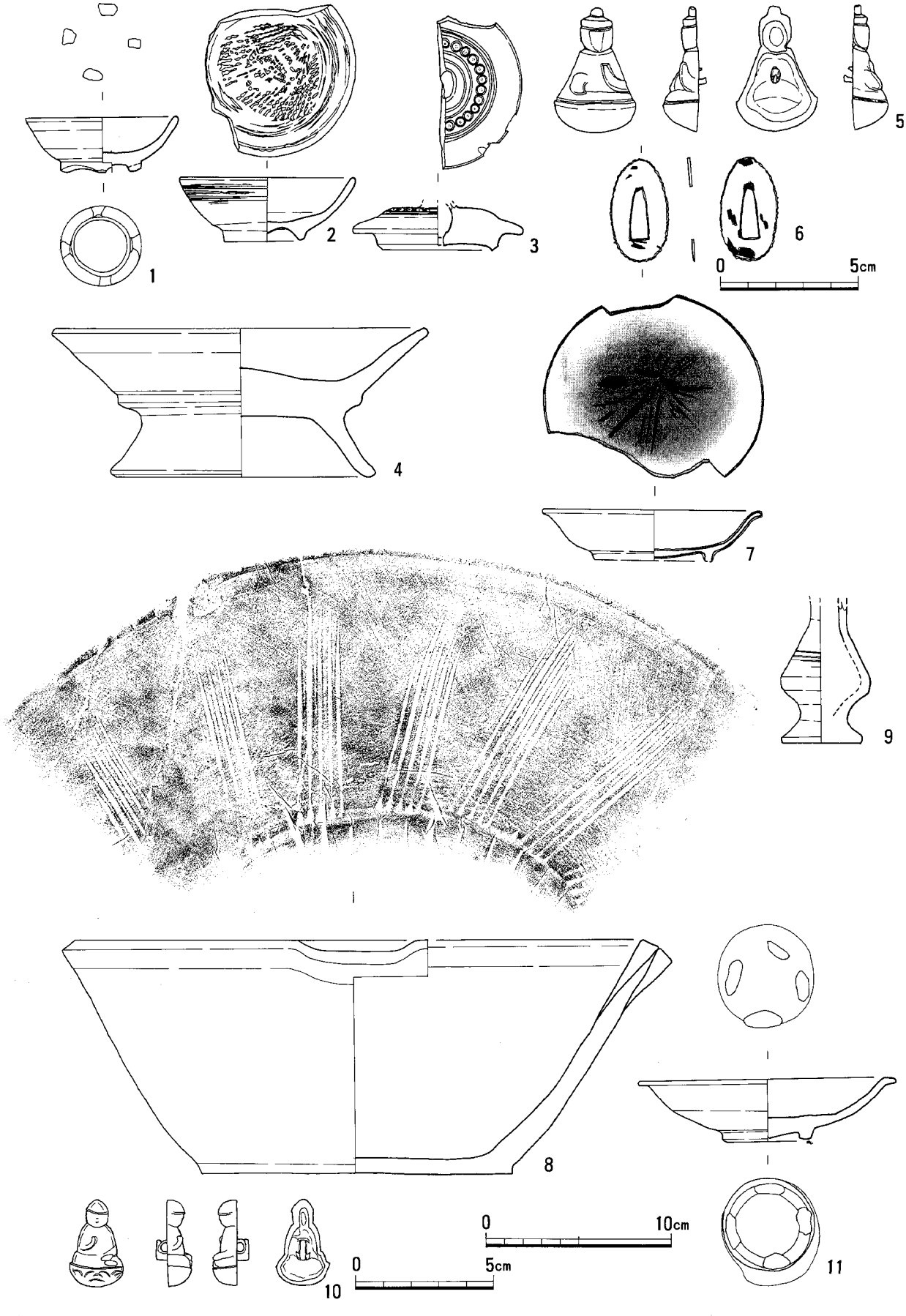
第51図１、２はSE742出土。１は軒丸瓦。瓦当径は12.9cmを測り、内区には左巻きの三つ巴文が配される。巴の頭はやや細くなり、尾は1/4周回って消える。中心に１個の、外区に推定11個の小さな珠文が配される。周縁の幅1.4cmを測る。２は平瓦。布目痕が残り、孔が穿たれる。３、４は攪乱出土。３は丸瓦。凹面に布目痕、抜き取り縄痕が残る。４は平瓦。布目痕が残る。

包含層・その他出土遺物（第52～54図　図版56）

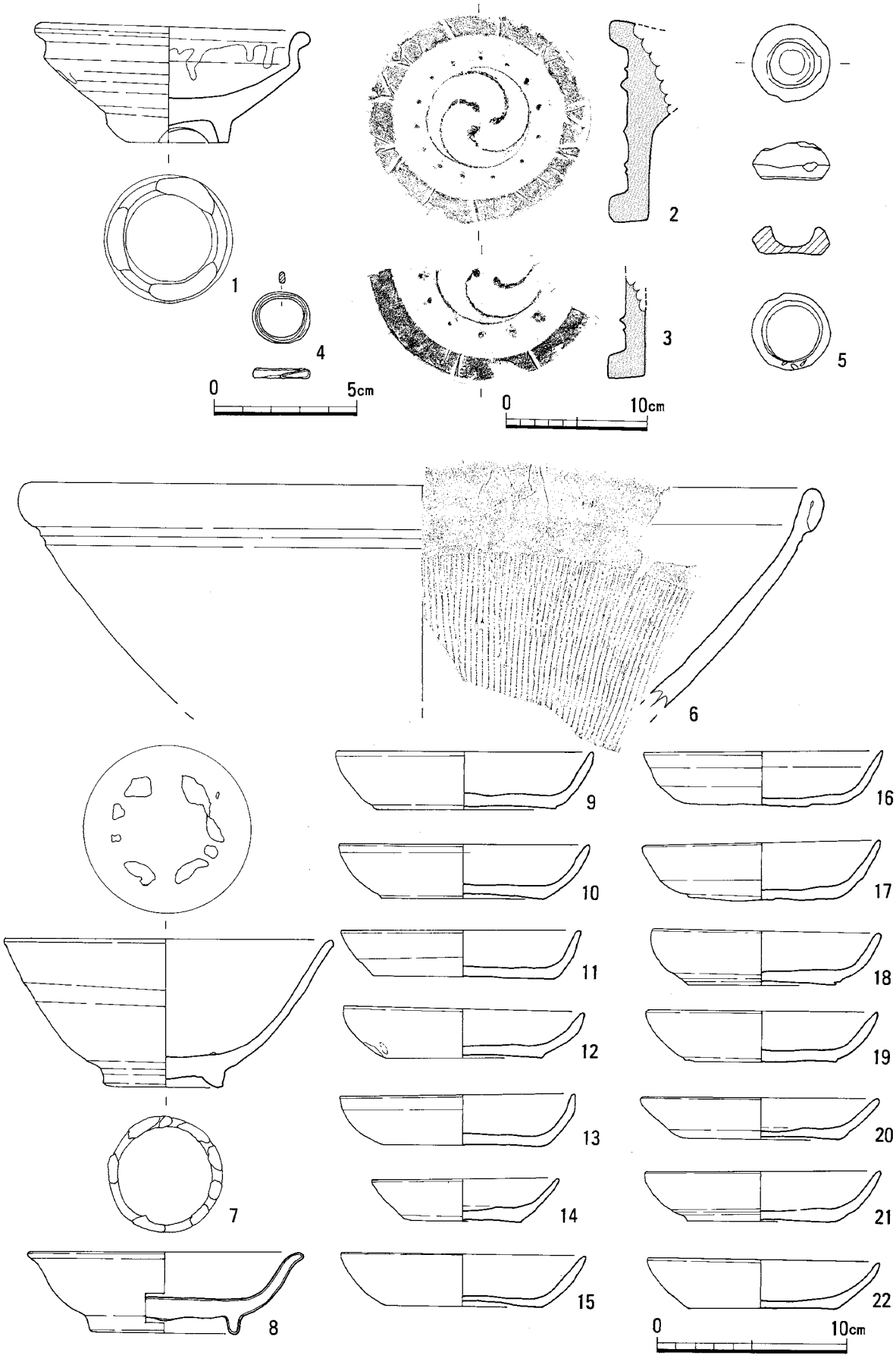
第52図１はＦ－９区出土。白磁皿Ｄ群。白黄色胎土に白黄色釉がかけられる。高台は４カ所を弧状に削り出す。見込に４カ所の目跡が残る。２～６はＦ－10区出土。２、３は朝鮮王朝粉青沙器。２は棒状施文具と縄目で文様を施した後白化粧土をかけ、透明釉を施す。３は蓋である。上面に圏線と円のスタンプ文を施し、白化粧土と濃い緑をかけ淡オリーブ色の釉をかける。４は土師器の台付き坏。口径20.3cm、器高8.1cm、底径14.3cm。５は銅製の懸仏。長さは4.5cmで、背面中央に留め金がつけられる。６は銅製の刀子鍔。周縁を波状に作り出す。長さ3.8cm、幅2.1cm。７～10はG－８区出土。７は青磁青花皿。中央に枝様の文様を描く。端反りの口縁で畳付を除き全面に灰緑色釉をかける。８は土師質のすり鉢。内面には細かなハケメ調整があり、その上に５条のスリ目が並ぶ。９は青磁の小型花瓶。仏壇具か。10は銅製の懸仏。５より若干小さく長さ3.1cmである。同じく背面中央に留め金を配する。11はH－７区出土。朝鮮王朝陶器皿。口縁部は外反する。灰褐色胎土に淡灰緑色釉を全面にかける。見込と畳付に４カ所砂目跡が残る。

第53図１は第２面G－10区出土。口縁部が屈曲し、口縁部内外面のみ茶褐色釉をかける。高台は３カ所弧状に削り出す。２、３は第２面H－８区出土軒丸瓦。２は瓦当径15.0cm、内区には左巻きの三つ巴文、巴の頭部は細く尾は半周して他の巴に接する。外区には小さな珠文を14個配する。周縁の幅は1.2cmを測る。３も内区は左巻きの三つ巴文で、２と類似する。４は第２面H－７区出土。銅製の指輪。ひも状の銅を一巻き半している。５はF－10区出土。不明土製品。径4.2cmでそろばん玉状を呈し、内部をくりぬく。

６～10、12、13は第２面F－９区出土。６は褐釉陶器のすり鉢。７は朝鮮王朝白磁碗。見込と畳付に８カ所の砂目跡が残り、黄みを帯びた灰褐色胎土に透明釉が全面にかかる。８は青磁皿。端反りの口縁部を呈し、高台内部は輪状に釉をかき取る。淡黄茶褐色の釉がかかる。９、10、12、13は土師器



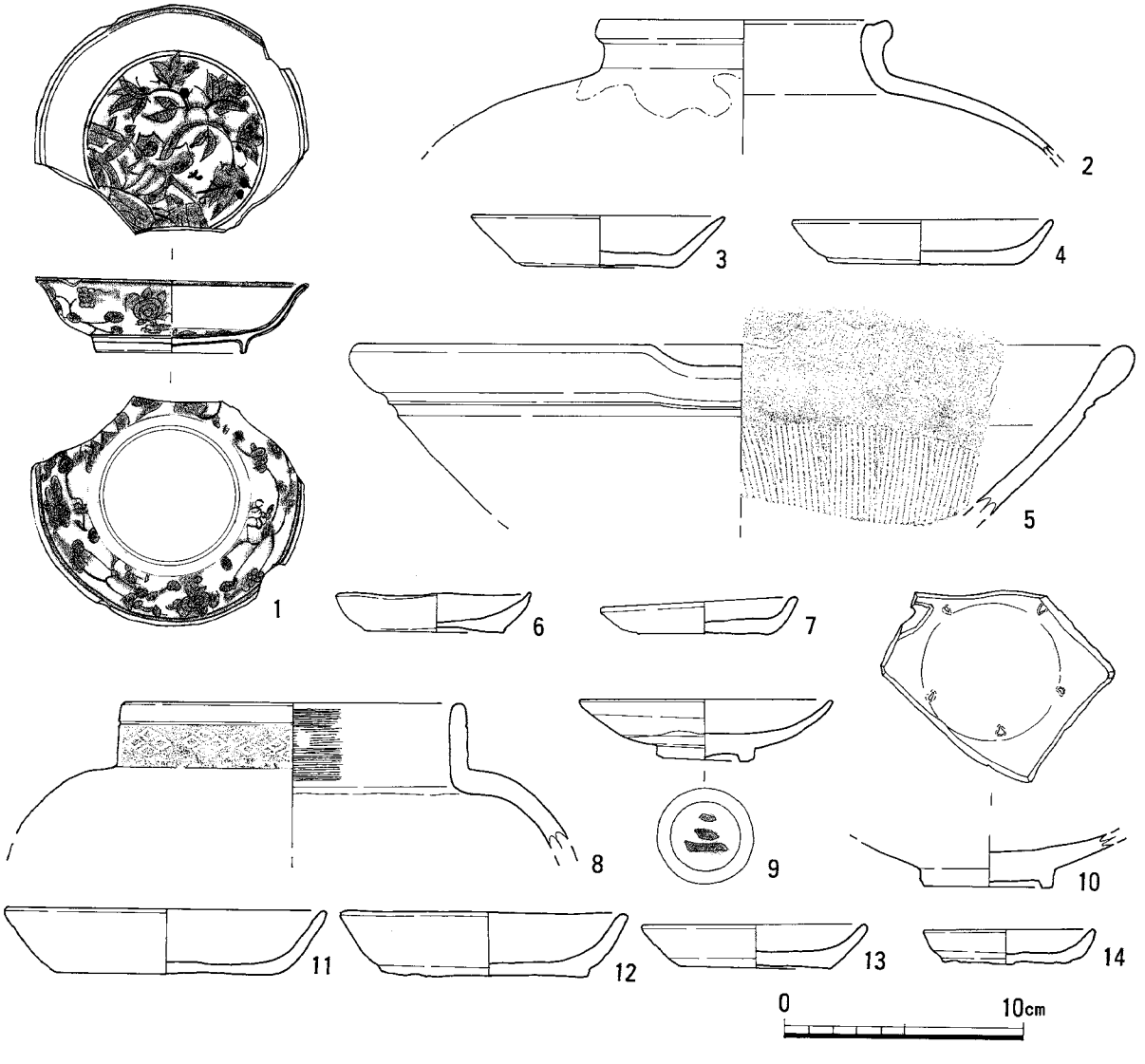
第52図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）



第53図　遺構面出土遺物実測図〔1〕(1/3・1/4)

の坏。いずれも糸切り離し底部で、口径12.4～13.6cm、器高2.6～3.0cm、底径8.4～9.4cm。11、14はI－8区出土。糸切り離し底部で、順に口径12.6cm、9.8cm、器高2.6cm、2.3cm、底径9.4cm、6.1cm。15～22は第2面F－10区出土。いずれも土師器の坏で、糸切り離し底部。口径は11.6～12.8cm、器高2.1～2.7cm、底径7.7～8.4cm。

第54図1はH－Ⅱ区出土。青花皿B－Ⅷ類。見込に果樹文、外面に牡丹唐草文を描く。2～8は第2面H－7区出土。2は褐釉陶器の壷か。3、4は土師器の坏。いずれも糸切り離し底部で板状圧痕がつく。順に口径10.6cm、10.9cm、器高2.1cm、1.9cm、底径6.6cm、7.7cm。5はすり鉢。6、7は土師器の小皿。いずれも糸切り離し底部で、口径8.1cm、8.2cm、器高1.7cm、1.5cm、底径5.7cm、5.6cm。8は瓦質火鉢。口縁部内面にヨコハケが残る。9は白磁皿D群。内面から胴部外面下部まで透明釉がかかる。高台内部に「三」の墨書が残る。10は朝鮮王朝白磁皿か。高台は露胎となり、灰白色胎土に淡緑色釉がかけられる。見込に目跡が5カ所つく。11～13はH－8区出土。11、12は土師器の坏で、口径13.4cm、12.0cm、器高2.7cm、底径9.7cm、8.6cm。13は土師器の小皿。口径9.3cm、器高1.9cm、底径6.3cm。14はH－9区出土。土師器の小皿で口径7.2cm、器高1.8cm、底径5.4cm。



第54図　遺構面出土遺物実測図〔2〕(1/3)

4．Ⅲ区の調査

Ⅲ区の概要

Ⅲ区はⅡ区を南西側に拡張する形で設定した。調査区はかなり変形している。第1面はⅡ区とほぼ対応する褐色砂質土層上面とした。ただ、調査区の南西端（A、B－1区）は攪乱され、第1面は削平されていた。第2面は褐色砂質土層を除去した黄褐色砂質土層で、これもⅡ区とほぼ対応する。また、Ⅱ区で検出された石墨遺構の続きが一部検出された。調査区C、D－10区の西寄りである。第2面遺構配置図にアミで示す。

第1面検出遺構

①集石遺構

SX23（第57図　図版45）

D－10区第1面上面で検出された。5m×4.5mの範囲に、長さ40cm以下の石が集中して散布している。一部調査区に切られているが、おそらく平面は方形に広がっていたと考えられる。土層断面からは、若干のゆるい窪地に石が堆積しているものの、ほぼ上面に散布している状況が見て取れる。ただ、その堆積状況も整然と敷き詰めたものではない。青磁碗、土師器等が出土している。

SK90（第57図　図版45）

D－10区で検出された。第1面では集石として検出したが、第1面を掘り下げ途中、土壙を確認した。土壙に伴う集石である。土壙は検出時で長軸1.74m、短軸1.23m、深さ40cmを測り、礫群はその上部に堆積する。径34cm以下の礫が集中している。土師器坏・皿が出土している。

SX49（第57図　図版45）

D－10区で検出された。径30cm以下の礫が集中している。当初は1.4m×1.2mの石積遺構と思われたが、集石遺構であった。土師器小皿が出土している。

SX64（第57図）

C－10区で検出された。径30cm以下の礫が集中している。壁に切られているために全容は不明である。出土遺物はなかった。

②土壙

SK79（第58図　図版45）

土師器の坏、小皿がまとまって出土したが、掘方は検出できなかった。D－10区北コーナーで検出された。ほぼ完形の土師器が多い。

SK62（第58図）

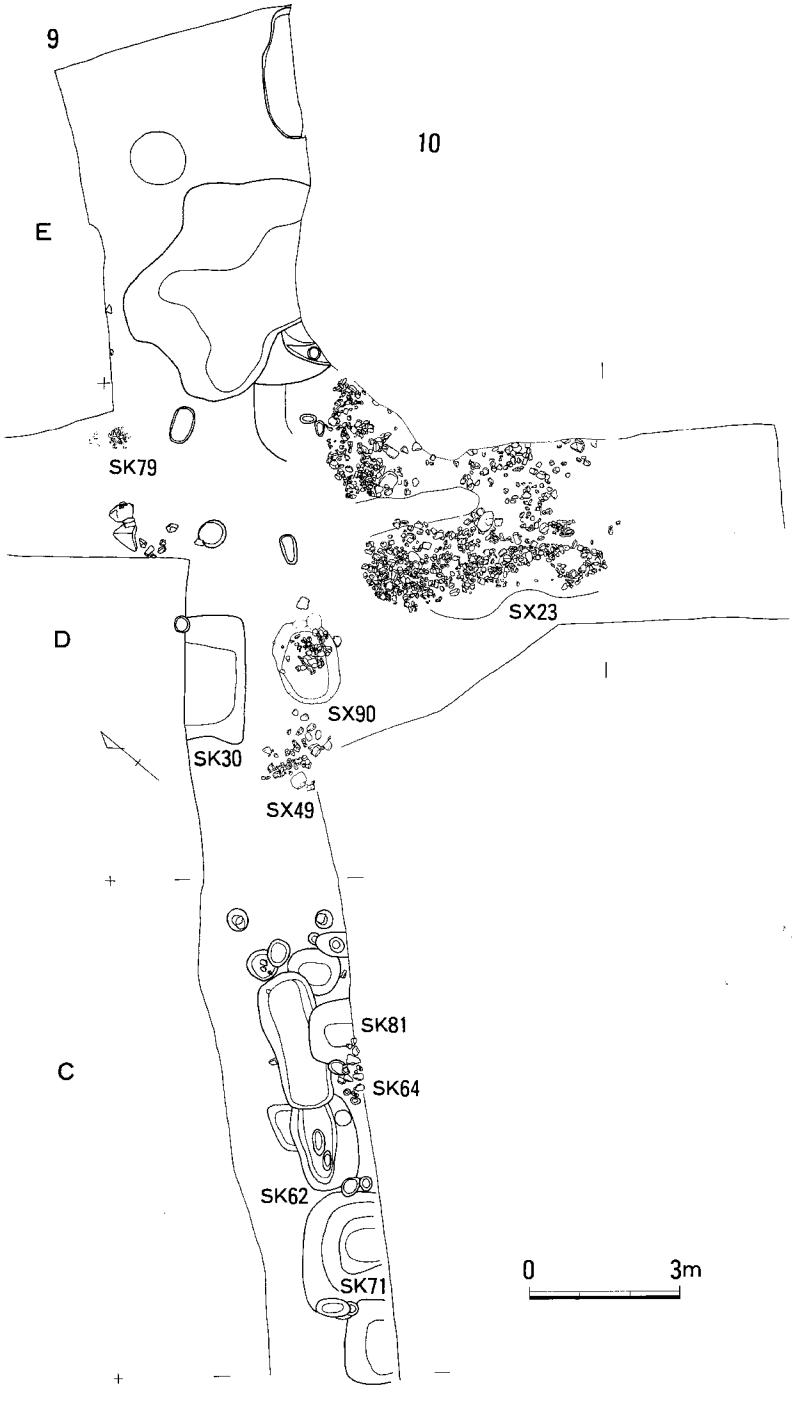
C－10区で検出された。長軸2.0m、短軸1.3m、深さ42cmを測る。ピット状の掘り込みが2カ所ある。すり鉢、土師器が出土している。

SK71（第58図）

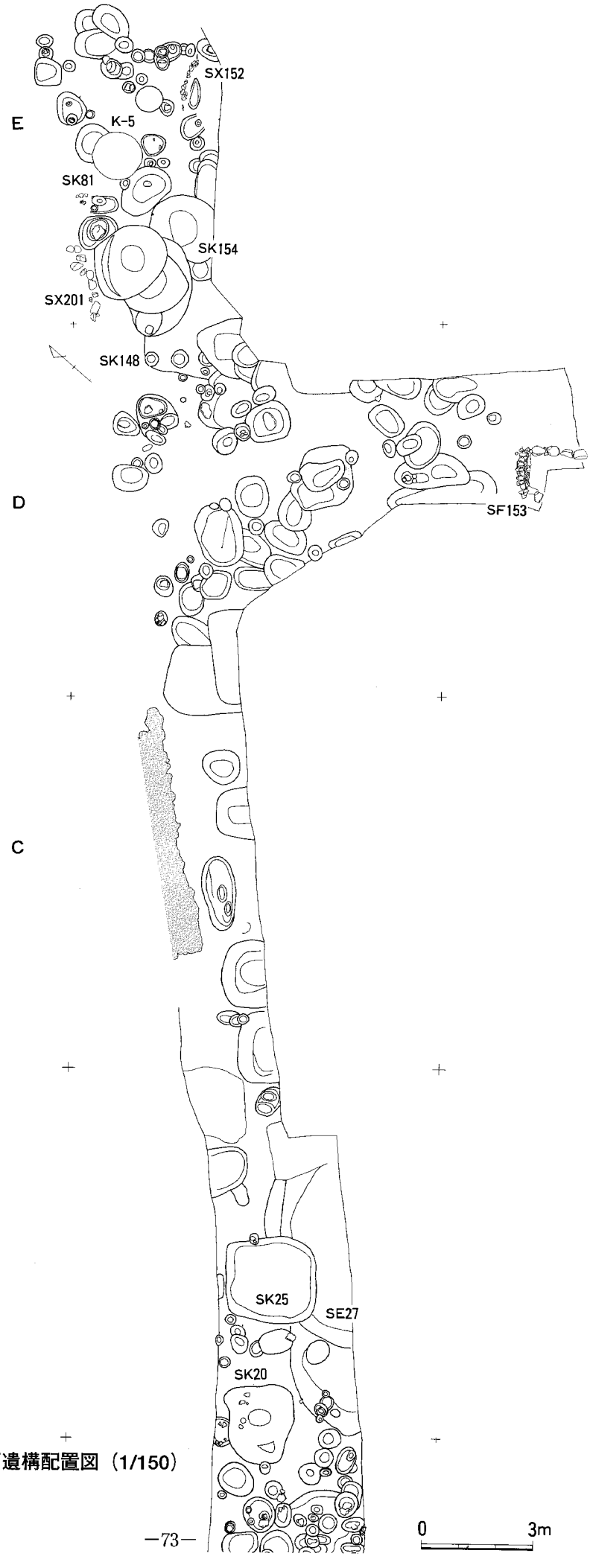
C－10区で検出された。一部壁に切られるが、平面方形の2.0m×（1.6＋α）m、深さ78cmを測る。朝鮮王朝白磁皿が出土している。

SK86（第58図）

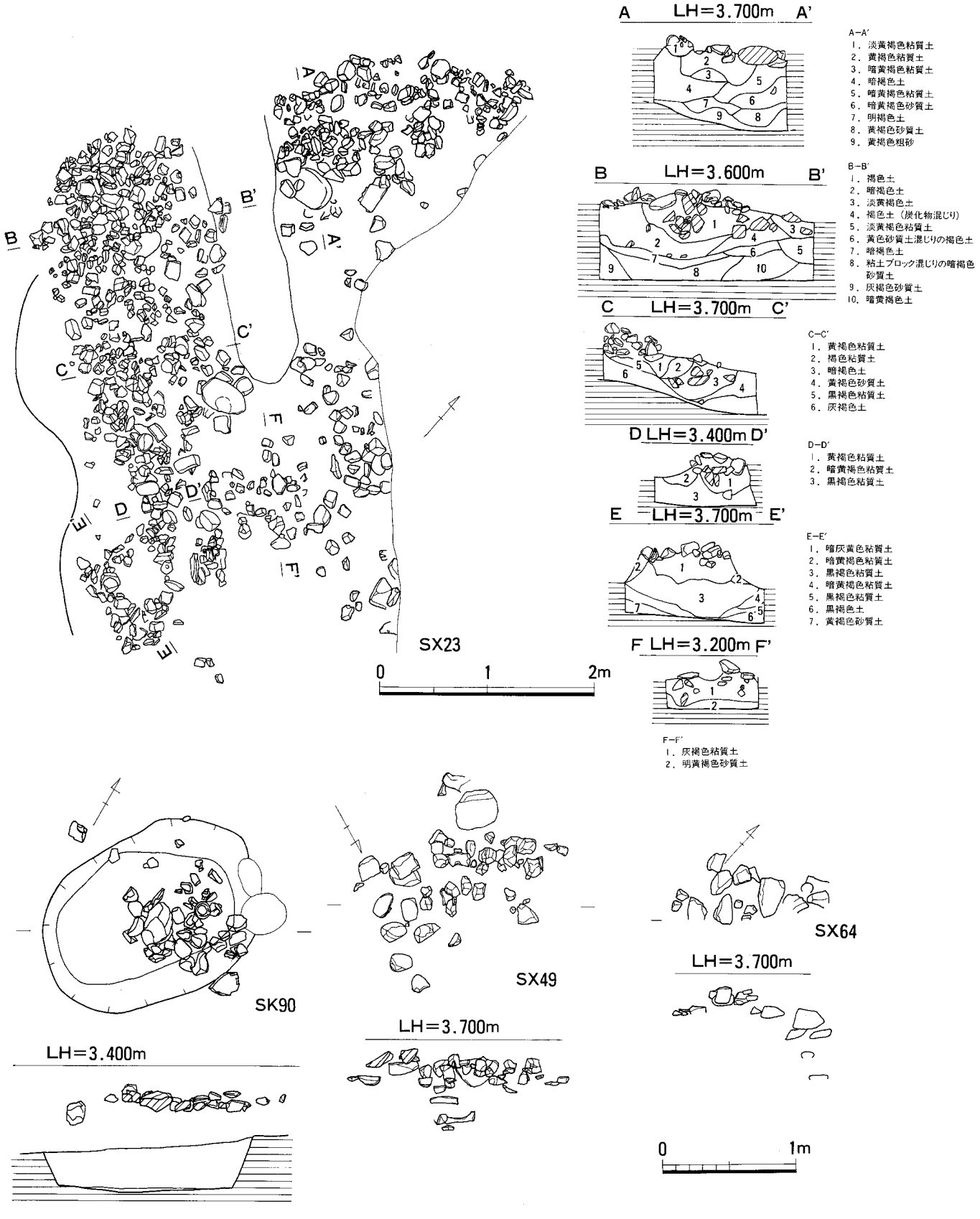
C－10区で検出された。一部壁に切られるが、平面方形の1.4m×（0.9＋α）m、深さ74cmを測る。土師器小皿が出土している。



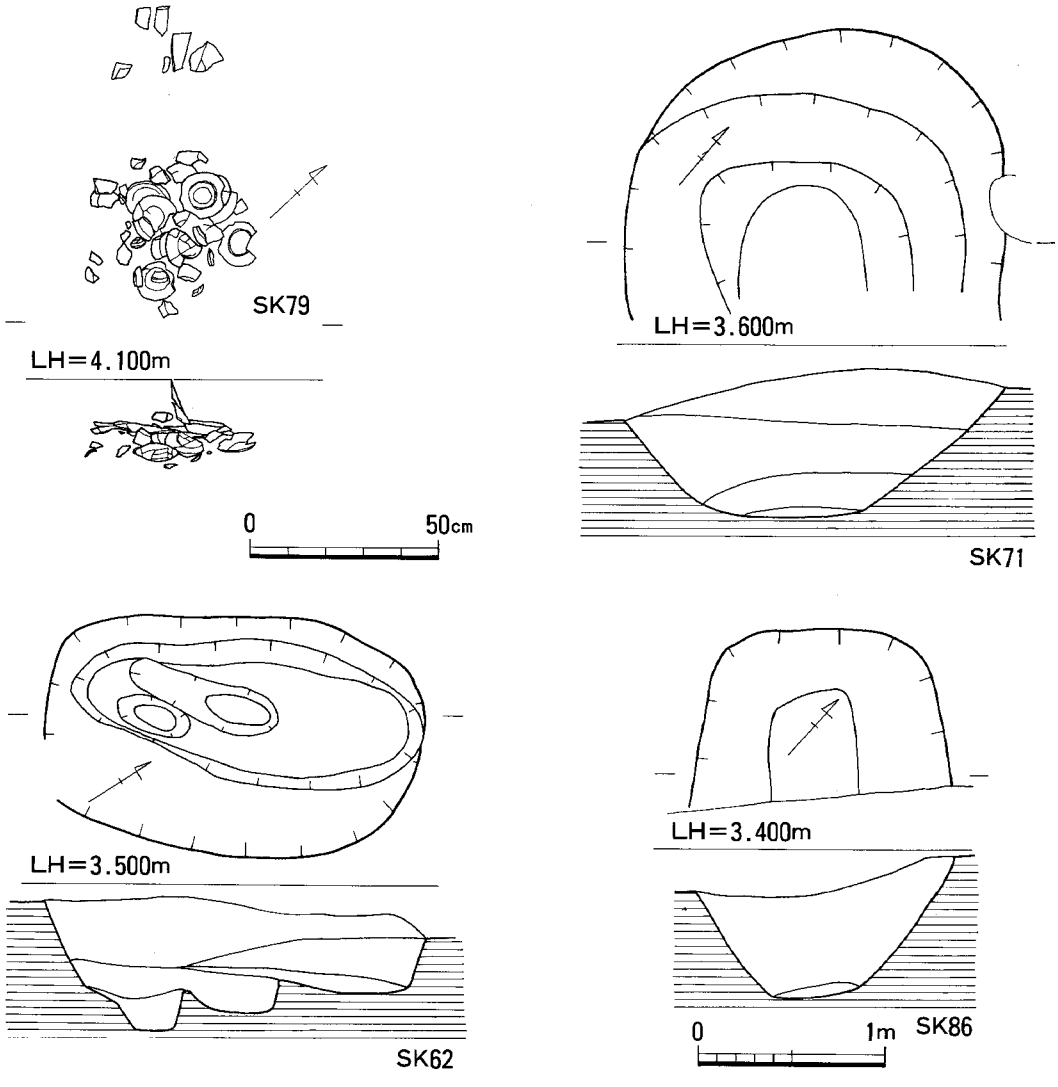
第55図　Ⅲ区第１面遺構配置図（1/150）



第56図　Ⅲ区第２面遺構配置図（1/150）



第57図　集石遺構実測図（1/50・1/40）



第58図　土壙実測図（1/20・1/40）

第２面検出遺構

①石積遺構・集石遺構

SF153（第59図　図版46）

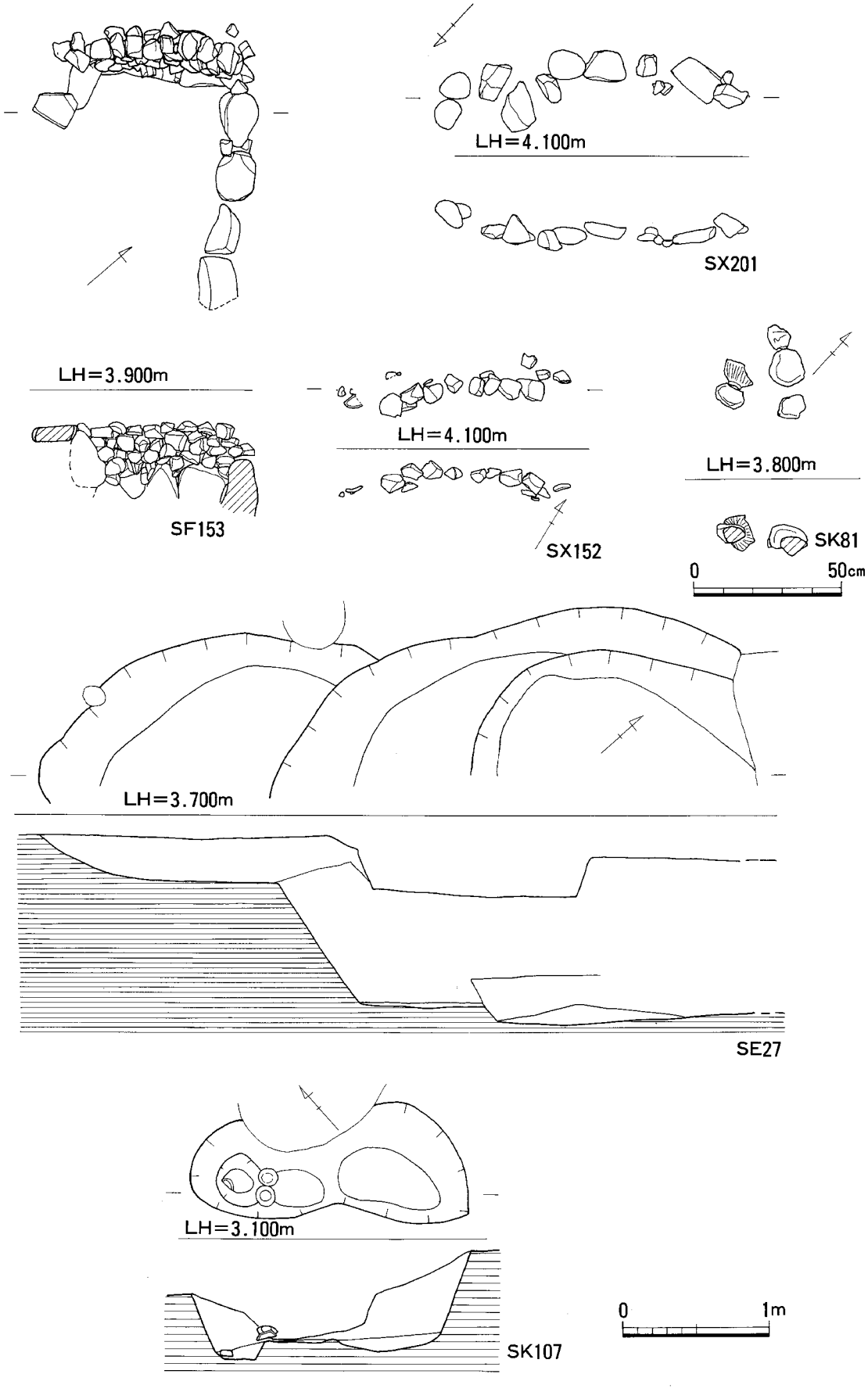
Ｄ－10区南端で検出された。防火水槽に一部切られている。主軸はＮ－49.0°－Ｅを測り、長辺1.9ｍ、短辺1.5ｍ、深さ65㎝以上を測る。短辺は、底部に長さ30㎝ほどの大きな石を並べ、その上に径10㎝ほどの小振りの石を４段積み重ねる。長辺には長さ40㎝ほどの大きな石を並べている。底部構造は明らかでない。白磁皿、土師器坏が出土している。

SX201（第59図）

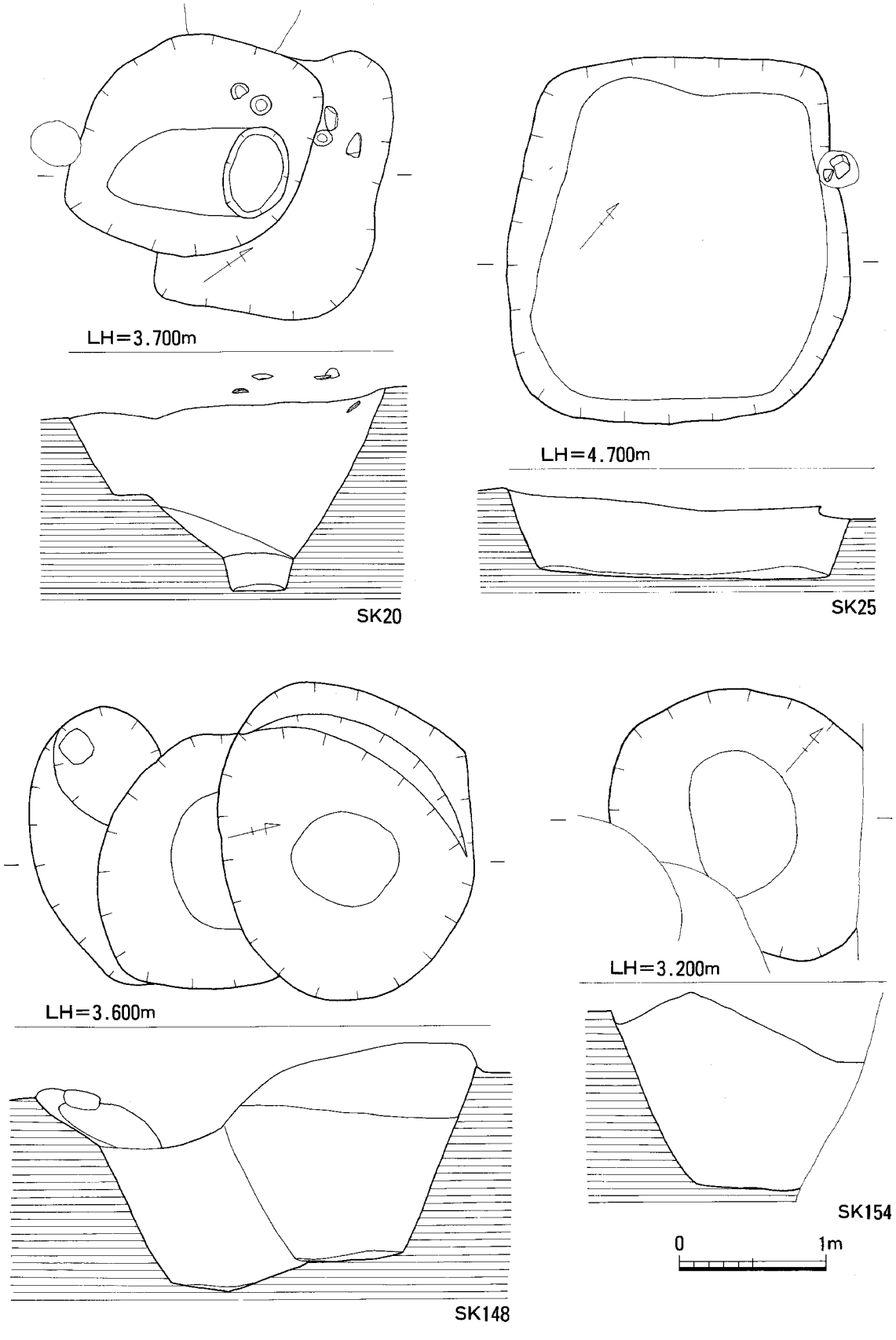
後に述べる石塁遺構B区の南端際に接するように位置していた。Ｅ－10区で検出されている。長さ30㎝程度の石を2.1ｍの長さに並べている。

SX152（第59図　図版46）

Ｅ－10区で検出されている。壁に切られているために全容は明らかでない。径15㎝ほどの石を1.5ｍの長さに弧状に配置する。石積遺構の一種かもしれない。



第59図　石積遺構・土壙実測図（1/20・1/40）



第60図　土壙実測図（1/40）

SK81（第59図　図版46）

Ｅ－10区で検出された。青磁碗が礫とともに出土している。掘方は検出できなかった。

SE27（第59図　図版46）

Ｂ－10区で検出された。壁に半分以上切られており、井筒は検出されていない。土壙の大きさから井戸の掘方と推定される。4.9ｍ×1.3ｍ以上の平面形で、深さは1.4ｍを測る。南側は別遺構の可能性もあるが、一連の掘方として提示した。青磁、白磁碗、青花、土師器坏、土製品が出土している。

SK107（第59図　図版46）

Ｄ－10、11区で検出された。平面は楕円で1.8ｍ×0.8ｍ以上、深さ0.7ｍを測る。土師器坏が出土した。

SK20（第60図　図版46）

Ａ、Ｂ－10区で検出された。平面はほぼ方形で、2.03ｍ×1.8ｍを呈し、深さは1.26ｍを測る。井筒状の掘り込みが検出されたことから、井戸の可能性も考えられる。白磁碗、土師器小皿が出土している。

SK25（第60図　図版46）

Ｂ－10区で検出された。平面は方形を呈し、2.48ｍ×2.34ｍ、深さ60㎝を測る。朝鮮王朝陶器、土師器小皿が出土している。

SK148（第60図　図版46）

Ｅ－10区に位置する。２基の土壙の切り合いとも考えられるが、同一遺構として提示した。長軸2.54ｍ、短軸2.1ｍ、深さ1.4ｍを測る。土師器小皿、灯明皿が出土している。

SK154（第60図）

SK148の東に位置する。平面は円形で径1.8ｍ、深さ1.2ｍを測る。

石塁遺構（第56図）

第１面掘り下げ中から、Ｃ－10区で石塁遺構の一部が検出された。壁にも石塁の一部が現れたためさらに北西側にその存在を予想できた。石塁遺構の項で詳述する。

Ⅲ区出土遺物

SX23出土遺物（第61図）

１は青磁碗Ｂ－Ⅳ類。外面には細線と剣頭が蓮弁を意識して施文される。見込にはねじ花が施文される。オリーブ色釉が全面にかかる。２は土師器坏。糸切り離しで、口径10.3㎝、器高2.3㎝、底径6.5㎝。口縁部は外反する。３、４は土師器小皿。糸切り離しで、順に口径7.2㎝、7.0㎝、器高1.5㎝、1.4㎝、底径5.5㎝、5.1㎝。５は瓦質の円盤、６は土錘である。

SK90出土遺物（第61図）

７、８は土師器坏。糸切り離しで、順に口径11.9㎝、12.0㎝、器高2.8㎝、2.5㎝、底径7.5㎝、8.0㎝。

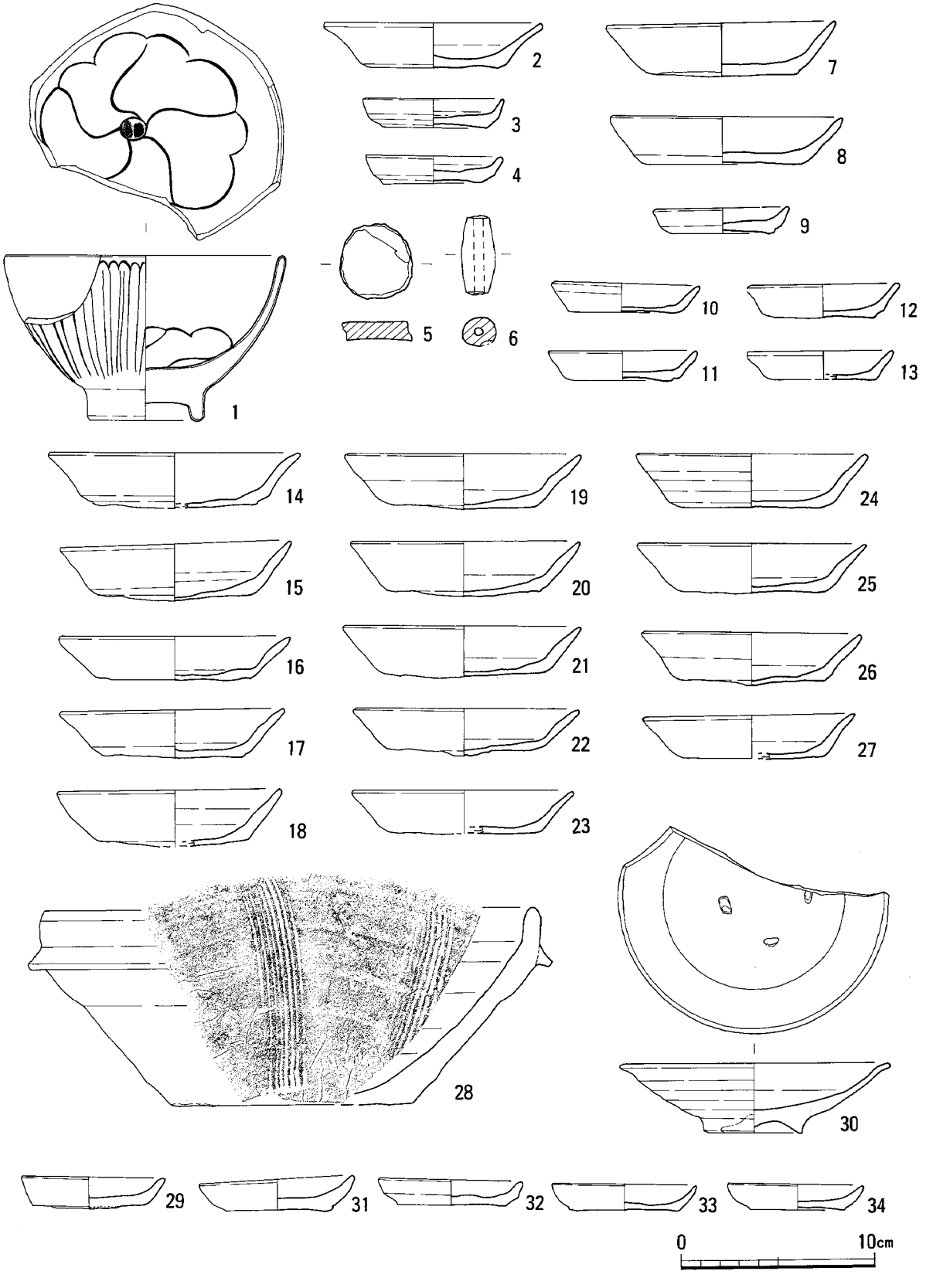
SX49出土遺物（第61図）

９は土師器小皿。糸切り離しで、口径7.1㎝、器高1.4㎝、底径5.4㎝。

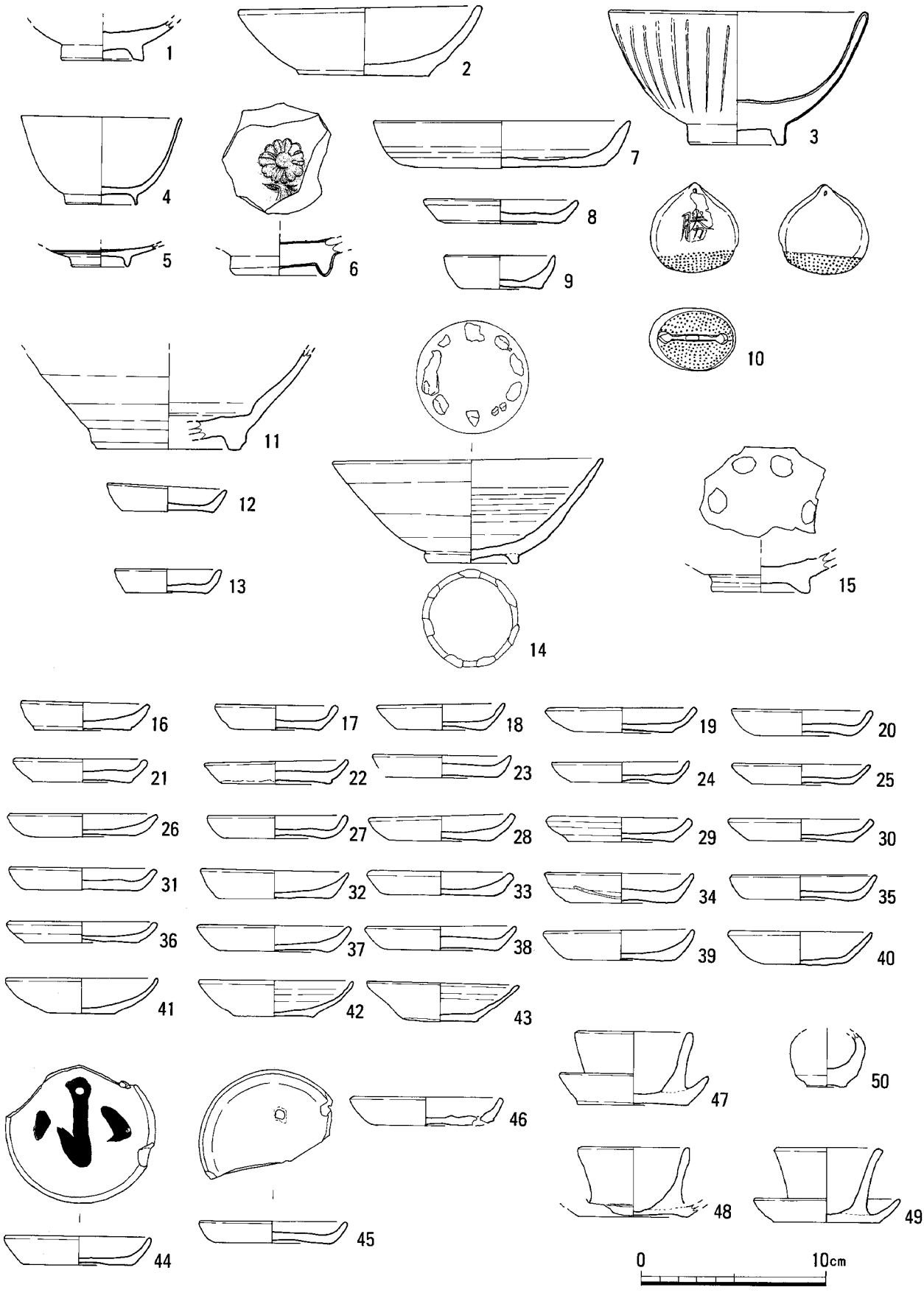
SK79出土遺物（第61図　図版47）

10～13は土師器小皿。12は糸切り離しで板状圧痕がつくが、他は糸切り離し。口径7.6～7.9㎝、器高1.5～1.7㎝、底径5.0～5.6㎝。14～23は土師器の坏。いずれも糸切り離しで、14、21、22、26は板状圧痕がつく。口径は11.0～13.0㎝、器高2.4～2.9㎝、底径7.1～8.0㎝。

SK62出土遺物（第61図）



第61図　集石遺構出土遺物実測図（1/3）



第62図　石積遺構・土壙出土遺物実測図（1/3）

28は備前のすり鉢Ⅴ期。29は土師器小皿で、糸切り離し底部。口径7.4㎝、器高、1.5㎝、底径5.9㎝。

SK71出土遺物（第61図　図版57）

30は朝鮮王朝白磁皿。口縁部はやや外反し、高台内部の削り出しは浅い。灰白色釉が高台外部までかかる。見込に目跡が推定４カ所残る。

SK86出土遺物（第61図）

31～34は土師器の小皿。いずれも糸切り離し底部で、口径7.0～8.0㎝、器高1.3～1.5㎝、底径4.7～5.6㎝。

SF153出土遺物（第62図）

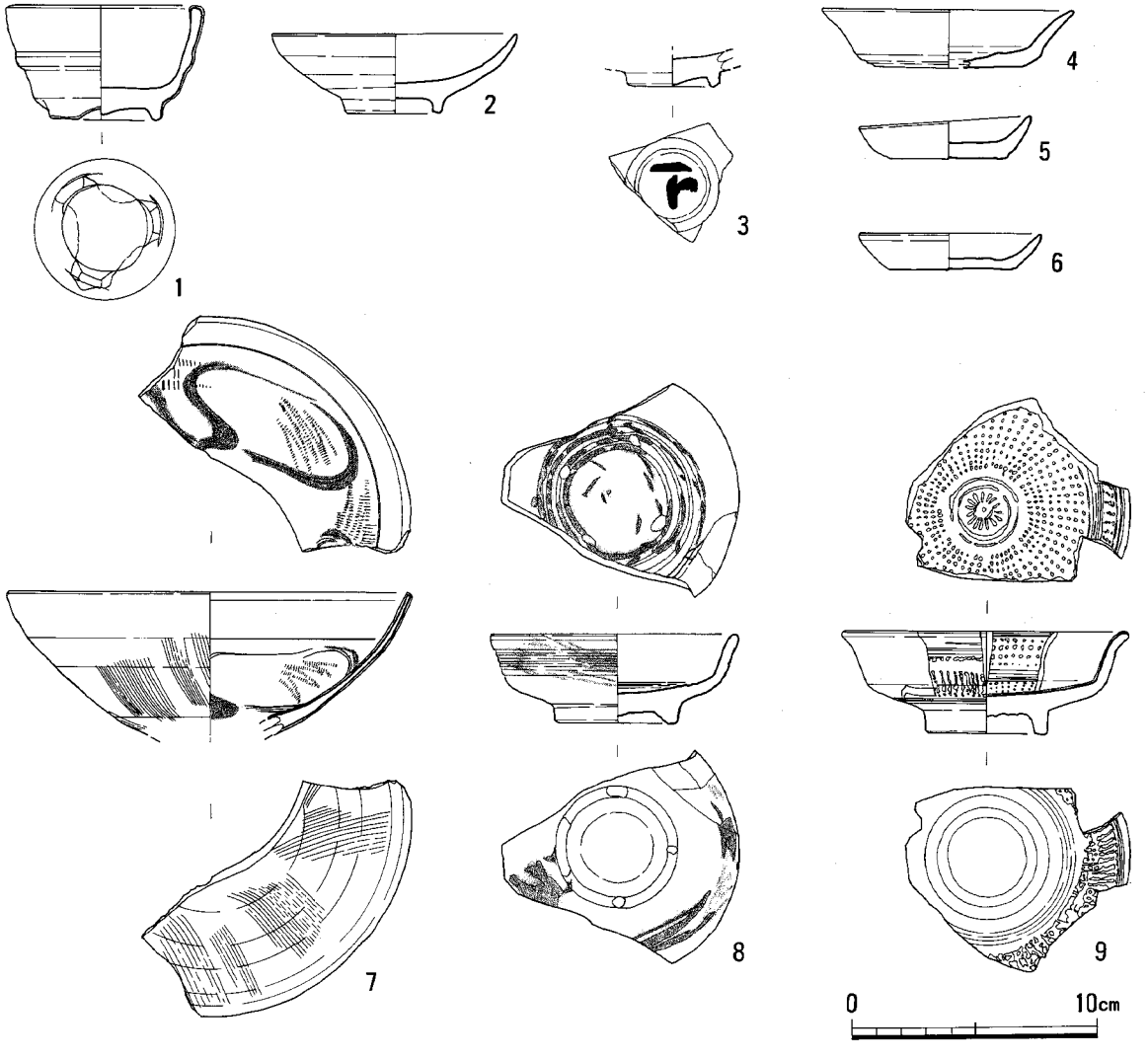
１は白磁皿の底部。畳付と高台内部は露胎となる。２は土師器の坏。糸切り離しで、口径13.2㎝、器高3.9㎝、底径5.0㎝。

SK81出土遺物（第62図）

３は青磁碗Ｂ－Ⅳ類。縦方向の細線のみで、蓮弁の痕跡を残す。畳付と高台内部は露胎となる。

SE27出土遺物（第62図　図版57）

４は白磁碗。白色胎土に白色釉が全面にかかる。５は青花皿Ｂ群。高台周囲に２条の圏線がめぐる。



第63図　包含層出土遺物実測図（1/3）

6は青磁碗B群。見込に菊花文が配される。灰褐色胎土にオリーブ色釉がかかる。7は土師器坏。糸切り離しのち、ハケメで調整される。口径14.0cm、器高2.6cm、底径11.0cm。8、9は土師器小皿。いずれも糸切り離しで、順に口径8.4cm、6.0cm、器高1.2cm、1.8cm、底径6.4cm、4.6cm。10は土鈴で栗を模している。頂部には紐通しのための孔が穿たれ、底部には切り込みが入り、内部に玉を入れて音を鳴らすようにする。表に「勝」の字が刻まれている。「かちぐり」とかけているのであろうか。

SK20出土遺物（第62図）

11は白磁碗。胴部中位まで灰白色釉がかかり、見込は輪状に釉をかき取る。12は土師器の小皿。糸切り離し底部で、口径6.6cm、器高1.5cm、底径5.0cm。15は朝鮮王朝陶器皿。高台内部の削り出しはやや浅く、露胎となる。見込には4カ所の砂目跡が残る。

SK25出土遺物（第62図）

13は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径5.9cm、器高1.3cm、底径4.5cm。14は朝鮮王朝陶器碗。高台の削り出しは浅く、露胎となる。見込に10カ所、畳付に7カ所の目跡がつく。

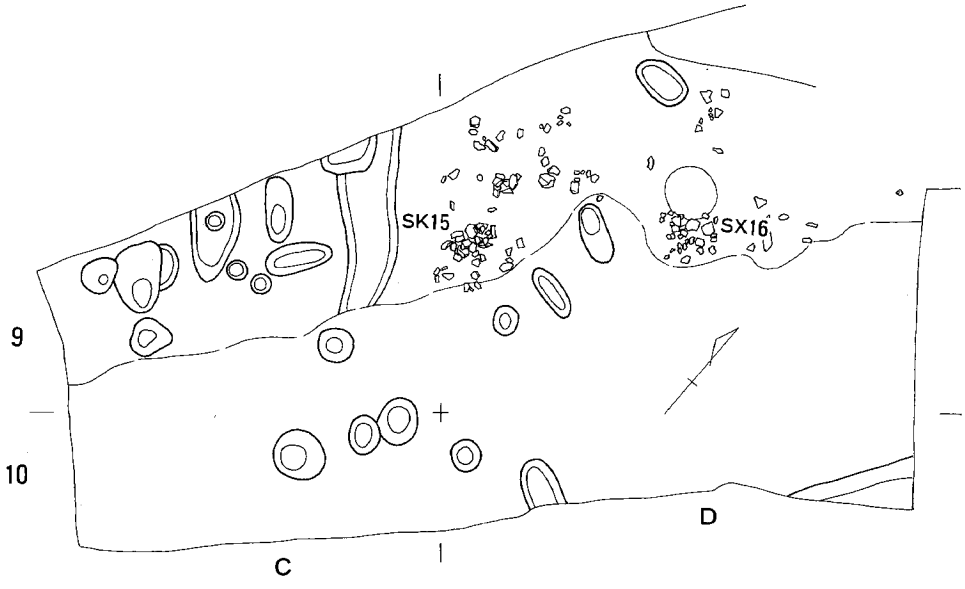
SK148出土遺物（第62図　図版57）

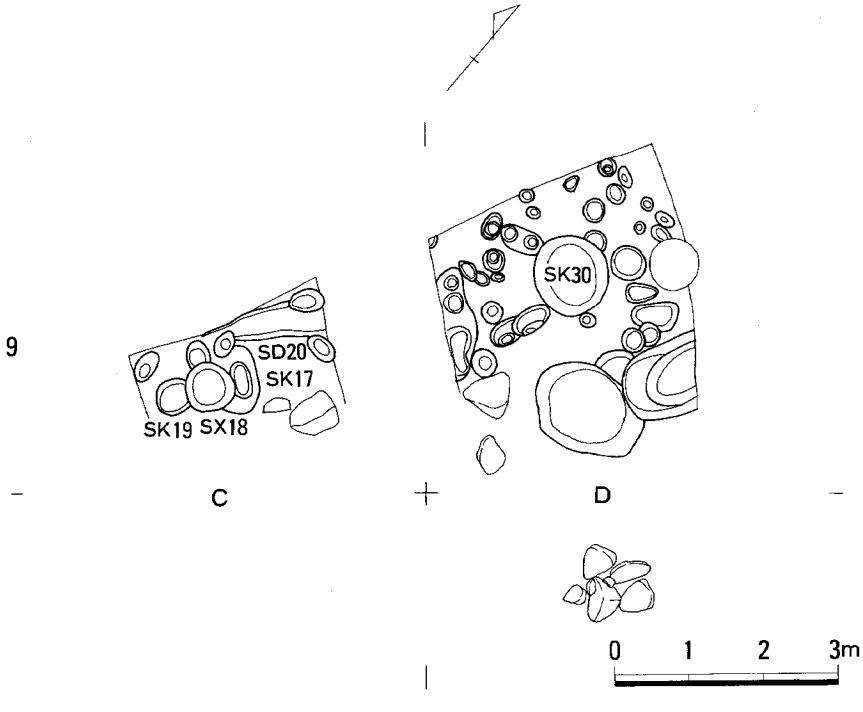
16～46は土師器の小皿。いずれも底部切り離しである。5群に分けて説明する。16～18は他群に比べて法量が小さく、口径6.6～7.0cm、器高1.3～1.5cm、底径4.9～5.0cm。19～38はやや大きくなる。口径7.4～8.4cm、器高1.1～1.7cm、底径5.3～6.2cm。39～41は器高が高くなる。口径8.0～8.2cm、器高1.6～1.9cm、底径3.8～6.0cm。42、43は内面の調整による稜が強く、碗状を呈する。口径8.4、8.2cm、器高2.6、2.8cm、底径5.8、5.4cm。44～46は孔が穿たれる。口径7.8～8.3cm、器高1.2～1.5cm、底径6.0～6.2cm。44内面には「小」の墨書がある。47～49は燭台。口径5.8～6.4cm、器高3.7～4.1cm、底径5.8～6.0cm。50は小型壷か。底径2.2cm。

その他の出土遺物（第63図　図版57）

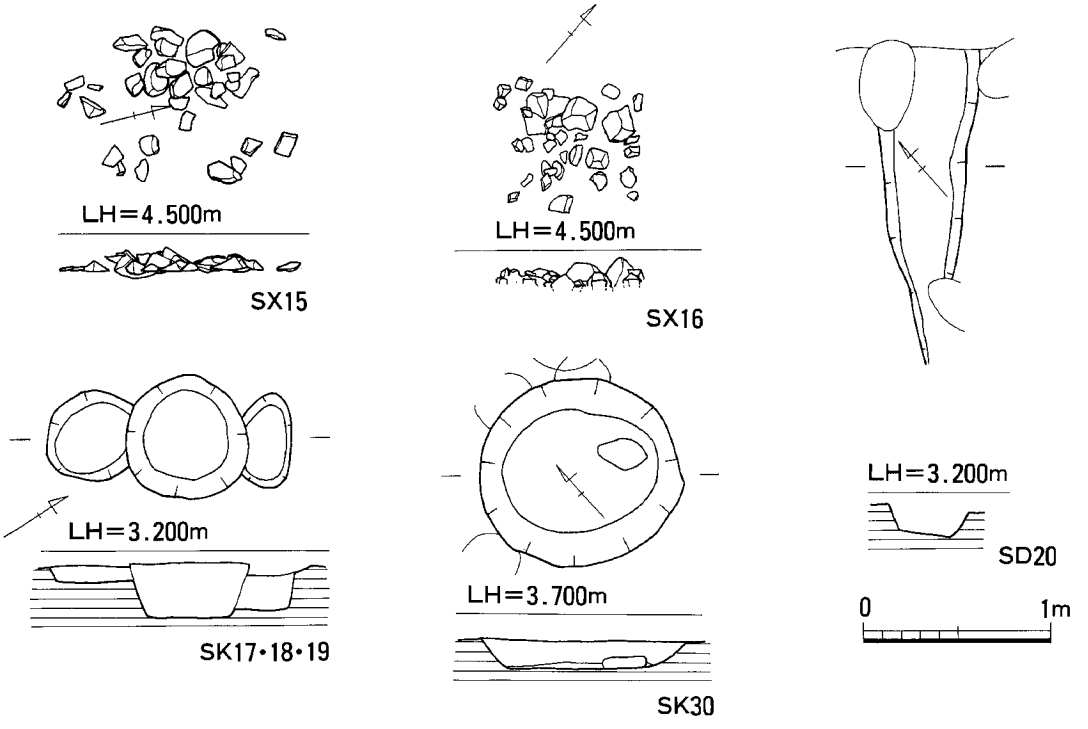
1はB－10区第1面包含層（以下包含層）出土。青磁香炉。外面及び口縁部内面のみに黄灰色釉がかかり、高台は弧状に削り出す。2はE－10区出土。白磁皿D群。見込を輪状に、畳付をかき取り露胎とする。3はD－10区包含層出土。白磁で、高台内部に「上」の墨書がある。方向を変えて朱で上書きされる。5はB－10区包含層出土。土師器小皿で、糸切り離し底部。口径7.0cm、器高1.7cm、底径4.6cm。4はSK30出土。土師器坏で、糸切り離し底部。口径10.2cm、器高2.4cm、底径5.9cm。6は土師器小皿。ハケメ様の調整が底部に施される。口径7.3cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。7は青磁碗。高台内部の釉を輪状にかき取る。淡緑色釉がかかる。

8はA－10区第2面上出土。青磁碗。同安窯系の櫛描文である。灰白色胎土にオリーブ色釉がかかる。9、10は朝鮮王朝陶器粉青沙器坏である。9はD－10区出土。見込と外面に白化粧土でハケメを施し、緑がかった灰褐色釉をかける。見込と畳付に4カ所目跡が残る。10は攪乱出土。見込に印花文が象嵌で施され、透明釉が掛けられる。





第64図　Ⅲ′区第１面・第２面遺構配置図（1/100）



第65図　遺構実測図（1/40）

5．Ⅲ′区の調査

Ⅲ′区の概要

Ⅲ区の第１面を掘り下げ中にＣ－10区で石墨が一部検出され、その全容を解明すべくⅢ区のＣ、Ｄ－10区部分を中心に拡張することとなった。これをⅢ′区とした。Ⅲ′区では、石墨遺構付近の土層断面を見るためベルトを設置したために上面遺構の調査については充分にできなかった。Ⅱ区、Ⅲ区とほぼ対応する第１面、地山面直上の礫混じり赤褐色砂層上面を第２面とした。なお、石墨遺構は、調査区の南東側を掘り下げ途中で検出され、石墨遺構と西壁との間を遺構面として調査した。

検出遺構

SX15（第65図　図版47）

第１面Ｄ－９区で検出された集石遺構。径1.0mの範囲に礫が分布する。

SX16（第65図　図版47）

第１面Ｄ－９区で検出された集石遺構。径70cmの範囲に礫が分布する。

SK17、18、19（第65図）

第２面Ｃ－９区で検出された切り合った土壙群である。

SK30（第65図）

第２面Ｄ－９区に位置する。長径1.03ｍ、短径0.99ｍ、深さ８cmの土壙。

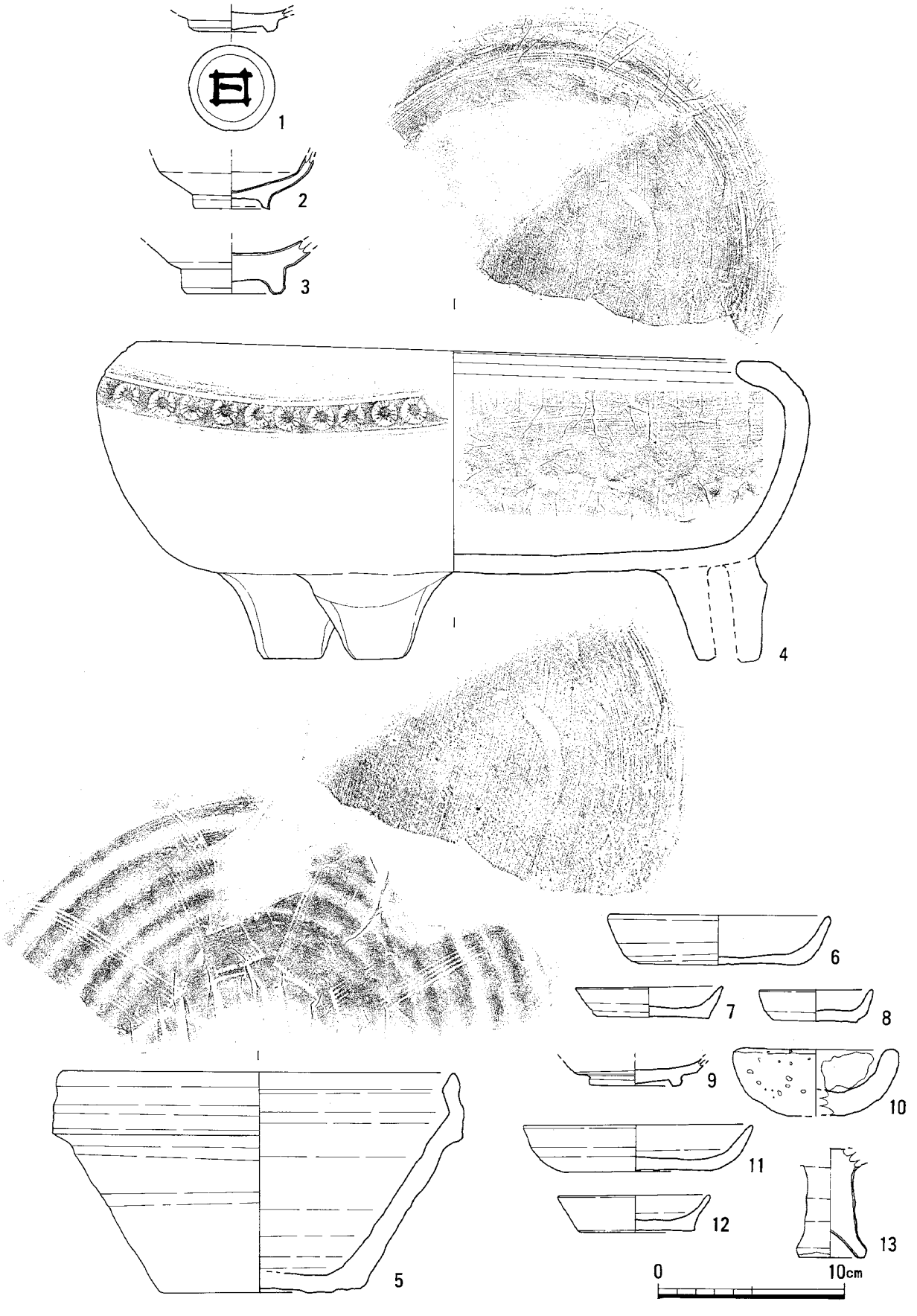
SD20（第65図）

第２面Ｃ－９区に位置する。延長1.7ｍ、幅0.5ｍ、深さ10cmの溝状遺構。

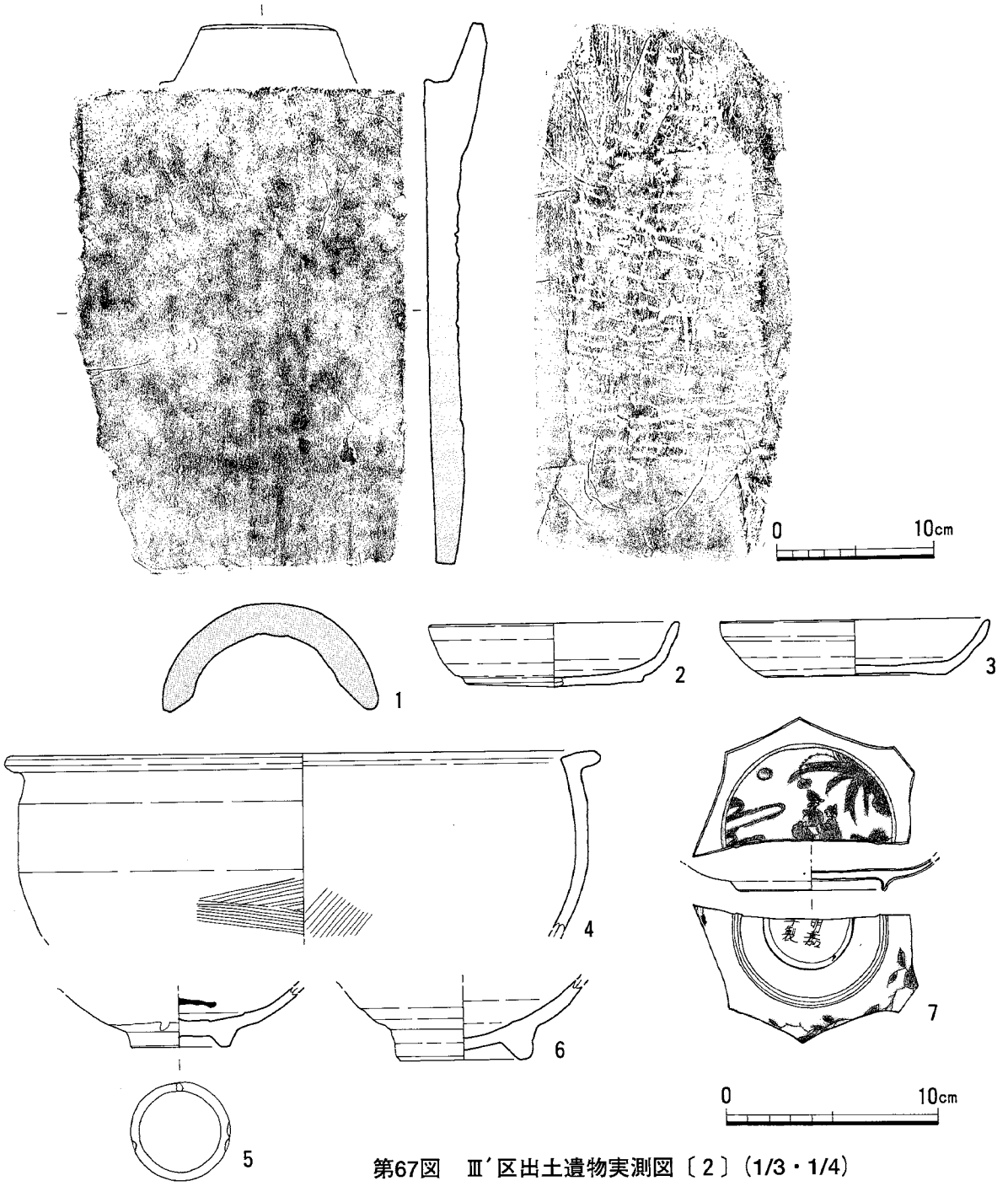
石墨遺構

Ｃ－10区を中心に検出された。Ⅲ区との境目付近である。石墨遺構の項で詳述する。

Ⅲ′区出土遺物（第66・67図　図版57）



第66図　Ⅲ′区出土遺物実測図〔1〕(1/3)



第67図　Ⅲ′区出土遺物実測図〔２〕(1/3・1/4)

遺構からの出土遺物は細片のため図示できず、すべて第１面包含層や、攪乱等からの出土である。

第66図１～５、11～13はＤ－９、10区出土。１は白磁Ⅲ。高台内部の削り出しは浅く、露胎で墨書がある。２は腰折れの白磁坏Ｅ群。畳付と高台内部は露胎となる。３は陶器。高台内部はかき取られ露胎となる。赤褐色胎土に灰赤褐色釉がかかる。４は瓦質火鉢。三脚で口縁部下に菊花文のスタンプが押される。３、４は下層出土。５は備前のすり鉢。Ⅳ期か。11は土師器坏。糸切り離し底部で、口径12.3cm、器高2.5cm、底径8.0cm。12は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径8.1cm、器高2.0cm、底径6.1cm。13は青磁高坏の脚部か。６～10はＣ－９、10区出土。６は土師器坏。口径10.8cm、器高2.7cm、底径8.7cm。７、８は土師器小皿。口径7.9、6.0cm、器高1.6cm、底径6.0、4.5cm。９は青磁坏か。腰折れで高台内部の削り出しは浅く、胴部まで露胎となる。灰褐色胎土に淡灰緑色釉がかかる。10は坩堝。緑青が付着する。第67図１～３はＤ－９、10区第２面直上出土。１は丸瓦。凸面はコテナデ、凹面は布目痕と抜き取り縄目痕が残る。２、３は土師器坏。口径10.8、12.7cm、器高3.0、2.6cm、底径8.9、

8.4cm。4～7はD－9区出土。4は土師器の鍋。外面にススが付着する。5は陶器。見込は輪状にかき取り、高台外部から内部に掛けては露胎となる。灰黄色胎土に透明釉がかかる。畳付に3カ所目跡が残る。6は白磁碗。白黄色胎土にやや緑がかった透明釉が全面にかかる。7は青花皿E－XI類か。見込に樹木、月、人物を描き、高台外部には「□明嘉□年製」の字款が描かれる。

6．Ⅱ′区の調査

Ⅱ′区の概要

Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅲ′区で一連の石墨遺構が検出され、さらに、その全容を明らかにするためにⅡ区の北東側を拡張し、これをⅡ′区とした。この調査区もまた、石墨遺構検出を目的としたため、ところどころ土層確認のためのベルトを設置しながらの調査となった。第1面は他の調査区と同じく褐色砂質土層上面とした。第2面はⅢ′区と同じく赤褐色砂質土層上面とした。なお、石墨遺構はここでの第2面を除去した地山上で検出された。地山上の遺構はほとんどが第2面の掘り残しでありここでは図示していない。石墨遺構部分は第2面遺構配置図にアミで示している部分である。

第1面検出遺構

SX25（第69図　図版47）

F－9区で検出された。一辺が50～60cmの平面三角形の土壙に径10cm程度の礫が詰め込まれている。出土遺物はない。

SK55（第69図）

F－9区で検出された。長軸50cm、短軸40cm、深さ8cmの土壙に土師器小皿が据えられていた。

SK56（第69図）

F－9区で検出された。長軸76cm、短軸約60cm、深さ38cmの平面楕円形の土壙。土師器坏が出土している。

SK22（第69図　図版47）

F－9区で検出された。平面は楕円形で、長軸1.3m、短軸1.1mを測る。上部は削平を受ける。染付皿が浮いた状態で出土している。

SK101（第69図　図版47）

G－9区で検出された。平面は変形の方形を呈し、2.0m×1.56m、深さは0.51mを測り、柱根状の掘り込みがある。土師器坏が出土している。

第2面検出遺構

SF64（第70図　図版48）

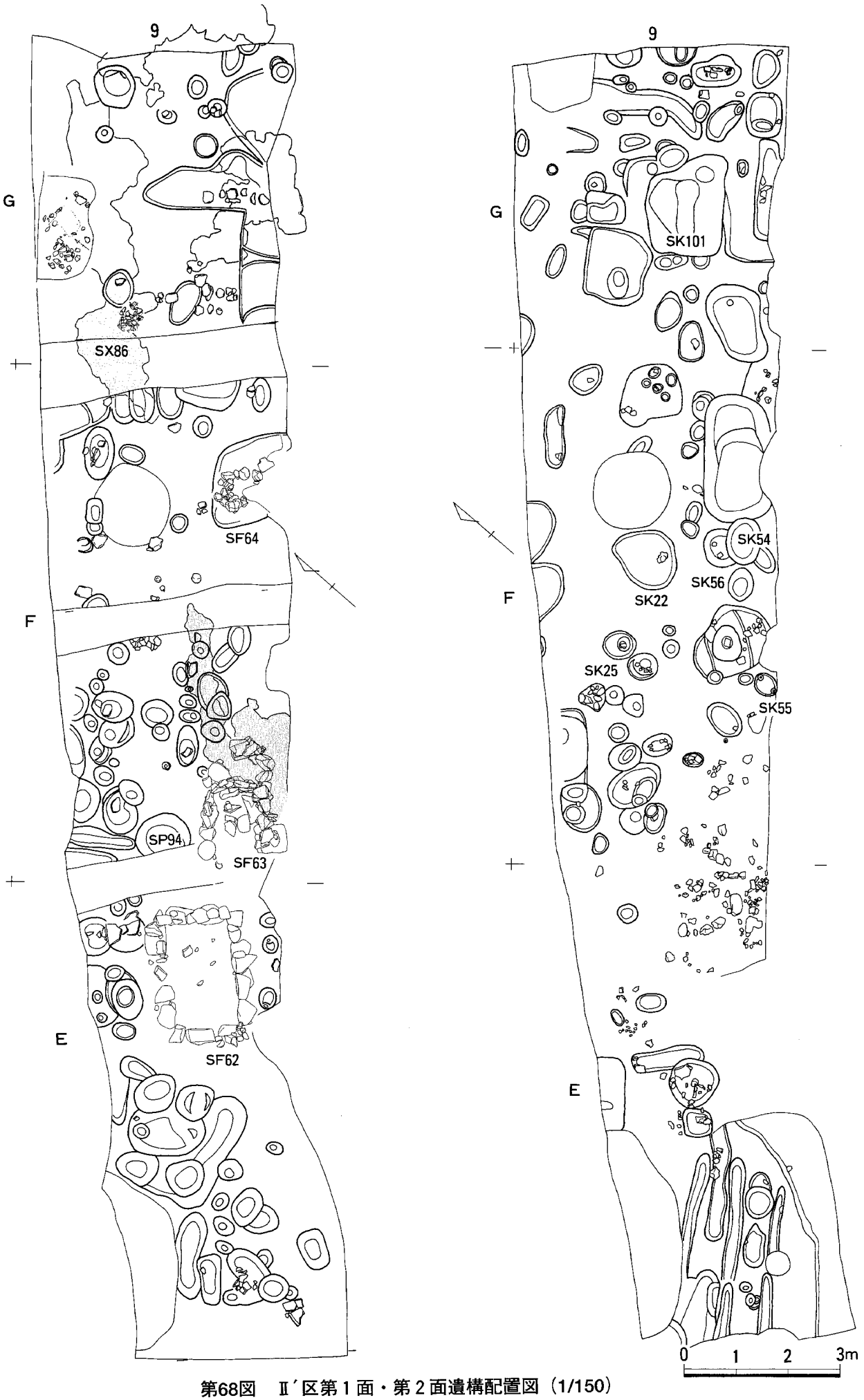
F－9区に位置する。主軸はN－54.5°－Eをとる。第1面で掘方が検出されたが、下層付近で石積が現れた。一辺が80cmほどの平面正方形を呈し、長さ20cm以下の石を積み上げていたと思われるが、崩れていた。青花皿、朝鮮王朝白磁皿、須恵質の小壷、土師器坏・小皿が出土している。

SF63（第70図　図版48）

F－9区に位置する。主軸はN－53.0°－Wをとる。長軸2.35m、短軸1.76mを測り、平面は長方形を呈する。間仕切りを持つ。長さ46cm以下の石を多いところで4段積み重ねている。底面には約50cm四方ほどの石が一部敷かれており、これは後に述べる石墨遺構の石を転用しているものと考えられる。土師器坏・小皿、朝鮮王朝陶器が出土している。

SF62（第70図　図版48）

E－9区に位置する。主軸はN－35.0°－Wをとる。長軸2.65m、短軸2.0mを測り、平面は長方形を呈する。一部2段残っているが、ほとんど底面1段のみの検出である。底面には50cm×50cmほどの



第68図　Ⅱ′区第１面・第２面遺構配置図（1/150）

大ぶりの石を並べている。長辺には一部大型の石を並べているが、短辺には長さ30cm以下の石を積み上げている。土師器坏・小皿、青磁碗、軒丸瓦が出土している。

SX86（第70図　図版48）

Ｇ－９区で検出された集石遺構。長軸1.5ｍ、短軸1.1ｍを測り、平面楕円形を呈する。土師器小皿が出土している。

SK65（第70図　図版48）

Ｇ－９区で検出され、壁に切られる。長軸2.0ｍ、短軸1.06ｍ以上の平面方形を呈する。礫、鉄、羽口が出土している。

石墨遺構（第68図）

Ｆ、Ｇ－９区で検出されている。ほとんどが抜き取られており、残存状況はあまり良くない。石墨遺構の項で詳述する。

Ⅱ′区出土遺物

SK55出土遺物（第71図）

１は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径7.6cm、器高1.5cm、底径4.7cm。

SK56出土遺物（第71図）

２は土師器坏。糸切り離し底部で、板状圧痕が残り、口径10.0cm、器高2.0cm、底径7.3cm。５は白磁皿Ｅ－２ｂ類。畳付のみ露胎となる。

SK22出土遺物（第71図）

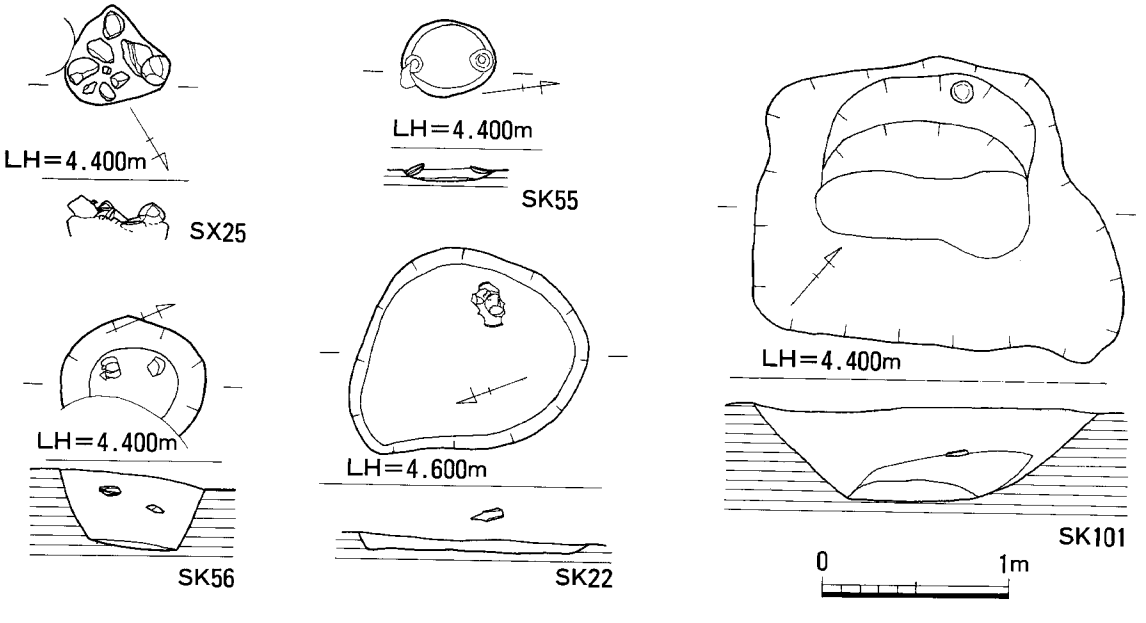
９は染付皿。いわゆるつば皿を呈する。内面いっぱいを使って、折枝梅花文を描く。畳付のみ露胎となり、白色胎土に青みがかった透明釉がかかる。

SK101出土遺物（第71図　図版57）

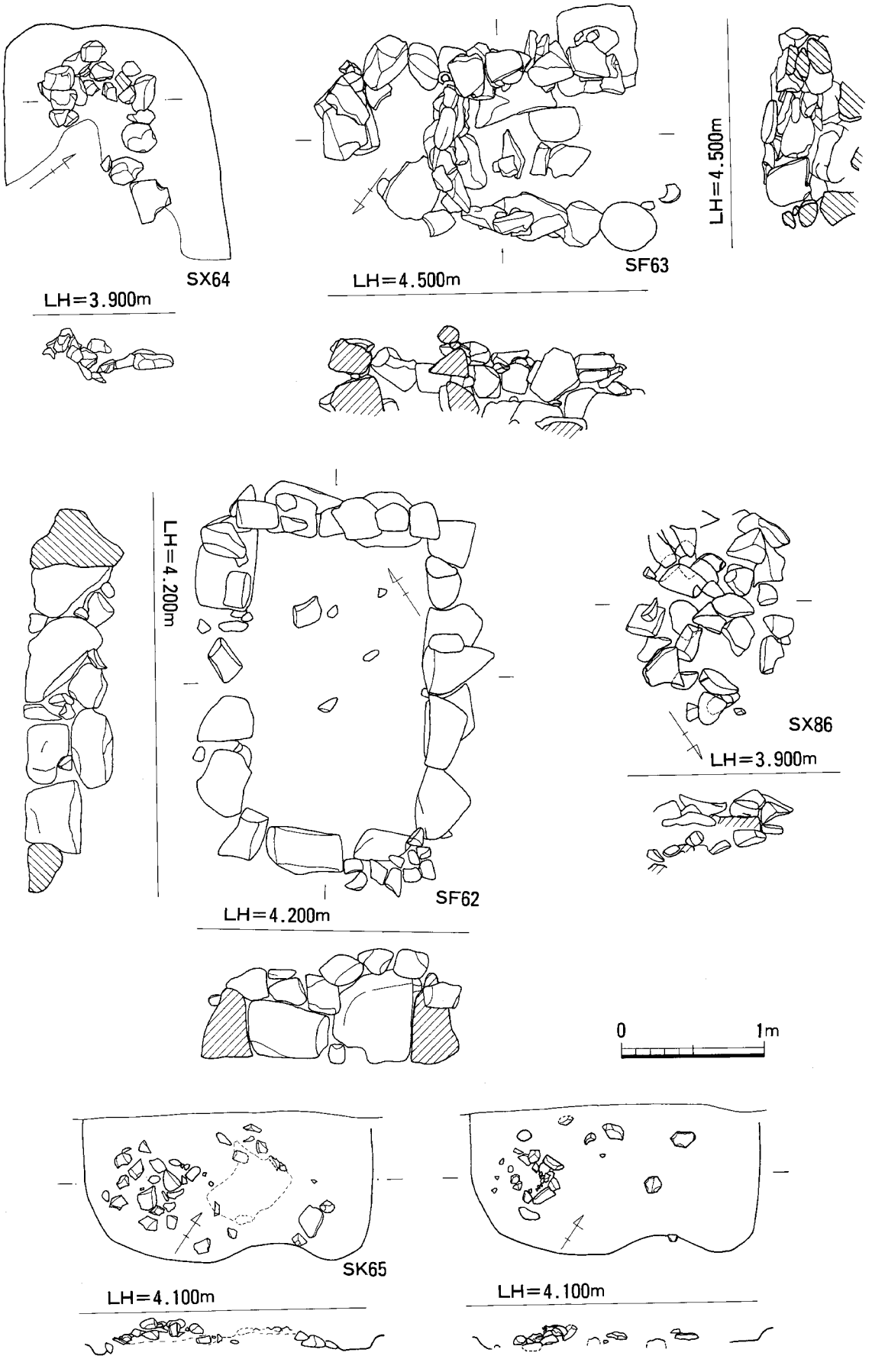
３、６は土師器坏。３は深みがあり、底部は板状圧痕が残る。口径12.2cm、器高3.5cm、底径7.2cm。６は糸切り離し底部で、口径10.7cm、器高2.6cm、底径7.2cm。７、８は瓦質の円形加工品。

SF64出土遺物（第71図　図版57）

10は碁笥底の白磁皿Ｃ－Ⅰ類。見込に花鳥文、胴部下半に芭蕉葉文を描く。高台内部と周囲は露胎



第69図　第１面遺構実測図（1/40）



第70図　石積遺構・土壙実測図（1/40）

となる。11は朝鮮王朝白磁か。畳付のみ露胎となり、白黄色胎土に白色釉がかかる。見込には推定5カ所の砂目跡が残る。12は須恵質の小壷である。内面には鉄分が付着し、外面には自然釉がかかる。13は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径5.0cm、器高0.6cm、底径3.8cm。14は土師器坏。糸切り離し底部で、口径10.6cm、器高2.2cm、底径6.7cm。

SF63出土遺物（第71図　図版57）

15、16は土師器坏。いずれも糸切り離し底部で、口径10.4cm、10.8cm、器高2.3cm、2.2cm、底径6.5cm。17～19は土師器小皿。いずれも糸切り離し底部で、順に口径7.0cm、6.4cm、6.3cm、器高1.9cm、1.2cm、1.5cm、底径5.0cm、3.8cm、4.8cm。20は朝鮮王朝陶器皿。高台内部の削り出しは浅く、灰褐色胎土に灰褐色釉が全面にかかる。見込に6カ所、畳付に5カ所目跡が残る。21は備前すり鉢Ⅴ期。22は朝鮮王朝陶器皿。灰褐色胎土に灰褐色釉が全面にかかり、見込には5カ所、畳付に4カ所の目跡が残る。

SF62出土遺物（第71図）

23は青磁。灰褐色胎土に淡オリーブ色釉をかける。高台内部は輪状に釉をかき取り露胎とする。見込に梅花文が施される。24～26は土師器坏。いずれも糸切り離し底部で、順に口径10.5cm、11.3cm、10.2cm、器高2.6cm、3.3cm、2.2cm、底径7.3cm、6.2cm、6.9cm。27～29は土師器小皿。27、28はいずれも糸切り離し底部で、順に口径6.7cm、4.4cm、器高1.2cm、1.5cm、底径3.9cm、2.7cm。30は軒丸瓦。内区には右巻の三つ巴文を配し、巴頭部は太く、尾は半周すると思われるが、自然に消える。外区には小さな珠文を配する。周縁の幅1.1cm。

SX86出土遺物（第71図）

29は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径6.2cm、器高1.4cm、底径4.9cm。

SK65出土遺物（第71図　図版57）

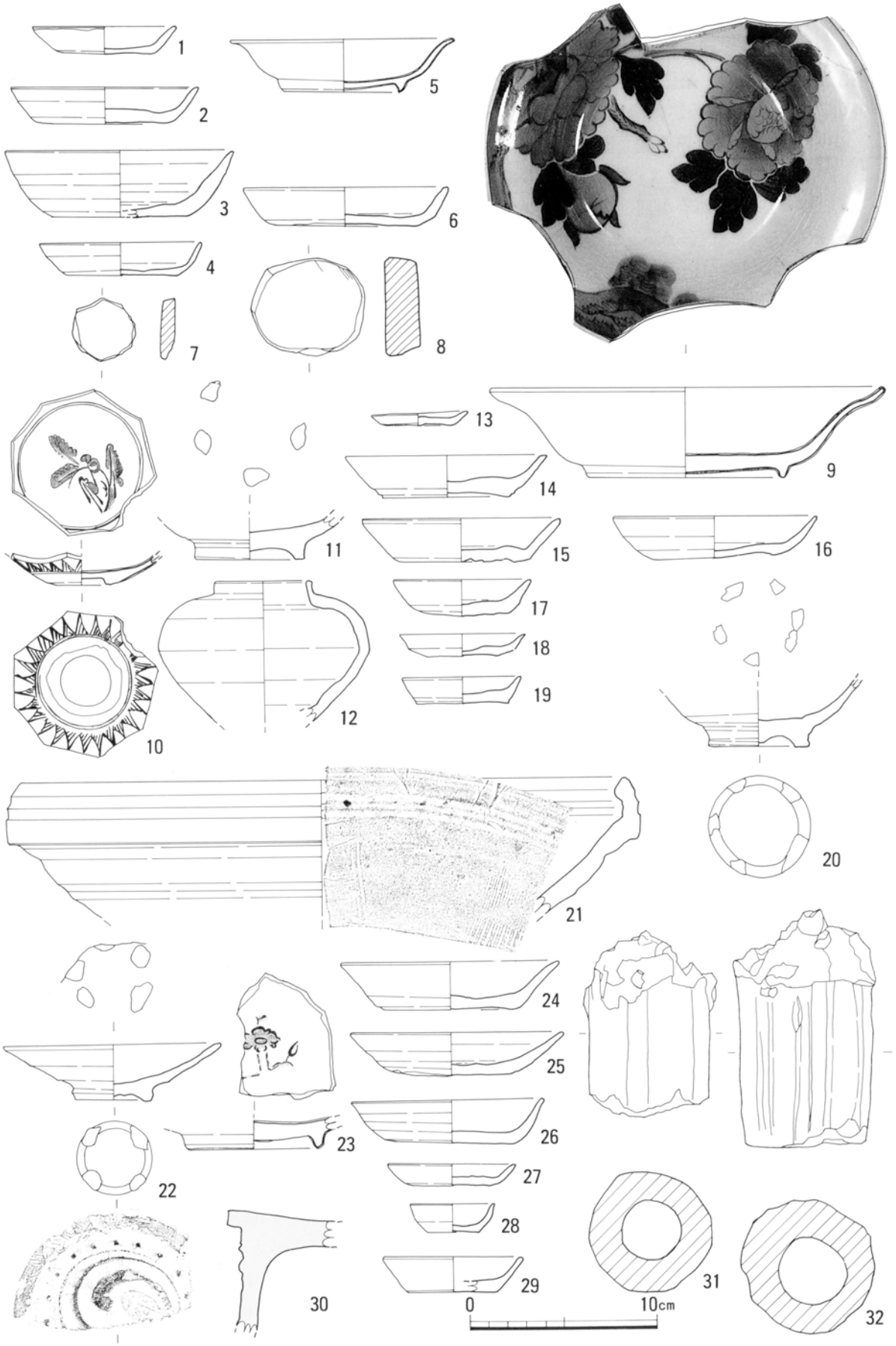
31、32は羽口である。31は径6.4cm、32は径7.0cm。一端に鉄が付着する。

包含層・その他出土遺物（第72～74図　図版47・48）

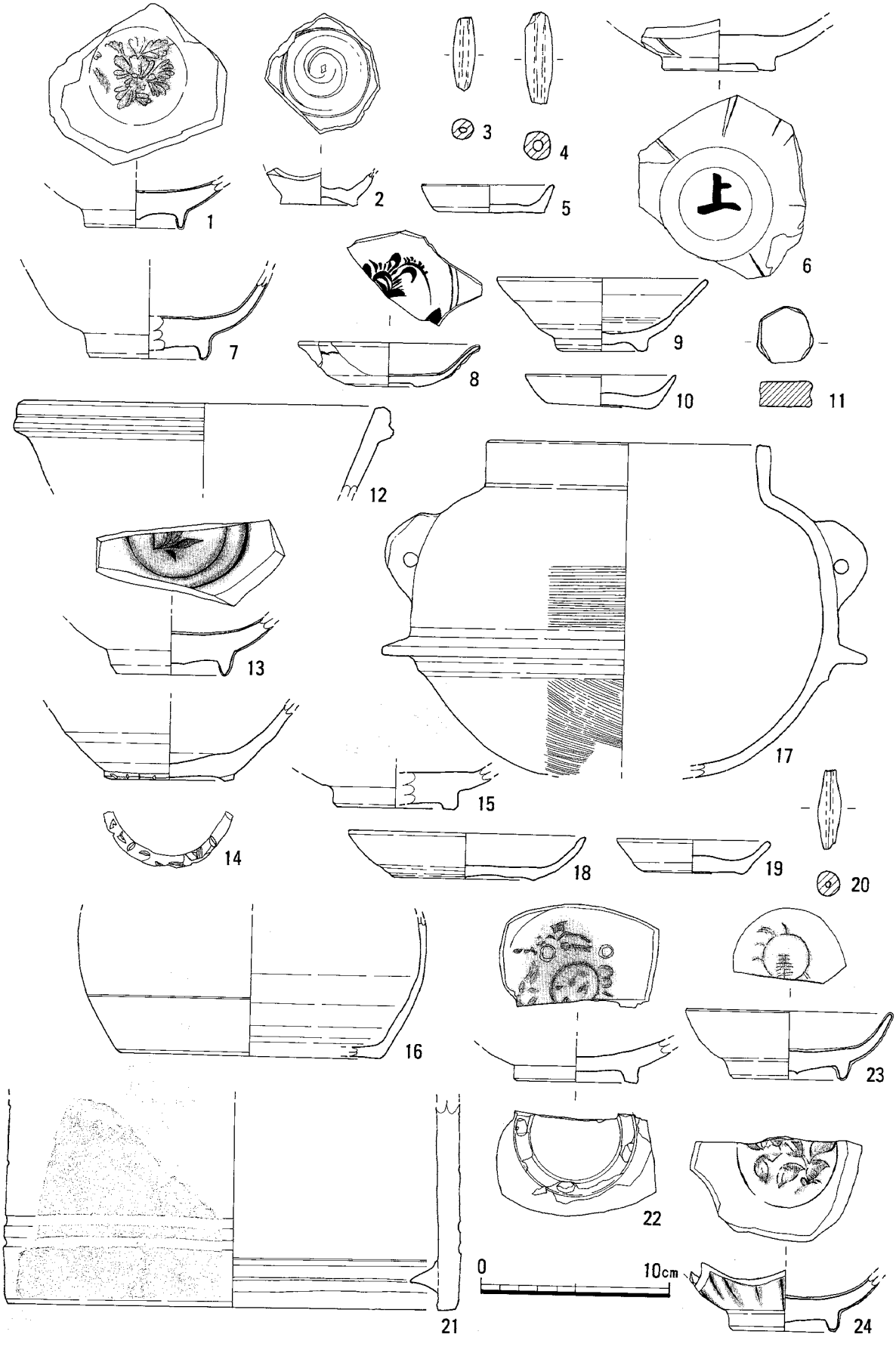
第72図1、2はE－9区出土。1は青磁で、高台内部は釉をかき取られ露胎となる。見込に菊花文がスタンプされる。灰褐色胎土にオリーブ色釉がかかる。2は陶器の小型碗で内面にのみ茶褐色釉がかかる。3～24はF－9区出土。3～12は4を除いて1層出土。3、4は土錘。4は2層出土。5は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径6.8cm、器高1.5cm、底径5.7cm。6は青磁碗。外面底部付近に片切掘りの蓮弁文が残り、高台内部と畳付は露胎となる。高台内部に「上」の墨書が施される。7は青磁碗E類。高台内部は露胎となる。灰褐色胎土にオリーブ色釉がかかる。8は碁笥底の青花皿だが、口縁部は端反りとなる。見込には草文を描く。9は朝鮮王朝陶器皿。灰褐色胎土に灰褐色釉が全面にかかる。10は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.7cm。11は瓦質の土製円盤。12は滑石製の鍋。口径20.0cmで、口縁部下に突帯を削り出す。

13～17は地山直上の礫混じり赤褐色砂層から出土した。13は青磁碗。灰褐色胎土にオリーブ色釉がかかるが、高台内部は輪状にかき取り露胎とする。見込に草文が施される。14は須恵質に近い碗。底部には糸切りの痕跡が残るが、高台がつき、畳付には刻み目が入る。回転ナデで仕上げられる。15は白磁か。灰褐色胎土に灰褐色釉がかかる。外面や高台は露胎となる。16は陶器壷か。17は瓦質火鉢か。把手が2カ所付き、胴部下位に突帯がめぐる。外面にはハケメで調整がなされ、ススが付着する。

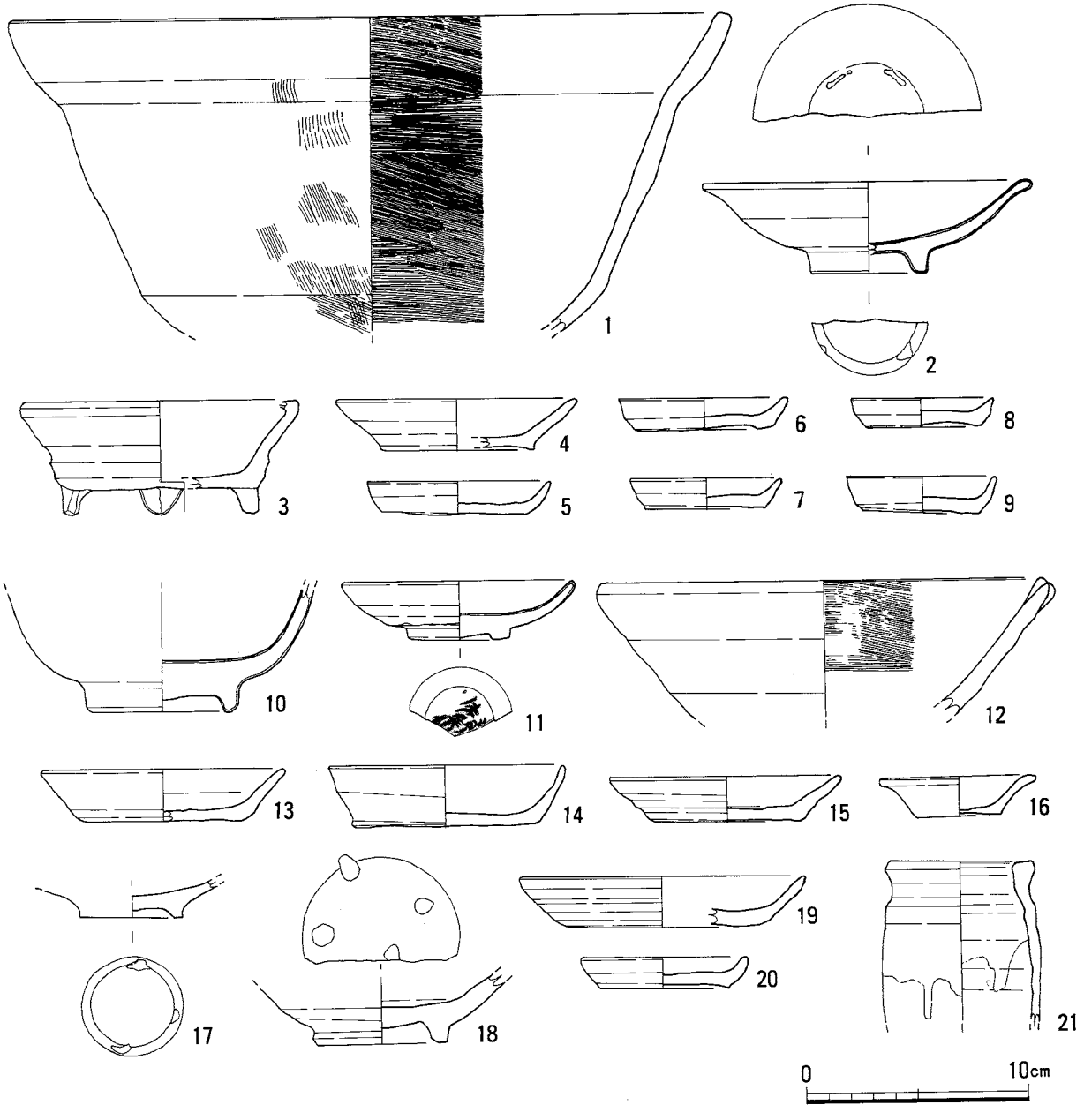
18、21、22は1層出土。19、20、23、24は2層出土。18は土師器坏。糸切り離し底部で、口径12.5cm、器高2.4cm、底径7.4cm。19は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径8.0cm、器高1.7cm、底径5.5cm。20は土錘。21は土師器。内面に一条突帯がめぐり、外面には扇文がスタンプされる。径は23.7cm、残高は10.8cmを測る。22は青磁。高台内部は露胎となるが、釉は剥げかけて色調は不明。見込に花文がスタンプされる。見込に2カ所、畳付に3カ所の目跡が残る。23は青磁皿。灰褐色胎土に淡オリーブ色釉がかけられ、高台内部は輪状に釉がかき取られる。見込に記号化した文字が施される。24は青磁



第71図　遺構出土遺物実測図（1/3）



第72図　包含層出土遺物実測図〔１〕(1/3)

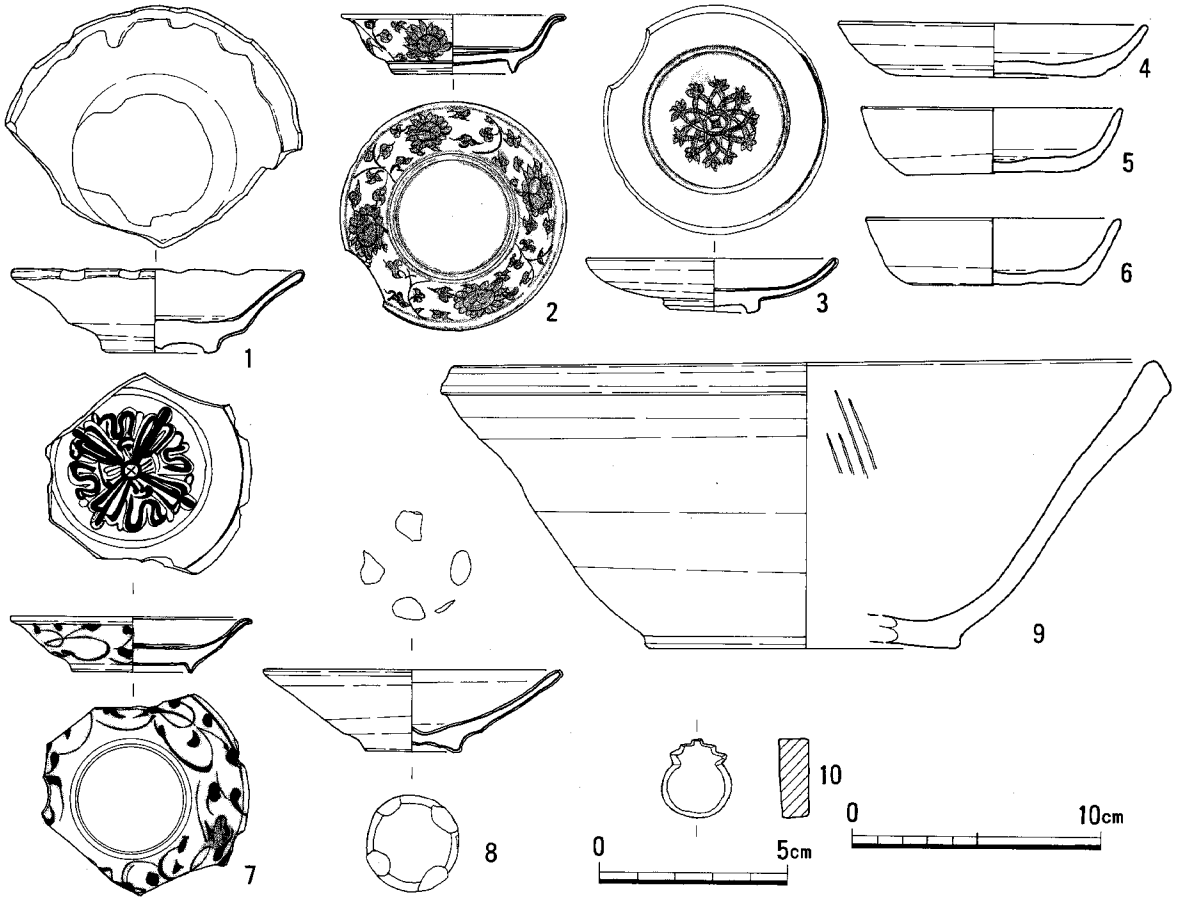


第73図　包含層出土遺物実測図〔２〕(1/3)

碗。灰白色胎土に淡オリーブ色釉がかけられ、高台内部は輪状に釉がかき取られる。外面には片切り彫りの連弁文が、見込には草花文が施される。

第73図１～９はＦ－９区１層出土。１は土師質の鍋。外面にはススが付着する。２は陶器皿。口縁部はやや外反し、灰黄褐色胎土に灰黄色釉が全面にかかる。見込、畳付には２カ所細長い目跡が残る。３は土師器の脚付き坏である。口径12.5cm、器高5.1cm、底径8.7cmを測る。脚は３カ所つく。４は土師器の坏。糸切り離し底部で、口径10.9cm、器高1.5cm、底径7.0cm。５～９は土師器小皿。いずれも糸切り離し底部。５、６は順に口径8.2cm、7.5cm、器高1.5cm、1.4cm、底径6.5cm、6.1cm。７～９は口径6.4～6.8cm、器高1.3～1.6cm、底径5.3～5.4cm。

10～21はＧ－９区出土。18、19、21は礫混じり赤褐色砂層出土で、それ以外は１層出土である。10は青磁碗Ｅ類。灰褐色胎土に灰緑色釉がかかり、高台内部は輪状に釉がかき取られる。11は白磁皿Ｄ群。白色胎土に白色釉が胴部下位までかけられ、高台内部には墨書が施される。12は東播系のこね鉢。



第74図　遺構面出土遺物実測図（1/3・1/2）

内面はハケメが施される。13～15は土師器坏。いずれも糸切り離し底部で、14、15は板状圧痕がつく。順に口径10.9cm、10.6cm、10.4cm、器高2.4cm、2.8cm、2.0cm、底径7.2cm、8.5cm、6.5cm。16は土師器小皿。口縁部は外反し、底部は糸切り離し。口径7.1cm、器高1.8cm、底径3.8cm。17は朝鮮王朝陶器か。灰褐色胎土に灰緑褐色釉が胴部外面までかけられ、畳付から高台内部は露胎となる。畳付に3カ所目跡が残る。18は朝鮮王朝陶器皿。灰褐色胎土に灰緑褐色釉がかけられる。見込に目跡が4カ所残る。19は土師器坏。ナデで調整される。口径12.8cm、器高2.3cm、底径8.6cm。20は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径7.4cm、器高1.5cm、底径5.8cm。21は陶器の小壷。灰赤褐色の胎土で、内外面胴部中位まで灰赤褐色釉が部分的にかけられる。

第74図1はSP94出土。朝鮮王朝陶器皿。胴部下位の屈曲部から口縁部が外反して伸び、口縁端部を輪花に仕上げる。見込と畳付部と高台内部までが露胎となり、やや赤みを帯びた淡灰褐色釉がかかる。赤褐色胎土。2はSK54出土。端反りの青花皿B群。外面に花唐草文が施文される。内面は圏線のみである。3は青花皿。厚めの高台がつき、高台内部の削り出しは浅い。白色胎土に透明釉がかけられるが、高台外面から内部まで露胎となる。内面には圏線と、見込に幾何学的な花文が施される。4～6は第2面上出土。いずれも土師器坏で、糸切り離し底部。順に口径12.4cm、10.5cm、10.2cm、器高2.2cm、2.7cm、2.7cm、底径8.3cm、6.9cm、7.0cm。7～10はその他の包含層出土。7は端反りの青花皿B－Ⅵ類。見込には十字花文、外面には唐草文が施される。8は朝鮮王朝陶器皿。高台内部の削り出しは浅く、淡赤褐色胎土に淡灰赤褐色釉が全面にかけられる。見込と畳付に4カ所砂目跡が残る。9は東播系のすり鉢である。内面には粗いヨコナデが施され、スリ目が入れられるが、摩耗のため明確ではない。10は銅製品。装飾品であろうか。

7．石墨遺構

概要

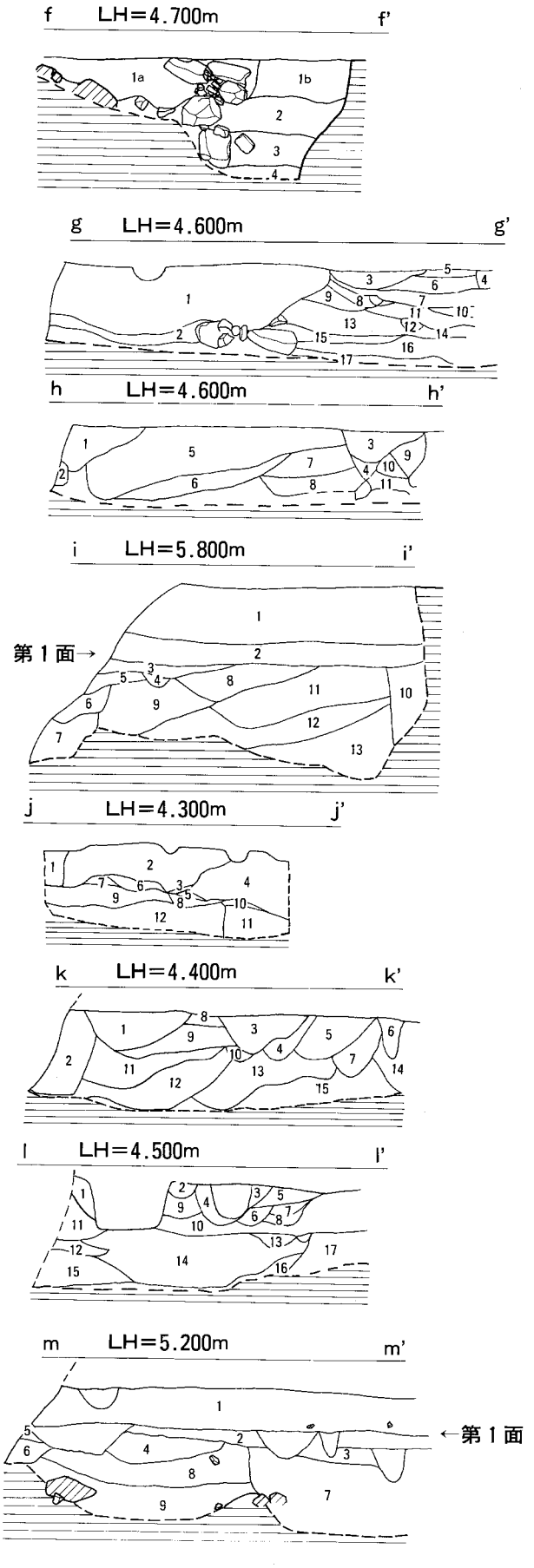
以上、Ⅱ区から調査を開始し、石墨遺構を追いながら調査区を拡張し、進めていった。その結果、今回の調査範囲内において石墨遺構の全容が明らかとなった。第75図と第76図を参照されたい。

石墨遺構は各調査区を通じて地山である黄褐色砂質土層上面で検出された。現在は部分的に点在している状況であるが、本来は石墨状につながっていたと推定される。石墨遺構の延長53ｍ、幅3.3～3.5ｍ、最も残りの良い部分の高さは1.3ｍで、主軸はＮ－37.0°－Ｗをとる。なお、説明を簡便にするため、石墨遺構をブロックに分け、南南西から北北東へ向かい、順にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅと記号を付した。以下この記号を用いて説明を行う。

層序（第77図　図版48）

石墨遺構は最終的に現状保存・一部展示という処置をとることにしたため、石墨を断ち割ることはできなかった。しかしながら前述したように、石は部分的に抜き取られており、ブロックごとに石積の状況を断面で見ることは可能であった。また、石墨遺構が削平されている部分でも、その痕跡が土層に現れている可能性があり、Ⅱ′区、Ⅲ′区を拡張した際、石墨遺構の位置を想定しながら土層ベルトを設定した。土層の位置と、土層図については第22図、第77図を参照されたい。ここで土層ｆ－ｆ′について見ると、これはＡブロックの南南西端付近に設置したものだが、土層図の左側部分は石墨遺構となる。上部は石墨遺構を攪乱した１ａ層であるが、それから順に１ｂ、２、３、４層となる（４層は地山）。ここで、３層は小礫を多く含む赤褐色砂層となるが、この層が、石墨遺構が構築された後に堆積した層と思われる。そしてこの層は石墨遺構の他のブロックにおいて、ほぼその北東側に堆積していた。また、石墨遺構が残存していない部分については、その抜き取り痕と思われる層があり、石墨遺構が本来縷々と続いていたと想定される。

第75図　石墨遺構配置図（1/500）



f−f'
1a. 10YR3/1(黒褐) 炭化物含む
1b. 10YR4/2(灰黄褐) 遺物含む
2. 10YR7/3 黄白色土 粒子細かい砂質土 整地層か
3. 7.5YR5/3 赤褐色土礫多く含む砂質土
4. 10YR5/4(にぶい黄褐) 地山(黄褐色砂質土)

g−g'
1. 10YR3/2(黒褐) 礫、炭化物、遺物含む粘質土
2. 10YR3/2(黒褐)〜10YR5/6砂質土
3. 10YR4/2(灰黄褐)〜3/2(黒褐) 炭化物、遺物、礫含む
4. 10YR5/1〜5/2(灰黄褐)
5. 10YR5/2(灰黄褐)砂質土
6. 7.5YR5/1 炭化物、粘度粒含む砂質土
7. 2.5Y5/1 炭化物含み粘性強い
8. 10YR5/1粘質土混じる砂質土
9. 10YR5/2(灰黄褐) 11と類似
10. 7.5YR5/1 炭化物混じりの粘土含む砂質土
11. 10YR5/2(灰黄褐)砂質土
12. 遺構
13. 10YR5/2(灰黄褐)〜5/1 黄色砂混じりの砂質土
14. 10YR7/3〜7/4 砂質土
15. 10YR5/1 炭化層(砂層)
16. 7.5YR4/3〜3/4 礫多く含む砂質土
17. 地山(黄褐色砂質土)

h−h'
1. 10YR4/2(灰黄褐)粘質土 礫、炭化物含む
2. 2.5Y5/2(暗灰黄) 砂質混じり粘質土
3. 10YR5/2(灰黄褐)粘質土 炭化物、礫含む
4. 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質土
5. 10YR4/3(にぶい黄褐)〜3/3 粘質土と砂質土の互層
6. 10YR4/3(にぶい黄褐)粘質土含む砂質土 礫含む
7. 10YR3/3(暗褐) 砂質土多く含む 炭化物、礫含む
8. 10YR3/3(暗褐) 7と類似
9. 10YR5/2(灰黄褐)〜5/3 礫含む砂質土
10. 10YR5/3(にぶい黄褐)〜4/3 礫含む砂質土 下部は10YR3/1(黒褐)
11. 10YR5/4(にぶい黄褐)〜5/3 粒子の細かい砂質土

i−i'
1. 表土
2. 10YR3/1(黒褐)
3. 7.5YR4/6
4. 遺構
5. 2.5Y3/2
6. 10YR3/1(黒褐) 遺物少量含む
7. 10YR3/2(黒褐)
8. 10YR4/4(褐) 礫、遺物含む
9. 10YR4/3(にぶい黄褐) 礫、遺物、炭化物含む
10. 遺構
11. 10YR4/2(灰黄褐) 礫、遺物、炭化物多量に含む 砂層挟む
12. 10YR3/3(暗褐) 礫、遺物、炭化物多量に含む 砂層挟む
13. 10YR3/3(暗褐) 礫、遺物、炭化物多量に含む 砂層挟む

j−j'
1. 遺構
2. 10YR4/3(にぶい黄褐)粘質土 礫含む
3. 10YR4/3(にぶい黄褐)砂質土
4. 10YR4/4(褐)砂質土
5. 10YR4/4(褐)砂質土 やや暗め
6. 10YR4/3(にぶい黄褐)砂質土含む粘質土 遺物、炭化物、礫多く含む
7. 10YR4/2(灰黄褐)粘質土
8. 10YR3/3暗褐色砂質土 炭化物少量含む
9. 7.5YR4/4(褐) 赤褐色砂質土 礫多く含む
10. 10YR7/6(暗黄褐)砂質土
11. 10YR4/2(灰黄褐)砂質土
12. 10YR7/6(暗黄褐) 地山

k−k'
1. 遺構
2. 10YR3/2(黒褐)砂質土混じりの粘質土 炭化粒含む
3〜7. 遺構
8. 2.5Y3/1砂質土混じりの粘質土 炭化物含む
9. 10YR1.7/1(黒)、10YR3/1(黒褐)粘質土と砂質土の互層 炭化物、礫含む
10. 遺構
11. 10YR4/4(褐)〜4/3(にぶい黄褐)砂質土 礫、遺物多く含む 石塁抜き取り後の埋土
12. 10YR4/3(にぶい黄褐)砂質土 粘質土、礫、遺物多く含む
13. 7.5YR4/4(褐)〜5/4赤褐色砂質土
14. 10YR5/3(にぶい黄褐)〜4/3
15. 10YR7/4〜6/4 地山

l−l'
1〜4. 遺構
5. 10YR4/3(にぶい黄褐)暗茶褐色砂質土 炭化物含む
6. 2.5Y4/2暗褐色砂質土 炭化物、礫含む
7. 2.5Y5/2(暗灰黄)砂質土 炭化物、遺物含む
8. 2.5Y4/1 黒褐色土 炭化物含む
9. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 炭化物含む
10. 10YR4/1(褐灰)暗黄褐色砂質土 礫、遺物、炭化物やや多く含む 下層に炭化層
11. 10YR4/1(褐灰) 礫、炭化物やや多く含む
12. 10YR3/1(黒褐) 粘質土、炭化物含む砂質土
13. 10YR4/1(褐灰) 粘土ブロック混じる砂質土 炭化物含む
14. 10YR5/4(にぶい黄褐)〜4/2砂質土 礫多量に含む 石塁抜き取り痕
15. 10YR4/3(にぶい黄褐)暗黄褐色砂質土 礫多量に含む 炭化層挟む
16. 赤褐色砂質土

m−m'
1. 10YR3/2(黒褐)粘質土 炭化物、礫少量含む
2. 10YR6/4(にぶい黄橙)〜7.5YR5/6砂質土
3. 10YR5/4(にぶい黄褐)砂質土
4. 10YR5/3(にぶい黄褐)砂質土
5. 10YR5/4(にぶい黄褐)〜5/3砂質土
6. 10YR5/2(灰黄褐)〜5/3(にぶい黄褐)炭化物含む砂質土
7. 10YR4/3(にぶい黄褐)〜4/2(灰黄褐)砂質土 礫含む
8. 10YR5/6(黄褐)〜5/4(にぶい黄褐)砂質土 炭化物少量、礫多く含む 炭化層挟む
9. 10YR5/4(にぶい黄褐)砂質土 炭化物少量、礫多く含む 炭化層挟む

0 1 2m

第77図 石塁遺構関係土層実測図 (1/80)

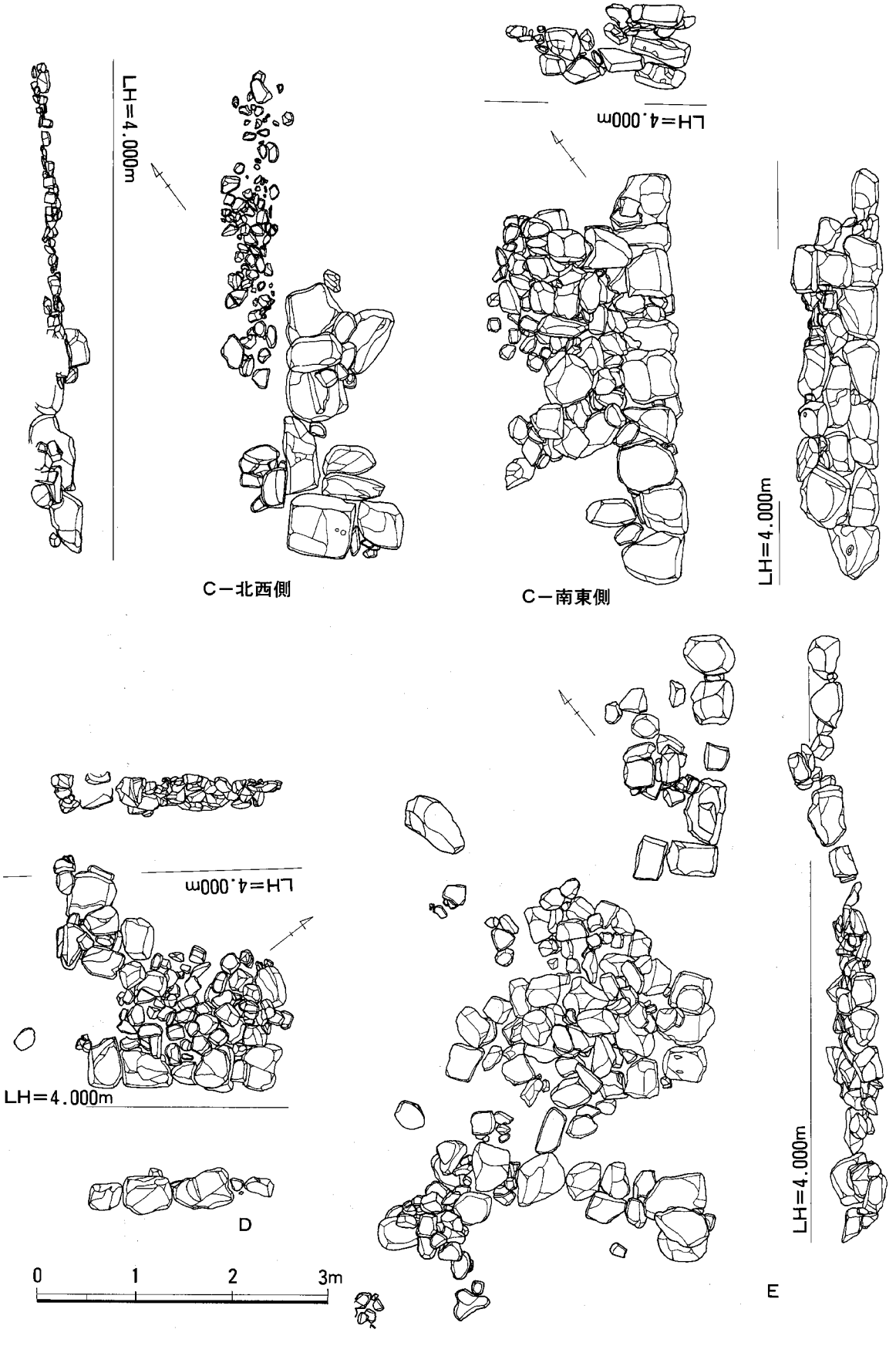
第78図　石塁遺構Ａ区実測図（1/60）

各ブロックの概要

Ａブロック（第78図　図版40）

Ｃ－９、10区に位置する。石塁遺構全体の中でも最も残りの良い部分である。残長8.5ｍ、最大幅3.8ｍ、最高1.3ｍを測る。石塁遺構基底面は、北西側サイドで標高2.95～3.10ｍ、南東側サイドで2.90～3.00ｍで標高はほぼ同じである。石塁遺構の両サイドには70㎝×50㎝以下の大きな石を積み上げ、

第79図　石墓遺構B区実測図（1/60）



第80図　石墨遺構C・D・E区実測図（1/60）

その間には50cm×40cm以下の石を詰め込むという構築方法をとる。北西側サイドの方が、南東側サイドよりも大きな石を用いているようである。また、このブロックで特徴的なのは、北東側サイドで、石を段状に積んでいる点である。これは、壁の石を積み上げ、その横に石を一段並べているもので、この構造は生の松原元寇防塁にみられるものである。

Bブロック（第79図　図版41）

D、E－9区に位置する。北西側サイドの石積が最も良く残っている。現在博多小学校地下展示室で公開されている部分である。残長12.3m、幅3.5m、最高1.05mを測る。基底面は北西側サイドで標高3.35～3.75m、南東側サイドで3.40～3.80mで、基底面の高さは一定ではない。北西側サイドでは80cm×35cm以下の方形の石を3段積み上げている。この部分は積み方に乱れはなく、平坦な壁面を呈している。石の間には小礫を裏込として詰め込む。南東側サイドは、端の石は1段のみ残るが、70cm×30cm以下の石を並べている。本来は数段積み上げていたのであろう。さらに、このブロックの北東よりに、石塁遺構の方向に直行するように80cm×50cm程度の方形の石が区分を呈するように並べられている。

Cブロック（第80図　図版42）

F－9区に位置する。第80図では北西側と南東側を離して掲載している。残長5.2m、幅3.4m、最高1.0mを測る。基底面は北西側サイドで標高3.15～3.25m、南東側サイドで3.00mを測る。両サイドの大きな石のみで、間に充填された小さな石はほとんど抜き取られている。北西側サイドには70cm×60cmの石を、南東側サイドには50cm×40cmの石を積み上げる。南東側サイドは残りが良く3段積まれている。

Dブロック（第80図　図版42）

G－9区に位置する。残りはあまり良くない。残長2.3m、残っている部分の幅2.5m、高さ40cmを測る。基底面は標高2.90～3.10mである。南東側サイドに、60cm×40cm以下の石を並べている。また、このブロックの北西側には小礫が多く堆積していた。

Eブロック（第80図　図版42）

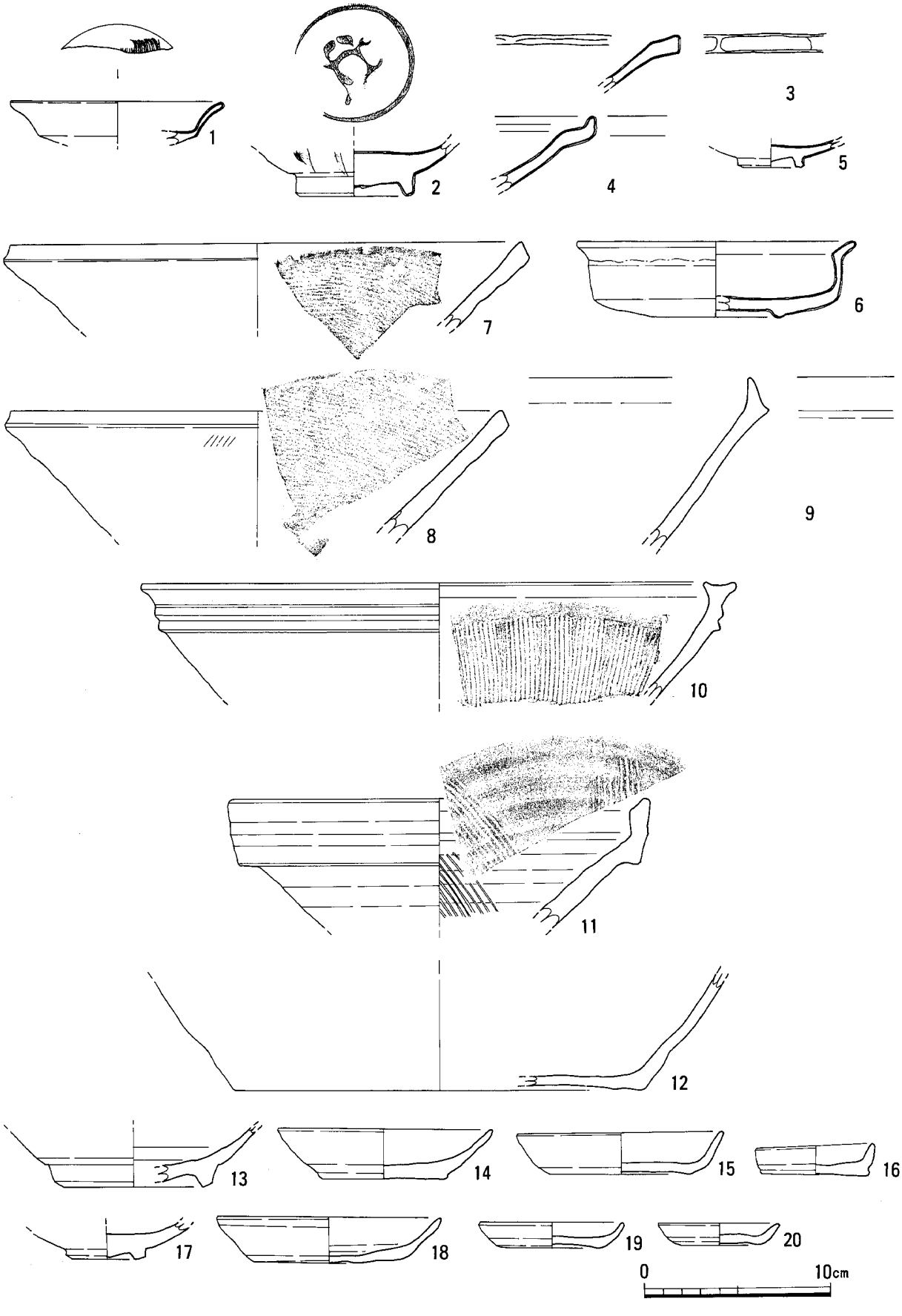
G－9区に位置する。残長6.6m、幅3.5m、高さ50cmを測る。基底面は標高3.20～3.75mである。南東側サイドに30cm×40cmの石を1段並べている。また、このブロックの南西側端は石塁遺構の方向に直行するように60cm×45cm以下の石を並べている。

まとめ

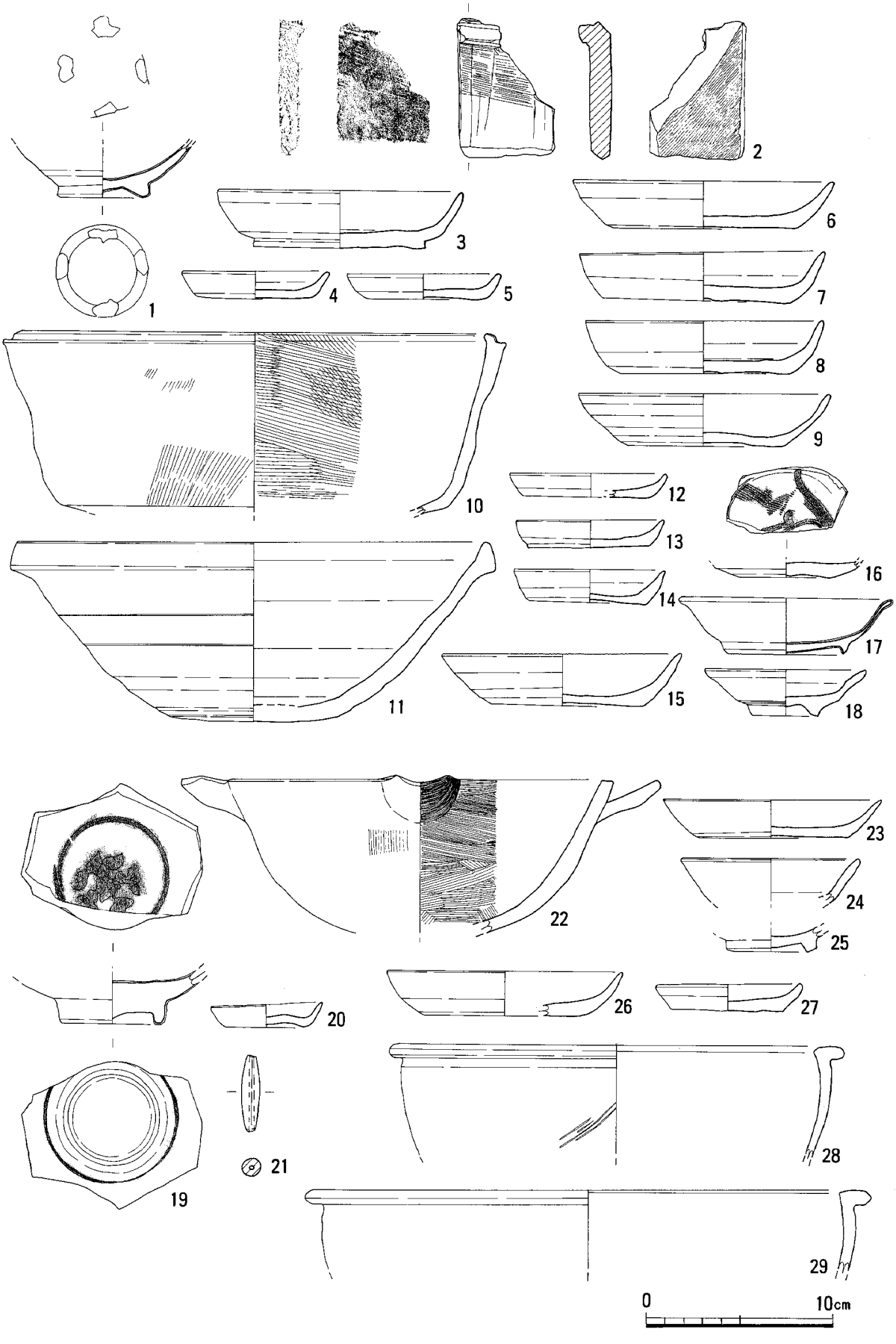
各ブロックの状況をまとめてみると、石塁遺構は標高2.90～3.80mの黄褐色砂層地山面上に、微地形に沿って構築されている。構築方法としては、両サイドに一辺が50cm以上の大ぶりの石を積み上げ、その中をやや小さな石で充填するというもので、特に北西側サイド（海側）の方が南東側サイド（陸側）よりも大きな石を用いている。また、Aブロックのように、北西側サイドの石を段状に積んでいる箇所もあり、場所によって積み方が異なる状況が伺える。さらにBブロックやEブロックでは区分を示すような石の列が見られる。

出土遺物（第81・82図　図版58）

石塁遺構の石の間や、その周囲から遺物が出土している。ただし、これらの遺物は直接石塁遺構の時期を示すものではない。特に石の間から出土した遺物は、石塁遺構を破壊した際に混入した可能性が高い。また、石塁遺構構築後に堆積したと推定される礫混じり赤褐色砂層から出土した遺物も、あ



第81図　石塁遺構関係出土遺物実測図（1/3）



第82図　土層ベルト出土遺物実測図（1/3）

くまでもその下限を示すものであり、また、後世に混入した遺物という可能性もある。さらに、地山にはわずかではあるが12、13世紀の遺物も含まれており、石塁遺構の時期を確定的にする遺物は現時点では判別は困難である。ここでは、参考までに石塁遺構関連遺物として提示したい。

第81図はすべて石塁遺構の間から出土した。1は青磁皿。屈曲した胴部下位は露胎となるが、淡黄褐色胎土にやや黄みがかった透明釉がかかる。見込に櫛描文が残る。2は青磁碗。淡青灰色胎土に淡オリーブ色釉が全面にかかる。外面には片切り彫りの蓮弁文が施され、見込には文様がスタンプされる。3、4は青磁皿。3は口縁端部を外反させ、輪花状に作り出す。口縁部内面には弧状の線刻、口縁部外面には区画状の文様が施文される。灰白色胎土に灰緑色釉がかかる。4は口縁端部をはね上げさせる。淡黄褐色胎土に黄みを帯びた透明釉がかかる。5は白磁皿D群。畳付と高台内部は露胎となり、白色胎土に透明釉がかかる。6は志野の向付。全体に灰白色ないし淡赤褐色の釉がかかり、口縁部外面には釉が垂れかかる。7、8は東播系のこね鉢。内面にはハケメ痕が残る。9は備前のすり鉢Ⅳ期。10は褐釉陶器のすり鉢。スリ目が密に入る。11は備前のすり鉢Ⅳ期か。12は陶器の甕。灰緑褐色～青灰褐色の胎土。13は朝鮮王朝陶器か。灰白色胎土に灰白色釉が全面にかかる。14、15、18は土師器坏。いずれも糸切り離し底部で、18には板状圧痕が残る。順に口径11.5cm、11.0cm、11.9cm、器高2.7cm、2.3cm、2.5cm、底径6.7cm、7.6cm、7.9cm。16、19、20は土師器小皿。いずれも糸切り離し底部で、順に口径6.4cm、7.7cm、6.5cm、器高1.7cm、1.4cm、1.2cm、底径5.8cm、5.4cm、4.5cm。17は白磁皿D群。白黄色胎土に白色釉がかかるが、胴部下位から高台内部にかけては露胎となる。

第82図はすべて土層ベルトから出土したもの。1～3はベルトf－f′出土。1は1b層出土。朝鮮王朝陶器皿。灰黄色胎土に灰褐色釉が全面にかかる。見込と畳付に4カ所目跡が残る。2は2層出土。滑石製の不明製品。残長7.4cm、幅5.0cm、厚さ1.2cmで、上部を突帯状に削り出す。鍋か。3は土師器坏。糸切り離し底部。口径13.2cm、器高3.1cm、底径9.2cm。

4～17はベルトg－g′出土。4、5は2層出土。土師器小皿で、糸切り離し底部。口径7.9、8.0cm、器高1.5、1.4cm、底径6.3、6.0cm。6～9は3層出土。土師器坏。すべて糸切り離し底部で、6、7、9は板状圧痕が残る。口径は12.7～13.9cm、器高2.5～2.8cm、底径8.2～9.6cm。12～14は3層出土。土師器小皿で糸切り離し底部。口径7.9～8.4cm、器高1.3～1.8cm、底径6.2～6.5cm。15は4層出土。土師器坏で糸切り離し底部。口径12.7cm、器高2.7cm、底径8.0cm。16は青磁皿。同安窯系か。外底付近は露胎となり、見込に櫛描文が施される。灰褐色胎土にうすい青緑色釉がかかる。18はベルトh－h′2層出土。2層出土朝鮮王朝白磁皿。灰褐色胎土に灰褐色釉がかかる。

19～21はベルトj－j′出土。19は1層出土。青磁碗で、高台内部は露胎となる。見込に花文が押され、灰褐色胎土に淡オリーブ色釉がかかる。20は2層出土。土師器小皿。口径5.9cm、器高1.2cm、底径4.4cm。21は土錘。22～25はベルトk－k′出土。22は1層出土。土師器の鍋。外面にススが付着する。23は1層出土。土師器坏。糸切り離し底部で、口径11.6cm、器高2.1cm、底径8.0cm。24は3層出土。腰折れの白磁坏。白色胎土に透明釉がかかる。25は4層出土。白磁。26～29はベルトl－l′出土。26は2層出土。土師器坏。糸切り離し底部で口径12.6cm、器高2.4cm、底径8.5cm。17は土師器小皿。糸切り離し底部で、口径7.8cm、器高1.5cm、底径6.0cm。28、29は土師器の鍋。いずれも外面にはススが付着する。

8．小結

以上、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅱ′区、Ⅲ′区について概要を述べてきた。ここでは紙面の都合ですべての遺構・遺物について考察を加えることはできない。そこでいくつかの項目を設け、若干の私見を交えて総括としたい。

（1）石塁遺構

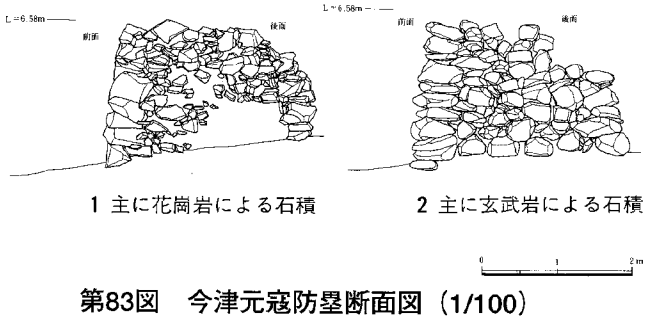
1274年の蒙古襲来の折り、鎌倉幕府は再度の来襲に備えて九州各国に命じ、博多湾岸に石築地を築かせた。この石築地は大正２年、中山平次郎によって「元寇防塁」と命名された。西は今津から東は香椎まで約20㎞にわたって築かれている。このうち今津にある元寇防塁は、底面幅が３～４ｍで、海側と陸側に大きな石を積み上げ、内部にやや小振りの石を充填するという構築方法で、場所により分担に応じた石材の違いや段差が見られる。今回検出された石塁遺構は、①規模と構造が今津元寇防塁と非常に類似しており、②大きめの石を並べ区分を示す箇所が見られること、③砂丘に沿って構築されていること、④石塁前面から13～14世紀の遺物が出土していること、以上の点から、元寇防塁である可能性が非常に高いといえる。さらに今回の石塁遺構で特徴的な点は、他の元寇防塁に比較して使用されている石がかなり大きいことであり、当時の博多の町を防護するためにより強固な防塁を築いたとも考えられる。

なお、古文書によると、博多部の防塁は筑前国と筑後国が分担して構築したとなっている。防塁の構築は国ごとに区域が定められ、さらに国内の領主に各々の所領に応じて分担が割り当てられていた。また、1558（永禄元）年以前の作とされる「聖福寺古図」には、聖福寺北側の浜辺で作業をしている風景が描かれており、この石垣が元寇防塁であった可能性が高い。さらに、博多に関する石築地の史料として、1303（乾元２）年「筑前守護少弐盛経・中村続をして博多前浜石築地加佐および修理のことを命ず」（広瀬文書）、1316（正和５）年「筑前守護少弐貞経、榊定禅地頭をして、筑前国役所たる博多前浜石築地の修理と加佐の築営を命ず」（森本文書）があり、博多部の石築地が修理されていた記述が残っている。このように、今回検出された石塁遺構が、博多における元寇防塁に比定される可能性は高いといえるであろう。

なお、石塁遺構は将来の調査に期して検出された部分すべてを保存処理し、一部（Ａ区）を博多小学校の地下展示室として公開している。その詳細については附篇(河野忠臣「博多小学校敷地内発見の石塁遺構を構成する石質調査報告」、正栄建装株式会社「石塁遺構保存処置施工記録」）を参照されたい。

参考文献

1．柳田純孝・西園禮三『元寇と博多－写真で読む蒙古襲来－』2001、西日本新聞社
2．福岡市教育委員会『生の松原元寇防塁発掘調査概報』1968
3．福岡市教育委員会『今津元寇防塁発掘調査概報』1969
4．福岡市教育委員会『西新元寇防塁発掘調査概報』1970
5．川添昭二『注解　元寇防塁編年史料』1971、福岡市教育委員会



1 主に花崗岩による石積　　2 主に玄武岩による石積

第83図　今津元寇防塁断面図（1/100）

（2）キリシタン遺物

今回の調査で、Ⅳ区からメダイの製品が、Ⅱ区からメダイ・十字架の鋳型が出土した。これらの内容と意義について述べてみたい。

メダイとは、スペイン語でMedalla、メダル、メダリオン、円形浮き彫りの意味である。硬貨の形

をした金属製の平たい円盤で、キリスト、聖人、礼拝堂、宗教上の出来事を表裏に刻んである。

Ⅳ区で出土したメダイにはサルバトール・ムンディ（世の救世主）イエス＝キリストと、聖母マリアの像がレリーフしてあり、ヨーロッパ製と見られる。一方鋳型のメダイ型に刻印されているモチーフは、イバラの冠をかぶったイエス＝キリストの顔を正面から描いたものである。このモチーフはVERONICA（ヴェロニカ・ポルトガル語で「真の像」の意）と呼ばれ、受難のイエス＝キリスト像を表している。また、十字架には線刻で文様が施されており、抽象化されたイエス＝キリストの磔刑図である可能性も考えられる。

メダイ、十字架の製品は、伝世品を別としても、原城跡（長崎県南有馬町）や長崎市内の遺跡、大分市大友府内町遺跡（メダイ）から出土している。特に長崎市内では、1991年以降コンフラリア・デ・ミゼリコルディア（福祉事業団）跡や教会をはじめとするキリシタン遺跡の調査が増加し、キリシタン関係の遺物（メダイ、十字架、ロザリオ、花十字文瓦）が多く出土している（第２表）。しかしながら、メダイもしくは十字架の鋳型は今回が初めての出土例となる。

Ⅳ区出土のメダイに用いられているモチーフは他にもいくつか類例が見られる。一方鋳型に用いられているメダイのモチーフ（VERONICA）は類例が少ない。類似した構図を持つモチーフでECCE HOMO（エッケ・ホモ）があるが、このモチーフが描かれた銅牌（大型のメダイ）は踏み絵などに用いられている（長崎奉行所旧蔵品）。また、大友府内町遺跡出土のメダイも、鋳型のメダイ型と同様VERONICAのモチーフと構図が類似している。

1549年、フランシスコ・ザビエルによりキリスト教が伝えられ、キリシタン大名となった大友宗麟が博多に教会を建てた後、戦乱による破壊、再建が繰り返された。豊臣秀吉による伴天連追放令で一旦キリスト教信仰が下火になるも後の江戸幕府によるキリシタン禁令に至るまで博多のキリシタン隆勢期を迎えたといわれる。本調査で出土したメダイ・鋳型から当時の博多の町がキリスト教布教において重要な地点であったこと、キリスト教信仰が隆盛を極め、メダイや十字架を複製するほど信徒が増加していたこと、さらに、近辺に教会が存在していたことが推定される。

註・参考文献

1．メダイについては、日本二十六聖人記念館館長の結城了悟先生にご教示いただいた。
2．結城了悟編『日本二十六聖人記念館カタログ』第四版1996、日本二十六聖人記念館
3．東京国立博物館『東京国立博物館図版目録－キリシタン関係遺品篇－』2001
4．福岡聖書展実行委員会『1999　福岡聖書展』パンフレット、1999
5．下川達彌「キリシタンの考古学」『季刊考古学』59　1997、雄山閣
6．賀川光夫「キリスト教」『季刊考古学』2　1983、雄山閣
7．大分市大友府内町遺跡出土メダイについては、2001年８月報道の西日本、朝日、毎日の各新聞記事によった。
8．長崎県内出土遺物については、第２表の引用文献を参照されたい。
9．長崎県内の状況については、扇浦正義氏(長崎市教育委員会)のご教示による。

第２表　メダイ・十字架出土地名一覧表

番号	遺　跡　名	所　在　地	出　土　遺　跡	時　期
1	原城跡	長崎県南有馬町	メダイ・十字架・ロザリオの珠	17世紀前葉
2	万才町遺跡(ミゼリコルディア跡)	長崎県長崎市万才町	メダイ	16世紀末～17世紀初頭
3	万才町遺跡(高島宅跡)	長崎県長崎市万才町	十字架・メダイ	
4	万才町遺跡(県庁新別館)	長崎県長崎市万才町	メダイ	
5	万才町遺跡(朝日生命ビル地)	長崎県長崎市万才町	メダイ	
6	築町遺跡(築町別館跡)	長崎県長崎市築町	メダイ・聖骨箱	
7	興善町遺跡(八尾宅跡)	長崎県長崎市興善町	十字架・ロザリオの珠	
8	大友府内町遺跡	大分県大分市元町	メダイ	16世紀後半
9	博多遺跡(第111次調査地点)	福岡県福岡市奈良屋町	メダイ・メダイと十字架の鋳型	16世紀後半～17世紀初頭

註
1．表は発掘調査出土例のみで、伝世品等は省略した。
2．大友府内町遺跡出土メダイに関しては、2001年８月報道の各新聞記事による。

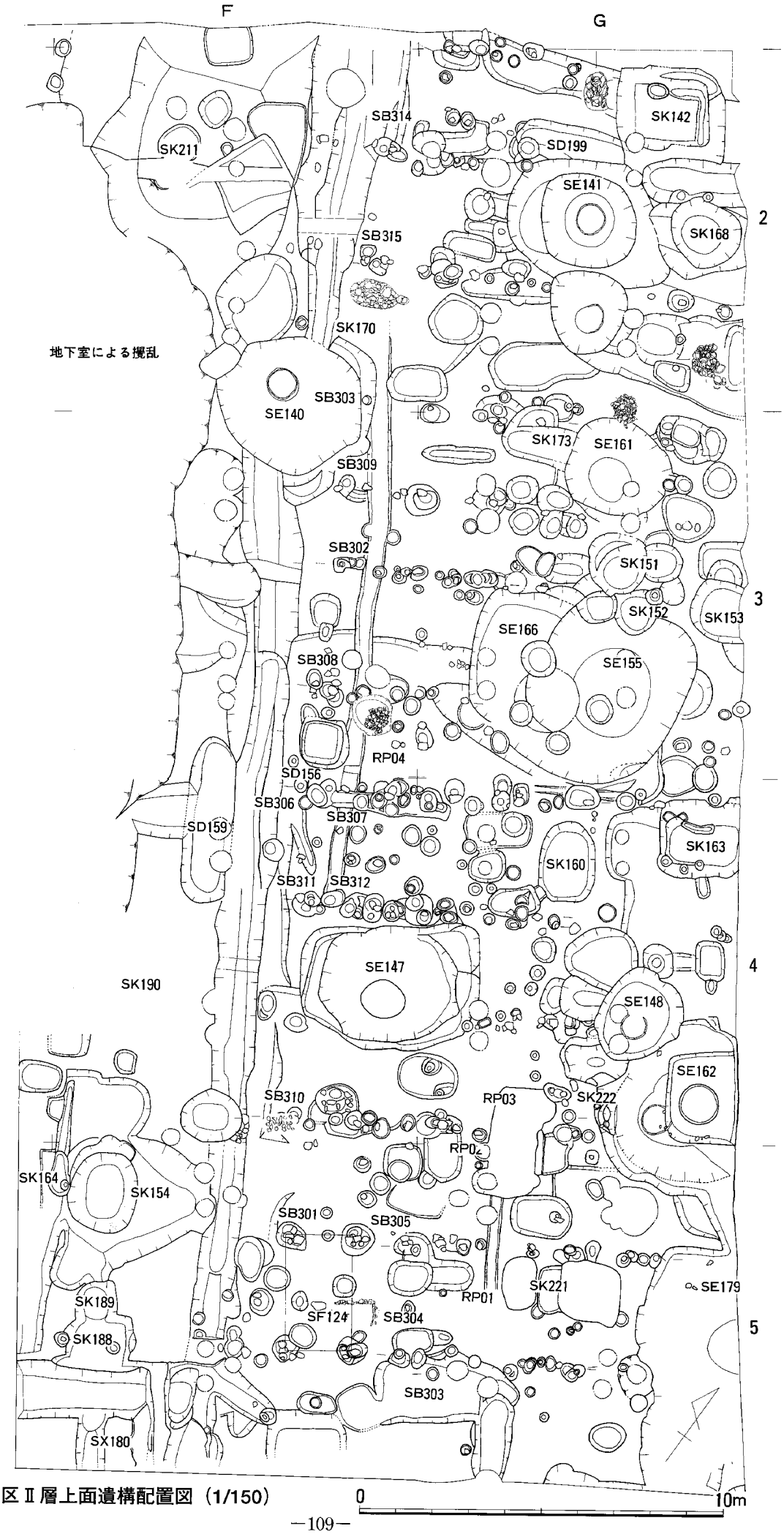
引用文献
下川達彌「キリシタンの考古学」『季刊考古学』59　1997　雄山閣
永松実『長崎家庭・簡易裁判所の建替工事に伴う発掘調査報告書』1992
永松実『朝日新聞社長崎支局敷地発掘調査報告書』1992
長崎県南有馬町教育委員会「原城跡」『南有馬町文化財調査報告書』第２集　1996
長崎市埋蔵文化財調査協議会『万才町遺跡－朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』1996
長崎市教育委員会『築町遺跡－築町別館地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』1997

整理番号	区	出土遺構・層位	古銭名	初鋳年	書体	銭径(mm)	備　考
1	Ⅱ区	S-3	明道元寶	北宋1032	篆書	25	
2	Ⅱ区	S-5	太平通寶	北宋976		24	
3	Ⅱ区	S-10	嘉祐通寶	北宋1056	篆書	24	
4	Ⅱ区	S-12	開元通寶？	唐618～907		破片	
5	Ⅱ区	S-12	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
6	Ⅱ区	S-12	宣德通寶	明1433		25	
7	Ⅱ区	S-18	寛永通寶			24	
8	Ⅱ区	S-29	開元通寶	唐618～907		23.5	
9	Ⅱ区	S-51	元豊通寶	北宋1078	真書	23	
10	Ⅱ区	S-57	至道元寶	北宋995	真書	25	
11	Ⅱ区	S-96	永楽通寶	明1403		24	
12	Ⅱ区	S-100	天聖元寶	北宋1023	真書	24	
13	Ⅱ区	S-100	淳熙元寶	南宋1174	真書	24	
14	Ⅱ区	S-108	元祐通寶	北宋1086	真書	24	
15	Ⅱ区	S-108	永楽通寶	明1403		24	
16	Ⅱ区	S-112	政和通寶	北宋1111	篆書	25	
17	Ⅱ区	S-113	聖宋元寶	北宋1101		24	
18	Ⅱ区	S-114	開元通寶	唐618～907		24	
19	Ⅱ区	S-124	政和通寶	北宋1111	真書	25	
20	Ⅱ区	S-126	永楽通寶	明1403		25	
21	Ⅱ区	S-194	永楽通寶	明1403		24	
22	Ⅱ区	S-204	寛永通寶			23	
23	Ⅱ区	S-220	開元通寶	唐618～907		24	
24	Ⅱ区	S-220	開元通寶	唐618～907		24	
25	Ⅱ区	S-290	聖宋元寶	北宋1101	真書	24	
26	Ⅱ区	S-725	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
27	Ⅱ区	S-782	紹聖元寶	北宋1094	真書	24	
28	Ⅱ区	S-784	天禧通寶	北宋1017		25	破片
29	Ⅱ区	S-801	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
30	Ⅱ区	S-809	開元通寶	唐618～907		23.5	
31	Ⅱ区	S-814	大禧通寶	北宋1017		25	
32	Ⅱ区	S-850	熙寧元寶	北宋1068	真書	25	
33	Ⅱ区	S-876	祥府元寶	北宋1004		24	
34	Ⅱ区	S-886	元祐通寶	北宋1086	篆書	25	
35	Ⅱ区	S-909	景德元寶	北宋1004		26	
36	Ⅱ区	S-911	永楽通寶	明1403		25	
37	Ⅱ区	S-911	天聖元寶	北宋1023	篆書	24	
38	Ⅱ区	S-914	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
39	Ⅱ区	S-958	聖宋元寶	北宋1101	真書	25	
40	Ⅱ区	S-969	聖宋元寶	北宋1101	真書	25	
41	Ⅱ区	S-986	天禧通寶	北宋1017		23	
42	Ⅱ区	S-986	元豊通寶	北宋1078	真書	24	
43	Ⅱ区	S-988	洪武通寶	明1368	真書	22	
44	Ⅱ区	S-988	永楽通寶	明1403		25	
45	Ⅱ区	S-1008	熙寧元寶	北宋1068	真書	24	
46	Ⅱ区	S-1010	皇宋通寶	北宋1039	真書	25	
47	Ⅱ区	S-1100	元祐通寶	北宋1086	真書?	23	
48	Ⅱ区	SP-110	洪武通寶	明1368		22	
49	Ⅱ区	SP-218	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
50	Ⅱ区	K-1	祥符元寶	北宋1008		25	
51	Ⅱ区	K-1	紹聖元寶	北宋1094	真書	24	
52	Ⅱ区	K-7	皇宋通寶	北宋1039	真書	25	
53	Ⅱ区	K-15	政和通寶	北宋1111	真書	25	
54	Ⅱ区	K-18	洪武通寶	明1368		23	
55	Ⅱ区	K-41	寛永通寶			23	
56	Ⅱ区	K-41	寛永通寶			23	
57	Ⅱ区	K-126	寛永通寶			24	
58	Ⅱ区	2面F-10	開元通寶	唐618～907		25	
59	Ⅱ区	2面F-10	開元通寶	唐618～907		23	
60	Ⅱ区	2面F-10	至道元寶	北宋995	行書	24	
61	Ⅱ区	2面F-10	咸平元寶	北宋998		25	
62	Ⅱ区	2面F-10	景德元寶	北宋1004		25	
63	Ⅱ区	2面F-10	祥符元寶	北宋1008		25	
64	Ⅱ区	2面F-10	皇宋通寶	北宋1039	篆書	25	
65	Ⅱ区	2面F-10	嘉祐元寶	北宋1056	真書	23	
66	Ⅱ区	2面F-10	元豊通寶	北宋1078	篆書	24	
67	Ⅱ区	2面F-10	元祐通寶	北宋1086	真書	25	
68	Ⅱ区	2面F-10	乾元重濱	唐618～907		24	
69	Ⅱ区	2面F-10	福平元宝		篆書	24	
70	Ⅱ区	2面F-10	福平元宝		篆書	24	
71	Ⅱ区	2面F-10	福平元宝		篆書	23	
72	Ⅱ区	2面F-10	嘉祐元寶	北宋1056	篆書	24	
73	Ⅱ区	2面F-10	嘉祐元寶	北宋1056	篆書	23	
74	Ⅱ区	2面F-10	天聖元寶	北宋1023	篆書	25	
75	Ⅱ区	2面F-10	熙寧元寶	北宋1068	篆書	24	
76	Ⅱ区	2面F-10	熙寧元寶	北宋1068	篆書	24	
77	Ⅱ区	2面F-10	嘉祐元寶	北宋1056	篆書	24	
78	Ⅱ区	2面G-7	祥符元寶	北宋1008		24	
79	Ⅱ区	2面G-7	永楽通寶	明1403		25	
80	Ⅱ区	2面G-8	祥符通寶	北宋1008		23	
81	Ⅱ区	2面G-8	景祐元寶	北宋1034	真書	25	
82	Ⅱ区	2面G-8	元符通寶	北宋1098	真書	24	
83	Ⅱ区	2面G-8	永楽通寶	明1403		25	
84	Ⅱ区	2面H-8	永楽通寶	明1403		25	
85	Ⅱ区	2面H-9	治平元寶	北宋1064	真書	24	
86	Ⅱ区	2面H-9	元豊通寶	北宋1078	真書	25	
87	Ⅱ区	2面H-9	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
88	Ⅱ区	2面H-9	大観通寶	北宋1107		25	
89	Ⅱ区	2面H-9	宣和通寶	北宋1119	真書	24	
90	Ⅱ区	2面H-10	天聖元寶	北宋1023	真書	25	
91	Ⅱ区	2面I-7	皇宋通寶	北宋1039	篆書	24	
92	Ⅱ区	包含層	天禧通寶	北宋1017		24	
93	Ⅱ区	包含層F-9	開元通寶	唐618～907		24	
94	Ⅱ区	包含層F-9	天禧通寶	北宋1017		23	
95	Ⅱ区	包含層F-9	景祐元寶	北宋1034	真書	25	
96	Ⅱ区	包含層F-9	元豊通寶	北宋1078	篆書	24	
97	Ⅱ区	包含層F-9	元豊通寶	北宋1078	真書	23	
98	Ⅱ区	包含層F-9	洪武通寶	明1368		23	
99	Ⅱ区	包含層F-9	永楽通寶	明1403		25	
100	Ⅱ区	包含層F-9	永楽通寶	明1403		25	
101	Ⅱ区	包含層F-9	永楽通寶	明1403			破片
102	Ⅱ区	包含層F-9	熙寧元寶	北宋1068	篆書	24	
103	Ⅱ区	包含層F-10	開元通寶	唐618～907		23	
104	Ⅱ区	包含層F-10	開元通寶	唐618～907		25	
105	Ⅱ区	包含層F-10	祥符元寶	北宋1008		25	
106	Ⅱ区	包含層F-10	天聖元寶	北宋1023	真書	25	
107	Ⅱ区	包含層F-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	25	
108	Ⅱ区	包含層F-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	24	
109	Ⅱ区	包含層F-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	24	
110	Ⅱ区	包含層F-10	熙寧元寶	北宋1068	真書	24	
111	Ⅱ区	包含層F-10	大観通寶	北宋1107		25	
112	Ⅱ区	包含層F-10	洪武通寶	明1368		24	
113	Ⅱ区	包含層F-10	永楽通寶	明1403		25	
114	Ⅱ区	包含層F-10	永楽通寶	明1403		25	
115	Ⅱ区	包含層F-10	永楽通寶	明1403		25	
116	Ⅱ区	包含層F-10	熙寧元寶	北宋1068	篆書	24	
117	Ⅱ区	包含層G-9	皇宋通寶	北宋1039	篆書	25	
118	Ⅱ区	包含層G-9	元祐通寶	北宋1086	真書	24	
119	Ⅱ区	包含層G-9	大観通寶	北宋1107		25	
120	Ⅱ区	包含層G-9	政和通寶	北宋1111	真書	24	
121	Ⅱ区	包含層G-9	洪武通寶	明1368		21	
122	Ⅱ区	包含層G-9	洪武通寶	明1368		23	

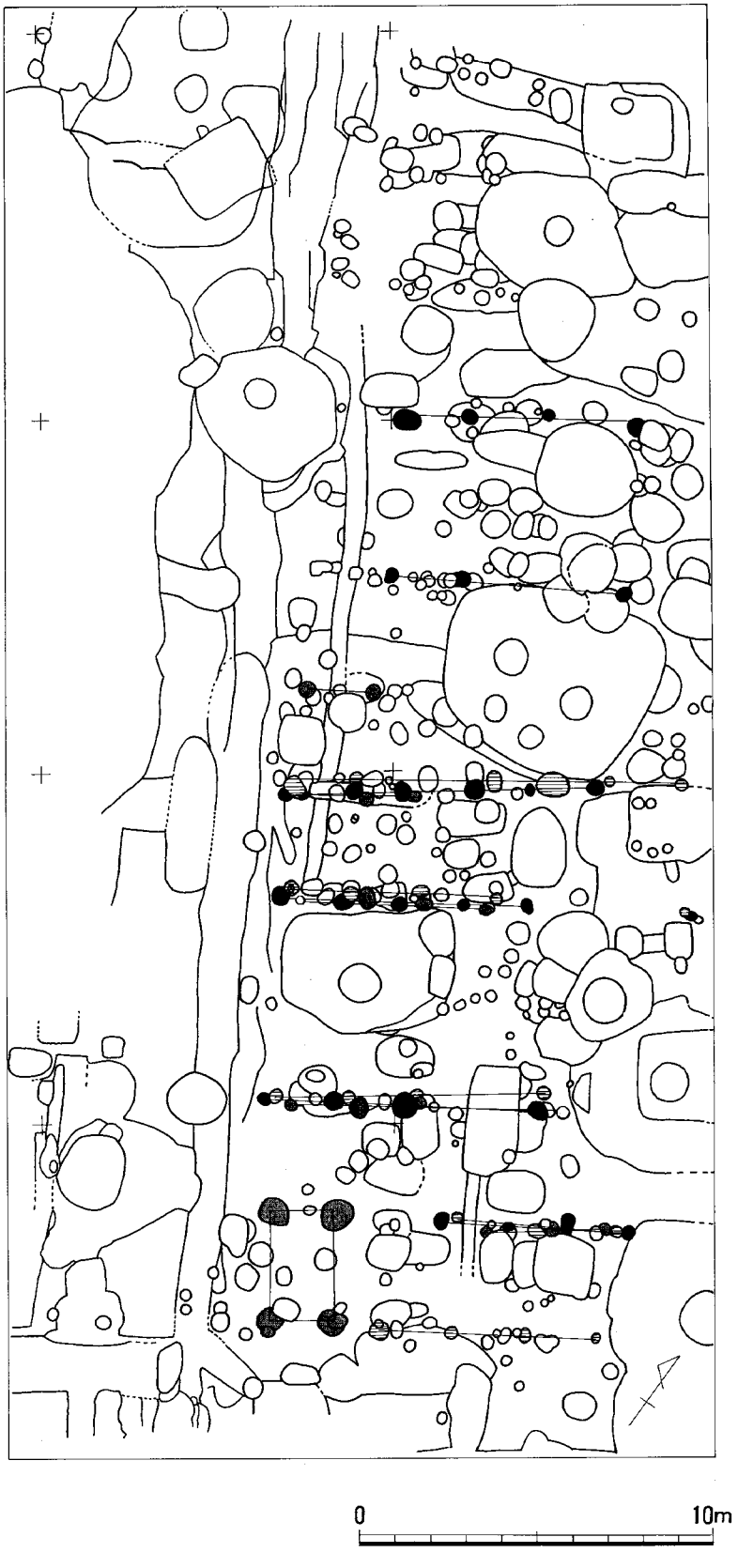
第３表　出土古銭一覧表（１）

整理番号	区	出土遺構・層位	古銭名	初鋳年	書体	銭径(mm)	備　考
123	Ⅱ区	包含層G-10	咸平元寶	北宋998		24	
124	Ⅱ区	包含層G-10	咸平元寶	北宋998		25	
125	Ⅱ区	包含層G-10	祥符元寶	北宋1008		破片	
126	Ⅱ区	包含層G-10	天禧通寶	北宋1017		25	
127	Ⅱ区	包含層G-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	25	
128	Ⅱ区	包含層G-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	23	
129	Ⅱ区	包含層G-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	24	
130	Ⅱ区	包含層G-10	皇宋通寶	北宋1039	真書	24	
131	Ⅱ区	包含層G-10	熙寧元寶	北宋1068	真書	23	
132	Ⅱ区	包含層G-10	元豊通寶	北宋1078	篆書	25	
133	Ⅱ区	包含層G-10	元豊通寶	北宋1078	篆書	24	
134	Ⅱ区	包含層G-10	元豊通寶	北宋1078	篆書	25	
135	Ⅱ区	包含層G-10	元豊通寶	北宋1078	篆書	24	
136	Ⅱ区	包含層G-10	元祐通寶	北宋1086	真書	25	
137	Ⅱ区	包含層G-10	紹聖元寶	北宋1094	真書	24	
138	Ⅱ区	包含層G-10	景定元寶	南宋1260	真書	24	
139	Ⅱ区	包含層G-10	嘉定通寶	南宋1208	真書	24	
140	Ⅱ区	包含層G-10	洪武通寶	明1368		22	
141	Ⅱ区	包含層G-10	洪武通寶	明1368		21	
142	Ⅱ区	包含層G-10	永楽通寶	明1403		25	
143	Ⅱ区	包含層G-10	永楽通寶	明1403		25	
144	Ⅱ区	包含層G-10	永楽通寶	明1403		25	
145	Ⅱ区	包含層G-10	永楽通寶	明1403		25	
146	Ⅱ区	包含層G-10	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
147	Ⅱ区	包含層G-10	福平元宝	北宋1086	篆書	24	
148	Ⅱ区	包含層H-9	咸平元寶	北宋998		25	
149	Ⅱ区	包含層H-9	景德元寶	北宋1004		24	
150	Ⅱ区	包含層H-9	天禧通寶	北宋1017		25	
151	Ⅱ区	包含層H-9	熙寧元寶	北宋1068	真書	24	
152	Ⅱ区	包含層H-9	大観通寶	北宋1107		23	
153	Ⅱ区	包含層H-9	政和通寶	北宋1111	篆書	25	
154	Ⅱ区	F-9	咸平元寶	北宋998		25	
155	Ⅱ区	F-9	紹聖元寶	北宋1094	真書	25	
156	Ⅱ区	F-9	紹聖元寶	北宋1094	真書	24	
157	Ⅱ区	F-9	洪武通寶	明1368		21	
158	Ⅱ区	F-10	天聖元寶	北宋1023	真書	25	
159	Ⅱ区	F-10	皇宋通寶	北宋25	?	25	
160	Ⅱ区	F-10	元豊通寶	北宋1078	真書	25	
161	Ⅱ区	G-8	景德元寶？	北宋1004		25	
162	Ⅱ区	G-8	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
163	Ⅱ区	G-9	開元通寶	唐618～907		25	
164	Ⅱ区	G-9	嘉祐元寶	北宋1056	真書	23	
165	Ⅱ区	G-9	元豊通寶	北宋1078	真書	24	
166	Ⅱ区	H-8	開元通寶	唐618～907		24	
167	Ⅱ区	H-9	洪武通寶	明1368		23	
168	Ⅱ区	ベルトB	開元通寶	唐618～907		25	
169	Ⅱ区	ベルト①	元祐通寶	北宋1086	真書	24	
170	Ⅱ区	ベルトB－3層	皇宋通寶	北宋1039	篆書	25	
171	Ⅱ区	ベルトB－3層	景定元寶	南宋1260	真書	24	
172	Ⅱ区	ベルトB－3層	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
173	Ⅱ区	ベルトB－4層	開元通寶？	唐618～907		24	
174	Ⅱ区	ラベルナシ	皇宋通寶	北宋1039	篆書	24	
175	Ⅱ区	ラベルナシ	紹聖元寶	北宋1094	真書	24	
176	Ⅱ区	ラベルナシ	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
177	Ⅱ区	ラベルナシ	政和通寶	北宋1111	真書	24	
178	Ⅱ区	ラベルナシ	洪武通寶	明1368		23	
179	Ⅱ区	ラベルナシ	洪武通寶	明1368		22	
180	Ⅱ区	ラベルナシ	永楽通寶	明1403			破片
181	Ⅱ区	壁	洪武通寶	明1368		22	
182	Ⅱ区	SF-28	淳祐元寶	南宋1241		24	
183	Ⅱ区	清掃中	寛永通寶			24	
184	Ⅱ区	清掃中	寛永通寶			23	
185	Ⅲ区	S-16	永楽通寶	明1403		25	
186	Ⅲ区	S-27	永楽通寶	明1403		25	
187	Ⅲ区	S-29	洪武通寶	明1368		23	
188	Ⅲ区	S-29	元祐通寶	北宋1086	篆書	24	
189	Ⅲ区	S-29	寛永通寶			24	
190	Ⅲ区	S-29	寛永通寶			24	
191	Ⅲ区	S-67	永楽痛寶	明1403		25	
192	Ⅲ区	S-79	元豊通寶	北宋1078	篆書	24	
193	Ⅲ区	S-80	元祐通寶	北宋1086	真書	24	
194	Ⅲ区	S-149	熙寧元寶	北宋1068	真書	25	
195	Ⅲ区	K-1	祥符通寶	北宋1008		23	破片
196	Ⅲ区	K-1	洪武通寶	明1368		23	
197	Ⅲ区	1面D-10	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
198	Ⅲ区	1面D-10	洪武通寶	明1368		22	
199	Ⅲ区	1面D-10	永楽通寶	明1403		25	
200	Ⅲ区	1面D-10	朝鮮通寶	朝鮮1423		24	
201	Ⅲ区	1面D-10	天聖元寶	北宋1023	篆書	25	
202	Ⅲ区	1面E-10	宣德通寶	明1433		25	
203	Ⅲ区	E-10	皇宋元寶	南宋1253	真書	24	
204	Ⅲ区	A区カベ	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
205	Ⅲ区	トレンチ	宣和通寶	北宋1119	真書	24	
206	Ⅱ･Ⅲ区	表採・不明等	開元通寶？	唐618～907		破片	
207	Ⅱ′区	S-11	元符通寶	北宋1098	真書	24	
208	Ⅱ′区	S-33	永楽通寶	明1403		23	
209	Ⅱ′区	S-87	天聖元寶	北宋1023	篆書	25	
210	Ⅱ′区	SP-07	咸平元寶	北宋998		25	
211	Ⅱ′区	SP-88	元豊通寶	北宋1078	篆書	25	
212	Ⅱ′区	SP-92	洪武通寶	明1368		24	
213	Ⅱ′区	RP-44	咸平元寶	北宋998		25	
214	Ⅱ′区	B区2層	周通元寶	南唐955		25	後周？
215	Ⅱ′区	B区2層	周通元寶	南唐955		25	
216	Ⅱ′区	C区-1上層	周通元寶	南唐955		25	
217	Ⅱ′区	C-1 2層	朝鮮通寶	朝鮮1423		23	
218	Ⅱ′区	D第1層	天禧通寶	北宋1017		24	
219	Ⅱ′区	E区	開元通寶	唐618～907		25	
220	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	開元通寶	唐618～907		25	
221	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	開元通寶	唐618～907		23	
222	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	祥符通寶	北宋1008		23	
223	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	皇宋通寶	北宋1039	篆書	24	
224	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	皇宋通寶	北宋1039	真書	24	
225	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	嘉祐元寶	北宋1056	真書	23	
226	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	元豊通寶	北宋1078	篆書	25	
227	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	元祐通寶	北宋1086	真書	23	
228	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	大観通寶	北宋1107		25	
229	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	政和通寶	北宋1111	篆書	24	
230	Ⅱ′区	E-2区レキ混褐色土上層	永楽通寶	明1403		25	
231	Ⅱ′区	ベルトB1層	洪武通寶	明1368		24	
232	Ⅱ′区	ベルトD3層	皇宋通寶	北宋1039	篆書	24	
233	Ⅱ′区	ベルトD3層	永楽通寶	明1403		25	
234	Ⅱ′区	F-9	元豊通寶	北宋1078	真書	25	
235	Ⅲ′区	SP-11	紹聖元寶	北宋1094	篆書	24	
236	Ⅲ′区	C-10 3層レキ混赤褐色砂	元豊通寶	北宋1086	真書	24	
237		ラベルナシ	開元通寶？	唐618～907		24	
238		ラベルナシ	元祐通寶	北宋1086	真書	24	
239		ラベルナシ	永楽通寶	明1403		25	
240		井戸	嘉祐元寶	北宋1056	真書	25	
241		K-13	永楽通寶	明1403		24	
242		清掃中	宣德通寶	明1433		25	

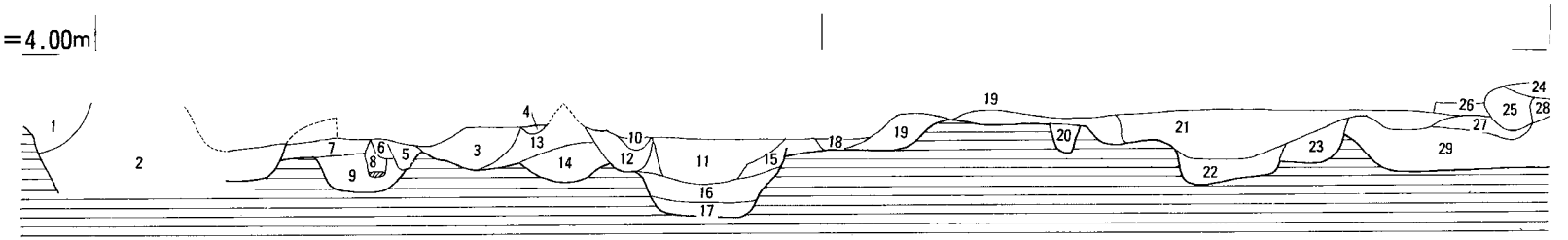
第４表　出土古銭一覧表（２）



第84図　Ⅳ区Ⅱ層上面遺構配置図（1/150）

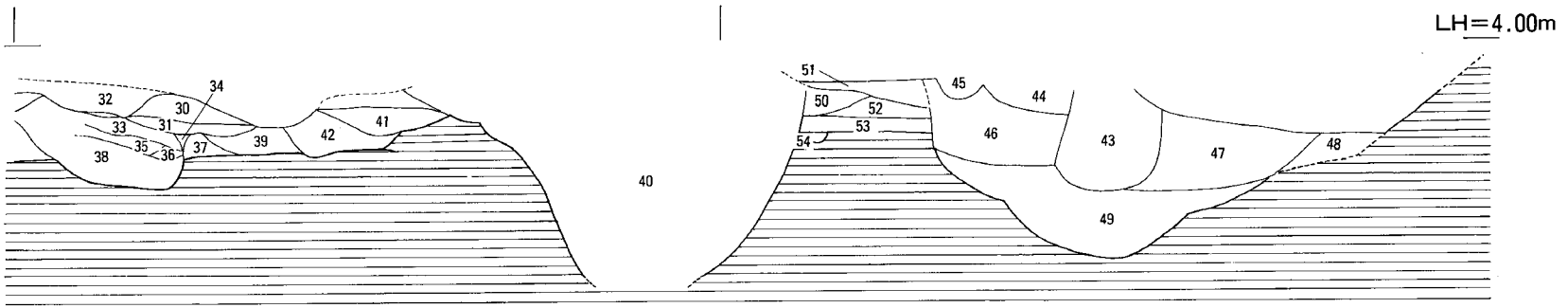


第85図　Ⅳ区Ⅱ層下面遺構配置図（1/200）



Ⅳ区北東壁面土層断面

1．褐灰色砂質土(5YR5/1)
2．黄オリーブ色砂質土(5Y5/2)
3．褐灰色砂質土(10YR5/1)
4．にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
5．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
6．にぶい褐色土(7.5YR5/4)
7．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
8．褐灰色砂質土(10YR5/1)
9．明黄褐色砂(10YR7/6)
10．明灰黄色土(2.5YR5/2)炭化物・焼土塊を含む
11．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)炭化物・焼土塊を含む
12．灰黄色砂質土(2.5YR6/2)
13．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)炭化物を含む
14．明黄褐色砂(10YR7/6)
15．灰黄褐色砂質土(10YR6/2)
16．灰黄褐色砂(10YR6/2)・褐灰色砂質土(10YR5/1)互層
17．にぶい黄橙色砂(10YR7/4)褐灰色砂質土塊(10YR5/1)を含む
18．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
19．にぶい黄橙色砂質土(10YR6/3)
20．にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
21．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)炭化物を含む
22．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)明黄褐色砂(10YR7/6)を含む
23．にぶい黄橙色砂質土(10YR6/3)
24．灰褐色土(攪乱層)(7.5YR4/2)炭化物・焼土塊を含む
25．にぶい褐色土(7.5YR5/3)炭化物を含む
26．にぶい橙色砂質土(7.5YR7/3)と粘土互層
27．灰褐色砂質土(7.5YR5/2)
28．にぶい橙色砂質土(7.5YR7/3)と粘土互層
29．にぶい褐色砂(7.5YR5/3)
30．炭化物・焼土塊
31．褐灰色砂質土(7.5YR5/1)
32．炭化物・焼土塊
33．灰褐色土(7.5YR6/2)
34．褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
35．褐灰色砂質土(10YR4/1)
36．にぶい褐色砂質土(7.5YR6/3)
37．にぶい褐色砂(7.5YR5/3)焼土塊
38．にぶい褐色砂(7.5YR5/3)
39．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
40．灰オリーブ色(5Y5/2)炭化物・焼土塊を含む　(近世井戸か?)

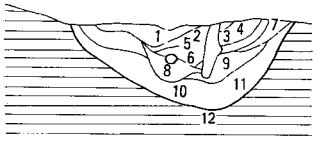


41．灰黄褐色土(10YR4/2)炭化物・焼土塊を含む
42．褐灰色砂質土(10YR4/1)
43．褐灰色土(10YR4/1)
44．にぶい黄褐色土(10YR5/3)
45．灰色土(5Y4/1)炭化物・焼土塊を含む
46．灰黄色砂(2.5Y6/2)黄灰色砂質土粒(2.5Y4/1)を含む
47．暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)炭化物・焼土塊を含む
48．浅黄色砂(2.5Y7/4)
49．浅黄色砂(2.5Y7/4)・黄灰色砂質土(2.5Y4/1)縞状に堆積
50．灰色土(5Y4/1)炭化物・焼土塊を含む
51．灰黄色砂(5Y4/1)炭化物・焼土塊を含む
52．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
53．にぶい褐色砂(7.5YR5/3)
54．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

0　3m

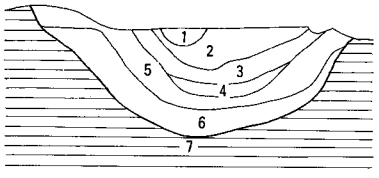
第86図　Ⅳ区東北壁土層実測図（1/40）

LH=3.00m



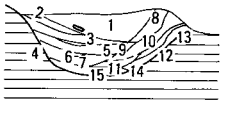
S-156 1　土層断面図(南から)
1．炭化物多・焼土塊少量含む、やや粘質
2．焼土塊少量含む砂質土
3．鉄分による斑文あり、炭化物・小石少量含む砂質土
4．鉄分による斑文あり、やや粘質
5．炭化物少量含む、砂質
6．鉄分による斑文あり、炭化物少量含む、砂質
7．炭化物・焼土塊含む、やや粘質
8．焼土極少量含む、砂質
9．炭化物大少量含む、砂質
10．砂質、不純物少ない
11．砂質、不純物少ない
12．地山
1～12:小石、1・8は他よりやや粒子大

LH=3.00m



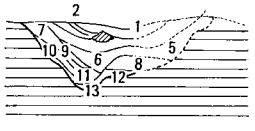
S-156 2　土層断面図(北から)
1．砂・焼土・黄褐色粘質土ブロックを多く含む、灰黄褐色、硬質砂質土
2．小石・砂・炭化物を多く含む、硬、砂、暗褐
3．炭化物少量含む、軟質砂質土
4．焼土少量含む、軟質砂質土
5．砂質土
6．砂質土、炭化物極少量含む
7．砂
1～4:埋戻土、5～6:自然堆積土、7:地山

LH=3.00m



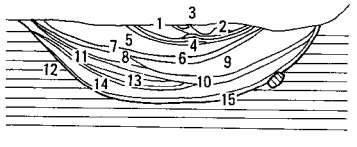
S-156 4　(3?)
1．灰色砂質土(7.5Y4/1)+灰色砂質土ブロック混入(5Y4/1)+土器・焼土・カーボンを含む
2．オリーブ黄色砂質土(7.5Y6/1)+灰オリーブ色砂質土ブロック混入(5Y5/3)+焼土を含む
3．灰色砂質土(5Y4/1)+灰オリーブ色砂質土ブロック混入(5Y5/3)
4．灰オリーブ色砂質土(5Y5/3)
5．灰色砂質土(5Y5/1)
6．灰オリーブ色砂質土(5Y5/2)
7．オリーブ黒色砂質土(5Y3/1)+黒褐色粘質土ブロック(2.5Y3/1)+カーボンを含む
8．黒褐色粘質土2.5Y3/1)+灰オリーブ色砂質土ブロック混入(7.5Y4/2)
9．オリーブ黒色粘質土(5Y3/2)+灰オリーブ色砂質土ブロック混入(7.5Y4/2)
10．灰オリーブ色砂質土(7.5Y4/2)+カーボンを含む
11．暗灰色粘質土(N3/)+カーボンを含む
12．黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
13．灰オリーブ色砂質土(5Y4/2)
14．灰色砂質土(10Y4/1)
15．黄褐色砂質土(2.5Y5/4)+灰色粘質土ブロック混入
※　ラメラ構造を示し、水の流れがあった証明となる層
地山　黄褐色砂質土(2.5Y5/3)
1：上層、2～13：中層、14～15：下層

LH=3.00m

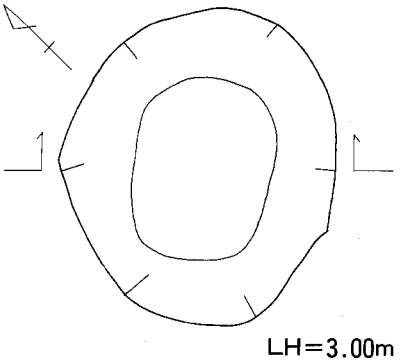


S-156 4　土層断面図(南から)
1．黒褐色粘質土(2.5Y3/1)+焼土少量・炭化物多く含む
2．黄灰色砂質土(2.5Y5/1)
3．黒褐色砂質土(2.5Y3/2)
4．灰黄褐色砂質土(10YR4/2)しまりあり、焼土(大)・焼土(細)少量含む
5．暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/8)しまりあり、焼土・炭化物少量含む
6．灰黄褐色砂質土(10YR4/2)しまりあり、焼土・炭化物(大)多量に含む
7．黒褐色砂質土(7.5YR3/2)しまりややあり、炭化物少量含む
8．黄褐色砂質土(2.5Y5/6)鉄分をやや多めに含む
9．黄褐色砂質土(2.5Y5/4)炭化物少量含む
10．暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)炭化物少量含む
11．黒褐色砂質土(2.5Y3/1)炭化物少量含む、鉄分混入
12．オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/3)
13．黒褐色砂質土(2.5Y3/1)

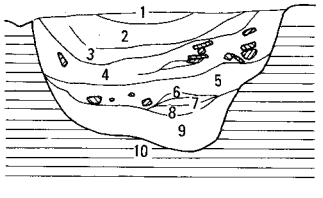
LH=3.00m



S-156 5　土層断面図(東から)
1．黄褐色砂質土(2.5Y5/3)下層(2と3)土塊少量混入
2．褐灰色粘質土(10YR5/1)ややしまり弱い
3．黒色腐植土(N1.5/)植物(木質)の灰または腐植土　軟
4．黒褐色粘質土(2.5Y3/2)間に5と同じ層を1枚挟む
5．明黄褐色砂層(2.5Y6/6)薄い黒褐色土(2.5Y3/2)を交互に数枚挟み、最低8枚の層から成る
6．オリーブ黒色粘質土(5Y3/1)7・8・9との間に黄褐色粘質土(2.5Y5/6)2mmと暗赤褐色土(5YR3/6・鉄分層)1～2mmを持つ+炭化物少量含む
7．6に同じ
8．にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)
9．褐灰色砂質土(10YR4/1)+焼土少量+3の土少量混入
10．6に同じ
11．8に同じ　※4～15：粘質度・砂質土が交互に入る
12．6に同じ　土断3と同じ状況
13．8に同じ　※2・4・6・10・12・15の粘質土は底に近いほど粘土
14．9に同じ　化しており、側面では砂質になっている。
15．6に同じ



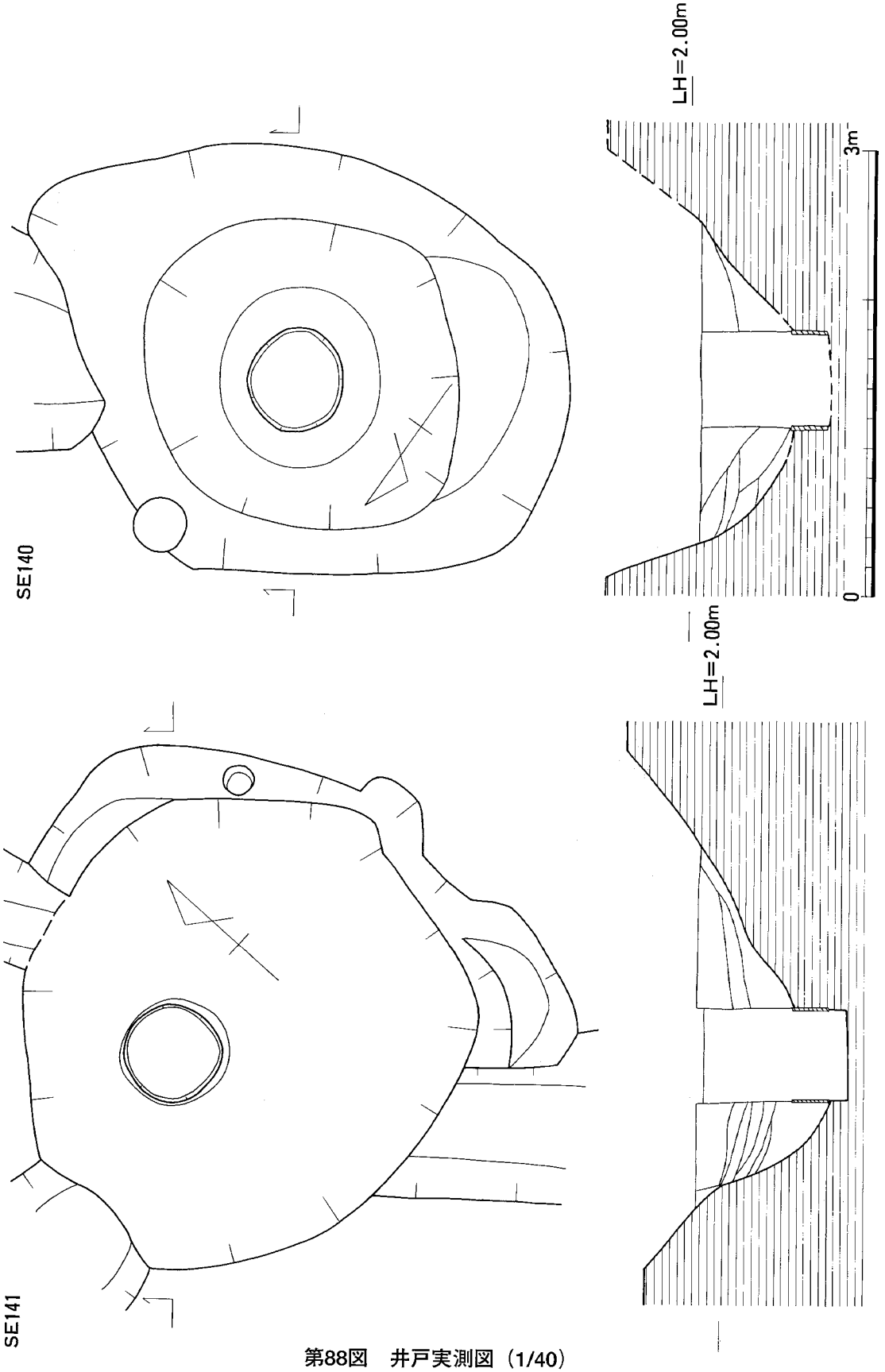
LH=3.00m



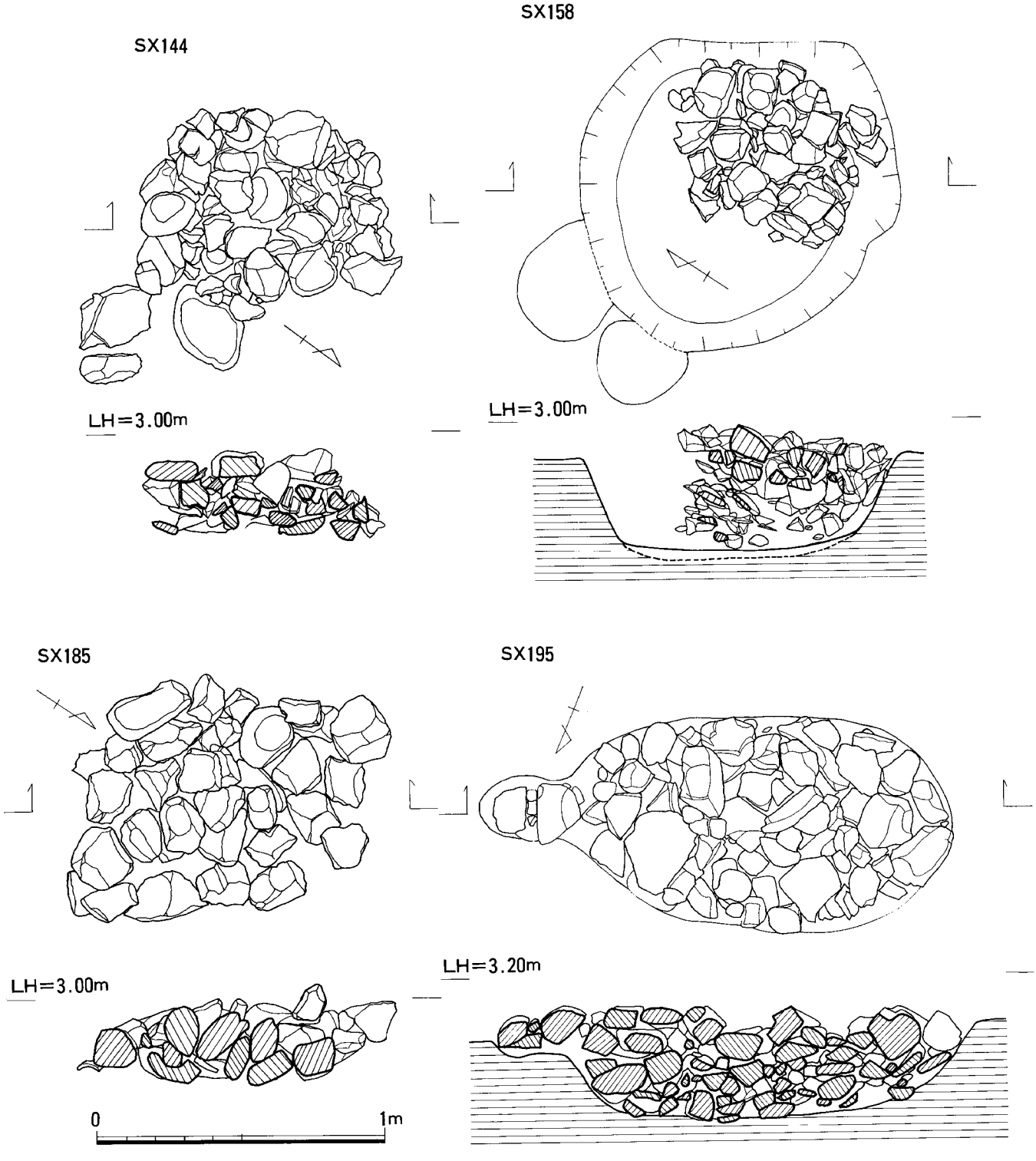
S-150
1．明黄色土(2.5Y6/4)焼土・炭化物少量含む、にぶい黄、しまりあり、硬質
2．暗黄褐色粘質土(10YR5/3)焼土・炭化物多量に含む、にぶい黄褐、しまりあり、硬質
3．黄褐色粘質土(10YR5/4)鉄分・焼土多・炭化物少量含む、にぶい黄褐、しまりあり、硬質
4．暗褐色粘質土(10YR3/1)焼土・炭化物極少量含む、焼土薄層を内包、黒褐、しまりややあり、硬質
5．暗褐色粘質土(10YR3/1)焼土・炭化物を少量含む、下層に焼土薄層、黒褐、しまりあり、硬質
6．黄灰褐色粘質土(2.5Y5/3)黄褐、しまりややあり、やや軟質
7．暗黄褐色砂質土(10YR3/4)焼土少量含む、暗褐、しまりなし、軟質
8．暗褐色砂質土(10YR3/2)焼土少量含む、黒褐、しまりややなし、やや軟質
9．暗褐色砂質土(10YR4/3)焼土・炭化物少量含む、粘土ブロック少量含む、にぶい黄褐、しまりなし、軟質
10．黄褐色砂質土(地山)

0　3m

第87図　SD156溝土層断面実測図（1/40）



第88図　井戸実測図（1/40）



第89図　土坑実測図〔1〕(1/20)

9　Ⅳ区の調査

調査対象部分北側に位置するⅣ区は旧体育館があった部分で、現地表下約1.5mまで撹乱を受けていた。撹乱層直下には遺物包含層が薄く確認され、その上面で遺構を検出した。体育館建設の際に打ち込まれたコンクリート杭が点在し、南側には地下室による撹乱がみられたが、遺構の残りは良好である。最も古い時期の遺構は15世紀後半の溝SD156で、以降17世紀前半までの遺構がみられた。包含層掘り下げ後、下面での遺構検出にあたったが、新たに検出された遺構はなく、上面での検出漏れした分にとどまる。

検出遺構

SD156溝（第87図　図版18）

Ｆ－２～５（グリット）で検出した溝で、Ｆ－５で西に直角に分岐している。現在の町割りと方位をほぼ同じくする主軸の方位はＮ－30°－Ｗに取る。幅1.1～1.7m、深さ0.4～1.2mを測り、延長40ｍ検出した。第87図にグリット毎の土層断面図を示す。

SE140井戸（第88図　図版19）

Ｆ－２・３で検出した。掘り方は上面径4.0ｍの略円形を呈し、深さ1.9ｍを測る。東側はSK170土坑を切る。基底部中央のやや西側に直径0.8ｍ、深さ30cm、厚さ３cmの瓦製の井戸枠を据えている。

SE141井戸（第88図　図版20）

Ｇ－２で検出した。掘り方は上面径3.6～4.9ｍの楕円形を呈し、深さ1.9ｍを測る。基底部中央に直径0.85ｍ、深さ30cm、厚さ2.5cmの瓦製の井戸枠を据えている。

集石土坑　　土坑中に直径20cm前後の礫を充填した遺構である。

SX144（第89図　図版24）

Ｇ－２で検出した。集石に伴う土坑は検出できなかった。

SX158（第89図　図版26）

Ｆ－３で検出した。上面径1.1ｍの円形土坑の東側に礫を充填する。深さ0.4ｍを測る。

SX161（第90図　図版25）

Ｇ－２で検出した。集石に伴う土坑は検出できなかった。

Pit292（第90図　図版25）

Ｆ－２で検出した。1.4×0.7ｍの楕円形土坑に礫を充填する。深さ0.4ｍを測る。

SX144（第89図　図版24）

Ｇ－３で検出した。上面径0.8ｍの円形土坑に礫を充填する。深さ0.3ｍを測る。

SX195（第89図　図版24）

Ｇ－２で検出した。1.0×0.5ｍの楕円形土坑に礫を充填する。深さ0.７ｍを測る。

SF149石積遺構（第90図　図版22）

Ｆ－５で検出した石積遺構で、残存部で長さ2.4ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。10～40㎝の礫を３段積み上げている。主軸の方位はＮ－35°－Ｗに取る。ＳＢ301に伴う可能性が考えられる。

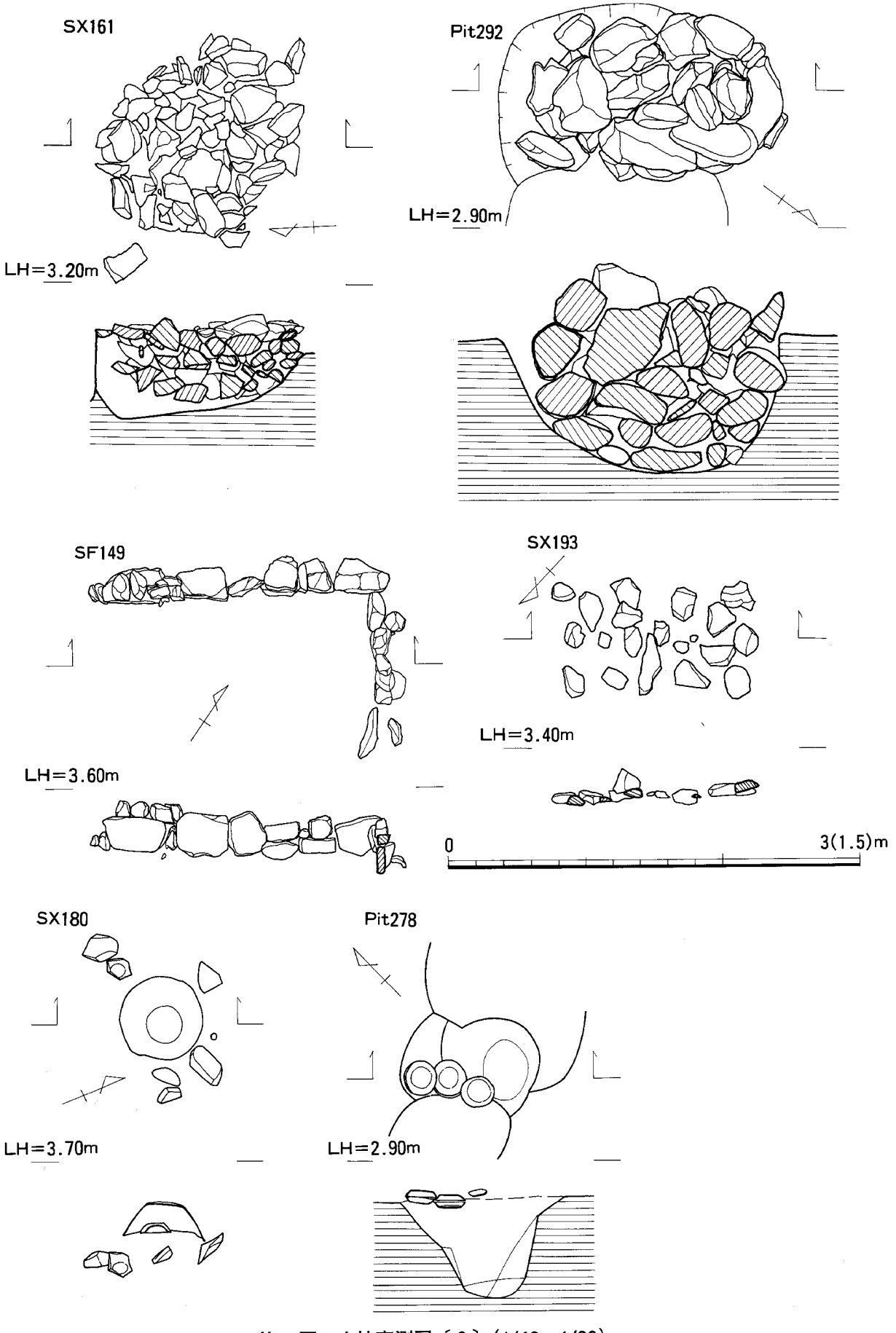
SX193（第90図　図版18）

Ｇ－４で検出した。長さ1.5ｍ、幅0.8ｍの方形の範囲に径10～40㎝の礫を同一のレヴェルに隙間を取って置いている。主軸の方位はＮ－45°－Ｗに取る。

掘立柱建物

SB301（第91図　図版23）

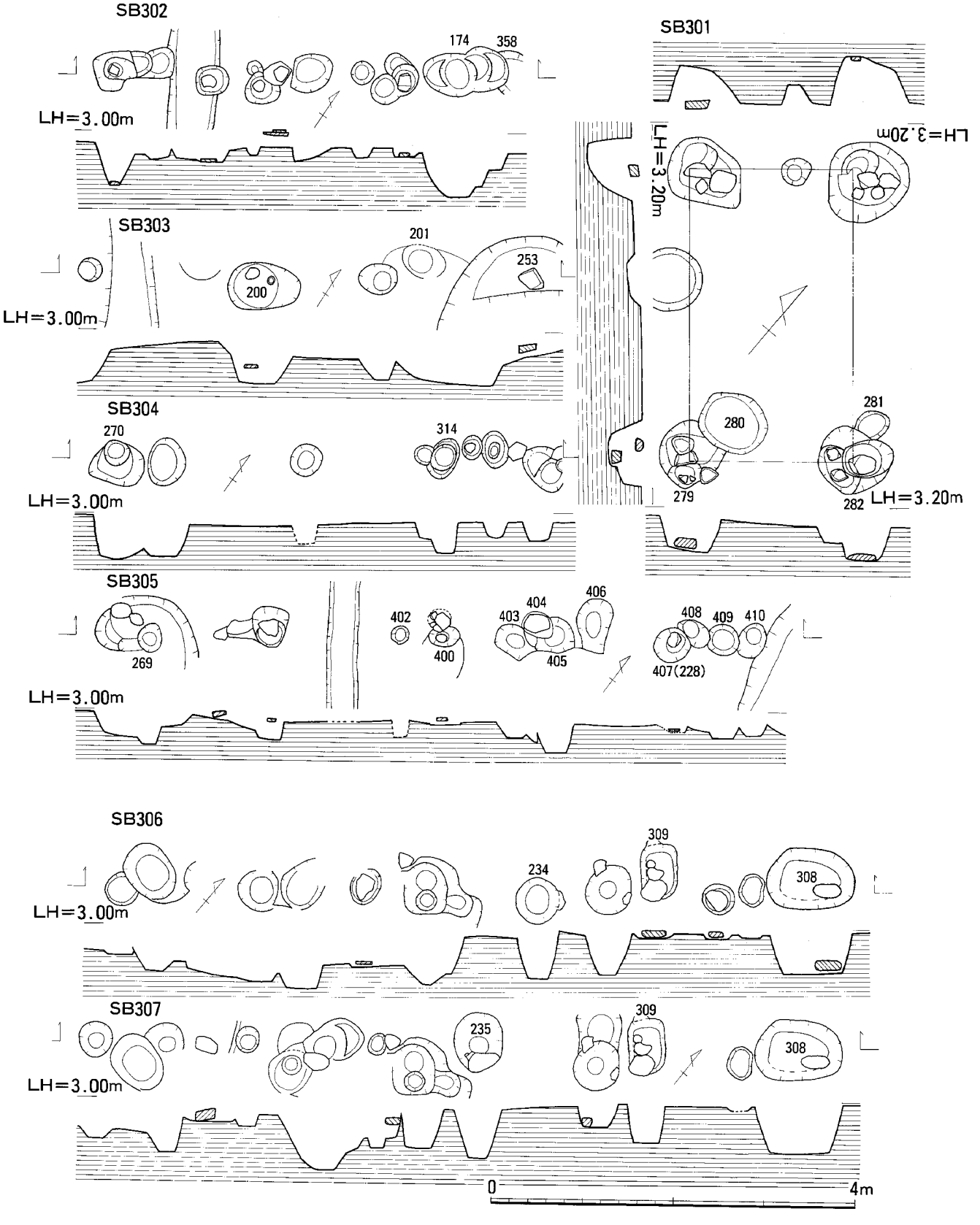
Ｆ－５に位置し、桁行3.2ｍ、梁間1.8ｍの１間×１間の建物である。柱穴は70cm前後の略円形を呈



第90図　土坑実測図〔２〕(1/40・1/20)

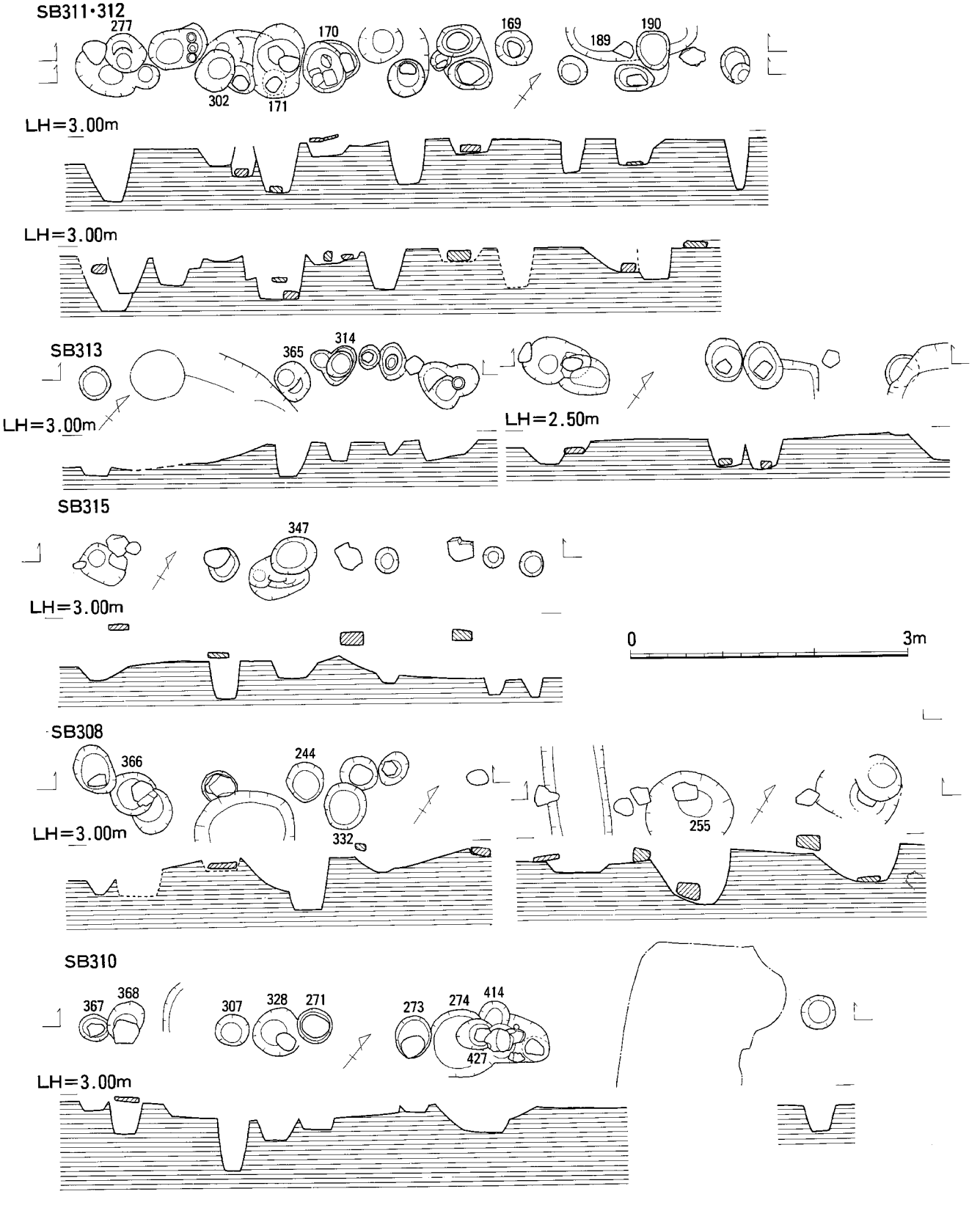
し、50cm前後残存する。底面に根石を据えている。N－40°－Wに方位をとる。柱間・柱穴の規模等から四脚門と考えている。

SB302～315（第91・92図　図版23）



第91図　柱列・掘建柱建物実測図〔1〕(1/60)

第91・92図に示す通り、柱穴の切り合い関係から少なくとも３期にわたって造営されている。各時期とも主軸方位・規模等をほぼ同じくすることから、建替えに伴うものとみられる。他時期の遺構や撹乱によって梁間方向の柱穴を捉えることは困難であるが、梁間２間、桁行３間ほどの建物が長屋状に軒を連ねて町屋を形成していたと考えられる。



第92図　柱列・掘建柱建物実測図〔２〕(1/60)

出土遺物

SE140出土遺物（第93図）　3は掘り方から、他は井戸枠内からの出土。

土師器

小皿（1～3）　1・3は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.0・6.6㎝、器高1.2㎝、底径4.3・4.9㎝を測る。2は内底まで回転横ナデされる。口径6.4㎝、器高1.5㎝、底径4.5㎝を測る。口縁部に煤が付着している。

杯（4）　体部から内底まで回転横ナデされ、外底には針状の工具による条線状の痕跡がみられる。口径9.7㎝、器高2.2㎝、底径6.7㎝を測る。

青花　皿（5・6）　5は碁笥底のⅢC群Ⅰ類で、外面に波涛文帯と蕉葉文を描く。高台より内側は欠失している。景徳鎮窯系。6は端反りの高台付ⅢB1群Ⅶ類で、外面に牡丹唐草文、見込には玉取獅子を描く。景徳鎮窯系。

朝鮮王朝陶器　粉青沙器　皿（7）　釉下に白化粧土の刷毛目を行い、透明釉が全面に掛けられている。胎土は灰色（7.5Y6/5）を呈する。見込と畳付に4ヵ所の砂目跡がみられる。

SE141出土遺物（第93図）

瀬戸・美濃焼　灰釉皿（8）　高台内に輪トチの痕跡がみられ、灰白色（2.5Y8/2）の胎土に、淡黄色（2.5Y8/2）の釉が掛けられている。

SK144出土遺物（第93図）

土師器

小皿（9）　口縁部が体部中位の屈曲部から直立気味にのび、内底まで回転横ナデされる。口径5.2㎝、器高1.5㎝、底径4.2㎝を測る。

蓋（10）　つまみをもつ蓋で、見受け部径6.2㎝、器高3.0㎝を測る。

SK145出土遺物（第93図）

白磁

杯（11・12）　11は碁笥底の端反り杯E－2群である。全面施釉の後、畳付の釉を掻き取っている。12は腰折れの端反り杯E－1群で、内底には線彫りの文様を施す。灰白色（2.5Y8/1）の胎土に、透明釉が掛けられている。口禿で、細かい貫入が入る。高台より内側は欠失している。

朝鮮王朝陶器　粉青沙器　皿（13）　内外面に白化粧土の象嵌を施す。褐灰色（7.5YR6/1）の胎土に透明感のある釉が全面に掛けられている。

SE147出土遺物（第93図）

青磁　碗（14）　体部外面にヘラ先による細線蓮弁文を施し、剣頭は蓮弁としてのまとまりを欠き波状をなしているB－Ⅳ′類である。印花文が施されている。焼成は甘く、浅黄橙色（10YR8/3）の胎土ににぶい黄橙色（10YR6/3）の不透明な釉が畳付を越えて高台内面途中まで掛かり、内底は丸く釉が掻き取られる。貫入が著しい。

朝鮮王朝陶器　粉青沙器　皿（15）　体部下位の屈曲部から直線的な口縁部が開く。内面に凹線を巡らせ、白化粧土の象嵌を施す。褐灰色（10YR6/1）の胎土に透明感のある釉が全面に掛けられている。

SE148出土遺物（第93図）

青磁　碗（16）　内底に印文を施す底部片で、灰白色（2.5YR8/1）の胎土に明黄褐色（2.5Y7/6）の釉が高台内面途中まで掛けられている。

青花　皿（17）　碁笥底の皿C群で、端反り口縁を呈する。外底は露胎である。

SF149出土遺物（第93図）

土師器　小皿（18）　内底まで回転横ナデされる。口径6.1㎝、器高1.2㎝、底径4.3㎝を測る。

SK151出土遺物（第93図）

土師器　小皿（19）　内底まで回転横ナデされる。口径6.8㎝、器高1.2㎝、底径5.0㎝を測る。

陶器　皿（20）　唐津系の溝縁皿である。にぶい褐色（7.5YR6/3）の胎土に灰黄色（2.5Y6/2）の釉が高台脇まで掛けられている。見込と畳付に4ヶ所の砂目跡がみられる。

瓦製魚形墨滴（21）　内部は空洞になっており、頭項部中央に径6mm、口唇部中央に径2mmの孔が穿たれている。

SK152出土遺物（第93図）

土師器　小皿（22）　内底まで回転横ナデされる。口径5.8㎝、器高1.1㎝、底径4.4㎝を測る。

SK153出土遺物（第93図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（23）　口径7.2㎝、器高1.5㎝、底径5.1㎝を測る。

杯（24）　底部はやや丸底状を呈する。口径13.2㎝、器高2.6㎝、底径8.7㎝を測る。

SK154出土遺物（第93図）

土師器　杯（25）　口径に比して底径が小さく、やや内湾する体部から直線的な口縁部が大きく開く。口径11.9㎝、器高3.4㎝、底径5.4㎝を測り、やや大型で深めである。体部内面は強く横ナデされ、鋭く稜をなす。内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。

SE155出土遺物（第94図）　26・27は井戸枠内からの出土。

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（26・27）　口径6.7・7.4㎝、器高1.4・1.3㎝、底径5.0・5.8㎝を測る。26は口縁部に煤が付着している。

杯（28）　口径10.0㎝、器高2.2㎝、底径7.0㎝を測る。

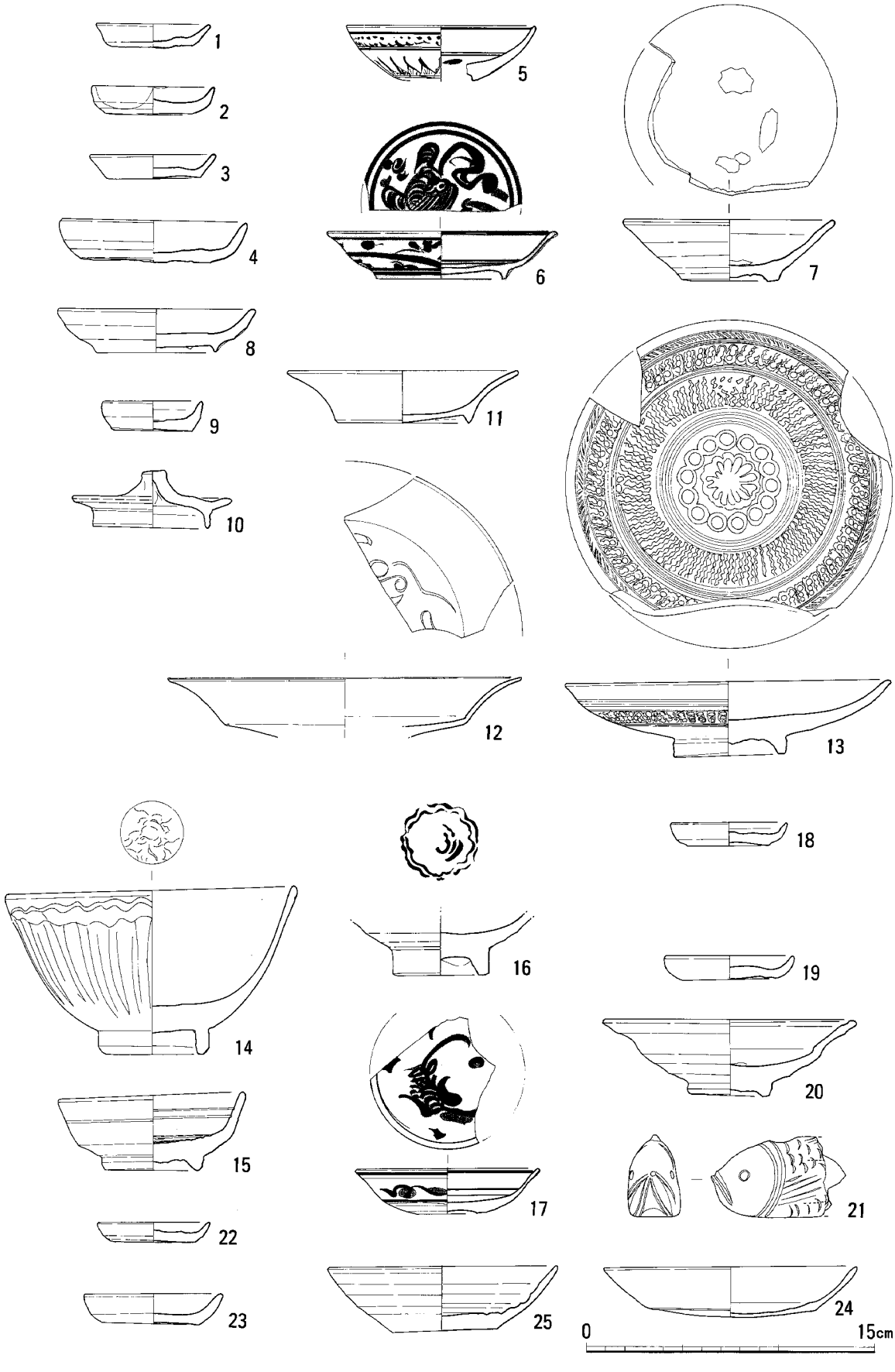
小壷（29）　口径2.1㎝、器高2.6㎝、底径2.7㎝を測る。

SD156出土遺物（第94・95・96図）

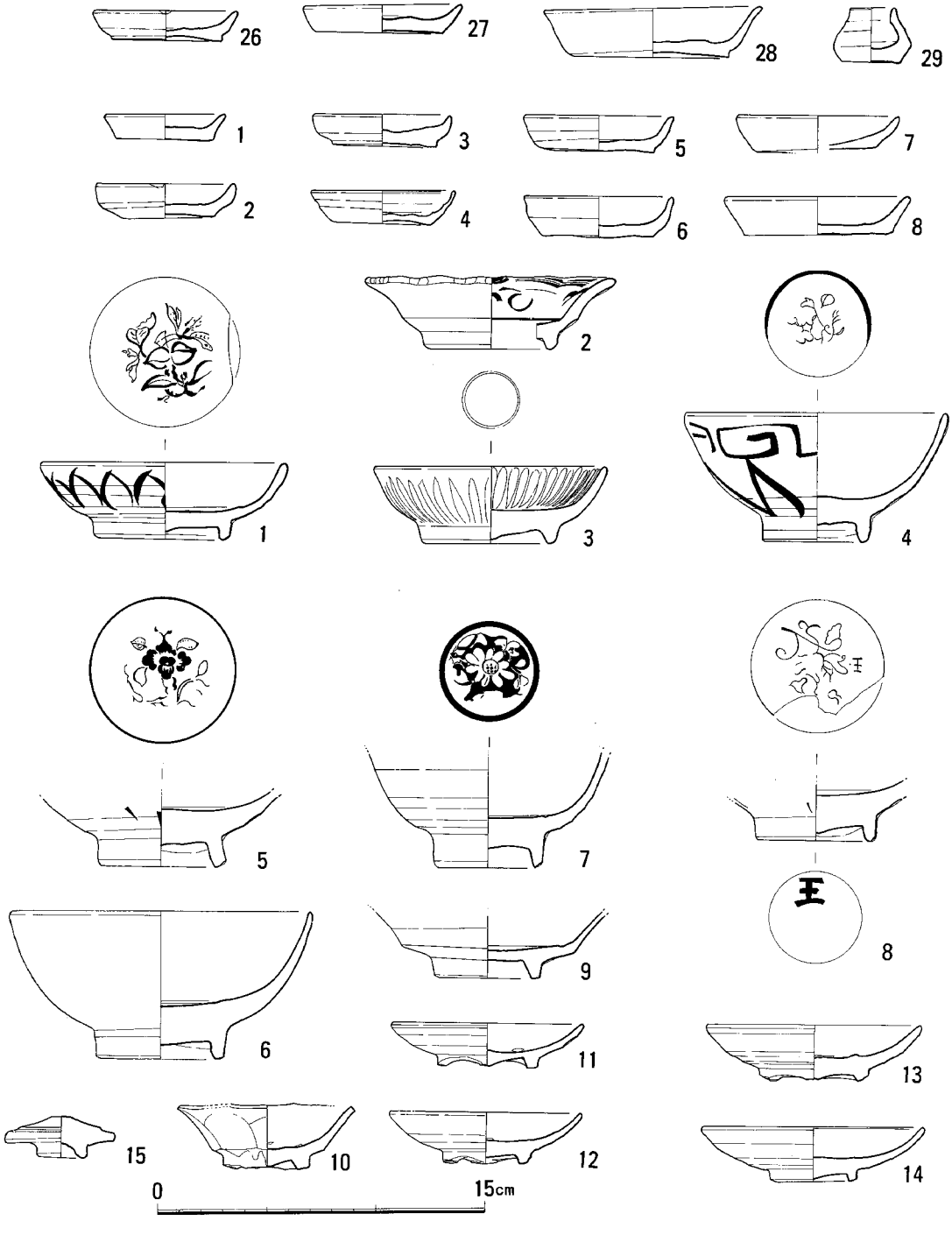
土師器　小皿（1～8）　1・7・8の内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。他は内底まで回転横ナデされる。1は口縁部が外反し、口径5.5㎝、器高1.2㎝、底径4.4㎝を測る小型のものである。2・3は体部中位の肥厚する屈曲部からやや内湾気味に口縁部がのびる。口径6.4㎝、器高1.5㎝、底径4.2・4.8㎝を測る。2の口縁部には煤が付着している。4は精良な生地を用い器壁が薄く仕上げられている。口縁部は内湾し、内底まで強く横ナデされ、鋭い稜をなしている。良好に焼成され橙色（5YR7/6）を呈する。口径6.7㎝、器高1.5㎝、底径4.5㎝を測る。5・6は体部中位で屈曲し外反する口縁部がのびる。口径6.9㎝、器高1.7・1.9㎝、底径5.0・5.1㎝を測る。7は口径7.5㎝、器高1.7㎝、底径5.5㎝を測る。8は1とほぼ同じ形態をとるが、口径8.5㎝、器高1.7㎝、底径6.8㎝を測り、約1.5倍の法量をとる。

青磁

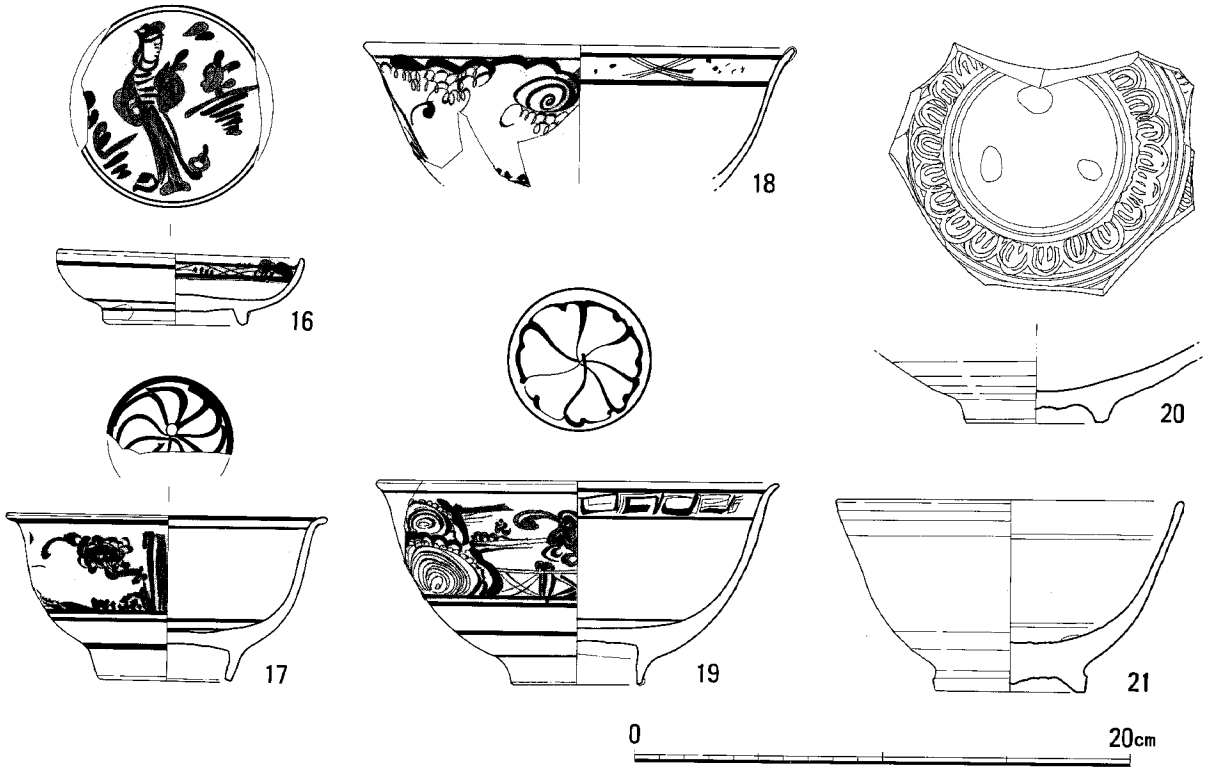
皿（1～3）　1は体部外面に蓮弁をヘラ彫りし、見込に花卉文のスタンプを施す。明緑灰色（10GY7/1）の釉が断面方形の高台内面途中まで掛けられている。2は稜花皿で、明緑灰色（7.5GY7/1）の釉が掛けられている。3は体部内外面に丸彫りによる蓮弁文を施す。オリーブ灰色（10Y6/2）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。



第93図　遺構出土遺物実測図〔１〕(1/3)



第94図　ＳＤ156出土遺物実測図〔１〕(1/3)



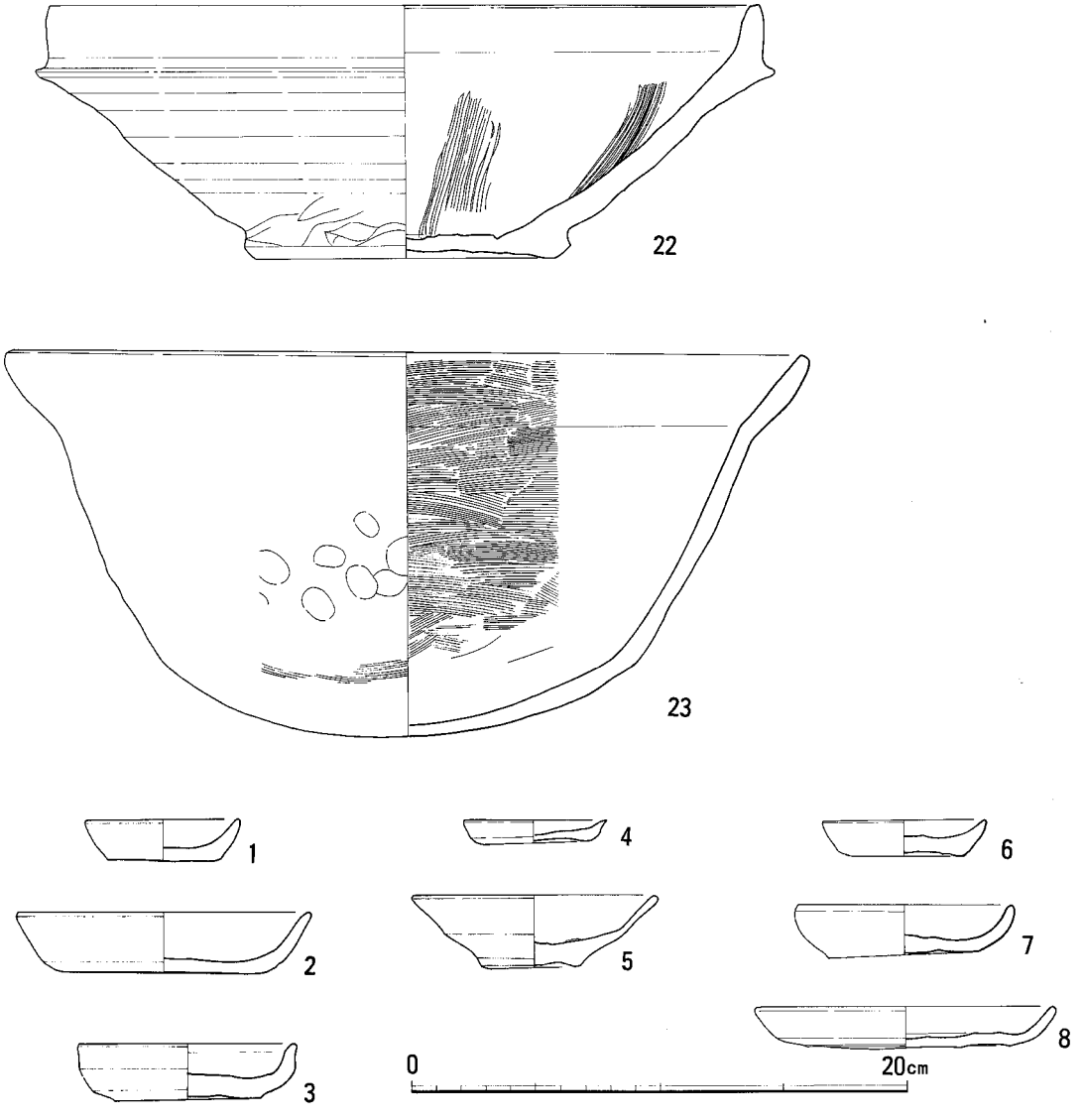
第95図　ＳＤ156出土遺物実測図〔２〕(1/3)

碗（４～８）　４・５は口縁部外面に雷文帯を巡らせ、下部に幅広の片切彫の蓮弁をもつ。断面方形の高台内面途中まで施釉されるＣ－２－ｂ類である。見込に花卉文のスタンプを施す。４はオリーブ灰色（10Y6/2)、底部片の５にはオリーブ黄色（5Y6/3）の釉が掛けられている。６は口縁部が内湾するE類で、内外面ともに無文である。オリーブ灰色（10Y6/2）の釉が高台内面途中まで掛けられる。７は口縁部欠失のために何類であるかは不明である。見込に印花文を施し、暗オリーブ色（5Y4/4）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。底部片の８は外面の高台上部に幅広の蓮弁の下部とみられる片切彫の断片がみられ、高台内面途中まで施釉される。見込に花卉文のスタンプを施し、オリーブ灰色（10Y6/2）の釉が掛けられている。高台内に墨書「王」が記されている。

白磁

杯（９・10）　９は腰折れの端反り杯Ｅ－１群で、口縁部は欠失している。灰白色（N8/）の胎土に、透明釉が高台外側まで掛けられている。高台内に墨・朱の痕跡が残るが、判読不能である。10は多角杯Ｄ群で、高台の４ヵ所に弧状の抉り込みが入る。見込には重ね焼きの際付いた高台の接地面の痕跡が４ヵ所みられる。灰白色（10YR8/2）の胎土に、灰白色（2.5YR8/1）の釉が体部外面下半まで掛けられている。

皿（11～14）　Ｄ群11～13は高台の４ヵ所に弧状の抉り込みが入る。見込には高台の接地面痕が４ヵ所みられる。11は灰白色（2.5YR8/1）の胎土に灰白色（5YR8/1）の釉が、12は灰白色（10YR8/1）の胎土に無色透明の釉が、13は灰白色（10YR8/1）の胎土に灰白色（5YR8/1）の釉が、全面に掛けら



第96図　ＳＤ156〔３〕・遺構〔２〕出土遺物実測図（1/3）

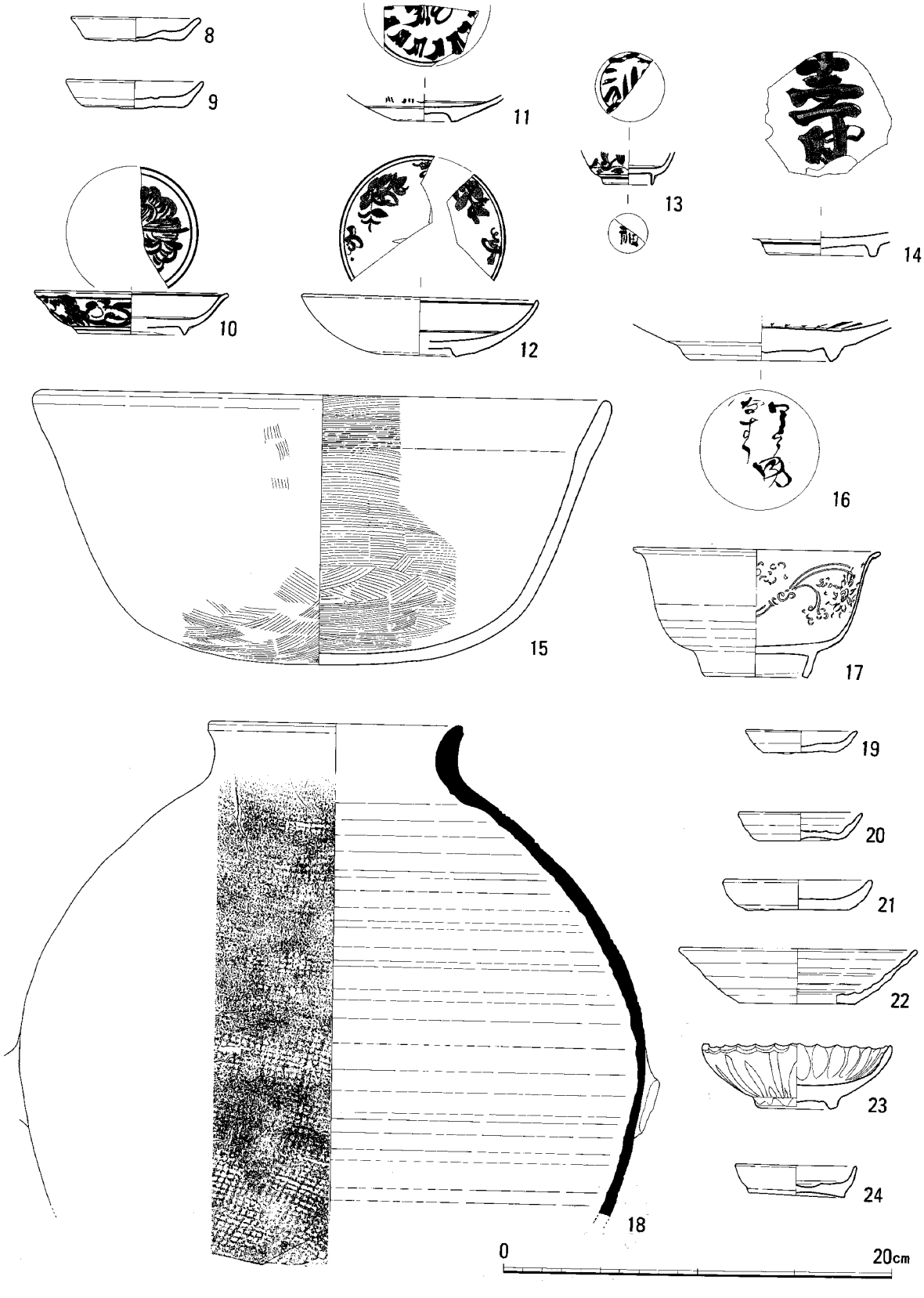
れている。Ｄ群14は灰白色（2.5YR8/1）の胎土に灰白色（5YR8/1）の釉が、体部外面下半まで掛けられている。

蓋（15）　灰白色（5YR8/1）の胎土に無色透明の釉が、天井部に掛けられている。

青花

皿（16）　口縁部は内湾し、平坦な底部に断面台形の高台が付く。口縁部内面に四方襷文を巡らせ、内底見込に仕女図を描く。白色の胎土に灰白色（7.5Y7/1）の釉が高台外側まで掛けられている。復元口径10.0㎝、器高2.4㎝、高台径5.8㎝を測る。

碗（17～19）　端反りの碗B群である。17は高台が薄く、内傾する。体部外面に菜蕗菜文、見込にねじ花を描く。白色の胎土に無色透明の釉を全面に施した後、畳付の釉を掻き取り露胎としている。復元口径12.8㎝、器高6.7㎝、高台径5.3㎝を測る。18は口縁部片で口縁部内面に四方襷文を巡らせ、



第97図　遺構出土遺物実測図〔３〕(1/3)

外面に巻雲蘭草文を描く。灰白色（2.5YR8/2）の胎土に緑灰色（7.5GY 5 /1）の釉を施す。復元口径17.4cmを測る。19は高台内側の削りが直で、体部外面に巻雲蘭草文、見込にねじ花を描く。白色の胎土に無色透明の釉が高台内面から畳付を除いて施されている。復元口径16.2cm、器高8.2cm、高台径5.2cmを測る。

朝鮮王朝陶器　粉青沙器　碗（20・21）　20は内面に白化粧土の象嵌による凹線を巡らせ、蓮弁文を施す。灰白色（2.5Y 7/1）の胎土に灰色（7.5Y 6/1）の釉が全面に掛けられている。胎土は灰色（7.5Y6/1）を呈する。見込と畳付に砂目跡がみられる。

備前焼　すり鉢（22）　口縁端部は立ち上がり、断面方形を呈する。Ⅳ期新に属する。胎土は明赤褐色（2.5YR5/8）～暗赤褐色（2.5YR3/2）を呈する。

土師器　鍋（23）　口縁部は外反し、内面に横方向の細かい刷毛目を施し、外面は口縁部が横ナデ、体部はナデを施し指頭圧痕が残る。底部はヘラナデを施す。胎土には粗い砂粒を多量に含み、にぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。外面と内底に煤が付着している。口径32.4cm、器高15.7cmを測る。

SD159出土遺物（第96図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（1）　口径6.2cm、器高1.7cm、底径4.5cmを測る。

杯（2）　口径11.8cm、器高2.5cm、底径8.0cmを測る。

SK160出土遺物（第96図）

土師器　杯（3）　内底まで回転横ナデされる。口径8.8cm、器高2.3cm、底径5.8cmを測る。器壁が厚く、体部中位の屈曲部から口縁部が直立し、口縁端部は内傾する。

SE161出土遺物（第96図）

土師器　小皿（4）内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径5.7cm、器高0.9cm、底径4.2cmを測る。

朝鮮王朝陶器　皿（5）　体部中位の屈曲部から口縁部が外反して開く。高台内の削り出しは浅い。浅黄橙色（7.5YR8/3）の胎土ににぶい黄橙色（10YR7/4）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に5ヵ所の砂目跡がみられる。

SE162出土遺物（第96図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（6）　器壁が厚く、口縁端部は薄くおさめられる。口径6.7cm、器高1.4cm、底径4.7cmを測る。

杯（7・8）　7は体部に丸みをもち、口径8.9cm、器高2.0cm、底径6.1cmを測る。8は口径12.2cm、器高1.6cm、底径8.6cmを測り浅めで大型である。

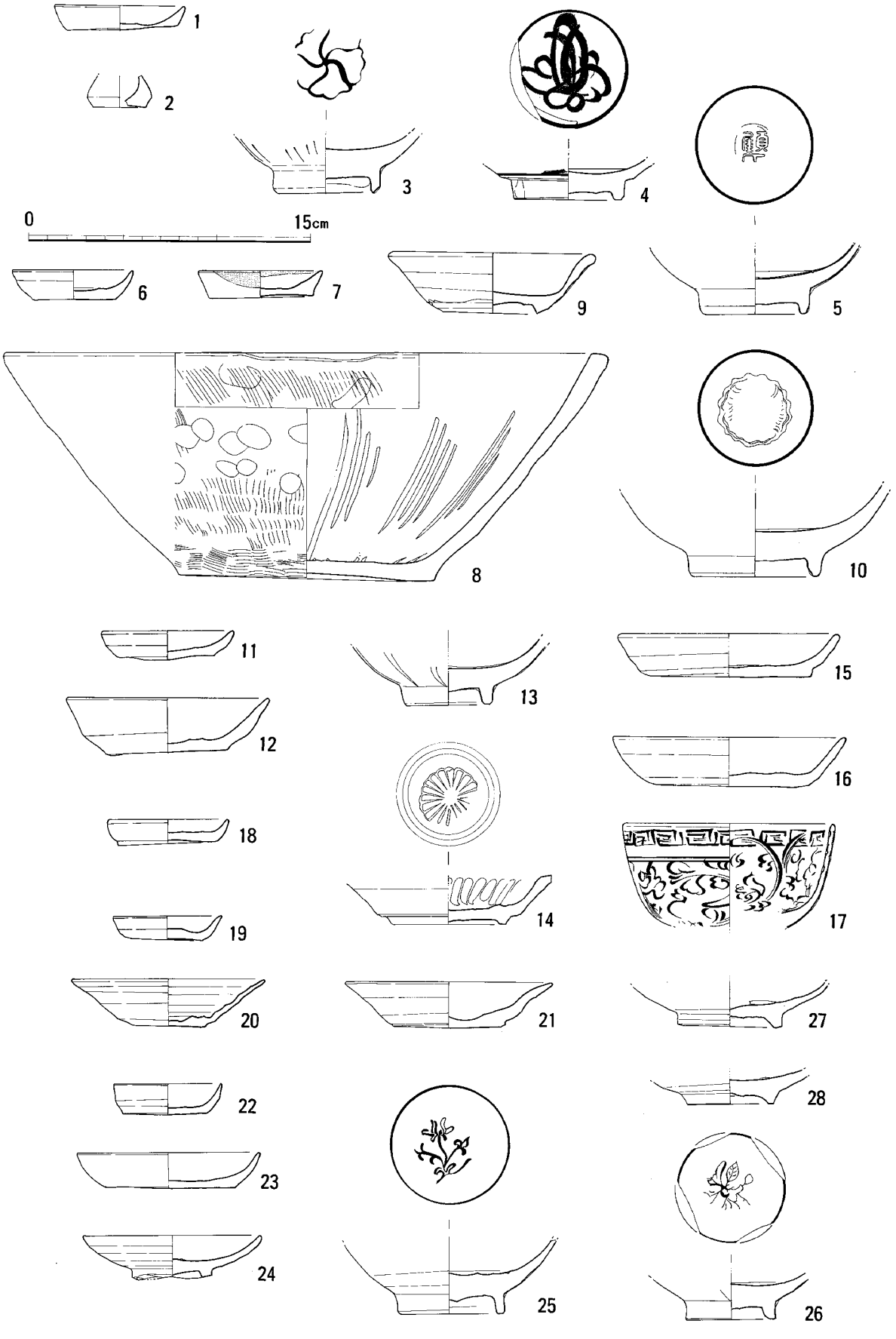
SK163出土遺物（第97図）

土師器　小皿（8・9）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.7・7.1cm、器高1.2・1.5cm、底径5.1・5.3cmを測る。

青花

皿（10～12・14）　10は端反りの高台付皿B 1 群Ⅵ類で、外面に牡丹唐草文、見込には十字花文を描く。11は碁笥底の皿C群Ⅰ類の底部片で、外面及び見込に梵字を描く。12はC群Ⅳ類で、外面が無文で、見込中央に鉄分の多い土からなる堆魚の断片がその周囲に水藻を巡らす。いずれも景徳鎮窯系。14は皿の底部片とみられる。見込に「寿」字を入れる。漳州窯系。

小杯（13）　外面に蓮華文、見込に寿山福海を描く。高台内に「福」の字款を入れる。口縁部は欠



第98図　遺構出土遺物実測図〔４〕(1/3)

失している。景徳鎮窯系。

SK164出土遺物（第97図）

土師器　鍋（15）　口縁部はわずかに外反し、内面に稜がつく。内面には細かい横方向の刷毛目を施し、外面は口縁部が横ナデ、体部は縦方向に刷毛目を施した後ナデ消す。底部は粗い横方向の刷毛目を施す。胎土には粗い砂粒を含み、橙色（5YR6/8）を呈する。外底に煤が付着している。口径29.7㎝、器高13.9㎝を測る。

青磁　盤（16）　口縁部が欠失している。体部外面に丸彫りによる蓮弁文を施す。オリーブ灰色（10Y6/2）の釉が高台の内側まで掛けられている。外底に墨書がみられる。

白磁　碗（17）　端反りの碗で、高台は薄く内傾する。体部内面に陽刻による唐草文を描く。白色の胎土に無色透明の釉を全面に施した後、畳付の釉を掻き取り露胎としている。復元口径11.8㎝、器高6.5㎝、高台径5.2㎝を測る。

朝鮮王朝陶器　無釉焼締陶器　甕（18）　口縁部から体部内面にかけて横ナデを施し、特に体部内面は強く横ナデされ、鋭く稜をなす。外面にはナデ残された格子目の叩き痕がみられる。体部中位に把手の基部が残存する。胎土には粗い砂粒を含み、暗灰色（N3/）～灰白色（7.5Y7/1）を呈する。

SE166出土遺物（第97図）

土師器　小皿（19）　体部中位で屈曲し、内底はナデ。口径5.8㎝、器高1.1㎝、底径3.9㎝を測る。

SK173出土遺物（第97図）

土師器

小皿（20・21）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。20は精良な生地を用い器壁が薄く仕上げられている。復元口径6.4㎝、器高1.5㎝、底径3.8㎝を測る。良好に焼成され、橙色（5YR7/6）を呈する。21は口径7.7㎝、器高1.6㎝、底径5.3㎝を測る。

杯（22）　精良な生地を用い器壁が薄く仕上げられ、口縁部は体部から直線的に開き、端部は丸くおさめられている。内外面ともロクロ目が顕著に残り、鋭く稜をなしている。底部の中心付近が欠失しているが、内底まで回転横ナデされる。復元口径12.2㎝、器高2.9㎝、復元底径5.8㎝を測り、口径に比べ底径の割合を減じている。良好に焼成され、橙色（5YR7/6）を呈する。

白磁　皿（23）　菊皿Ｅ－４群で、灰白色（10YR8/2）の胎土に灰白色（7.5Y7/1）の釉が高台外面の途中まで掛けられている。復元口径9.8㎝、器高3.3㎝、復元高台径4.3㎝を測る。

SK168出土遺物（第98図）

土師器

小皿（１）　内底まで回転横ナデされる。口径7.1㎝、器高1.3㎝、底径5.5㎝を測る。

小壷（２）　口縁部は欠失している。底径2.9㎝を測る。

青磁　碗（３）　口縁部欠失のために何類であるかは不明である。片切彫で見込にねじ花文が施され、外面の高台上部には蓮弁の下部とみられる断片がみられる。オリーブ灰色（5GY6/1）の釉が高台内面途中まで掛けられる。

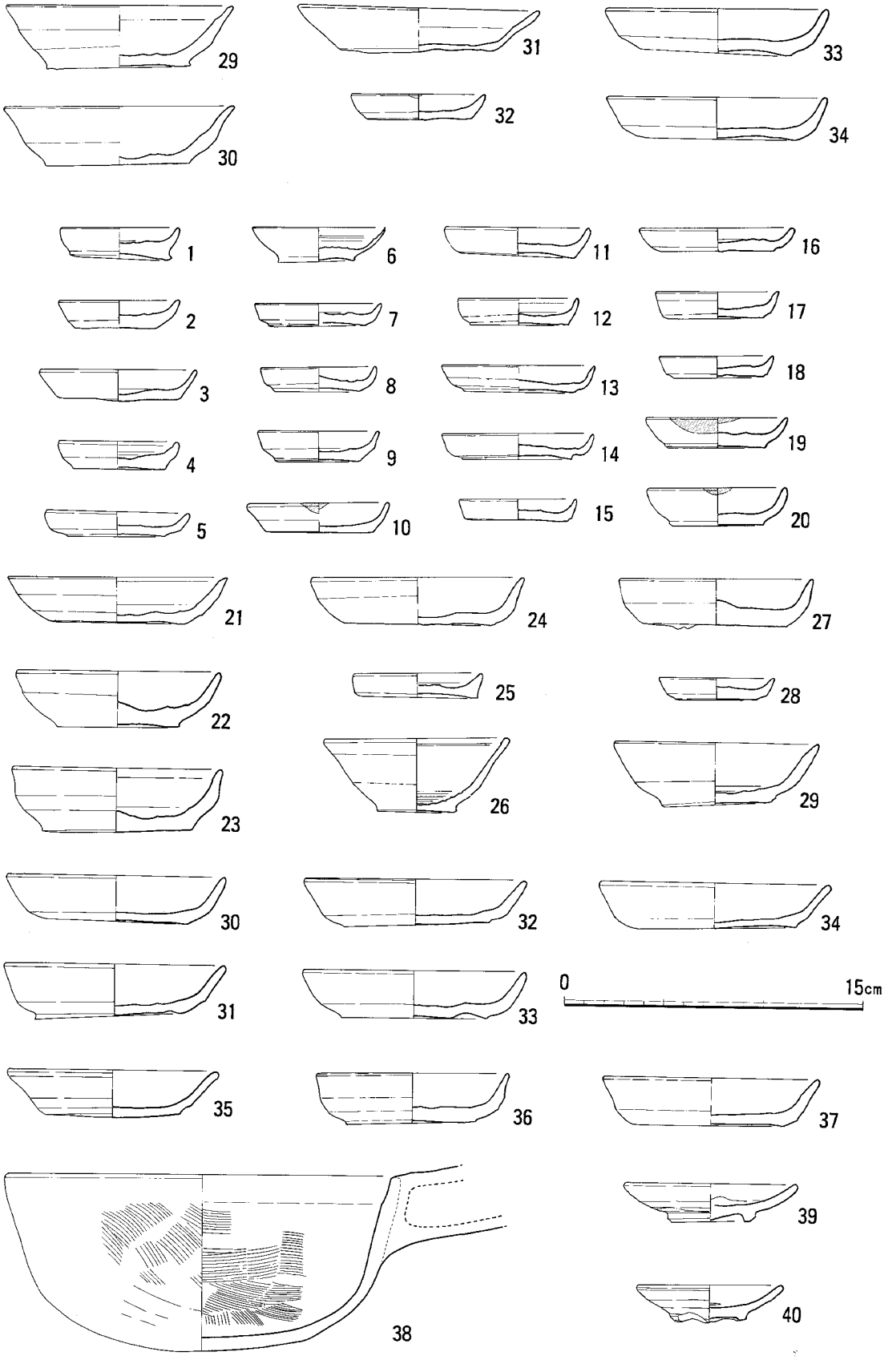
青花　碗（４）　碗の底部片とみられる。見込に花文を施す。漳州窯系。

SK170出土遺物（第98図）

青磁　碗（５）　口縁部欠失のために何類であるかは不明である。見込に「顧氏」銘をスタンプする。オリーブ灰色（10Y5/2）の釉が高台内面途中まで掛けられる。

SX180出土遺物（第98図）

土師器



第99図　遺構出土遺物実測図〔５〕(1/3)

小皿（６・７）　６は内底まで回転横ナデされ、口径6.4cm、器高1.4cm、底径4.4cmを測る。７は内底をナデ、口径6.7cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測る。口縁部に煤が付着している。
すり鉢（８）　口縁部がやや肥厚し、平坦面はわずかに外傾する。口縁部を双方向に押し出して二口となす。体部内面は横方向の板ナデを施し、４本単位の条線が入る。外面は口縁部が横ナデ、体部は縦方向に刷毛目を施した後ナデ消し、指頭圧痕が残る。底部との境には横方向の刷毛目を施す。胎土には砂粒を含み、浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。口径32.0cm、器高12.1cm、底径13.6cmを測る。

青磁

碗（10）　口縁部欠失のために何類であるかは不明である。見込に印花文を施す。オリーブ灰色（10Y5/2）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。

皿（９）　底部は碁笥底で、口縁部が体部下位の屈曲部から外反して開く。口縁端部は肥厚している。浅黄色（2.5Y8/2）の透明な釉が体部外面下位まで掛けられている。

SK188出土遺物（第98図）

土師器

小皿（11）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.2cm、器高1.5cm、底径5.1cmを測る。

杯（12）　内底まで回転横ナデされ、口径10.7cm、器高2.9cm、底径6.5cmを測る。

SK189出土遺物（第98図）

青磁　碗（13）　口縁部欠失のために何類であるかは不明である。外面の高台上部に幅広の蓮弁の下部とみられる片切彫の断片がみられる。オリーブ灰色（10Y6/2）の釉を全面に施した後、畳付の釉を掻き取っている。

瀬戸・美濃焼　灰釉皿（14）　口縁端部が欠失している。体部内面には丸のみでソギを入れ、見込は菊花文をスタンプする。灰白色（10YR8/2）の胎土に、淡黄色（2.5Y7/4）の釉が掛けられている。

SK190出土遺物（第98図）

土師器　杯（15）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径11.9cm、器高2.4cm、底径8.6cmを測る。

SK192出土遺物（第98図）

土師器　杯（16）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径12.5cm、器高2.7cm、底径8.3cmを測る。

青磁　碗（17）　口縁部外面に雷文帯を巡らせるＣ－Ⅱ類で、体部の内外面には片切彫の花卉文を施す。底部は欠失している。オリーブ灰色（2.5GY6/1）の釉が掛けられている。

SD199出土遺物（第98図）

土師器　小皿（18）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.5cm、器高1.3cm、底径5.3cmを測る。

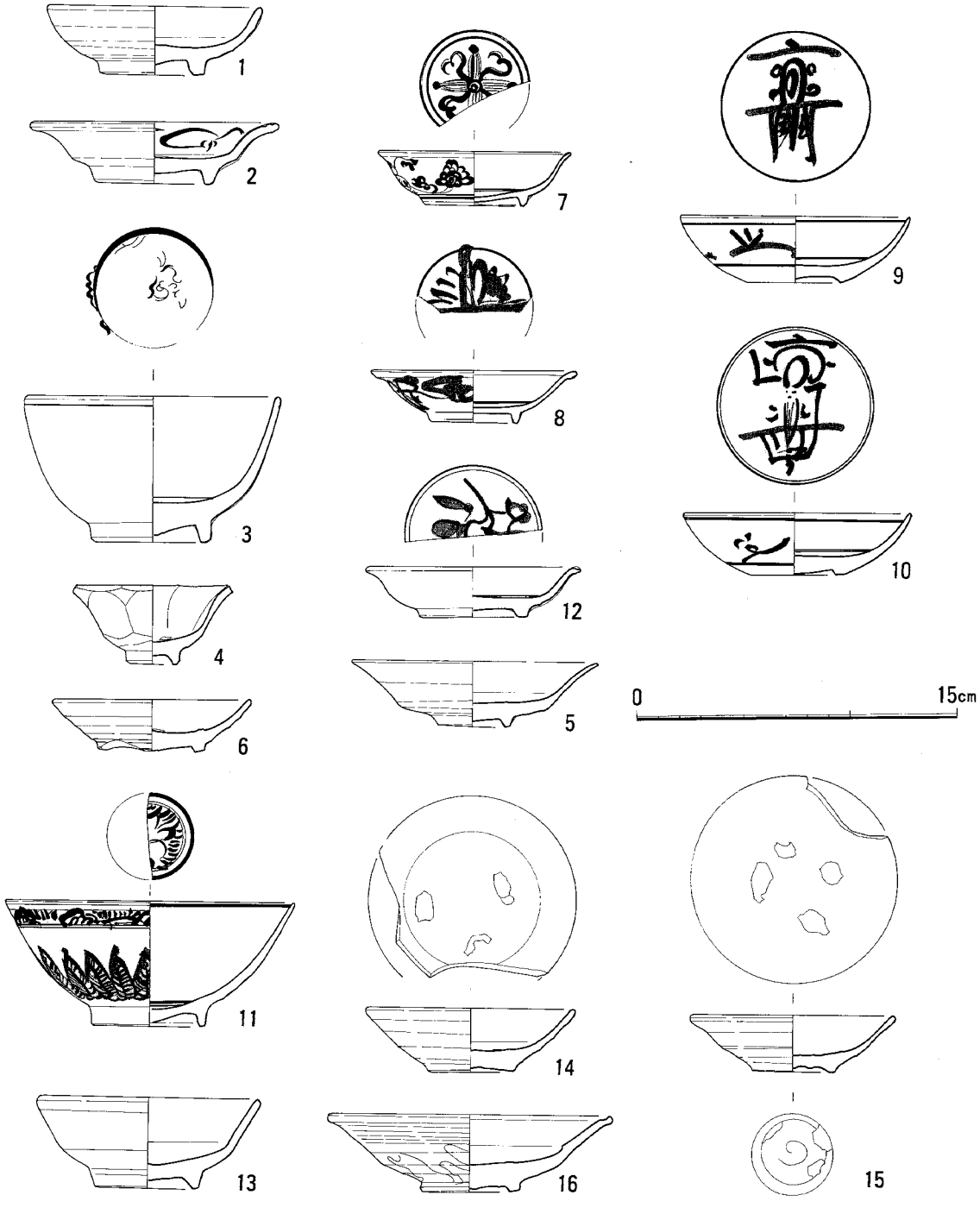
SK211出土遺物（第98図）

土師器

小皿（19）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径5.8cm、器高1.2cm、底径3.9cmを測る。

杯（20）　口縁部は体部から直線的に開き、端部は鋭く仕上げられている。内底まで回転横ナデされ、ロクロ目が顕著に残り、鋭く稜をなす。口径10.4cm、器高2.5cm、復元底径3.9cmを測り、口径に比べ底径は小さい。精良な生地を用い薄手に仕上げられる。良好に焼成され、にぶい橙色（5YR7/4）を呈する。

SK221出土遺物（第98図）



第100図　包含層出土遺物実測図（1/3）

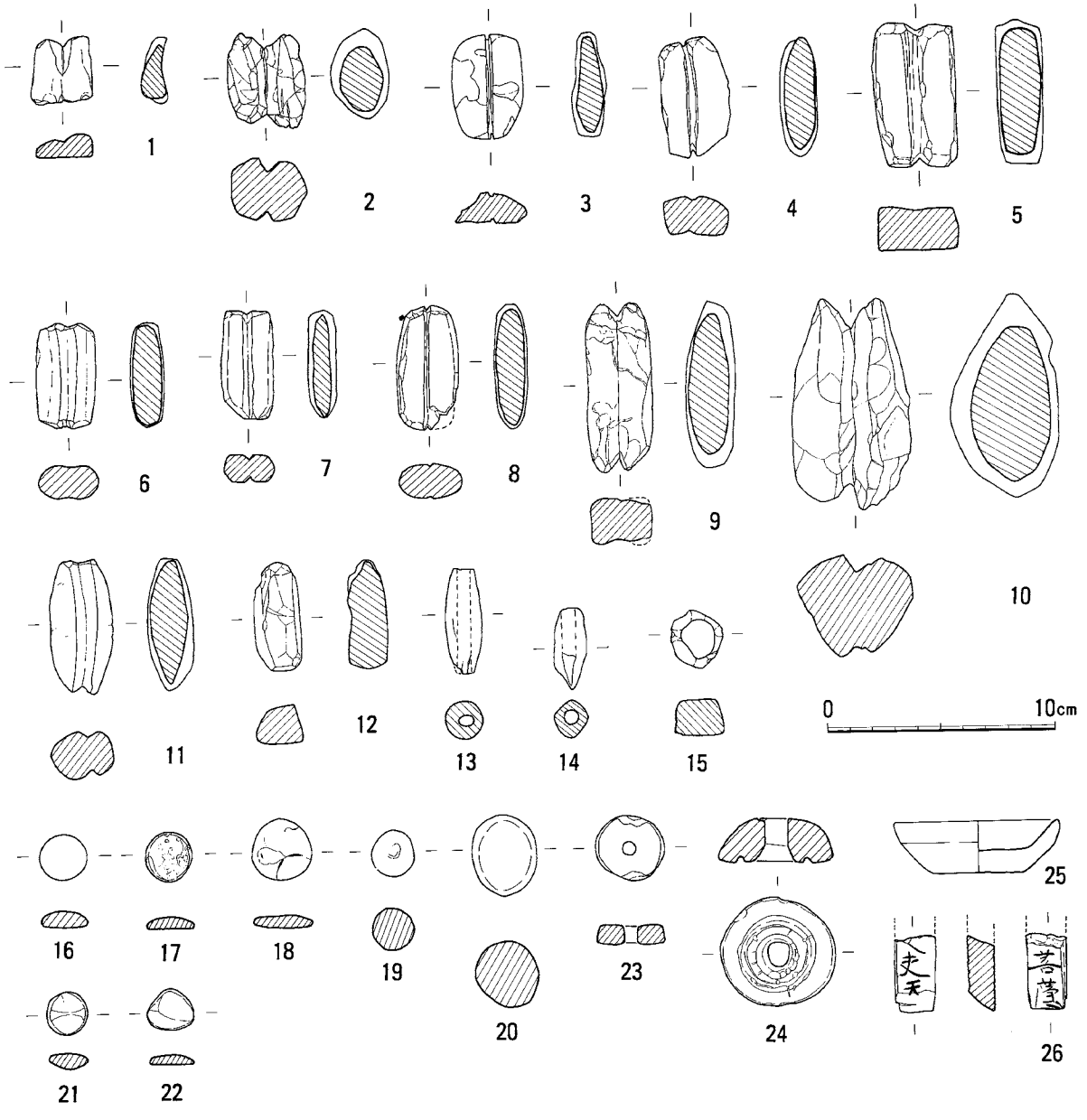
土師器　杯（21）　口縁部は体部中位の屈曲部から外反して開き、端部は薄くおさめられている。内底まで回転横ナデされ、口径11.2cm、器高2.5cm、底径6.0cmを測り、口径に対する底径比は小さい。

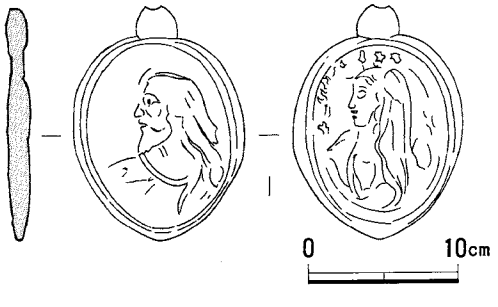
ＳＫ222出土遺物（第98図）

土師器

小皿（22）　口縁部は体部中位の屈曲部から直立気味に開く。内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径5.8cm、器高1.7cm、底径4.5cmを測る。

杯（23）　内底まで回転横ナデされる。口径9.8cm、器高1.9cm、底径7.0cmを測る。



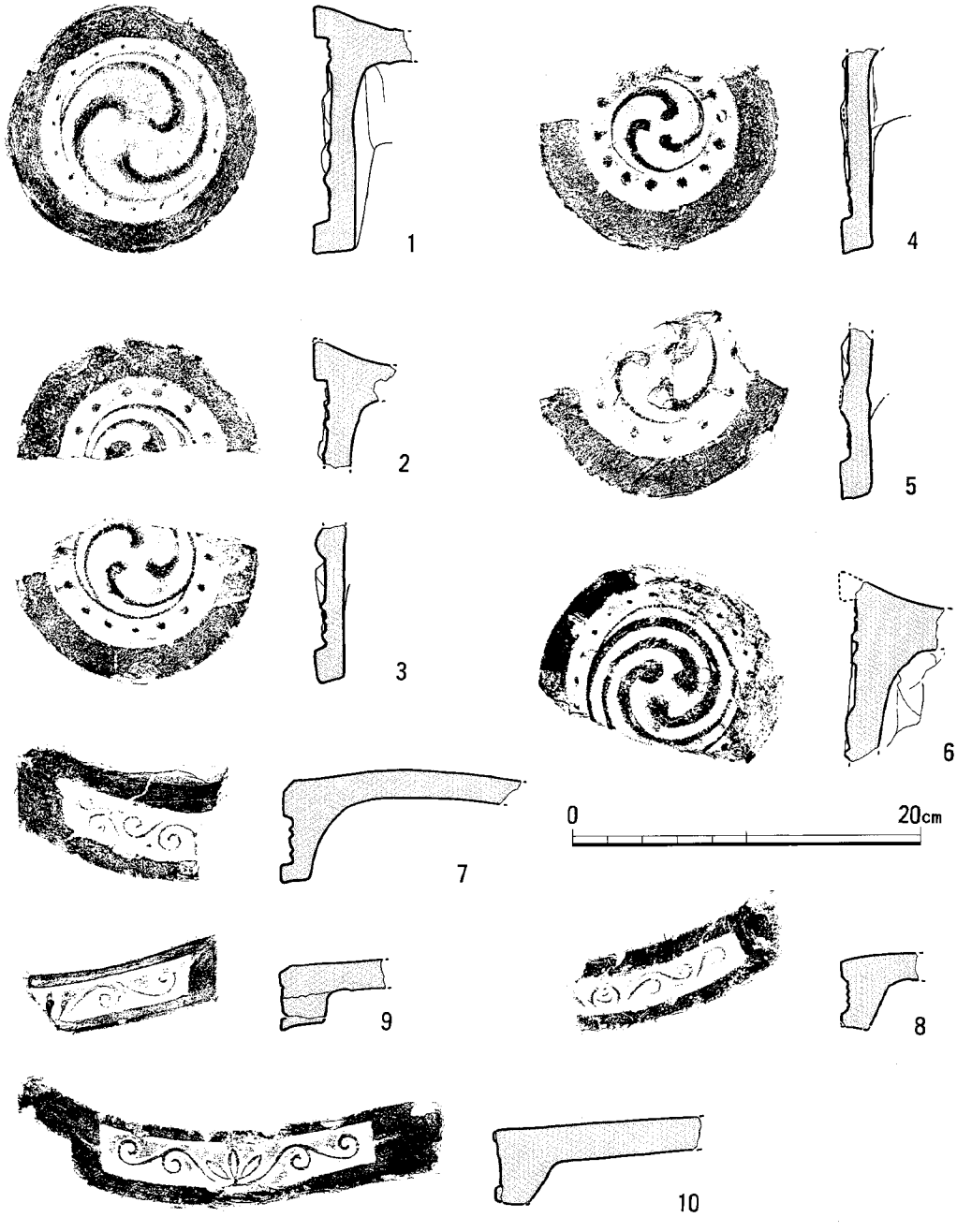


第101図　石製品・土製品・金属製品実測図（1/3）

白磁　皿（24）　高台の４ヵ所に弧状の抉り込みが入るＤ群で、見込には高台の接地面痕が５ヵ所みられる。灰白色（2.5Y8/1）の胎土に灰白色（5Y8/2）の釉が、全面に掛けられている。

青磁　碗（25・26）　口縁部欠失のために何類であるかは不明である。見込に印花文を施す。25はオリーブ灰色（10Y6/2）の釉が高台内面途中まで掛けられる。26はオリーブ灰色（5GY6/1）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。

朝鮮王朝陶器　皿（27・28）　いずれも底部片で、高台内の削り出しは浅い。27は灰白色（2.5Y7/1）の胎土に灰色（7.5Y5/1）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に５ヵ所の砂目跡が



第102図　軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（1/4）

みられる。28は灰白色（2.5Y7/1）の胎土に灰色（5Y6/1）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に6ヵ所の砂目跡がみられる。

RP01出土遺物（第99図）

土師器　杯（29・30）　口縁部は体部中位の屈曲部から外反して開く。内底まで回転横ナデされ、口径11.4・11.5㎝、器高3.1・2.9㎝、底径7.2・7.1㎝を測る。

RP02出土遺物（第99図）

土師器　杯（31）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径12.1㎝、器高2.2㎝、底径7.9㎝を測る。

RP03出土遺物（第99図）

土師器　小皿（32）　内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径6.8㎝、器高1.3㎝、底径5.2㎝を測る。

RP04出土遺物（第99図）

土師器　杯（33・34）　内底まで回転横ナデされ、口径11.2・11.1㎝、器高2.3・2.1㎝、底径7.5㎝を測る。

柱穴・ピット状遺構出土遺物（第99図）

土師器

小皿（1～20）　1～4・6～19は内底まで回転横ナデされ、5・20は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。10・19・20の口縁部には煤が付着している。

1（Pit153出土）は口径6.0㎝、器高1.6㎝、底径5.1㎝を測る。2（Pit198出土）は口径6.2㎝、器高1.4㎝、底径4.1㎝を測る。3（Pit201出土）は口径7.9㎝、器高1.6㎝、底径5.8㎝を測る。4（Pit203出土）は口径6.1㎝、器高1.4㎝、底径4.7㎝を測る。5（Pit208出土）は口径7.3㎝、器高1.3㎝、底径4.8㎝を測る。6（Pit214出土）は口径6.7㎝、器高1.7㎝、底径3.9㎝を測る。口縁部はやや内湾気味におさめられる。体部の器壁は薄く仕上げられているが、底部は厚い。内面にはロクロ目が顕著に残り、鋭く稜をなす。精良な生地が用いられ良好に焼成され、浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。7（Pit232出土）は口径6.3㎝、器高1.2㎝、底径4.8㎝を測る。8・9（Pit268出土）は口径5.8・6.1㎝、器高1.2・1.6㎝、底径4.8・4.2㎝を測る。10（Pit272出土）は口径7.1㎝、器高1.5㎝、底径5.4㎝を測る。11（Pit256出土）は口径7.4㎝、器高1.4㎝、底径5.9㎝を測る。12（Pit259出土）は口径6.1㎝、器高1.4㎝、底径4.9㎝を測る。13・14（Pit289出土）は口径7.8・7.6㎝、器高1.3㎝、底径5.5・5.4㎝を測る。15（Pit293出土）は口径5.9㎝、器高1.1㎝、底径5.4㎝を測る。16（Pit295出土）は口径7.8㎝、器高1.2㎝、底径5.8㎝を測る。17・18（Pit329出土）は口径6.2・5.8㎝、器高1.3・1.1㎝、底径5.3・4.5㎝を測る。19・20（Pit359出土）は口径7.2・7.1㎝、器高1.5・1.9㎝、底径5.0・4.8㎝を測る。

杯（21～24・27・35～37）　21・24・27は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。22・23・27・35～37は内底まで回転横ナデされ、22・23・27は内底部が盛り上がっている。

21（Pit176出土）は口径11.0㎝、器高2.3㎝、底径6.8㎝を測る。22（Pit200出土）は口径10.3㎝、器高2.8㎝、底径6.1㎝を測る。口縁端部に内傾する平坦面をもち、内面は鋭く稜をなす。23（Pit203出土）は口径10.6㎝、器高3.2㎝、底径7.5㎝を測る。やや外反する口縁部が体部中位の屈曲部から直立気味にのびる。24（Pit227出土）は口径10.7㎝、器高2.4㎝、底径7.5㎝を測る。27（Pit259出土）は口径9.8㎝、器高2.3㎝、底径7.1㎝を測る。35（Pit284出土）は口径10.6㎝、器高2.4㎝、底径6.8㎝を測る。36（Pit305出土）は口径9.7㎝、器高2.5㎝、底径6.4㎝を測る。口縁部が体部中位の屈曲部から外反気味に開く。37（Pit317出土）は口径10.9㎝、器高2.4㎝、底径7.5㎝を測る。

Pit235出土土器（第99図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（25）　口径6.5㎝、器高1.2㎝、底径5.8㎝を測る。口縁部に煤が付着している。

杯（26）　口径9.3㎝、器高3.7㎝、底径3.9㎝を測る深めの杯である。精良な生地を用い、口縁部は体部中位の屈曲部から外反気味に開き、端部は丸くおさめられている。内底にはロクロ目が顕著に残

り、鋭く稜をなしている。良好に焼成され、灰白色（2.5Y8/2）を呈する。SK152出土の破片と接合した。

Pit264出土土器（第99図）

土師器　内底まで回転横ナデされる。

小皿（28）　口径5.8㎝、器高1.1㎝、底径4.1㎝を測る。

杯（29）　口径10.3㎝、器高3.2㎝、底径5.7㎝を測る。

Pit278出土土器（第99図）

土師器　杯（30～34）　30・31・34は内底をナデ、外底には板状圧痕が残る。32・33は内底まで回転横ナデされる。口径11.0～11.6㎝、器高2.3～2.6㎝、底径6.9～7.9㎝を測る。

鍋（38）　把手付鍋で、丸底の底部から体部が直線的に開く。口縁部はやや内湾気味におさめられ、内面の体部との境は緩く稜をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は斜め方向、内面は横方向の刷毛目を施す。

白磁　皿（39・40）　皿D群で、39（Pit303出土）は浅黄色（2.5Y7/3）の胎土に白色不透明の釉が内外底を除いて施されている。40（Pit307出土）は高台の４ヵ所に弧状の抉り込みが入り、見込には高台の接地面痕が４ヵ所みられる。灰白色（2.5Y8/1）の胎土に無色透明の釉が、全面に施されている。

包含層出土遺物（第100図）

青磁

皿（１・２）　１は口縁部が内湾し、断面方形の高台が付く。灰オリーブ色（7.5Y5/2）の釉が見込と高台内面を除いて施されている。Ｆ－５、Ⅰ層出土。２は稜花皿で、オリーブ灰色（10Y6/2）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。Ｇ－２、Ⅰ層出土。

碗（３）　口縁部が内湾するＥ類で、内外面ともに無文である。オリーブ灰色（10Y6/2）の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に掻き取っている。Ｇ－５、Ⅰ層出土。

白磁

杯（４・５）　４は多角杯Ｄ群で、灰白色（N8/）の胎土に、透明釉が体部外面下半まで掛けられている。Ｆ－５、Ⅰ層出土。５は腰折れの端反り杯Ｅ－１群で、灰白色（2.5Y8/1）の胎土に、無色透明の釉が高台外側まで掛けられている。Ｇ－５、Ⅰ層出土。

皿（６）　高台の４ヵ所に弧状の抉り込みが入るD群で、見込には高台の接地面痕が４ヵ所みられる。灰白色（2.5Y8/1）の胎土に白色不透明の釉が、全面に掛けられている。Ｆ－２、Ⅰ層出土。

青花　皿（７～10）　７・８は端反りの高台付皿Ｂ１群Ⅵ類で、外面に牡丹唐草文、見込には十字花文を描く。Ｆ－５、Ⅰ層出土。７は全面施釉の後、畳付の釉を掻き取り露胎としている。景徳鎮窯系。８は高台の外側まで施釉され、文様は粗雑に描かれている。漳州窯系。９・10は碁笥底の皿Ｃ群Ⅲ類で、外面に字を略した文様、見込には「寿」字を背景に福禄寿を描く。全面施釉の後、畳付の釉を掻き取り露胎としている。景徳鎮窯系。Ｆ－２、Ⅰ層出土。

碗（11）　蓮子碗Ｃ群Ⅰ類で、外面に波涛文帯と蕉葉文、見込には蓮華文を描く。景徳鎮窯系。F－５、Ⅰ層出土。

青磁染付　皿（12）　端反りの断面方形の高台付皿で、見込に花文を描く。青色を帯びた透明釉を全面に施した後、畳付の釉を掻き取り露胎としている。F－５、Ⅰ層出土。

朝鮮王朝陶器　皿（13～15）　体部中位で屈曲部し口縁部がやや外反して開く。胎土は浅黄橙色（7.5Y8/4）を呈し、にぶい黄橙色（10YR7/4）の釉が全面に掛けられている。白磁の可能性も考えら

れる。口縁部に煤が付着している。F－2、Ⅰ層出土。14・15は体部下位で屈曲し口縁部はほぼ直線的に開く。高台内の削り出しは浅い。14は灰色（7.5Y5/1）の胎土に灰色（7.5Y6/1）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に3ヵ所の砂目跡がみられる。G－5、Ⅰ層出土。15は灰白色（10Y7/1）の胎土に灰色（10Y6/1）の釉が全面に掛けられている。見込と畳付に4ヵ所の砂目跡がみられる。F－5、Ⅰ層出土。

陶器　皿（16）　唐津系の溝縁皿である。灰白色（2.5Y7/1）の胎土に灰オリーブ色（5Y6/2）の釉が高台脇まで掛けられている。見込と畳付に4カ所の砂目跡がみられる。G－3、Ⅰ層出土。

石製品（第101図）

石錘（1～12）　紐かけの溝を1本入れる。1（SK211出土）、2（Pit211）、3（Pit231）、4（SK219）、5（F－4、Ⅰ層）、6（Pit224）、7（SX180）、8（G－4、Ⅰ層）は短冊状を呈する。9（SK189）、10（廃土中）、11（SK198）、12（K－83）は紡錘状を呈する。

碁石（16～18・21・22）16～18は白石、21・22は黒石で、16・17・21はSE155、18はSE162、22はSD156からの出土である。

紡錘車（23・24）　23はF－5、Ⅰ層、24はSK146からの出土である。滑石製。

石皿（25）　SE148からの出土で、滑石製。

土製品（第101図）

土錘（13～14）　13はSE141、14はG－4、Ⅰ層からの出土である。

瓦玉（15）　SE155出土である。

不明土製品（26）　上下を欠く棒状の土製品で、「菩薩」その裏面に「□天」とヘラ書きされる。F－5、Ⅰ層からの出土である。

瓦（第102図）

軒丸瓦（1～6）　1は瓦当径12.5㎝で、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味で、尾は半周して他の巴に接している。外区には小さな珠文19個を配し、周縁の幅1.5㎝を測る。SK146出土。2・3は復元瓦当径14.0㎝で、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味で、尾は半周して他の巴に接している。外区には小さな珠文15個を配するとみられ、周縁の幅2.0㎝を測る。SE147井戸枠内出土。4・5は瓦当径13.5㎝で、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は1/4ほど廻って消える。外区には珠文12個を配するとみられ、周縁の幅2.0㎝を測る。SE162出土。6は瓦当径14.0㎝で、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は半周して他の巴に接している。外区には小さな珠文24～25個を配するとみられ、周縁の幅1.5㎝を測る。F－5、Ⅰ層出土。

軒平瓦（7～10）　7の中心飾りは不明、残存する左半部では4回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚5.5㎝を測る。SK153出土。8は宝珠の中心飾り、残存する右半部では3回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚3.5㎝を測る。SX180出土。9は三つ葉の中心飾り、残存する右半部では2回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚3.5㎝を測る。SK163出土。10は三つ葉の中心飾り、左右に2回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚4.0㎝を測る。G－5壁面出土。

金属製品（第101図）

メダイ（1）　素材は鉛で、長径3.2㎝、短径2.3㎝を測る。表にキリスト半身像、裏に聖母半身像を鋳出している。ヨーロッパ製とみられる。G－3、Ⅰ層出土。

小　結

掘立柱建物の時期について　柱穴掘り方の出土遺物は細片がほとんどで、全形を知りうるものは少ない。在地土師器については15世紀以降の編年が確立していないことから、完形に近い状態で出土しても時期を限定することは困難である。規格化された中国陶磁片から広い時期幅で捉えるしかない。SB305を構成するPit269から青磁稜花皿、碁笥底の青花皿C－Ⅰ、白磁端反りの高台付皿E－2片が、Pit406からは外底の釉を掻き取った青磁碗底部片が出土しており、他の建物を構成する柱穴からは肥前系陶磁器は出土しておらず、15世紀後半から16世紀後半にかけての時期に営まれたものと推定される。国産陶磁器を出土する16世紀末から17世紀前半にかけての遺構は井戸や土坑に限られ、上層から掘り込まれた柱穴等の掘り込みが浅い建築遺構は削平により失われたとみられる。検出遺構の項でのべた通り、建物はほぼ同一の方位を取って最低3回は建替えられている。建物の耐用年数を過ぎたことによる建替えの他に、戦乱等による被災からの復興に伴うものも含まれるであろう。

町割りの方位について　今回の調査で検出した遺構の方位は15世紀後半の溝SD156から遅くとも16世紀には収まる掘立柱建物群までほとんど同一の方位をとる。今回の調査区の南東100ｍに位置する第60次調査でも同じ方位の15世紀後半の溝285号溝が検出されている。その後16世紀末の豊臣秀吉の命による復興の際の「太閤町割り」に踏襲されている。16世紀末～17世紀前半の方形の掘り方をもった井戸がその方位を取っている。東北から西南方向へ長く延びる息浜の東北部では先に述べた第60次調査の他、42次調査においてもＮ－45°－Ｗに方位をとる遺構が検出されている。一方、それらの調査地よりの南西に位置する第46・55・78・122次調査では真北、もしくは振れても10°未満に方位をとる遺構が検出され、息浜東北部とは異なる町割りを取っている。

溝SD156は延長40ｍ検出し、調査区の南西で西に直角に分岐し、南側に位置する調査区（Ⅱ区）ではその延長は検出されなかった。分岐した西側の延長は今回の調査対象区域から外れており、どのように展開するのかは現在のところ不明である。Ⅱ・Ⅲ区で検出した石築地から約50ｍぐらい海岸寄りに位置するⅣ区であるが、遺構検出面の標高は3ｍ前後を測り、15世紀後半には幅1ｍ以上の溝が40ｍ以上延々と延びている。第111次調査地の南東100ｍに位置する第60次調査で15世紀後半の遺構が検出された標高は2.3ｍと海岸寄りの第111次調査地より低い。石築地を海岸線に沿って巡らされたものとした場合、砂州が急速に発達し陸地化したとみるのは不自然である。

出土遺物からみた問題点　16世紀末から17世紀前半にかけての遺構からは名島城跡第1次調査で出土したものと同氾の橘花文軒丸瓦を始め瓦が多く出土している。当時は寺院や城郭に限られていた瓦葺きであるが、復興の際に領主小早川隆景から神屋宗湛に宛てた文書（島井文書）の中に上級の商人には瓦葺きを命じた記事がみられることから、地位の象徴である陶磁器の出土と考えあわせると今回の調査地には富裕な商人が居を構えていたと推定される。

包含層上面で検出した遺構で最も古いＳＤ156溝は出土遺物から15世紀後半とみられ、Ⅳ区の報告中で包含層出土とある遺物について上面から掘り込まれた遺構に伴うものを看過したものも含まれている。メダイはＡ－3、Ⅰ層からの出土であるが、下面からはPit272が検出されそれに伴う可能性がある。遺構検出面では16世紀末以降の柱穴等掘り込みが浅い遺構は削平により失われていることから、メダイは16世紀後半の大友宗麟によってキリスト教が保護された時期にもたらされたもので、16世紀末まで下るものではないと考えている。

ＳＤ156溝からは博多遺跡群でも希少な青花碗Ｂ1群がまとまって出土した。妙楽寺が1452年の遣明船派遣の際、根拠地となる頃の所産である。全国的には流通せず、受容層も限られた青花碗の一群がもたらされた背景には、当時息浜が遣明船派遣の根拠地であったことが大きいと考えている。

参考文献

福岡市教育委員会『博多26』福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集　1992
福岡市教育委員会『博多30』福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集　1992
福岡市教育委員会『博多35』福岡市埋蔵文化財調査報告書第327集　1993
福岡市教育委員会『博多44』福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集　1995
福岡市教育委員会『博多84』福岡市埋蔵文化財調査報告書第710集　2002
陶磁器の分類に関して
森田　勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.２』　1982
上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究No.２』　1982
小野正敏「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.２』　1982

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
Ⅳ区 SE140			
土師器小皿			
1	6.0	1.2	4.3
2	6.4	1.5	4.5
3	6.6	1.2	4.9
土師器杯			
4	9.7	2.2	6.7
Ⅳ区 SK144			
土師器小皿			
9	5.2	1.5	4.2
Ⅳ区 SF149			
土師器小皿			
18	6.1	1.2	4.3
Ⅳ区 SK151			
土師器小皿			
19	6.8	1.2	5.0
Ⅳ区 SK152			
土師器小皿			
22	5.8	1.1	4.4
Ⅳ区 SK153			
土師器小皿			
23	7.2	1.5	5.1
土師器杯			
24	13.2	2.6	8.7
Ⅳ区 SK154			
土師器杯			
25	11.9	3.4	5.4
Ⅳ区 SE155			
土師器小皿			
26	6.7	1.4	5.0
27	7.4	1.3	5.8
Ⅳ区 SE155			
土師器杯			
28	10.0	2.2	7.0
土師器小壷			
29	2.1	2.6	2.7
Ⅳ区 SD156			
土師器小皿			
1	5.5	1.2	4.4
2	6.4	1.5	4.2
3	6.4	1.5	4.8
4	6.7	1.5	4.5
5	6.9	1.7	5.0
6	6.9	1.9	5.1
7	7.5	1.7	5.5
8	8.5	1.7	6.8
Ⅳ区 SD159			
土師器小皿			
1	6.2	1.7	4.5
土師器杯			
2	11.8	2.5	8.0
Ⅳ区 SK160			
土師器杯			
3	8.8	2.3	5.8
Ⅳ区 SE161			
土師器小皿			
4	5.7	0.9	4.2
Ⅳ区 SE162			
土師器小皿			
6	6.7	1.4	4.7
土師器杯			
7	8.9	2.0	6.1
8	12.2	1.6	8.6
Ⅳ区 SK163			
土師器小皿			
8	6.7	1.2	5.1
9	7.1	1.5	5.3
Ⅳ区 SE166			
土師器小皿			
19	5.8	1.1	3.9
Ⅳ区 SK173			
土師器杯			
20	(6.4)	1.5	3.8
21	7.7	1.6	5.3
土師器杯			
22	12.2	2.9	5.8
Ⅳ区 SK178			
土師器小皿			
24	6.3	1.5	5.0
Ⅳ区 SK168			
土師器小皿			
1	7.1	1.3	5.5
土師器小壷			
2	1.9	1.6	2.9
Ⅳ区 SX180			
土師器小皿			
6	6.4	1.4	4.4
7	6.7	1.4	5.6
Ⅳ区 SK188			
土師器小皿			
11	7.2	1.5	5.1
土師器杯			
12	10.7	2.9	6.5
Ⅳ区 SK190			
土師器杯			
15	11.9	2.4	8.6
16	12.5	2.7	8.3
Ⅳ区 SD199			
土師器小皿			
18	6.5	1.3	3.9
Ⅳ区 SK211			
土師器小皿			
19	5.8	1.2	5.3
土師器杯			
20	10.4	2.5	3.9
Ⅳ区 SK221			
土師器杯			
21	11.2	2.5	6.0
Ⅳ区 SK222			
土師器小皿			
22	5.8	1.7	4.5
23	9.8	1.9	7.0
Ⅳ区 RP01			
土師器杯			
29	11.4	3.1	7.2
30	11.5	2.9	7.1
Ⅳ区 RP02			
土師器杯			
31	12.1	2.2	7.9
Ⅳ区 RP03			
土師器小皿			
32	6.8	1.3	5.2
Ⅳ区 RP04			
土師器杯			
33	11.2	2.3	7.5
34	11.1	2.1	7.5
Ⅳ区 Pit153			
土師器小皿			
1	6.0	1.6	5.1
Ⅳ区 Pit198			
土師器小皿			
2	6.2	1.4	4.1
Ⅳ区 Pit201			
土師器小皿			
3	7.9	1.6	5.8

第5表　Ⅳ区出土土器計測表（1）

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
Ⅳ区 Pit203			
土師器小皿			
4	6.1	1.4	4.7
Ⅳ区 Pit208			
土師器小皿			
5	7.3	1.3	4.8
Ⅳ区 Pit214			
土師器小皿			
6	6.7	1.7	3.9
Ⅳ区 Pit232			
土師器小皿			
7	6.3	1.2	4.8
Ⅳ区 Pit268			
土師器小皿			
8	5.8	1.2	4.8
9	6.1	1.6	4.2
Ⅳ区 Pit272			
土師器小皿			
10	7.1	1.5	5.4
Ⅳ区 Pit256			
土師器小皿			
11	7.4	1.4	5.9
Ⅳ区 Pit259			
土師器小皿			
12	6.1	1.4	4.9
Ⅳ区 Pit289			
土師器小皿			
13	7.8	1.3	5.5
14	7.6	1.3	5.4
Ⅳ区 Pit293			

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
土師器小皿			
15	5.9	1.1	5.4
Ⅳ区 Pit295			
土師器小皿			
16	7.8	1.2	5.8
Ⅳ区 Pit329			
土師器小皿			
17	6.2	1.3	5.3
18	5.8	1.1	4.5
Ⅳ区 Pit359			
土師器小皿			
19	7.2	1.5	5.0
20	7.1	1.9	4.8
Ⅳ区 Pit176			
土師器杯			
21	11.0	2.3	6.8
Ⅳ区 Pit200			
土師器杯			
22	10.3	2.8	6.1
Ⅳ区 Pit203			
土師器杯			
23	10.6	3.2	7.5
Ⅳ区 Pit227			
土師器杯			
24	10.7	2.4	7.5
Ⅳ区 Pit235			
土師器小皿			
25	6.5	1.2	5.8
土師器杯			
26	9.3	3.7	3.9

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
Ⅳ区 Pit259			
土師器杯			
27	9.8	2.3	7.1
Ⅳ区 Pit264			
土師器小皿			
28	5.8	1.1	4.1
土師器杯			
29	10.3	3.2	5.7
Ⅳ区 Pit278 RP05			
土師器杯			
30	11.0	2.4	7.1
Ⅳ区 Pit278			
土師器杯			
31	11.1	2.6	6.9
Ⅳ区 Pit278 RP03			
土師器杯			
32	11.2	2.3	7.3
Ⅳ区 Pit278			
土師器杯			
33	11.2	2.4	7.2
Ⅳ区 Pit278 RP04			
土師器杯			
34	11.6	2.3	7.9
Ⅳ区 Pit284			
土師器杯			
35	10.6	2.4	6.8
Ⅳ区 Pit305			
土師器杯			
36	9.7	2.5	6.4
Ⅳ区 Pit317			
土師器杯			
37	10.9	2.4	7.5

第6表　Ⅳ区出土土器計測表（2）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備考
346	Ⅳ区		K-88		祥		符通寶
347	Ⅳ区		K-88		祥		符通寶
348	Ⅳ区		K-88		祥		符元寶
349	Ⅳ区		K-88		不明		8個体分?
350	Ⅳ区		K-89		聖宋元寶	行	
351	Ⅳ区		K-90		皇宋通寶	真	
352	Ⅳ区		K-91		不明		
480	Ⅳ区		K-92		天聖元寶		
353	Ⅳ区		K-93		不明		

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備考
385	Ⅳ区		試掘トレンチ		紹聖元寶	篆	
386	Ⅳ区		試掘トレンチ		○○通寶	行	
560	Ⅳ区		表採	1	祥符元寶		
561			表採	1	皇宋通寶		
262			表採		不明		
263			表採		不明		
600			表採	3	政○通寶		
601			表採		銅銭		

第13表　出土古銭一覧表（9）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
187	Ⅰ区		S-06		不明		
188	Ⅰ区		S-10		元豊通寶	行	
189	Ⅰ区		S-12		寛永通寶		文銭
190	Ⅰ区		S-13		不明		
104	Ⅰ区	Ⅰ層	S-16内側		熙寧元寶	篆	
105	Ⅰ区	Ⅰ層	S-16内側		○○○寶		
196	Ⅰ区		S-17		景德元寶		白色
192	Ⅰ区		S-22		聖宋元寶	篆	
193	Ⅰ区		S-23		不明		
194	Ⅰ区		S-23		寛永通寶		新
195	Ⅰ区		S-25		永楽通寶		
198	Ⅰ区		S-27		不明		
197	Ⅰ区		S-27裏込内		不明		
199	Ⅰ区		S-45		皇宋通寶	真	
200	Ⅰ区		S-56		寛永通寶		新
201	Ⅰ区		S-56		寛永通寶		新
202	Ⅰ区		S-65		不明		
203	Ⅰ区		S-69		太○○寶		
225	Ⅰ区		S-76		開○通○		
204	Ⅰ区		S-83		不明		
205	Ⅰ区		S-84		熙寧元寶	真	
206	Ⅰ区		S-84		不明		
207	Ⅰ区		S-87		元祐通寶	篆	
208	Ⅰ区		S-87		不明		
209	Ⅰ区		S-87		不明		
210	Ⅰ区		S-87		○元通○		
211	Ⅰ区		S-88		寛永通寶		古
212	Ⅰ区		S-93		元祐通寶	篆	
213	Ⅰ区		S-93		○○元寶	真	
214	Ⅰ区		S-93		至道元寶	真	
481	Ⅰ区		S-93		景德元寶		
482	Ⅰ区		S-93				
519	Ⅰ区		S-93	1	治平元寶		
519	Ⅰ区		S-93	9			
215	Ⅰ区		S-95		元豊通寶	行	
216	Ⅰ区		S-95		皇宋通寶	篆	
217	Ⅰ区		S-95		祥符通寶		白っぽい
218	Ⅰ区		S-97		聖宋元寶	篆	
219	Ⅰ区		S-97		開元通寶		
220	Ⅰ区		S-97		天聖元寶	真	
221	Ⅰ区		S-97		皇宋通寶	真	
222	Ⅰ区		S-97		元豊通寶	篆	
223	Ⅰ区		S-99		紹聖元寶	真	
224	Ⅰ区		S-99		不明		
577	Ⅰ区		S-99	1			
226	Ⅰ区		S-102		元豊通寶	篆	
227	Ⅰ区		S-102		不明		
228	Ⅰ区		S-104		不明		
231	Ⅰ区		S-105		開元通寶		
232	Ⅰ区		S-105		景祐元寶	篆	
233	Ⅰ区		S-105		元豊通寶	篆	
234	Ⅰ区		S-105		不明		
520	Ⅰ区		S-105	1	皇宋通寶		不明1
229	Ⅰ区		S-105井戸枠内		至道元寶	行	
230	Ⅰ区		S-105井戸枠内		○符○○		
235	Ⅰ区		S-108		元豊通寶	篆	白っぽい
521	Ⅰ区		S-110	1	熙寧元寶		不明1
236	Ⅰ区		S-111		○宋元○		
495	Ⅰ区		S-119				
238	Ⅰ区		S-121		元重寶		
239	Ⅰ区		S-121		不明		
240	Ⅰ区		S-122		景祐元寶	真	
241	Ⅰ区		S-122		天禧通寶		
522	Ⅰ区		S-122	2			
242	Ⅰ区		S-123		政和通寶	篆	
243	Ⅰ区		S-123		嘉祐元寶	篆	
244	Ⅰ区		S-127		開元通寶		
245	Ⅰ区		S-127		景聖元寶	真	
246	Ⅰ区		S-127		天聖元寶	真	
247	Ⅰ区		S-127		元豊通寶	篆	
248	Ⅰ区		S-127		不明		
249	Ⅰ区		S-127		開元通寶		
250	Ⅰ区		S-127		淳熙元寶		背「十二」
251	Ⅰ区		S-127		不明		
42	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		紹定通寶		背「元」
43	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		元豊通寶	篆	
44	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		天聖元寶	真	
45	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		至和通寶	篆	
46	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		開元通寶		
47	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		景德元寶		
48	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		祥符元寶		
49	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		天禧通寶		
50	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		天祐通寶	行	
51	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		元豊通寶	行	
52	Ⅰ区	Ⅰ層	S-127下層		不明		
483	Ⅰ区		S-144				
484	Ⅰ区		S-147				
485	Ⅰ区		S-147				
486	Ⅰ区		S-147				
487	Ⅰ区		S-147				
488	Ⅰ区		S-147		景德元寶		
489	Ⅰ区		S-147				
490	Ⅰ区		S-147				
491	Ⅰ区		S-147				
492	Ⅰ区		S-147				
493	Ⅰ区		S-147				
494	Ⅰ区		S-147				
237	Ⅰ区		S-237		永楽通寶		
252	Ⅰ区		Pit72		天禧元寶		
253	Ⅰ区		Pit77		天聖元寶	真	

第７表　出土古銭一覧表（3）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
254	Ⅰ区		Pit89		天聖元寶	真	
255	Ⅰ区		Pit98		熙寧元寶	真	
256	Ⅰ区		Pit100		明道元寶	篆	
257	Ⅰ区		Pit100		熙寧元寶	篆	
258	Ⅰ区		Pit100		天禧通寶		
259	Ⅰ区		Pit100		皇宋通寶	真	
260	Ⅰ区		Pit100		景德元寶		
261	Ⅰ区		Pit100		熙寧元寶	篆	
1	Ⅰ区	Ⅰ層	A-2				
2	Ⅰ区	Ⅰ層	A-2		聖宋元寶	篆	
400	Ⅰ区	Ⅰ層	A-2				
419	Ⅰ区	Ⅰ層	A-2		寛永通寶		
401	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		熙寧元寶		
402	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		大宋元寶		
403	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元豊通寶		
404	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		聖宋元寶		
405	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元豊通寶		
406	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇宋通寶		
407	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		嘉泰通寶		
3	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇〇通〇	篆	
4	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇宋通寶	真	
5	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元豊通寶	篆	
6	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		〇元通〇		
7	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		政和通寶		
8	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		不明		
9	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇宋通寶	篆	
10	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		紹聖元寶	篆	
11	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		祥符通寶		
12	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		〇祐元〇	真	
13	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		開元通寶		
14	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇宋通寶	真	
15	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		至道元寶	真	
16	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元祐通寶	行	
17	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		天聖元寶	真	
18	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		嘉祐元寶	篆	
19	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		政和通寶	篆	
20	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		天禧元寶		
21	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		咸平元寶		
22	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		不明		
23	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		皇宋通寶	篆	
24	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		開通元寶		
25	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		至道元寶	真	
26	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元豊通寶	行	
27	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		元祐通寶	篆	
28	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		〇〇通寶	行	
29	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3		不明		
440	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3				
562	Ⅰ区	Ⅰ層	A-3	1			
30	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		元祐通寶	行	
31	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		天禧通寶		

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
32	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		太平通寶		
33	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		不明		
34	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		不明		
408	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		皇宋通寶		
409	Ⅰ区	Ⅰ層	A-4		開元通寶		
35	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		洪武通寶		
36	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		不明		
37	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		〇〇通寶	真	
38	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		〇〇通〇	行	
410	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		寛永通寶		
411	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		寛永通寶		
412	Ⅰ区	Ⅰ層	B-2		寛永通寶		
413	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		嘉泰通寶		
414	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		淳祐元寶		
415	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3				
416	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		開元通寶		
39	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		嘉定通寶		背「八」
53	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		不明		
54	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		政和通寶	真	
55	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		天聖元寶	篆	
56	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		天聖元寶	真	
57	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		不明		
58	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		永〇〇寶		
59	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		開元通寶		
60	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		天禧通寶		
61	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		元豊通寶	行	
62	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		天聖元寶	真	
63	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		宣和通寶	真	
64	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		天禧通寶		
65	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		不明		
66	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		政和通寶	真	
67	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		熙寧元寶	篆	
68	Ⅰ区	Ⅰ層	B-3		永楽通寶		
69	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		元豊通寶	行	
70	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		不明		
71	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		皇宋通寶	真	星孔
72	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		元豊通寶	篆	
73	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		不明		
74	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		開元通寶		
75	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		不明		
76	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		不明		
78	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4				
417	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		開元通寶		
418	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4				
420	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		皇宋通寶		
421	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		開元通寶		
422	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4				
423	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4		嘉定通寶		
424	Ⅰ区	Ⅰ層	B-4				
79	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		淳熙元寶		背「十四」

第8表　出土古銭一覧表（4）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
80	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		元豊通寶	行	
81	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		皇宋通寶	篆	
82	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		皇宋通寶	真	
83	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		咸平元寶		
84	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		元祐通寶	篆	
85	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		皇宋通寶	真	
86	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		宣和通寶	篆	
87	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		皇宋通寶	篆	
88	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		元祐通寶	行	
89	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		聖宋元寶	篆	
90	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		永楽通寶		
91	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		嘉祐通寶	篆	
92	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		天禧通寶		
93	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		熙寧元寶	篆	
94	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		聖宋元寶	篆	
95	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		開元通寶		
96	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		嘉祐元寶	真	
97	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		紹聖元寶	行	
98	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		政和通寶	真	
99	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		皇宋通寶	真	
100	Ⅰ区	Ⅰ層	C-2		洪武○寶		
77	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		元豊通寶	行	
101	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		元祐通寶	篆	
102	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		天禧通寶		
103	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		天聖元寶	真	
106	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		元豊通寶	真	
107	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		熙寧元寶	真	
108	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		不明		
109	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		○寧元○	篆	
110	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		永○通○		
425	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3		寛永通寶		
426	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3				
503	Ⅰ区	Ⅰ層	C-3	4			
143	Ⅰ区	Ⅰ層	C-4		開元通寶		
144	Ⅰ区	Ⅰ層	C-4		皇宋通寶	篆	
145	Ⅰ区	Ⅰ層	C-4		皇宋通寶	真	
146	Ⅰ区	Ⅰ層	D-2		寛永通寶		古
147	Ⅰ区	Ⅰ層	D-2		寛永通寶		古
148	Ⅰ区	Ⅰ層	D-3		開元通寶		背「〜」
149	Ⅰ区	Ⅰ層	D-3		開元通寶		
158	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		聖宋元寶	篆	
159	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		洪武通寶		白色
160	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		政和通寶	真	
161	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		○○元寶	真	
162	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4				
427	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		洪武通寶		
429	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4		元豊通寶		
430	Ⅰ区	Ⅰ層	D-4				
40	Ⅰ区	Ⅱ層	B-3		紹聖元寶	篆	
41	Ⅰ区	Ⅱ層	B-3		元豊通寶	篆	

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
502	Ⅰ区	Ⅱ層	B-3	2	太平通寶		
111	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元祐通寶	篆	
112	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		皇宋通寶	篆	
113	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		紹聖元寶	行	
114	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3				
115	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		嘉泰通寶		背「三」
116	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		篆		
117	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		聖宋元寶	行	
118	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		景徳元寶		
119	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		天聖元寶	真	
120	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		政和通寶	篆	
121	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		紹聖元寶	篆	
122	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		景徳元寶		
123	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		太平通寶		
124	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		嘉祐通寶	篆	
125	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		開元通寶		
126	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		熙寧元寶	真	
127	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		政和通寶	真	
128	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元祐通寶	行	
129	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元豊通寶	行	
130	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		皇宋通寶	真	
131	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元豊通寶	行	
132	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元豊通寶	行	
133	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		熙寧元寶	真	
134	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元祐通寶	行	星孔
135	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		元祐通寶	行	
136	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		嘉祐通寶	真	星孔
137	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		皇宋通寶	真	星孔
138	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		紹聖元寶	篆	
139	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		天禧通寶		
140	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		皇宋通寶	篆	
141	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3		○○通寶	行	
142	Ⅰ区	Ⅱ層	C-3				
150	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		聖宋元寶	行	
151	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		熙寧元寶	篆	
152	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		熙寧元寶	篆	
153	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		開元通寶		
154	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3				
155	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		元○○寶	行	
156	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		不明		
157	Ⅰ区	Ⅱ層	D-3		祥符元寶		
501	Ⅰ区	攪乱層	B-1	1			
512	Ⅰ区		K-1	1	寛永通寶		不明2
513	Ⅰ区		K-4	1	祥符元寶		
163	Ⅰ区		K-11		寛永通寶		古
164	Ⅰ区		K-11		開元通寶		
165	Ⅰ区		K-12		洪武通寶		薄く白色
166	Ⅰ区		K-12		祥符通寶		
514	Ⅰ区		K-17	1	咸平元寶		不明3
167	Ⅰ区		K-19		寛永通寶		古

第9表　出土古銭一覧表（5）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
168	Ⅰ区		K-19		不明		鉄銭カ
169	Ⅰ区		K-19		不明		
170	Ⅰ区		K-20		熙寧元寶	真	
171	Ⅰ区		K-20		天聖元寶	篆	
515	Ⅰ区		K-26	1	寛永通寶		
516	Ⅰ区		K-35	1	寛永通寶		不明2
172	Ⅰ区		K-55		寛永通寶		古
173	Ⅰ区		K-68		開元通寶		
174	Ⅰ区		K-70		不明		
175	Ⅰ区		K-70		皇宋通寶	真	
176	Ⅰ区		K-71		不明		
177	Ⅰ区		K-72				鉄銭
178	Ⅰ区		K-72		洪武通寶		
179	Ⅰ区		K-72		不明		
180	Ⅰ区		K-72		不明		179同個体
181	Ⅰ区		K-75		元豊通寶	篆	
182	Ⅰ区		K-76		紹聖元寶	篆	
183	Ⅰ区		K-76		紹聖元寶	篆	
184	Ⅰ区		K-76		不明		
185	Ⅰ区		K-76		不明		
186	Ⅰ区		K-76		開元通寶		
354	Ⅳ区		S-140		咸平元寶		
355	Ⅳ区		S-140		開元通寶		
356	Ⅳ区		S-140		永○○寶		
357	Ⅳ区		S-141		元豊通寶	篆	2個体
358	Ⅳ区		S-141		皇宋通寶	真	
359	Ⅳ区		S-141		不明		
360	Ⅳ区		S-141		天禧通寶		
361	Ⅳ区		S-141		皇宋通寶		
523a	Ⅳ区		S-141	1	開元通寶		不明2
523b	Ⅳ区		S-141	1	天○通寶		
578	Ⅳ区		S-144	1	○元○寶		不明1
524	Ⅳ区		S-145	1			
525	Ⅳ区		S-146	3			
526a	Ⅳ区		S-147	1	元祿通寶		不明6
526b	Ⅳ区		S-147	1	開元通寶		
527	Ⅳ区		S-147	1	祥符通寶		
528a	Ⅳ区		S-147	1	皇宋通寶		不明3
528b	Ⅳ区		S-147	1	開元通寶		
528c	Ⅳ区		S-147	1	洪武通寶		
528d	Ⅳ区		S-147	1	永楽通寶		
528e	Ⅳ区		S-147	1	大定通寶		
529	Ⅳ区		S-149	2			
530	Ⅳ区		S-152	1			
362	Ⅳ区		S-154		不明		
363	Ⅳ区		S-154		天聖元寶	真	
364	Ⅳ区		S-155		開元通寶		
579	Ⅳ区		S-155	1			
580	Ⅳ区		S-155	2			
581	Ⅳ区		S-155	3			

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
531a	Ⅳ区		S-155	1	祥元符寶		不明4
531b	Ⅳ区		S-155	1	開元通寶		
531c	Ⅳ区		S-155	1	元祿通寶		
532a	Ⅳ区		S-156	1	永楽通寶		不明1
532b	Ⅳ区		S-156	1	洪○○寶		
582	Ⅳ区		S-156	1	洪武通寶		不明1
365	Ⅳ区		S-156		不明		
366	Ⅳ区		S-156		不明		
367	Ⅳ区		S-156		不明		
368	Ⅳ区		S-156		嘉祐通寶	真	
583	Ⅳ区		S-160	2			
533a	Ⅳ区		S-161	1	永楽通寶		不明2
533b	Ⅳ区		S-161	1	○○元寶		
534	Ⅳ区		S-162	6			
584	Ⅳ区		S-162	4	○○○寶		不明3
585	Ⅳ区		S-163	1			
369	Ⅳ区		S-163		○楽○寶		
370	Ⅳ区		S-163		不明		
371	Ⅳ区		S-163		元祐通寶	篆	
535a	Ⅳ区		S-164	1	永楽通寶		
535b	Ⅳ区		S-164	1	元豊○寶		
536	Ⅳ区		S-165	3			
537	Ⅳ区		S-168	1	元祠○寶		不明1
586	Ⅳ区		S-171	1	永楽通寶		不明1
538	Ⅳ区		S-172	1	政和通寶		
587	Ⅳ区		S-176	1	元豊通寶		
372	Ⅳ区		S-178		永楽通寶		
373	Ⅳ区		S-178		不明		
374	Ⅳ区		S-178		不明		
539	Ⅳ区		S-179	1			
588	Ⅳ区		S-179	4	永楽通寶		不明3
375	Ⅳ区		S-180		○○○寶		
376	Ⅳ区		S-180		不明		
377	Ⅳ区		S-180		咸平元寶		
378	Ⅳ区		S-180		咸平元寶		
379	Ⅳ区		S-180		永楽通寶		
380	Ⅳ区		S-180		淳祐元寶		背「元」
381	Ⅳ区		S-180		景徳元寶		
382	Ⅳ区		S-180		熙寧元寶	篆	
383	Ⅳ区		S-180		不明		
384	Ⅳ区		S-180		不明		
540	Ⅳ区		S-181	1	祥符元寶		不明1
589	Ⅳ区		S-186	1	天元○寶		
590	Ⅳ区		S-188	5			
591	Ⅳ区		S-193	1	○寧○○		
541a	Ⅳ区		S-193	1	永楽通寶		不明5
541b	Ⅳ区		S-193	1	元豊通寶		
541c	Ⅳ区		S-193	1	○和通寶		
542	Ⅳ区		S-195	1	永楽通寶		
543a	Ⅳ区		S-198	1	○聖○○		不明1

第10表　出土古銭一覧表（6）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
543b	Ⅳ区		S-198	1	皇宋通寶		
592a	Ⅳ区		S-200	1	洪武通寶		
592b	Ⅳ区		S-200	1	永楽通寶		
593	Ⅳ区		S-211	2			
594	Ⅳ区		S-211	1	永楽通寶		不明5
544	Ⅳ区		S-222	1	○○通○		
387	Ⅳ区		Pit153		大通定寶		
595	Ⅳ区		Pit154	1			
388	Ⅳ区		Pit156		元符通寶	篆	
545	Ⅳ区		Pit164	1	嘉定通寶		不明3
596	Ⅳ区		Pit171	2			
546	Ⅳ区		Pit189	2			
547	Ⅳ区		Pit195	1	祥符元寶		
548	Ⅳ区		Pit196	1			
549	Ⅳ区		Pit198	1			
550	Ⅳ区		Pit207	1			
551	Ⅳ区		Pit209	1	○元通寶		
552	Ⅳ区		Pit224	1	○元通寶		
597	Ⅳ区		Pit240	1			
553	Ⅳ区		Pit245	1	○元通寶		
554	Ⅳ区		Pit247	1	○元通寶		
555	Ⅳ区		Pit261	1			
556	Ⅳ区		Pit269	1	元豊通寶		
557a	Ⅳ区		Pit272	1	元○○寶		不明1
557b	Ⅳ区		Pit272	1	○元寧寶		
598	Ⅳ区		Pit272	1	○元○○		
599	Ⅳ区		Pit305	1			
558	Ⅳ区		Pit317	1			
559	Ⅳ区		Pit319	1			
504	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	16	祥符通寶		
505	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	1	元祐通寶		
563	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	1			
564a	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	1	永楽通寶		不明15
564b	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	1	元豊通寶		
564c	Ⅳ区	Ⅰ層	F-2	1	政和通寶		
565	Ⅳ区	Ⅰ層	F-3	2			
506	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4	4			
264	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		大観通寶		
265	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		紹聖元寶	行	
270	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		○○○寶		
271	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		不明		
272	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		○○元寶	篆	
273	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		不明		
274	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		不明		
428	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4				
266	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		開元通寶		
267	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		聖宋元寶	行	
268	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		不明		
269	Ⅳ区	Ⅰ層	F-4		不明		
275	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		○符元寶		

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
276	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
277	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
278	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
279	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		洪武通寶		
280	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		唐國通寶	篆	
281	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		○○元寶		
282	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		元○○○	行	
283	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		○○元寶		
284	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		○宋○寶		
285	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		無文銭系
286	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
287	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
288	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
289	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
290	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		洪武通寶		
291	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
292	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		永楽通寶		
293	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		永楽通寶		
294	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
295	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		大観通寶		
296	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		○○元寶		
297	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		景祐元○	真	
298	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		不明		
431	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		永楽通寶		
432	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
433	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
434	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
435	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		政和通寶		
436	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		洪武通寶		
437	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		永楽通寶		
438	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		嘉定通寶		
439	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
455	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
456	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
457	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
458	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
459	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		熙寧元寶		
460	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		皇宋通寶		
461	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
462	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5		聖宋元寶		
463	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5				
507a	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	皇宋通寶		不明20
507b	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	永○通寶		
507c	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	天元通寶		
507d	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	天聖元寶		
566	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	○元○○		不明3
567	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1			
568	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	祥符元寶		
569a	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	永○○○		不明5
569b	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	淳熙元寶		

第11表　出土古銭一覧表（7）

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
569c	Ⅳ区	Ⅰ層	F-5	1	熙寧元寶		
299	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2		元祐通寶	行	
508a	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	洪武通寶		不明6
508b	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	熙寧元寶		
508c	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	皇宋通寶		
509a	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	永楽通寶		不明1
509b	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	紹聖元寶		
570a	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	祥符元寶		不明1
570b	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	太平通寶		
570c	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	1	祥符元寶		
571	Ⅳ区	Ⅰ層	G-2	3			
572a	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3	1	○元○寶		
572b	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		聖宋元宝		
300	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		元祐通寶	篆	
301	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		永楽通寶		
302	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		洪武通寶		
303	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		永楽通寶		
304	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		景祐元寶	真	
305	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
306	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		元祐通寶	行	堺型(背がフラット)
307	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		永楽通寶		
308	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
309	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		皇宋通寶	篆	
310	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		天聖元寶	真	
311	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		紹聖元寶	篆	
312	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		聖宋元寶	行	
313	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
314	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
315	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
316	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		祥○元寶		
317	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		2個体分
318	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		嘉祐元寶	真	
319	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		嘉祐元寶		元
320	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		元豊通寶	行	
321	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
322	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		皇宋通寶	篆	
323	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		不明		
324	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		天禧通寶		
325	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		天聖○○	篆	
326	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3		洪武通寶		大字
509c	Ⅳ区	Ⅰ層	G-3	1	皇宋通寶		
327	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		不明		
328	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		不明		2個体分?
446	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		天聖元寶		
447	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4				
448	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		永楽通寶		
449	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		元豊通寶		
450	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		永楽通寶		
451	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		元祐通寶		
452	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4		開元通寶		

整理番号	区	層位	出土遺構	点数	古銭名	書体	備　　考
453	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4				
454	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4				
510	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4	1	天禧通寶		
511a	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4	1	政○○寶		不明5
511b	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4	1	元○通寶		
511c	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4	1	朝鮮通寶		
573	Ⅳ区	Ⅰ層	G-4	1			
574	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5	1	○元○寶		不明1
441	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		元符通寶		
442	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		祥符通寶		
443	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		天禧通寶		
444	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		治平元寶		
445	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		開元通寶		
464	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		天禧通寶		
465	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5				
466	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		紹聖元寶		
467	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		永楽通寶		
468	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		○元重寶		
469	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5				
470	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		永楽通寶		
471	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		聖宋通寶		
472	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5				
473	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5				
329	Ⅳ区	Ⅰ層	G-5		開元通寶		
474	Ⅳ区	Ⅰ層	K-81				
475	Ⅳ区	Ⅰ層	K-83				
476	Ⅳ区	Ⅰ層	K-83		天聖元寶		
477	Ⅳ区	Ⅰ層	K-83				
479	Ⅳ区	Ⅰ層	K-84				
478	Ⅳ区	Ⅰ層	K-92				
330	Ⅳ区		K-80		寛永通寶		古
331	Ⅳ区		K-80		寛永通寶		古
332	Ⅳ区		K-82		寛永通寶		古
333	Ⅳ区		K-82		永楽通寶		
334	Ⅳ区		K-84		不明		
517	Ⅳ区		K-84	8			
575	Ⅳ区		K-84	2			
335	Ⅳ区		K-85		景祐元寶	篆	
518	Ⅳ区		K-85	1	大○通寶		不明6
336	Ⅳ区		K-86		不明		
576	Ⅳ区		K-86	1	元○祠○		
337	Ⅳ区		K-88		祥符通寶		
338	Ⅳ区		K-88		祥符通寶		
339	Ⅳ区		K-88		祥符通寶		
340	Ⅳ区		K-88		皇宋通寶	篆	
341	Ⅳ区		K-88		祥符通寶		
342	Ⅳ区		K-88		天禧通寶		
343	Ⅳ区		K-88		祥符元寶		
344	Ⅳ区		K-88		元豊通寶	行	
345	Ⅳ区		K-88		祥符通寶		

第12表　出土古銭一覧表（8）

博多小学校敷地内発見の石塁遺構を構成する石質調査報告

九州産業大学工学部教授
河野忠臣

平成11年9月

本調査報告は、福岡市教育委員会の委託によって、関係資料の収集・現地調査および室内作業を行ってとりまとめたもので、その概要は下記のとおりである。

1．目的：福岡市博多区奈良屋町博多小学校敷地に、ほぼ北北東－南南西方向に直線状に築かれている元寇防塁と推定される構築物について、構成石材の特徴を調査し、石材として利用されている岩石の利用状況及び石材の産地を明らかにすることを目的とした。

2．調査方法：不連続的に並ぶ石塁遺構を位置図をもとにして、南側から北側にA、B、C、Dの4つのエリアに区分し、各エリアごとに写真撮影に基づいて幾つかのユニットに細分し、さらに、各ユニットごとに防塁を構成している石材に一連の番号を付して現場での調査台帳とした。これに各石材ごとにその特徴、特にサイズ、形状、円磨度、風化程度、亀裂の多少、色調、岩石種等を記載し、室内作業の資料とした。石材産地は福岡市周辺の地質図（地質調査所監修：日本地質図体系九州地方）を参考にして現地で確認後、写真撮影し添付資料とした。

3．調査結果：（1）防塁を構成する石材の岩石種
（2）石材の各種特徴と構成比
（3）石材の産地

4．付表および付図
付表1～4：石材のサイズ、形状、円磨度、風化程度、亀裂、色調、岩石種別、出現頻度（エリア別）
付図1：福岡市周辺地質図
付図2：エリア区分図
付図3：（1）防塁中の代表的石材（礫岩）
（2）名島海岸に見られる礫岩
（3）防塁中の石材（砂岩）に見られる欧穴状のくぼみ
（4）防塁中の石材（砂岩）に発達する亀裂
（5）防塁中に見られる数少ない塩基性岩

調査結果

（1）防塁を構成する石材の岩石種

本防塁を構成する石材の種類は、礫岩と砂岩が圧倒的に多い。このほか、塩基性岩類、玄武岩、閃緑岩、ひん岩、珪化木などが見られるが、これらの出現頻度は極めて低い。それぞれの岩石の特徴は下記の通りである。

①礫岩：構成要素が通常径2㎜以上の粒径の岩片または鉱物粒からなる砕屑岩を指し、径数㎝オーダーのかなり大きい岩片が含まれていることも多い。このほか構成物質の間を充填し、接着剤の役目を果たしている細粒の物質も含まれている。これらの細粒物質は、粘土物質、炭酸カルシウム、珪酸等である。この岩石は堆積岩の中でも、堆積の始まりの時期に基底部に見られるのが普通であるが、

堆積の間隙がある場合は比較的薄い層が何層も繰り返し、堆積輪廻が見られる場合もある。より細粒の砂岩やシルト岩を伴うことが多く、礫岩のみが厚く広域にわたって分布することは少ない。

防塁の石材として利用されている礫岩は、一般に比較的濃い褐色～灰褐色を呈するのが特徴で、礫径は数㎜～数㎝オーダーで、砂質部分を相当量含み砂質礫岩に相当する場合も多い。また、角のとれた亜円礫～亜角礫状で、不定形をなす場合が多いが、丸みを帯びた直方体～楕円体状をなす場合もある。風化度は一般に弱風化～中風化程度であり、概して硬質である。

福岡市近傍では、東区名島海岸～内陸部の松崎から若宮付近の丘陵地帯にほぼ東西方向に帯状分布する。これらの礫岩は日本地質図体系九州地方によれば、地質学的には次に記述する砂岩と一連の堆積物で、新生代古第三紀漸新世（2300万～3500万年前）に堆積したものであり、志免層群名島層に分類されている。

②砂岩：構成要素が礫岩より小さく、通常２㎜～0.02㎜程度の粒径の岩片または鉱物粒からなる砕屑岩を指す。礫岩の場合と同様に粒間を埋める膠結物は、粘土物質、炭酸カルシウム、珪酸等である。また、部分的に礫が混じる場合には、礫質砂岩と呼ばれたり、より細粒部が顕著な場合はシルト質砂岩、凝灰質な場合は、凝灰質砂岩と呼ばれる場合がある。この他、粒の形や構成鉱物種を基準にした分類がなされる場合もある。

防塁の石材として利用されている砂岩は一般に灰褐色を呈し、本来の砂岩の他に構成粒子がやや細粒でかつ凝灰質なものが含まれている。すなわち、シルト質砂岩～凝灰質シルト岩も含まれているが、本報告では砂岩として一括表示した。礫岩と同様に、一般に比較的角のとれた亜円礫～亜角礫状で、不定形をなす場合が多いが、礫岩に比べると全体として丸みを帯びた直方体～楕円体をなす場合が多い。風化度は平均的には中風化程度であり、礫岩に比べると、風化が進み脆弱化した強風化岩の比率が高い。また、亀裂が発達したり、表面の剥離が見られる場合がある。このほか、特徴的形状として例は少ないが、表面に径数㎝の円形のくぼみ（付図３（３））の発達が見られる場合がある。これは海岸部での水の影響によって形成されたものであり、これらの石材が沿岸部から供給されたことを強く示唆している。

この砂岩は、福岡市東部では前述の礫岩と一体となって一つの地質単位を構成しており、一括して礫岩および砂岩（シルト岩を含む）の一連の地層を志免層群名島層と呼んでいる。したがって、狭い範囲では礫岩が優勢な領域と砂岩が優勢な領域の違いはあるが、礫岩と同様に東区名島海岸～内陸部の松崎から若宮付近の丘陵地帯に分布する。

なお、西区生の松原における元寇防塁の東側半分の主要石材である砂岩は、堆積年代は本砂岩と同じ新生代古第三紀漸新世であるが、地質学的には上位の堆積層である姪浜層群姪浜層に相当するもので、本砂岩とは異質のものである。

③塩基性岩類：鉄・マグネシウムに富んだ岩石で、一般に優黒色～暗緑色の岩石を指し、成因によって細分される。次に記述する玄武岩を別にすると、本防塁の石材として利用されているのは、輝緑岩と塩基性変成岩である。付着物の付かない新鮮な表面は、一般に優黒色～暗緑色を呈する。形状はほとんどの場合、亜円礫～円礫状の不定形～楕円体を呈し、風化度は低く亀裂もほとんど見られない。このような特徴は沿岸部における水の影響下にあったことを示唆している。この塩基性岩類は福岡市周辺では篠栗周辺に広く分布するが、本防塁の近辺には顕著な分布地は見られない。

④玄武岩：塩基性火山岩類の一種で、優黒色で緻密な岩石である。石材としては径10数㎝の亜角礫～亜円礫の形状で見られるが、石材としての利用頻度は極めて低い。福岡市近傍では能古島の頂部に広く分布し、能古島西部の海岸には径10数㎝程度の亜円礫～円礫が多数散在しているが、本防塁の近

辺には目立った分布は見られない。

⑤閃緑岩：広い意味では花崗岩類に含まれる中性の深成火成岩類（SiO_2含有量に基づく区分の中で、SiO_2量が中程度の岩石）で、やや優黒色で粗粒の岩石である。花崗岩に比べると鉄・マグネシウムに富んだ岩石であり、地質学的には広域に分布することが多い。楕円体～球状を呈しており、風化度は低く亀裂もほとんど見られない。上記の塩基性岩類と同様に、石材としての利用頻度は極めて低い。福岡市周辺では内陸部に花崗岩類とともに広く分布するが、本防塁の近辺には目立った分布は見られない。

⑥ひん岩：斑状の組織を示す優白色の岩石であり、地質学的には岩脈として産出し、一般に広域に分布することはない。石材としては径10数㎝の円礫～亜円礫の形状で見られ、沿岸部の礫を採取したものと推定される。石材としての利用頻度は極めて低い。

⑦珪化木：樹木の細胞壁や細胞中に外部から珪酸溶液がしみ込み、内容物と置換・沈殿し樹木全体がオパールまたはめのう化したもので、非常に硬質な樹木の化石である。これと同様の珪化木は、名島の帆柱石として名島海岸の名勝地に見られる。すなわち、石材としての利用が極めて例外的とは言え、この珪化木が石材として利用されていることは、この地の防塁を構成する石材の供給地が名島海岸近傍であったことを強く示唆するものと言える。

（2）石材の各種特徴と構成比

調査した石材のサイズ、形状、円磨度、風化程度、亀裂の多少、色調、岩石種について、ユニット別の出現頻度数をエリアごとにまとめた一覧表が付表１～４（本文末尾に添付）である。この付表１～４に基づいて、防塁全体の調査項目別出現頻度を百分率で表すと、下記のようになる。

〈サイズ〉	20㎝未満 33%	20㎝以上 40㎝未満 52%	40㎝以上 60㎝未満 11%	60㎝以上 4％
〈形状〉	直方体 13%	楕円体 9％	球 2％	不定形 76%
〈円磨度〉	角礫 5％	亜角礫 45%	亜円礫 44%	円礫 6％
〈風化度〉	新鮮 3％	弱風化 40%	中風化 41%	強風化 16%
〈亀裂〉	無 27%	少 35%	中 24%	多 14%
〈色調〉	黒色 14%	灰色 43%	褐色 42%	その他(緑、白) 1％
〈岩石種〉	礫岩 60%	砂岩 35%	その他（塩基性岩ほか） 5％	

注：〈岩石種〉の中で、その他の岩石は石材としての構成比は５％であるが、
サイズの小さいものが多く、防塁全体の容積比は２～３％程度と推定される。

（3）石材の産地

本防塁を構成する石材は、礫岩と砂岩が圧倒的に多く、しかもこの2つの岩石は地質学的には同一の地層を形成する一体不可分のものである。これと同一の地層は東区名島海岸から内陸部に広く分布している。すなわち、付図1に示す名島海岸から内陸部の松崎、若宮地区に至るアミ部分の領域がこれに相当する。このほか、石材の産地を示唆する事実としては、数は少ないが砂岩表面に見られる甌穴状のくぼみ（付図3（3））の存在があげられる。また、礫岩・砂岩以外の少数の岩石は、いずれもほぼ共通して円磨度の高い亜円礫～円礫として見られる。これらの事実は沿岸部における状況に対比されるものである。さらに、石材中に見られる特殊な例として珪化木があり、これと同一のものが名島海岸に見られる。この名島海岸一帯には、広く礫岩・砂岩が分布することを考えあわせると、本防塁の主要な石材産地は東区名島の沿岸部一帯であると推定される。〈付図3（1）（2）を参照〉

このほか、礫岩・砂岩以外の、塩基性岩類、玄武岩、閃緑岩、ひん岩等の石材としての利用頻度の小さい岩石は、上記のようにほとんどの場合円礫～亜円礫状であり、内陸部ではなく沿岸部の水の作用する地域で採取されたものであることを物語っているが、本防塁の近辺でこれらの岩石の産出地を特定することはできなかった。ただし、塩基性岩類と玄武岩は西区生の松原における元寇防塁に見られる例と同様に、これらの産地は能古島である可能性が高い。

付表１　石材のサイズ、形状、円磨度、亀裂、色調、岩石種別出現頻度（エリアＡ）

ユニット番号	石材個数	サイズ(cm)				形状				円磨度				風化度				亀裂				色調				岩石名						備考
		20未満	20~40	40~60	60以上	直方体	楕円体	球	不定形	角礫	亜角礫	亜円礫	円礫	新鮮	弱風化	中風化	強風化	無	少	中	多	黒	灰	褐	その他	礫岩	砂岩	塩基性岩	玄武岩	閃緑岩	その他	
1	34	8	22	2	2	12	9	0	13	5	17	10	2	0	22	12	0	9	20	4	1	3	12	19	0	23	8	3	0	0	0	
2	31	10	20	0	1	6	2	0	23	3	14	1	13	0	16	13	2	10	12	4	5	2	8	21	0	21	9	1	0	0	0	
3	32	17	9	3	3	1	2	0	29	0	21	11	0	0	7	24	1	6	16	7	3	4	16	12	0	14	13	0	3	2	0	
4	20	16	4	0	0	1	0	0	19	1	12	7	0	0	7	13	0	7	9	4	0	0	7	12	1	10	7	1	2	0	0	
5	51	15	27	7	2	8	0	0	43	1	21	29	0	0	9	42	0	10	18	20	3	1	28	22	0	27	24	0	2	0	0	
6	36	14	15	7	0	1	1	0	34	0	6	30	0	0	8	28	0	7	17	12	0	2	23	11	0	20	11	4	2	1	0	
7	40	13	17	5	5	4	1	0	35	0	25	14	1	1	16	21	2	8	20	7	5	8	25	7	0	18	15	2	5	0	0	
8	18	13	4	1	0	0	0	1	17	1	11	6	0	1	10	4	3	8	6	3	1	4	10	4	0	5	4	2	5	2	0	
9	3	3	0	0	0	0	0	0	3	0	1	2	0	0	0	3	0	1	0	1	1	1	2	0	0	0	0	1	2	0	0	
10	29	26	1	2	0	4	0	0	25	0	9	18	2	0	10	11	8	3	11	7	8	4	15	10	0	6	14	5	4	0	0	
11	40	10	25	4	1	6	6	2	26	0	26	10	4	1	13	17	9	5	20	9	6	4	23	13	0	28	12	0	0	0	0	
12	33	11	22	0	0	1	2	0	30	3	16	14	0	0	15	14	4	4	11	11	7	4	16	12	1	16	15	1	1	0	0	
13	4	4	0	0	0	0	0	0	4	1	1	2	0	0	0	3	1	0	1	2	1	0	2	2	0	0	4	0	0	0	0	
14	41	13	24	3	1	2	3	0	36	3	17	20	1	0	19	14	8	3	18	13	7	3	16	21	1	31	9	0	0	1	0	
15	48	23	17	7	1	4	3	1	40	6	21	21	0	0	14	20	14	7	10	17	14	1	27	20	0	38	10	0	0	0	0	
16	15	5	9	1	0	0	1	0	14	1	5	8	1	1	9	2	3	4	7	3	1	4	6	5	0	11	2	1	1	0	0	
17	20	6	11	3	0	3	0	0	17	3	10	7	0	0	3	14	3	0	9	6	5	0	3	17	0	16	4	0	0	0	0	
18	18	6	12	0	0	1	1	0	16	1	8	8	1	1	6	7	4	5	3	6	4	1	9	8	0	10	7	0	0	1	0	
19	4	1	3	0	0	1	0	0	3	1	0	3	0	0	0	2	2	0	2	1	1	0	1	3	0	3	1	0	0	0	0	
20	7	1	6	0	0	0	0	0	7	0	3	4	0	0	4	2	1	1	3	1	2	1	3	3	0	2	5	0	0	0	0	
21	7	2	5	0	0	1	0	0	6	0	6	1	0	0	3	3	1	1	3	2	1	0	4	3	0	5	2	0	0	0	0	
22	6	2	4	0	0	0	0	0	6	1	3	2	0	0	1	2	3	0	2	2	2	0	3	3	0	3	3	0	0	0	0	
23	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	
24	18	6	9	3	0	3	3	0	12	2	5	8	3	0	5	6	7	2	1	7	8	2	5	9	2	6	8	4	0	0	0	
25	19	7	9	3	0	2	6	1	10	1	4	12	2	0	6	7	6	1	7	6	5	2	9	7	1	5	14	0	0	0	0	
26	5	1	3	0	1	0	2	0	3	0	0	3	2	0	1	1	3	0	1	2	2	1	2	2	0	1	4	0	0	0	0	
27	9	1	4	4	0	0	4	0	5	0	1	5	3	0	3	5	1	2	2	4	1	3	4	2	0	1	8	0	0	0	0	
計	589	234	283	55	17	61	46	5	477	34	264	256	35	5	207	290	87	104	229	161	95	55	280	248	6	321	213	25	23	7	0	

付表２　石材のサイズ、形状、円磨度、亀裂、色調、岩石種別出現頻度（エリアＢ）

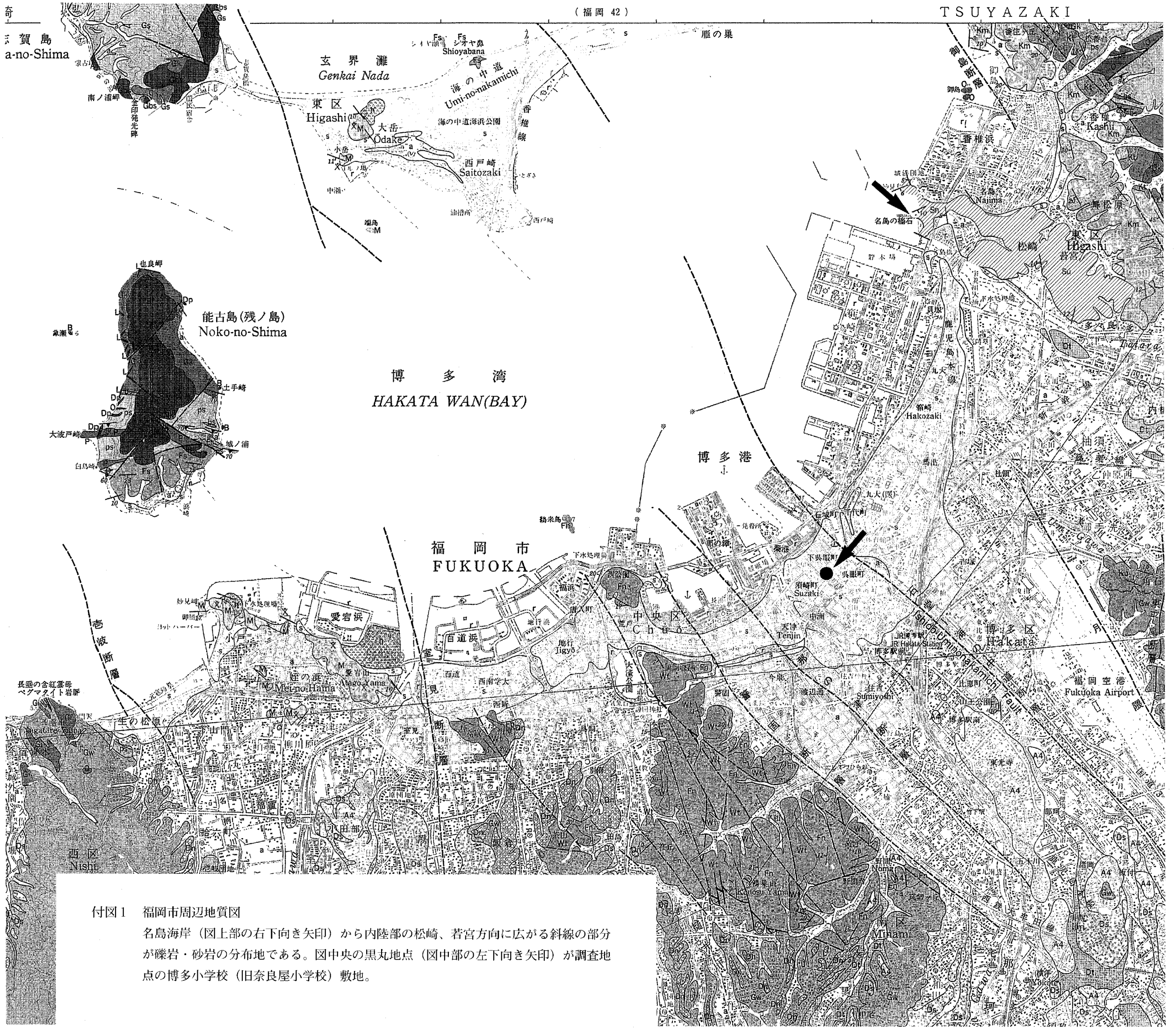
ユニット番号	石材個数	サイズ(cm)				形状				円磨度				風化度				亀裂				色調				岩石名						備考
		20未満	20～40	40～60	60以上	直方体	楕円体	球	不定形	角礫	亜角礫	亜円礫	円礫	新鮮	弱風化	中風化	強風化	無	少	中	多	黒	灰	褐	その他	礫岩	砂岩	塩基性岩	玄武岩	閃緑岩	その他	
1	28	5	9	8	6	9	4	0	15	1	12	12	3	0	15	8	5	14	8	4	2	5	12	11	0	23	4	0	0	1	0	
2	42	8	27	6	1	4	3	1	34	0	22	19	1	0	10	22	10	14	8	15	5	9	6	27	0	36	5	0	0	0	1	珪化木
3	33	4	23	5	1	6	1	1	25	1	15	14	3	1	6	15	11	6	8	9	10	1	19	13	0	14	18	0	0	1	0	
4	19	7	12	0	0	1	2	0	16	2	10	7	0	0	10	4	5	4	6	4	5	1	9	8	1	5	14	0	0	0	0	
5	27	9	16	0	2	2	3	0	22	1	9	16	1	0	13	13	1	8	8	7	4	4	19	4	0	13	13	1	0	0	0	
6	13	3	6	2	2	2	2	0	9	0	3	9	1	0	5	3	5	4	2	3	4	2	4	7	0	12	1	0	0	0	0	
7	30	2	20	6	2	7	5	0	18	2	16	10	2	0	8	12	10	3	13	7	7	6	6	18	0	26	4	0	0	0	0	
8	37	10	24	3	0	6	2	0	29	2	16	17	2	1	11	15	10	11	11	12	3	4	11	21	1	32	4	1	0	0	0	輝緑岩
9	38	18	17	2	1	3	5	1	29	1	13	20	4	2	19	12	5	15	12	8	3	10	12	16	0	18	18	0	1	1	0	
10	10	4	6	0	0	2	1	0	7	2	7	0	1	0	5	5	0	4	6	0	0	3	5	2	0	7	3	0	0	0	0	
11	15	4	10	1	0	1	0	0	14	1	7	7	0	0	9	4	2	2	8	5	0	1	7	7	0	13	2	0	0	0	0	
12	8	1	7	0	0	1	0	0	7	1	2	5	0	0	3	3	2	1	2	3	2	0	2	6	0	8	0	0	0	0	0	
13	11	1	10	0	0	0	1	0	10	0	7	4	0	1	2	7	1	2	5	1	3	2	4	5	0	8	2	0	0	0	1	ヒン岩
14	7	4	3	0	0	2	0	0	5	1	4	2	0	0	1	4	2	0	2	4	1	0	5	2	0	2	5	0	0	0	0	
15	3	1	2	0	0	0	0	0	3	1	1	1	0	0	1	1	1	0	3	0	0	1	1	1	0	3	0	0	0	0	0	
16	11	6	4	0	1	2	0	0	9	0	3	8	0	0	7	3	1	3	5	2	1	6	3	2	0	3	7	0	0	0	1	
計	332	87	196	33	16	48	29	3	252	16	147	151	18	5	125	131	71	91	107	84	50	55	125	150	2	223	100	2	1	3	3	

付表３　石材のサイズ、形状、円磨度、亀裂、色調、岩石種別出現頻度（エリアＣ）

ユニット番号	石材個数	サイズ(cm)				形状				円磨度				風化度				亀裂				色調				岩石名						備考
		20未満	20～40	40～60	60以上	直方体	楕円体	球	不定形	角礫	亜角礫	亜円礫	円礫	新鮮	弱風化	中風化	強風化	無	少	中	多	黒	灰	褐	その他	礫岩	砂岩	塩基性岩	玄武岩	閃緑岩	その他	
1	13	2	2	4	5	0	3	0	10	0	7	6	0	0	10	3	0	3	9	1	0	0	11	2	0	8	5	0	0	0	0	
2	16	3	8	5	0	4	0	0	12	0	8	8	0	0	10	3	3	5	6	1	4	6	7	2	1	8	5	3	0	0	0	
3	13	2	11	0	0	2	3	1	7	0	4	6	3	3	4	5	1	5	4	4	0	7	3	3	0	3	5	1	2	0	2	輝緑岩
4	11	7	4	0	0	2	2	1	6	0	1	7	3	4	6	1	0	11	0	0	0	3	7	1	0	1	7	2	1	0	0	
5	42	14	22	5	1	3	7	2	30	1	16	20	5	4	21	11	6	18	13	7	4	18	17	7	0	11	26	4	0	0	1	珪化木
6	12	1	9	2	0	1	2	3	6	2	3	5	2	3	5	1	3	6	3	0	3	3	8	1	0	6	3	1	1	0	1	輝緑岩
7	11	6	3	2	0	5	0	0	6	0	8	3	0	1	10	0	0	5	6	0	0	1	4	6	0	2	7	1	0	0	1	輝緑岩
計	118	35	59	18	6	17	17	7	77	3	47	55	13	15	66	24	13	53	41	13	11	38	57	22	1	39	58	12	4	0	5	

付表４　石材のサイズ、形状、円磨度、亀裂、色調、岩石種別出現頻度（エリアＤ）

ユニット番号	石材個数	サイズ(cm)				形状				円磨度				風化度				亀裂				色調				岩石名						備考
		20未満	20～40	40～60	60以上	直方体	楕円体	球	不定形	角礫	亜角礫	亜円礫	円礫	新鮮	弱風化	中風化	強風化	無	少	中	多	黒	灰	褐	その他	礫岩	砂岩	塩基性岩	玄武岩	閃緑岩	その他	
1	44	10	28	6	0	7	8	1	28	1	23	17	3	2	28	8	6	23	12	6	3	3	16	25	0	37	6	0	0	1	0	
2	19	6	10	3	0	6	0	1	12	2	10	7	0	0	12	3	4	8	6	5	0	3	8	8	0	16	2	1	0	0	0	
3	20	7	8	5	0	2	1	1	16	2	8	10	0	3	9	5	3	10	6	3	1	2	9	9	0	11	7	2	0	0	0	輝緑岩
4	12	3	5	2	2	2	0	0	10	0	7	4	1	1	6	4	1	6	3	3	0	1	5	6	0	9	3	0	0	0	0	
5	6	3	2	0	1	0	0	0	6	0	4	2	0	0	5	0	1	2	3	0	1	1	1	3	1	3	1	0	0	0	1/1	珪化木・ヒン岩
6	4	0	0	2	2	2	0	0	2	3	0	1	0	0	1	2	1	1	1	1	1	0	1	2	1	3	0	0	0	0	1	珪化木
7	8	3	5	0	0	4	0	0	4	1	4	3	0	0	2	4	2	2	1	3	2	0	5	3	0	5	3	0	0	0	0	
8	6	0	4	2	0	0	0	2	4	0	2	2	2	0	0	1	5	0	1	3	2	0	1	5	0	6	0	0	0	0	0	
計	119	32	62	20	5	23	9	5	82	9	58	46	6	6	63	27	23	52	33	24	10	10	46	61	2	90	22	3	0	1	3	



付図１　福岡市周辺地質図

名島海岸（図上部の右下向き矢印）から内陸部の松崎、若宮方向に広がる斜線の部分が礫岩・砂岩の分布地である。図中央の黒丸地点（図中部の左下向き矢印）が調査地点の博多小学校（旧奈良屋小学校）敷地。

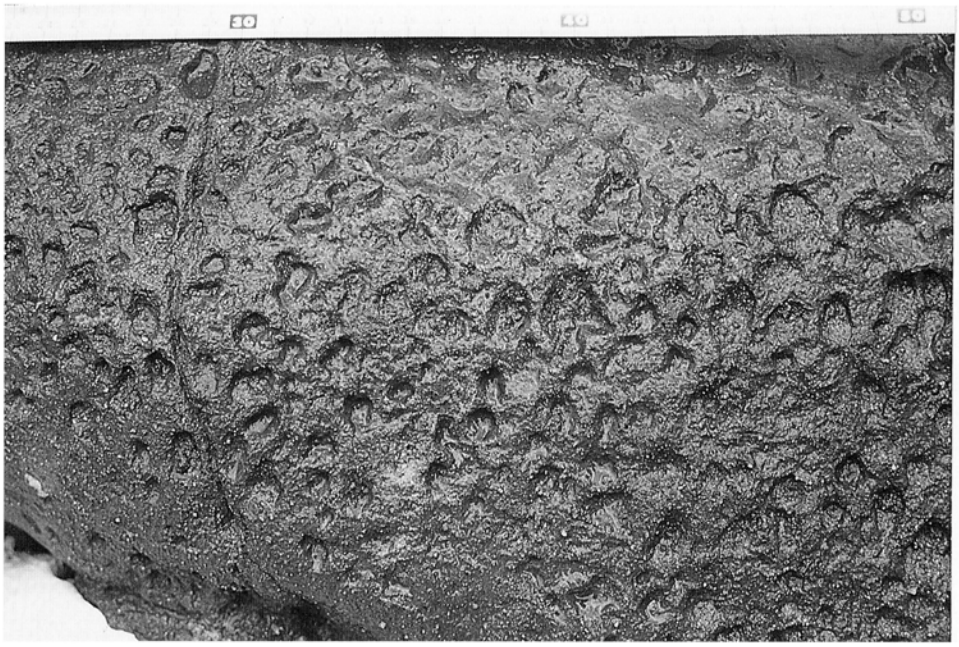
付図２　エリア区分図

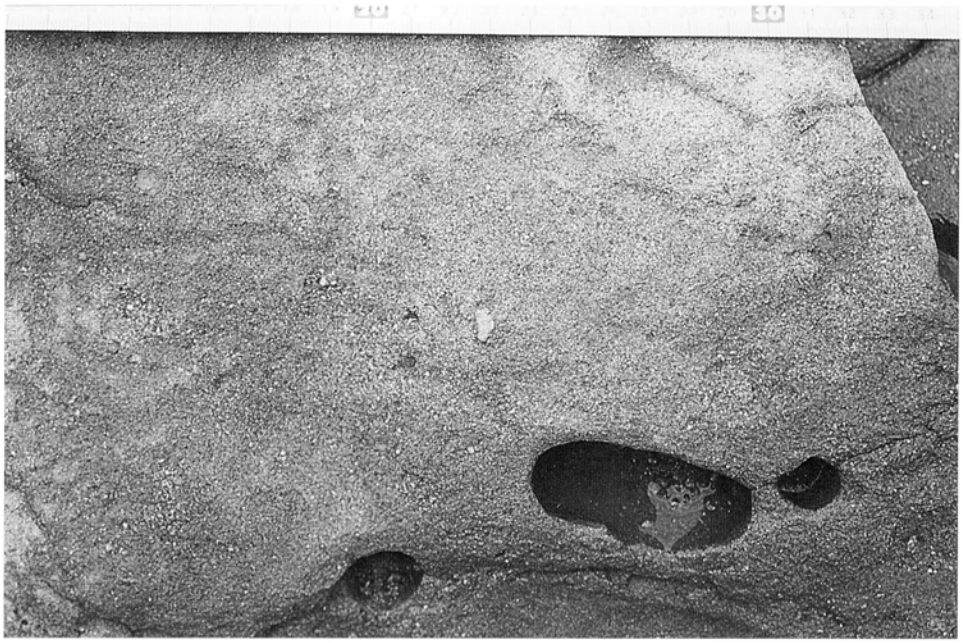
付図３　（１）防塁中の代表的石材（礫岩）

全体として褐色～灰褐色で特徴づけられ、径数㎜～数㎝オーダーの小礫と膠結物質からなる。

付図３　（２）名島海岸に見られる礫岩

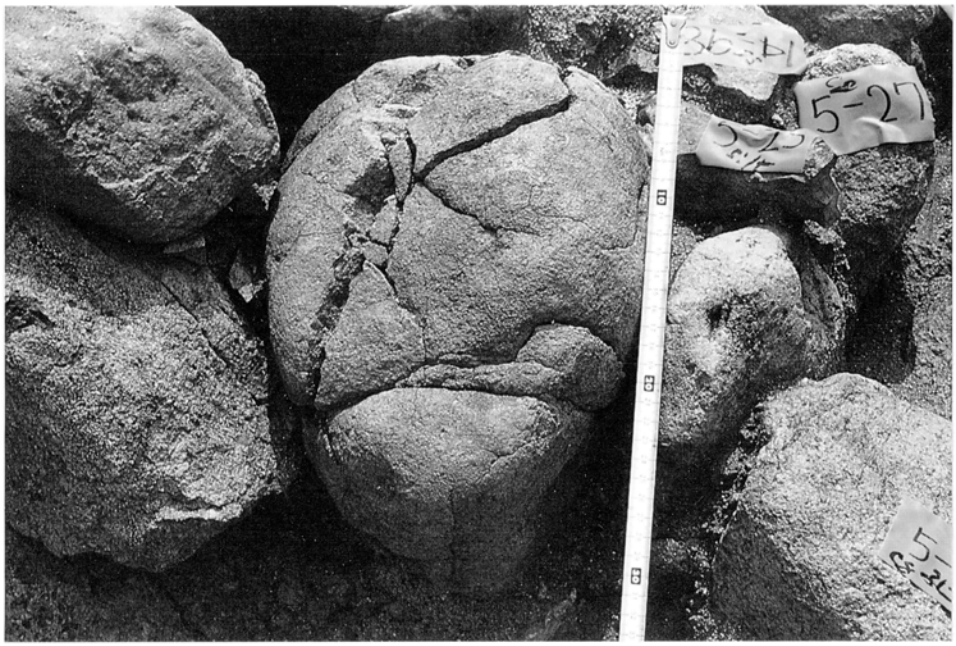
防塁を構成する礫岩と色調および岩相が酷似する。





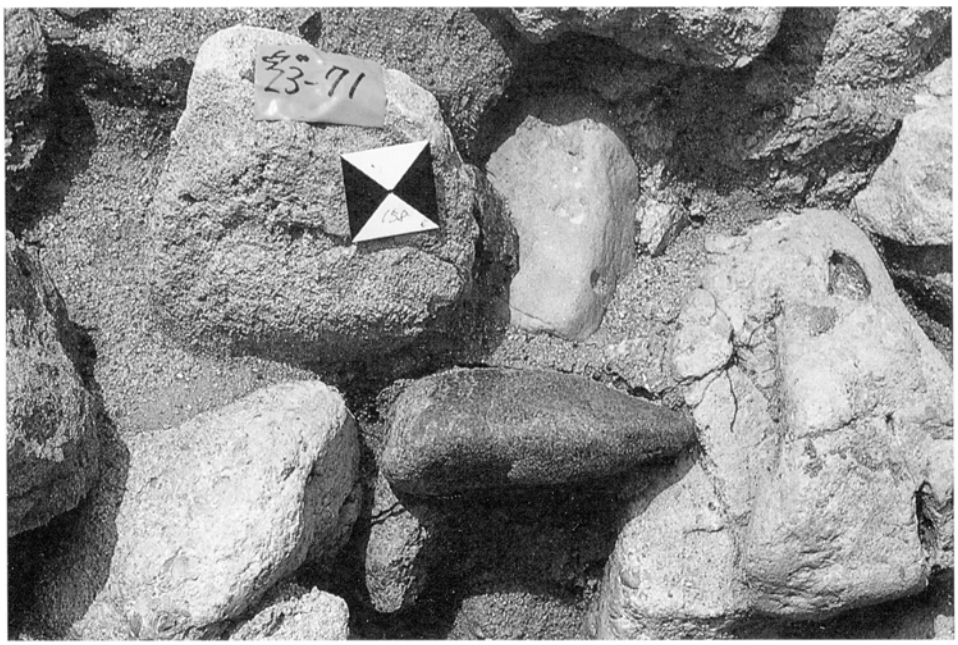
付図３　（３）防塁中の石材（砂岩）に見られる甌穴状のくぼみ

水の影響によって形成されたもので、沿岸部に存在していたことを示唆する。



付図３　（４）防塁中の石材（砂岩）に発達する亀裂

防塁の石材として利用されている砂岩は地質学的には新期の堆積物であり、相対的に風化されやすく亀裂が発達したり、脆弱化したもの、表面部分が剥離したものが見られる場合がある。



付図３　（５）防塁中に見られる数少ない塩基性岩（中央下の優黒色の亜円礫、長径約15cm）

塩基性岩類や玄武岩はこのように周囲の灰色～褐色の岩石に対して明瞭なコントラストを示す。

石塁遺構保存処置施工記録

正栄建装株式会社

平成11年９月

１．材料選定のための現地試験施工

①遺構下部土質安定強化を図る材料、工法選定のため施工ブロックＥで施工範囲内の石塁で試験施工を行った。

②石塁の前面５㎝に、30㎝間隔で径６㎜の孔を、石塁下部に向け角度60で、深さ約50㎝窄孔し薬剤注入用の孔とした。

③遺構下部土質安定強化の材料として、①珪酸ソーダ系土質固化材　②セメント系土質固化材　③イソシアネート系土質固化材の３種類により、下部砂中に遺構安定のための一定強度を有する硬化体を作る試験を行った。

④注入方法はこれまでの経験から、一定量の材料を注入する必要性がある場合、注入量の管理が確実で、注入力にも優れているため点滴注入法を選定した。

２．現地試験施工の結果

	珪酸ソーダ系	セメント系	イソシアネート系
含　浸　力	△	×	◎
強　　度	◎	◎	◎
施　工　性	△	△	○

現地試験施工の結果、イソシアネート系特殊ウレタン樹脂による点滴注入工法が所定の選定基準を充たすため、今回の使用材料として採用することとした。現地試験施工の詳細データを別表に記す。

試験結果

注入量を以下に明記する。時間は、１ℓ注入に用した時間である。

No.１～No.７　　薬剤　イソシアネート系ウレタン樹脂

No.８～No.11　　薬剤　珪酸ソーダ系

No.12～No.14　　薬剤　セメント系

	注入回数　　1回＝1ℓ　　単位　分：秒				
	1	2	3	4	5
No. 1	10 : 40	11 : 30			
No. 2	10 : 10	10 : 30	11 : 20		
No. 3	10 : 35	11 : 10			
No. 4	10 : 10	10 : 20	11 : 10	11 : 30	
No. 5	10 : 40	11 : 40			
No. 6	10 : 50	12 : 00			
No. 7	10 : 30	11 : 10			
No. 8	13 : 20	15 : 10			
No. 9	13 : 50	15 : 40			
No.10	13 : 50	注入不可能			
No.11	13 : 40	15 : 50			
No.12	17 : 20	注入不可能			
No.13	17 : 20	注入不可能			
No.14	注入不可能				

3．遺構下部土質安定強化処理

①石墨遺構保存処置ブロック区分をA～Eに設定した。

②各ブロック毎に点滴注入用の仮設架台を設置した。

③表層強化処理　注入口設置時の表層を強化し孔への砂の入り込みを防ぐ。

④注入穴設置　径10㎜、深さ70㎝の穴を30㎝間隔で設置した。

⑤注入針設置　径6㎜、長さ30㎝のアルミ製鋼管の注入針を注入穴に挿入し、薬材のオーバーフロー防止のため、注入口を油粘土で固定した。

⑥器具

⑦点滴注入開始　イソシアネート系特殊ウレタン樹脂と酢酸エチルの1：1混合液を1.2ｍの高さにセットした点滴容器に1ℓ入れ、自重圧力による注入を行った。

⑧注入穴ごとに二回計2ℓの注入量を確保し、注入速度の以上に早い箇所にはさらに1ℓ追加注入を行った。

各ブロック毎の注入口の数量と注入薬液量は以下の通りである。

Aブロック	68箇所	136ℓ
Bブロック	72箇所	152ℓ
Cブロック	28箇所	56ℓ
Dブロック	48箇所	96ℓ
Eブロック	14箇所	28ℓ

⑨注入完了から各ブロック2週間の機能安定養生期間をとった。

4．石塁遺構露出石材の修理及び劣化保護処理

①露出石材の個別の石に変荷重がかからぬよう、石同士の隙間を砂で充填し目地詰め的補強を行い、割裂、破損等風化劣化の著しい石は予め石質強化材で修理して劣化防止保護材を塗布した。

②目地詰め砂の固定

事前に砂地にジョウロで薬剤を㎡／1㎏基準に散布した。

7日間の養生期間の後、針貫入試験器（ペネトロ試験）で強度を測定したところ薬剤散布前は、10㎜／0㎏1で点荷重はほぼ0であったのが、10㎜／3㎏1に固化強度は向上した。

③露出石材の石同士の隙間を砂で充填し、水を散布し締め固めた後、7日間の養生期間をとり、珪酸リチウム溶液（アイセラ　ハード510）とアクリル60の混合水溶液を散布し、砂に一定の固化強度を付与した。

④割裂、破損等風化劣化の著しい石の強化処理

今回の保存処置後再び埋め戻されるため、過度の修理は行わず、石塁前面に石質強化材珪酸リチウム溶液（アイセラ　ハード510）を噴射器で㎡／2㎏平均を散布した。

5．石塁遺構を形成する石材の特定調査

石塁遺構の各ブロックごとに、形成する石材すべてを九州産業大学工学部の河野教授に依頼し調査していただいた。

6．遺構の保存処置（土圧軽減被覆処置）

①遺構（下部土質含む）の将来の再発掘、再修理を念頭に、遺構面（下部土質含む）を濡れ和紙や特殊フィルムで被覆した上を、土圧軽減対応発砲ウレタンを約30㎝厚平均で包み込むように、打設被覆する。

②使用する土圧軽減対応発砲ウレタンの選定

今回の遺構保存にあたり、埋め戻し土圧5ｔ／㎡に耐えうる強度を求められたため、材料メーカーとの共同研究をくりかえし、イソシアネート系特殊発砲ウレタンの積層被覆工法で打設すると、土圧12ｔ／㎡の強度が得られることが証明されたため土圧軽減イソシアネート系特殊発泡ウレタンSK-100（正栄建装（株）土）を選定した。

③保存場所が小学校建設地であることを考慮し、これまでの発砲ウレタン使用の際に発泡促進材として使われてきたフロンを使わないイソシアネート系とすることで環境問題にも配慮した。

④土圧軽減対応処理

今回の石塁遺構は発掘調査のためもあり、下部にオーバーハング箇所が数多く確認され、構築石塁自体も不安定な形状のため、下部のオーバーハング箇所や不安定な形状箇所に土嚢を積み、空隙部をできる限りなくす処理を行った。

⑤各ブロックごとに土圧を分散させるよう半円形に形状を整えた。

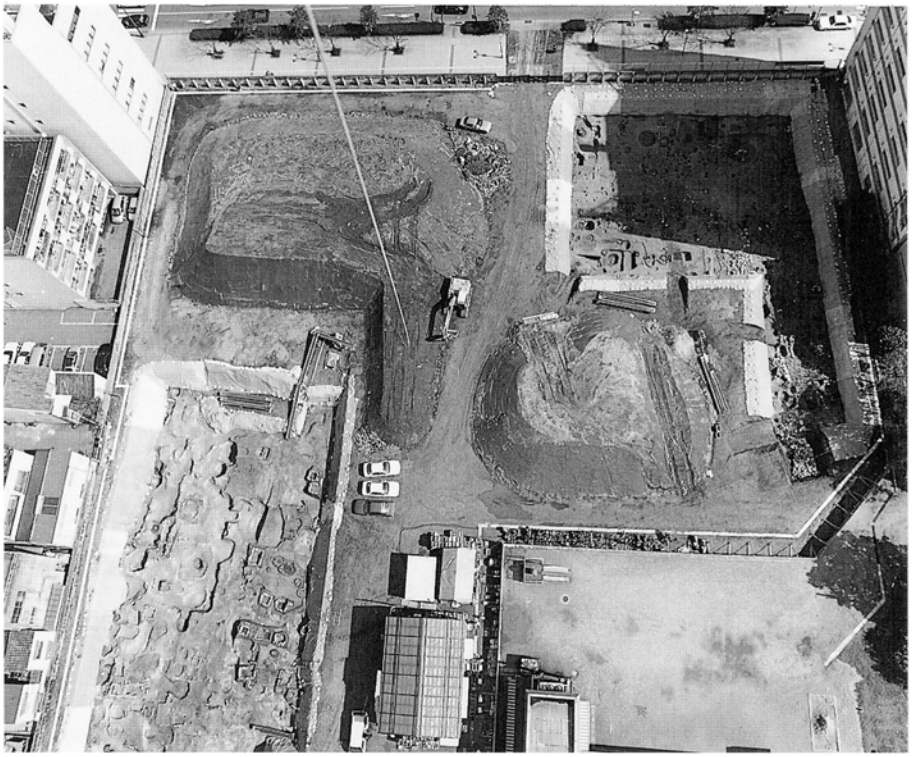
⑥石塁遺構補強処置を終えたブロックに遺構面保護の特殊フィルムを被覆した。

⑦土圧軽減対応イソシアネート系特殊発砲ウレタンSK-100（正栄建装（株）土）の被覆

発泡ウレタン打設機ガスマーにて各ブロック一回の発泡厚2.5㎝を4回繰り返し、1日あたり被覆厚10㎝相当になるよう被覆し、最終被覆厚を30㎝とした。

付図１　エリア区分図

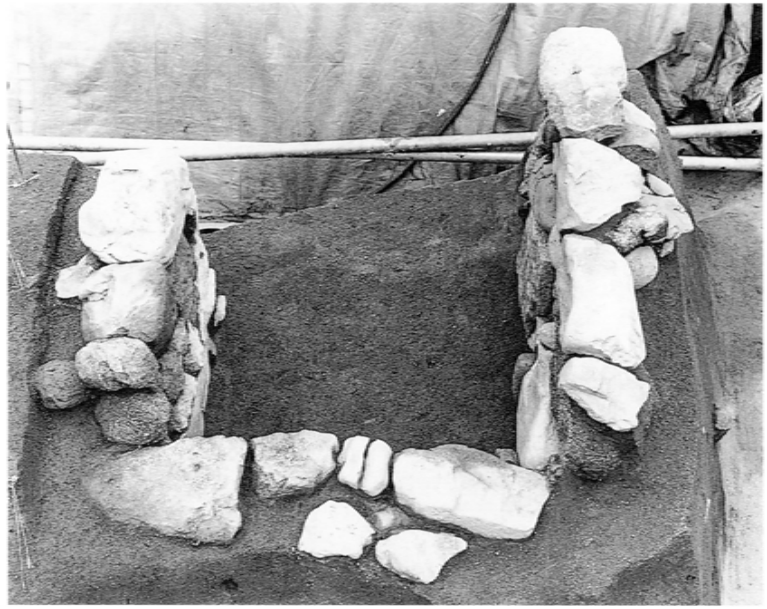
图　　版
PLATES



(1)　Ⅰ区全景（空中写真）

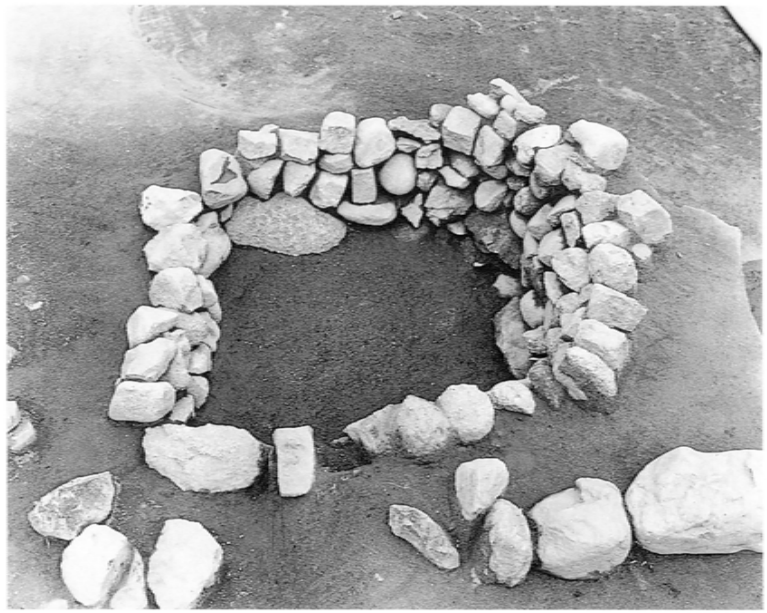
(2)　Ⅰ区全景（北東から）

(1)　Ⅰ区全景（西から）

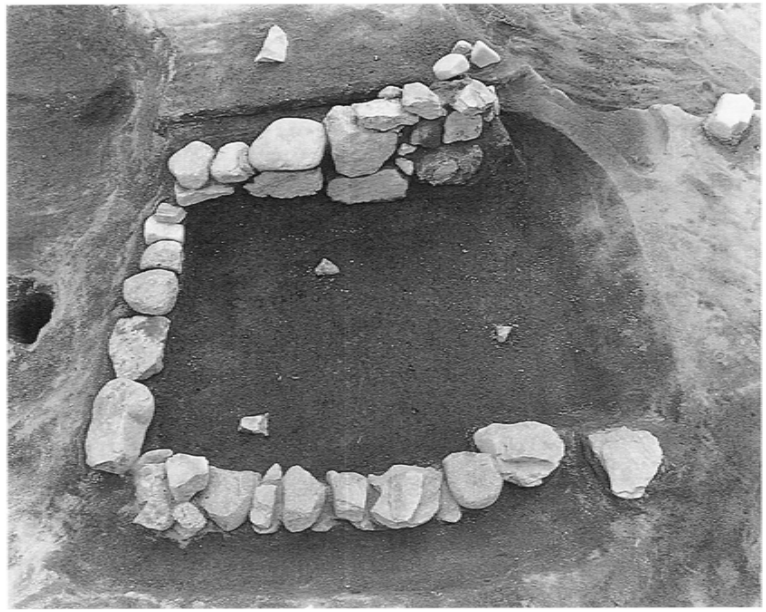


(2)　ＳＦ26石積遺構（南東から）

(3)　ＳＦ27石積遺構（北から）

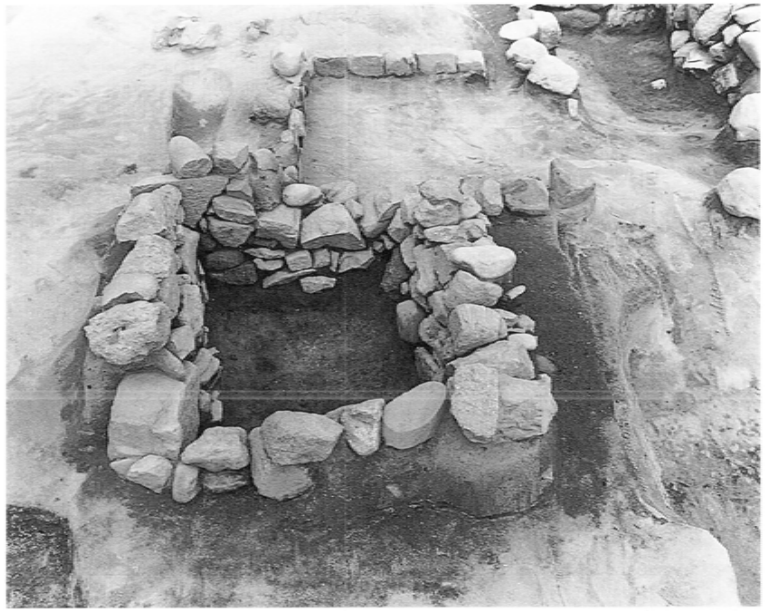


(4)　ＳＦ27石積遺構（西から）



(1)　ＳＦ31石積遺構（南西から）

(2)　ＳＦ31石積遺構（北西から）

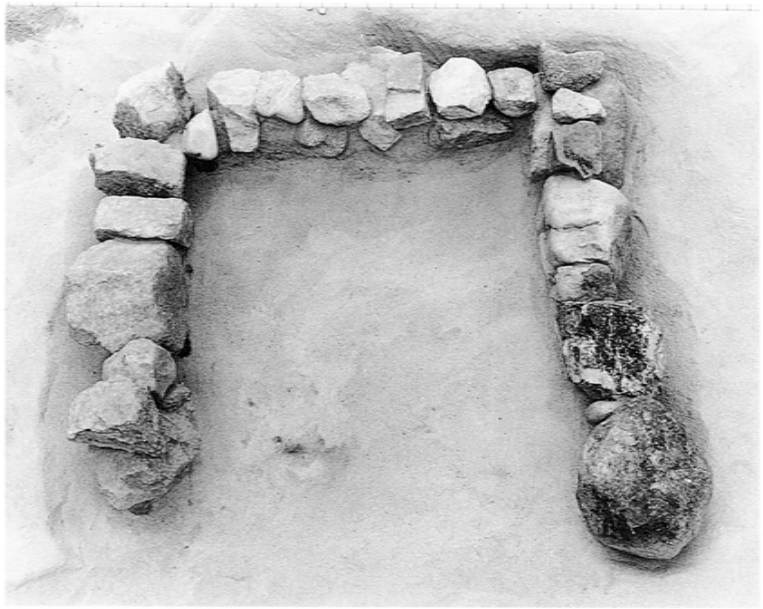


(3)　ＳＦ32・74石積遺構（南から）

(4)　ＳＦ32石積遺構（南から）

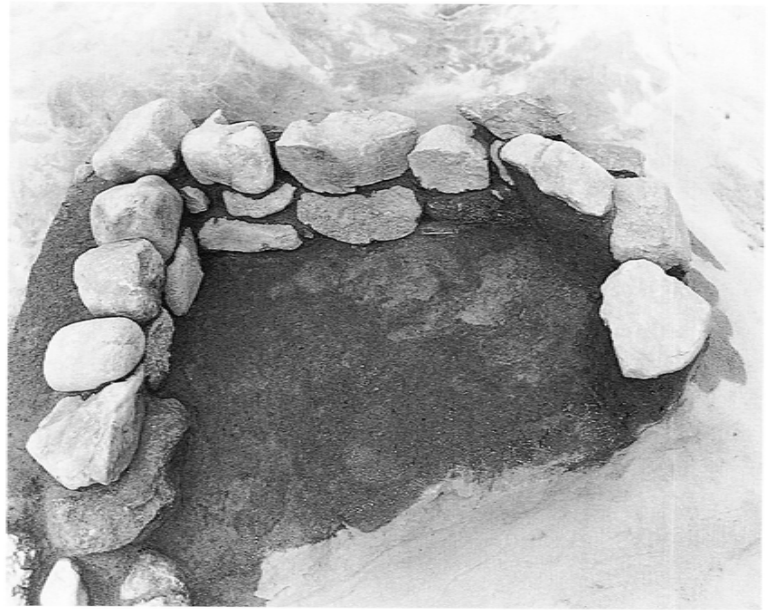
(1)　ＳＦ32石積遺構（東から）

(2)　ＳＦ39石積遺構（南から）



(3)　ＳＦ40石積遺構（北東から）

(4)　ＳＦ40石積遺構（東から）



(1)　ＳＦ41石積遺構（西から）

(2)　ＳＦ55石積遺構（北東から）

(3)　ＳＦ75・76・55石積遺構（南から）

(4)　ＳＦ67・73石積遺構（南から）

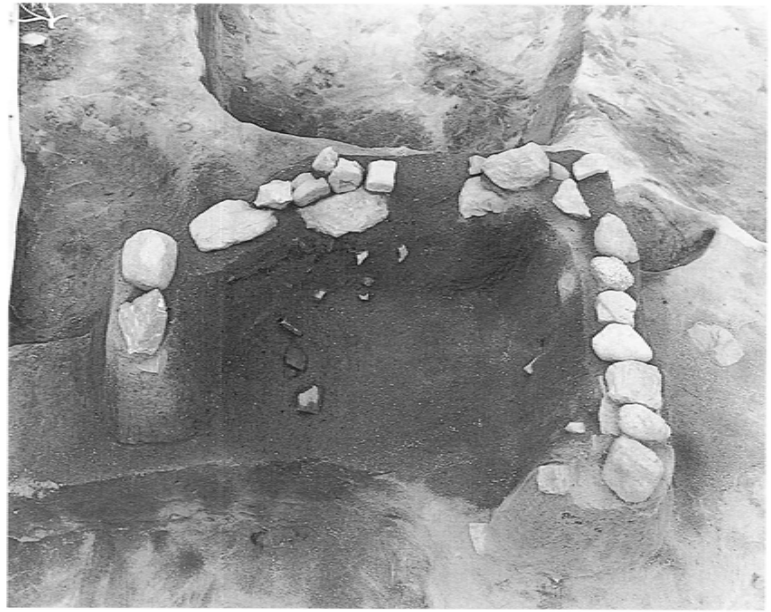
(1)　ＳＦ67石積遺構（西から）

(2)　ＳＦ73石積遺構（南から）

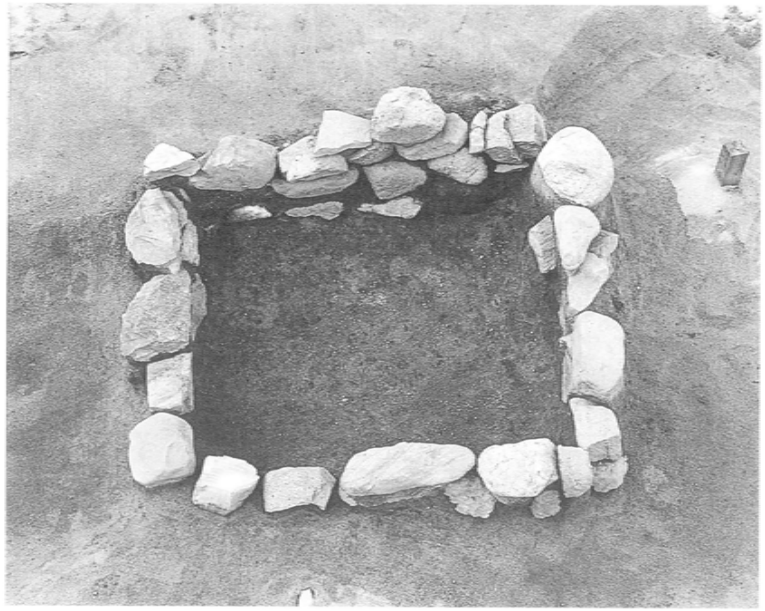
(3)　ＳＦ74石積遺構（南から）

(4)　ＳＦ74石積遺構（東から）

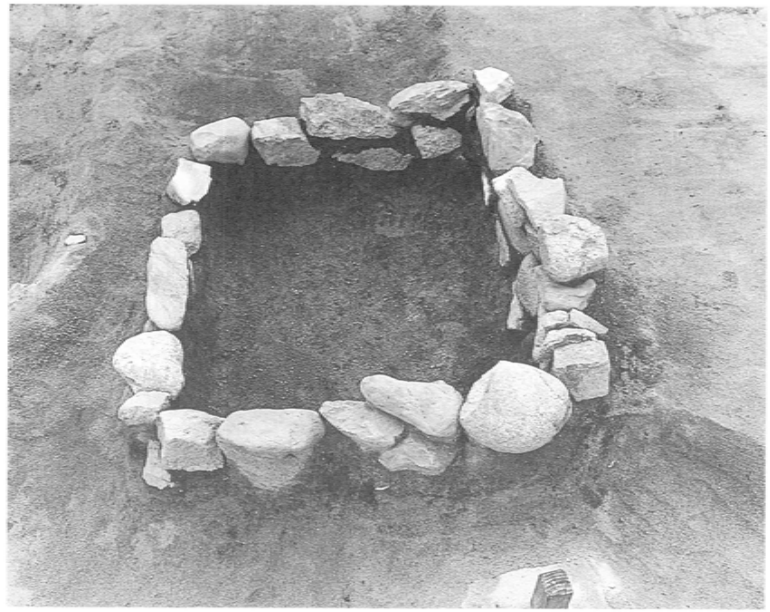
(1)　ＳＦ75石積遺構（南から）



(2)　ＳＦ80石積遺構（南から）



(3)　ＳＦ81石積遺構（南から）

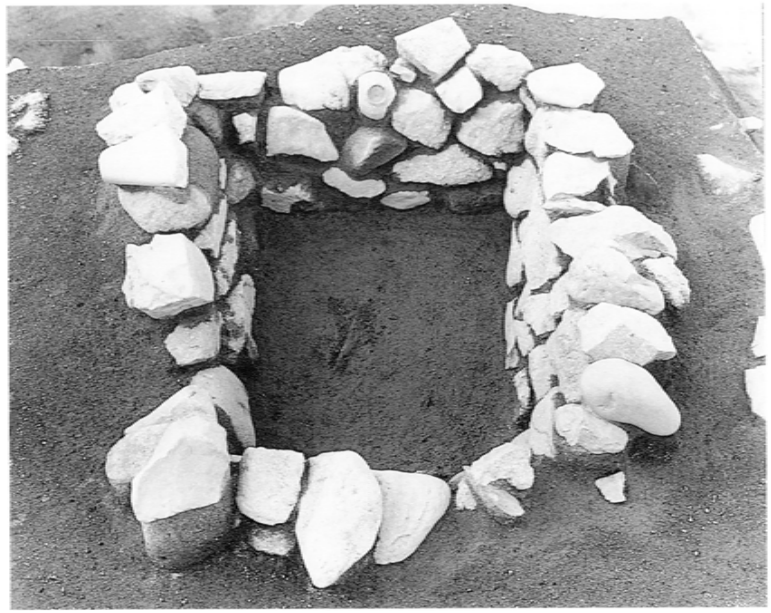


(4)　ＳＦ81石積遺構（東から）

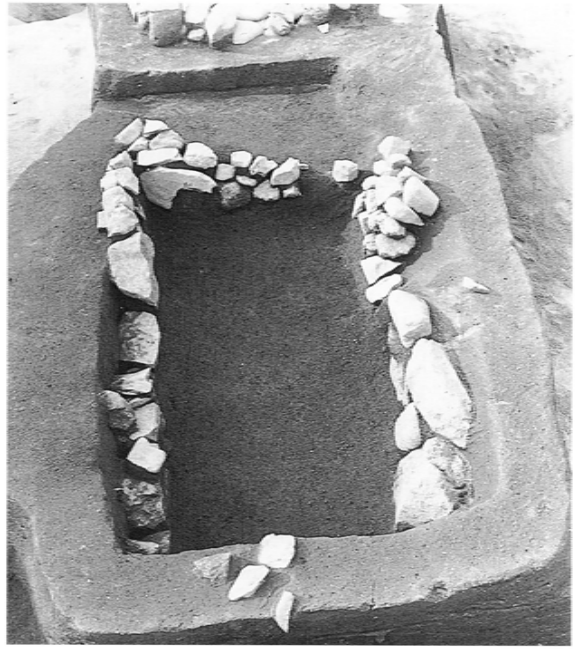
(1)　ＳＦ81石積遺構（西から）

(2)　ＳＦ82石積遺構（南西から）

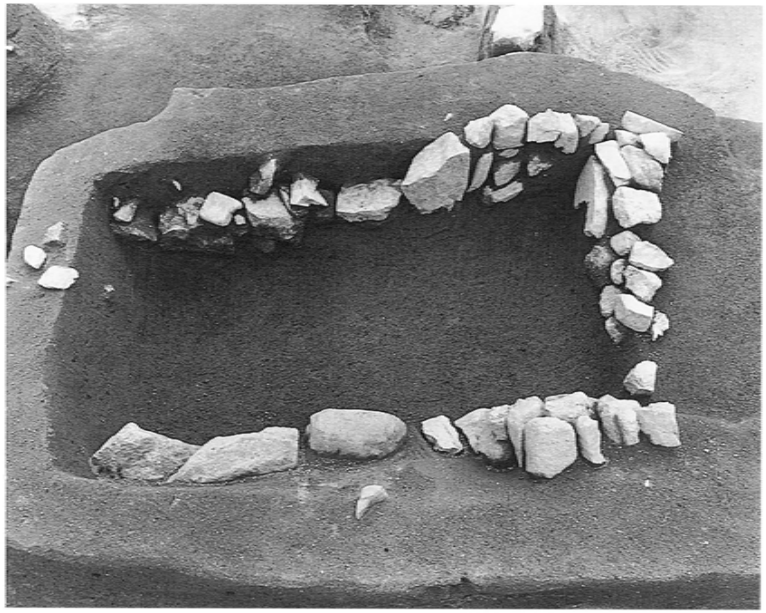
(3)　ＳＦ82遺物出土状況（南西から）



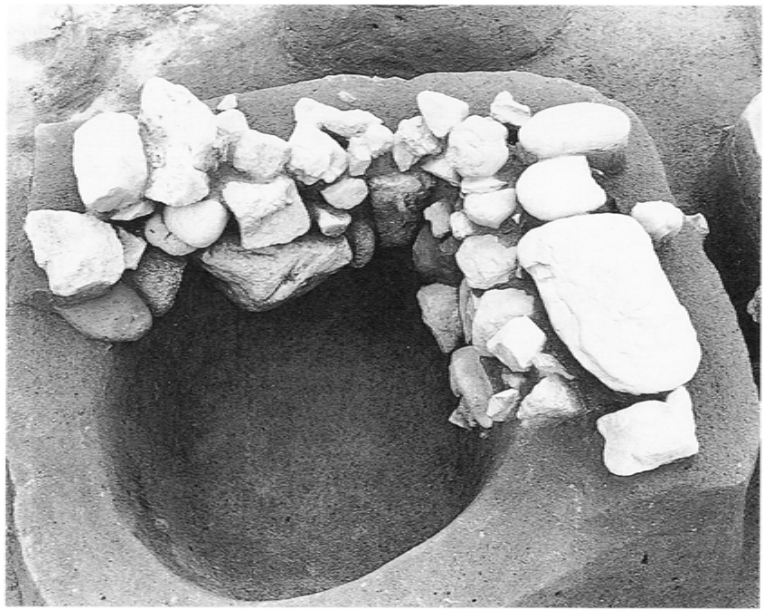
(4)　ＳＦ86石積遺構（南東から）



(1)　ＳＦ87石積遺構（南東から）



(2)　ＳＦ87石積遺構（北東から）



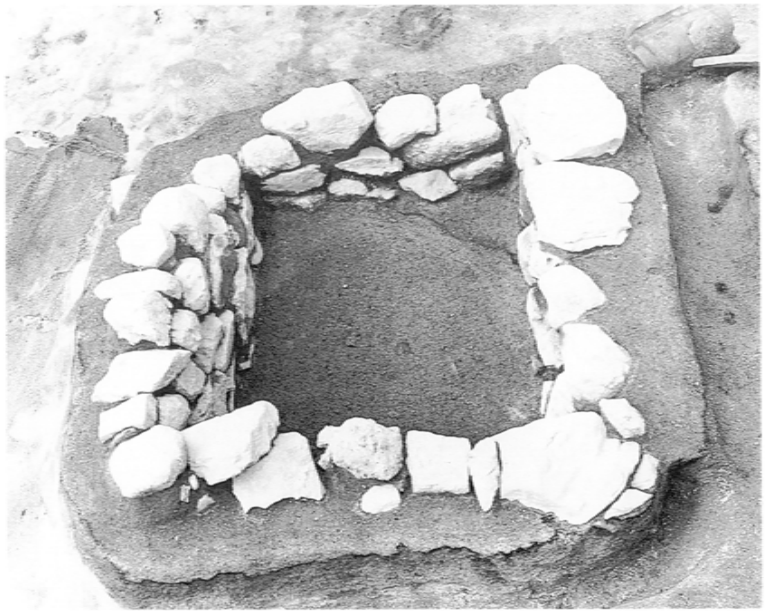
(3)　ＳＦ88石積遺構（北東から）

(4)　ＳＦ96石積遺構（北東から）

図版9

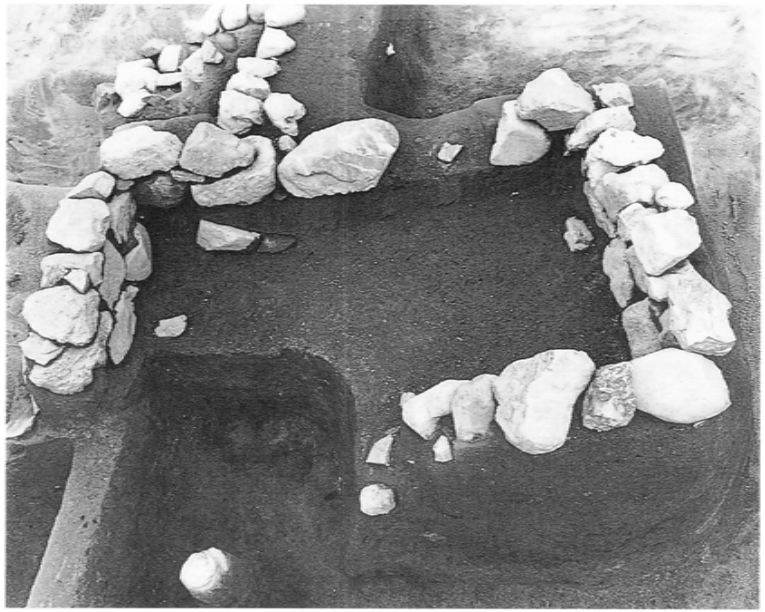
(1)　ＳＦ99石積遺構（北から）

(2)　ＳＦ99石積遺構（北東から）



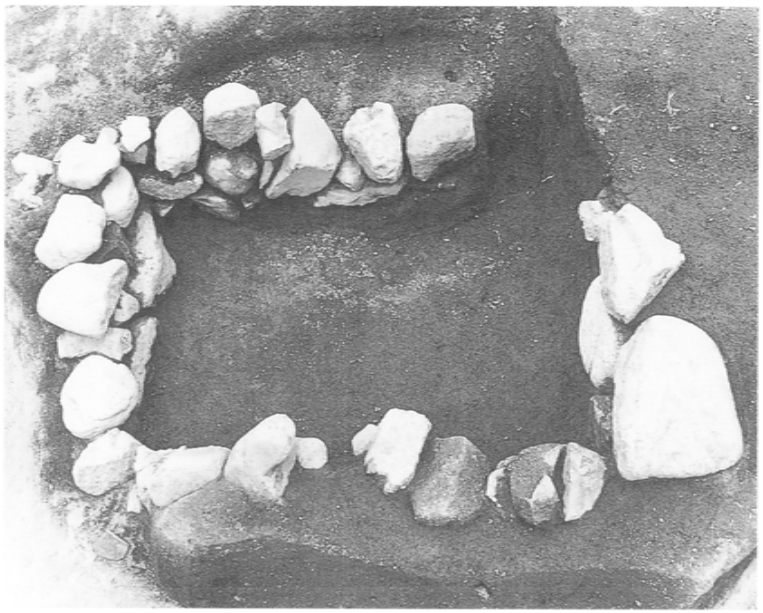
(3)　ＳＦ89石積遺構（南東から）

(4)　ＳＦ106石積遺構（南東から）

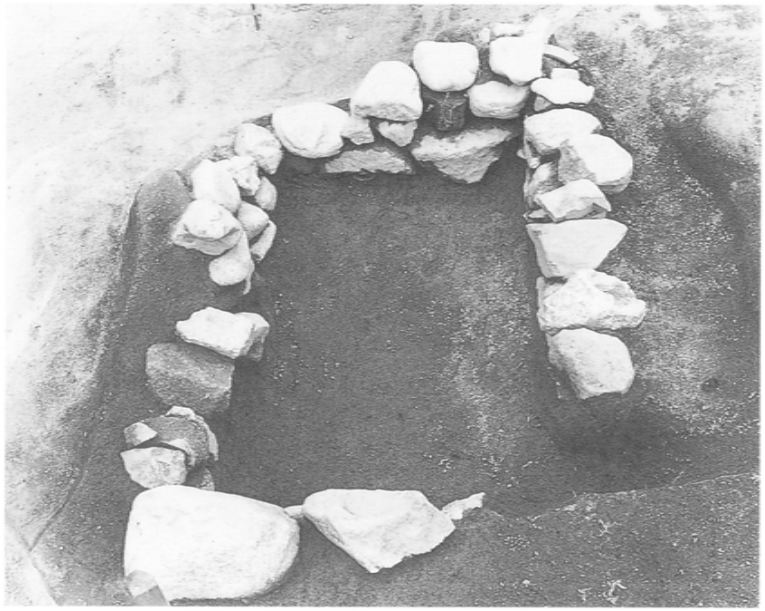


(1)　ＳＦ106石積遺構（北東から）

(2)　ＳＦ110石積遺構（南東から）



(3)　ＳＦ110石積遺構（南東から）

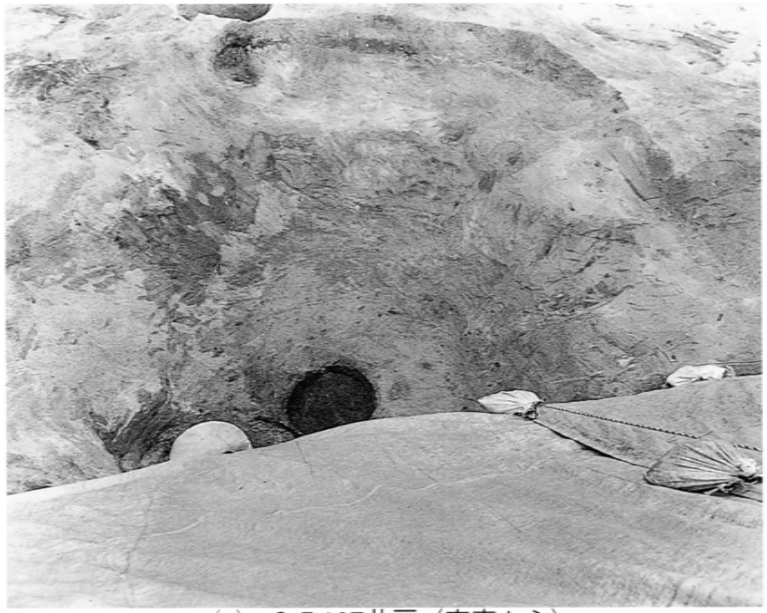


(4)　ＳＦ110石積遺構（南東から）

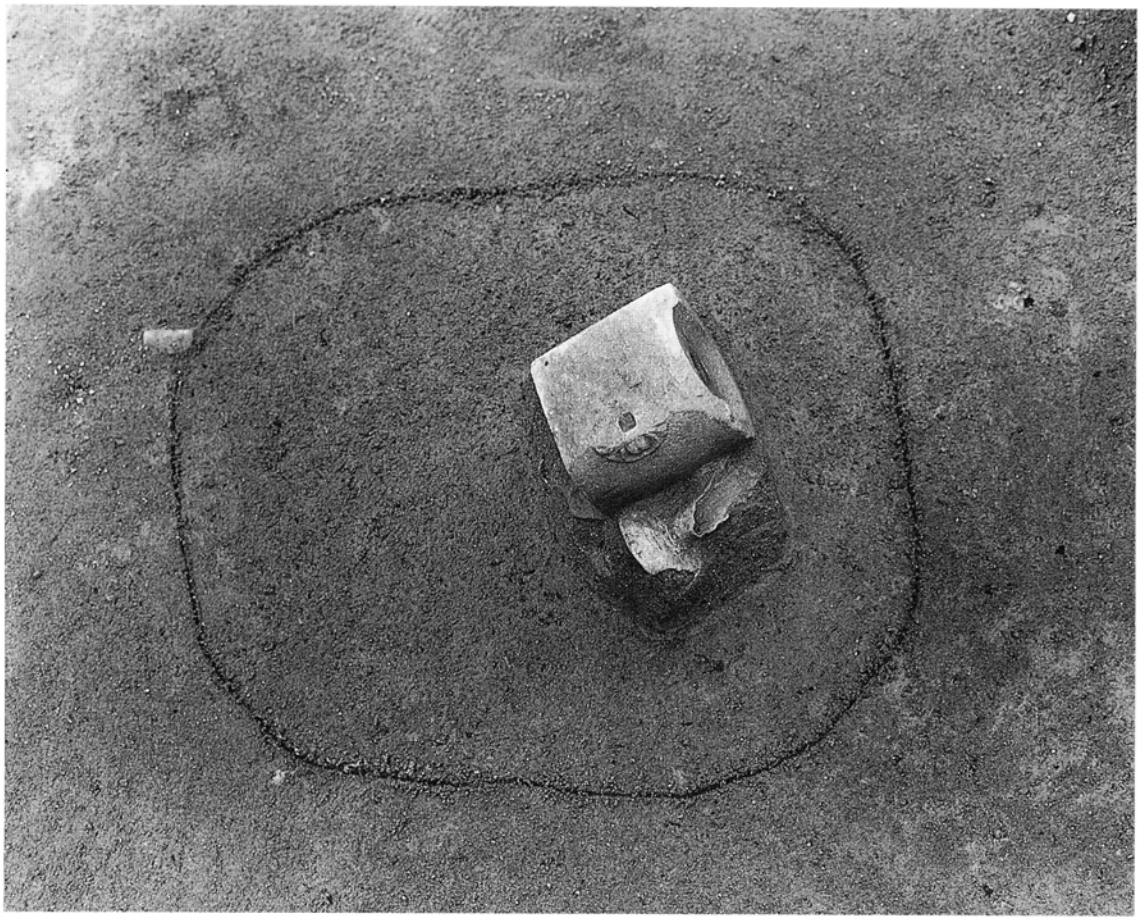
(1)　ＳＦ122石積遺構（北東から）

(2)　Ⅰ区南東壁面Ｄ区土層（西から）

(3)　ＳＥ126井戸（南から）



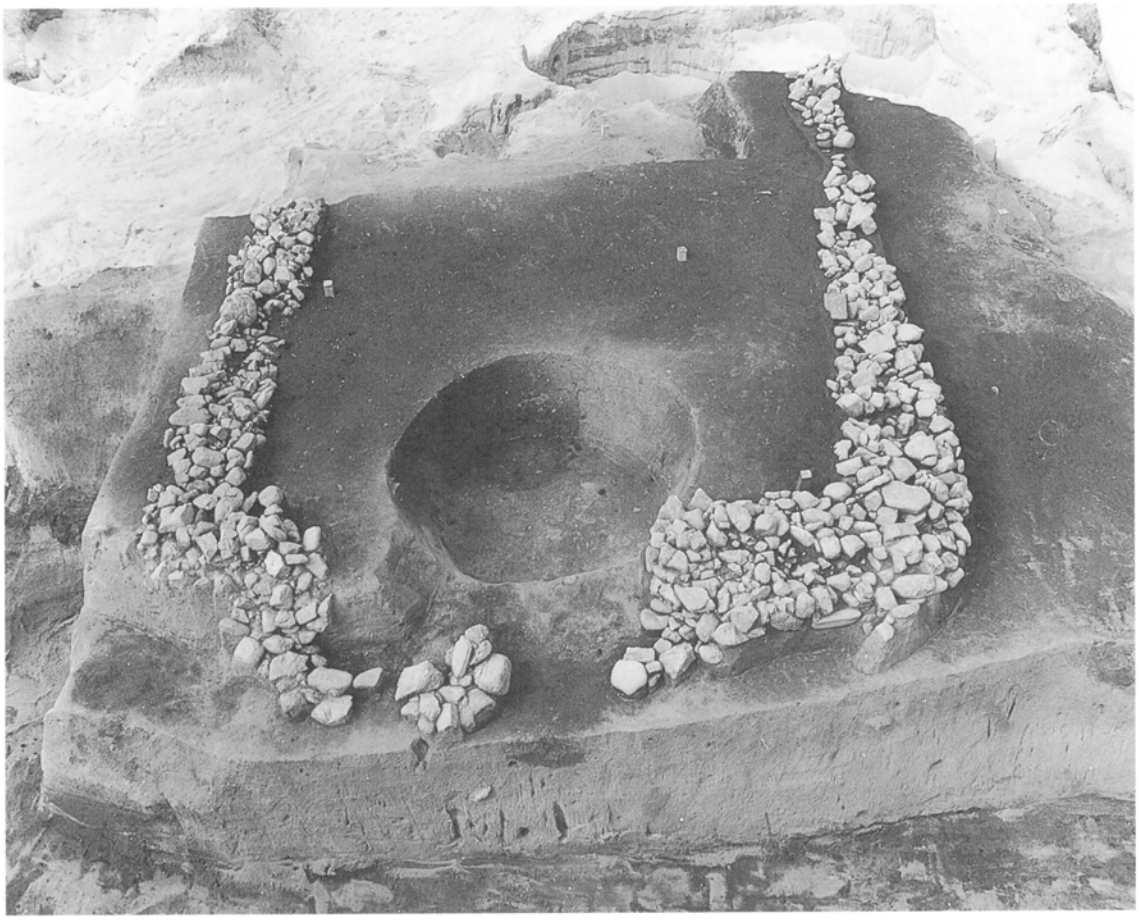
(4)　ＳＥ127井戸（南東から）



(1)　ＳＫ103土坑（南西から）

(2)　ＳＫ104遺物出土状況（西から）

図版14



(1)　ＳＢ16石基礎（南から）

(2)　ＳＢ16石基礎掘り方（南から）

(3)　ＳＢ16石基礎断面（北から）

(1)　ＳＢ79石基礎・ＳＦ82石積遺構（北西から）

(2)　ＳＢ79石基礎・ＳＦ82石積遺構（南西から）

(1)　ＳＢ79石基礎断面Ａ（東から）

(2)　ＳＢ79石基礎断面Ｂ（東から）

(3)　ＳＢ79石基礎断面Ｃ（南から）

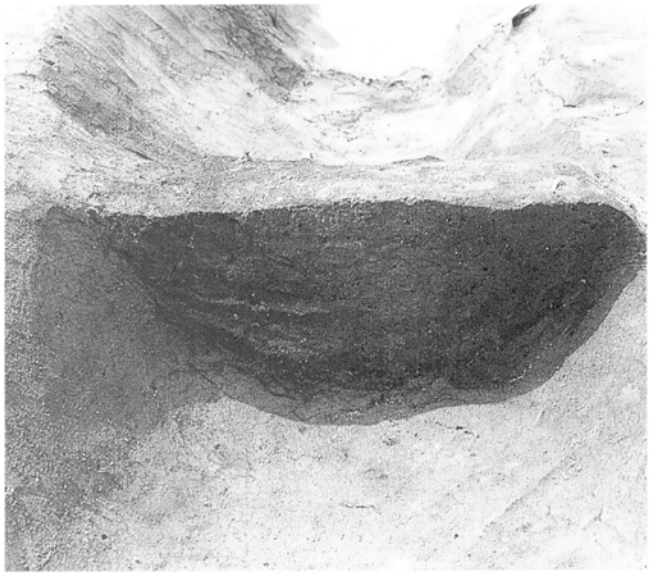
(4)　ＳＢ79石基礎断面Ｄ（南から）

(1)　Ⅳ区全景（南東から）

(2)　Ⅳ区全景（空中写真）

図版18

(1)　ＳＤ156溝（南東から）



(2)　ＳＤ156溝土層（南東から）

(3)　ＳＫ163土坑（南西から）

(4)　ＳＸ193石積遺構（北東から）

(1)　ＳＥ140井戸上面（南東から）

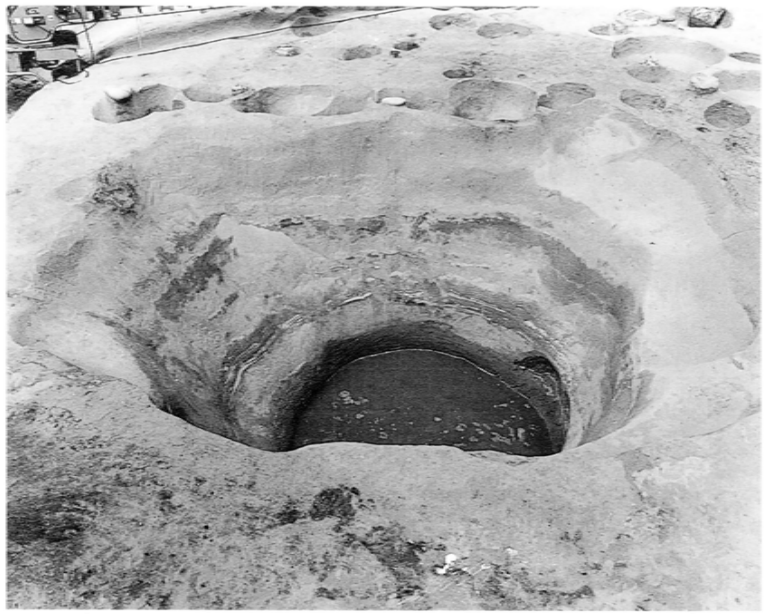
(2)　ＳＥ140井戸土層（南東から）

(3)　ＳＥ140井戸（東から）

(4)　ＳＥ140井戸（南東から）

(1)　ＳＥ141井戸（南西から）

(2)　ＳＥ141井戸土層（南西から）



(3)　ＳＥ147井戸（南東から）

(4)　ＳＥ148井戸土層（北西から）

(1)　ＳＥ155井戸上面（北から）

(2)　ＳＥ155井戸（北から）

(3)　ＳＥ162井戸上面（東から）

(4)　ＳＥ162井戸（北東から）

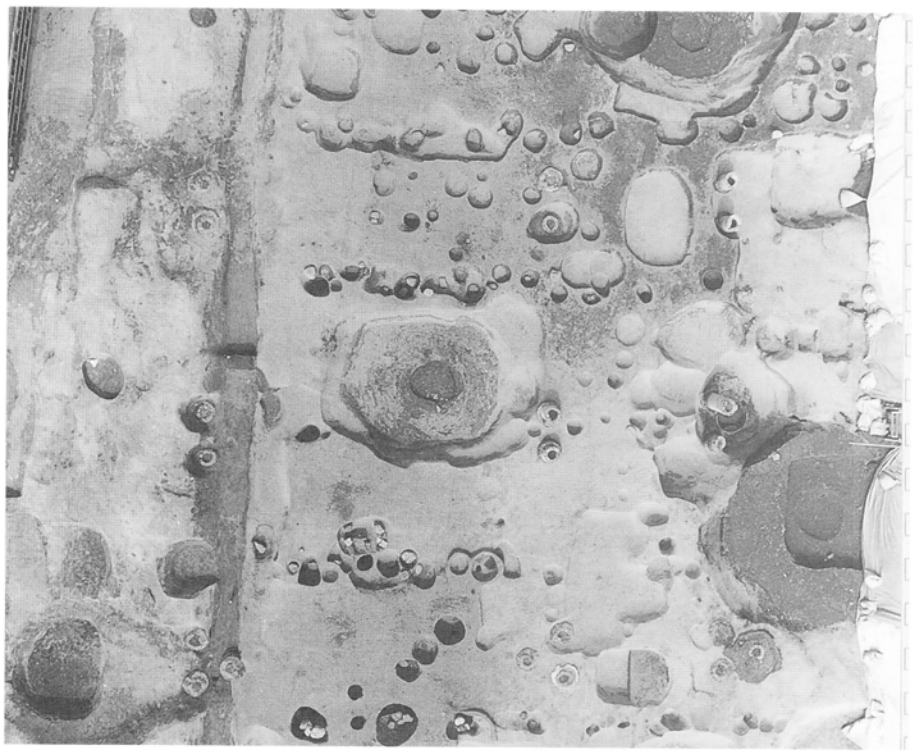
(1)　ＳＥ179井戸上面（北から）

(2)　ＳＥ211井戸（北西から）

(3)　ＳＦ149石積遺構（南東から）

(4)　Ⅳ区南東壁面土層（西から）

(1)　Ⅳ区掘立柱建物群（空中写真）



(2)　Ⅳ区南側掘立柱建物群（空中写真）

図版24

(1) SX144石積遺構（南西から）

(2) SX195石積遺構（東から）

(1)　Pit292石積遺構（南東から）

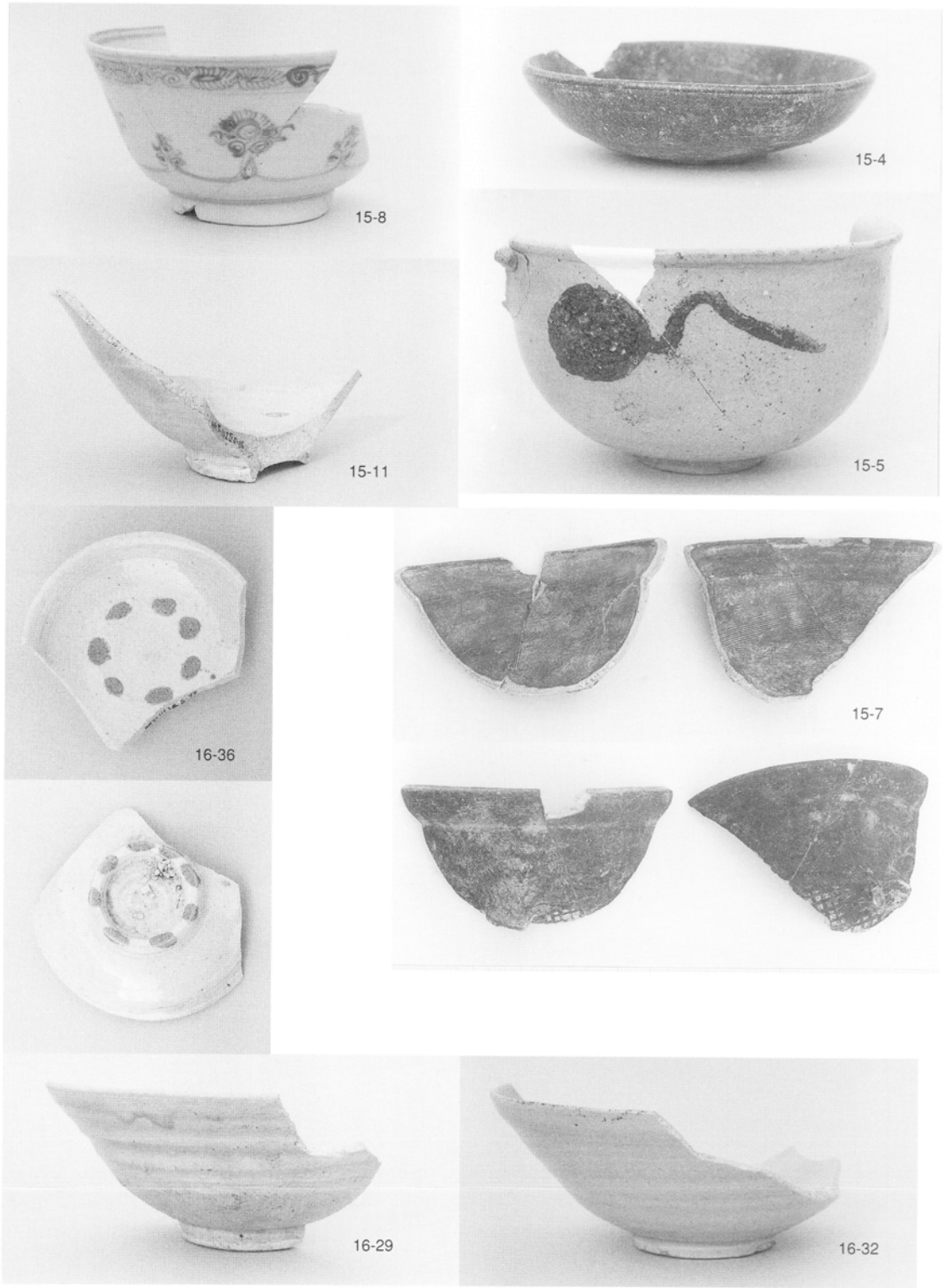
(2)　ＳＸ161石積遺構（東から）

(1)　ＳＫ150土坑土層（南西から）

(2)　ＳＫ151土坑（南西から）

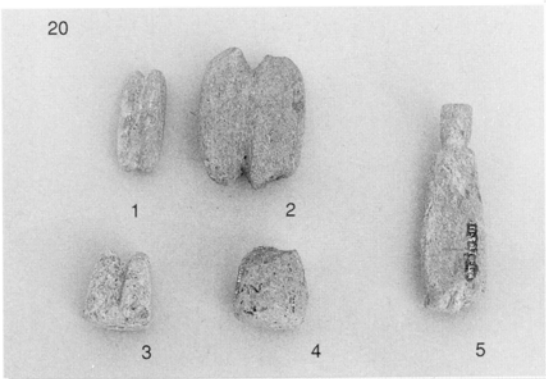
(3)　ＳＫ158a土坑土層（南西から）

(4)　ＳＫ158b土坑（北東から）

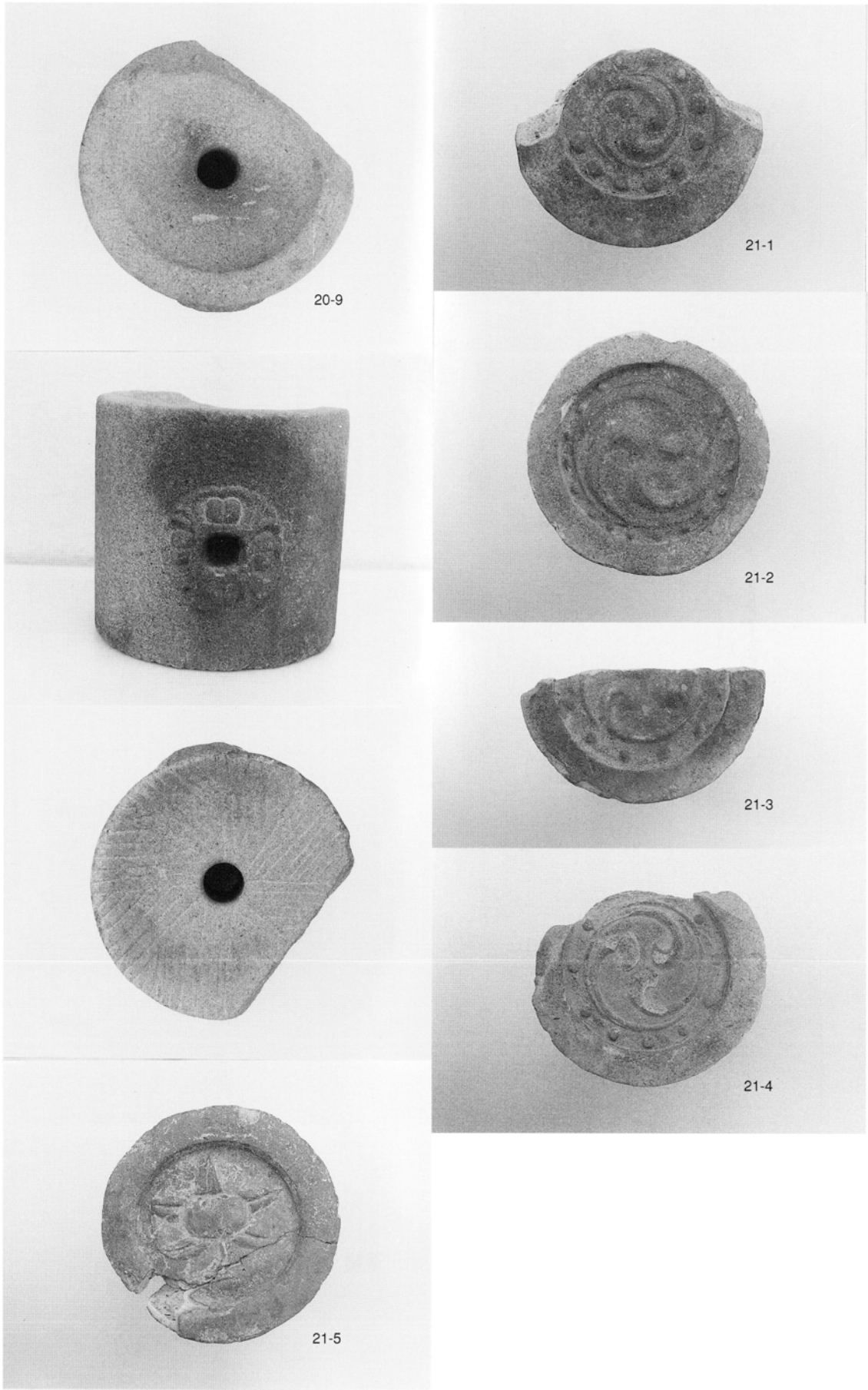


Ⅰ区遺構出土遺物

図版28



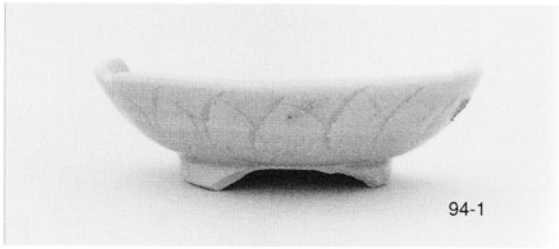
Ⅰ区包含層出土遺物・石製品・土製品・金属製品

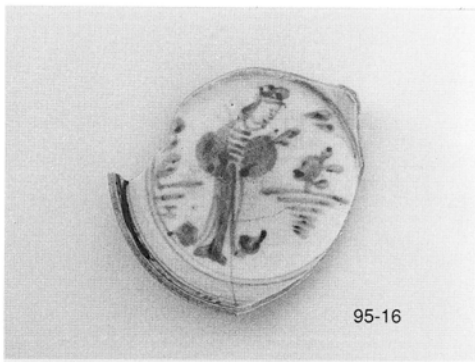


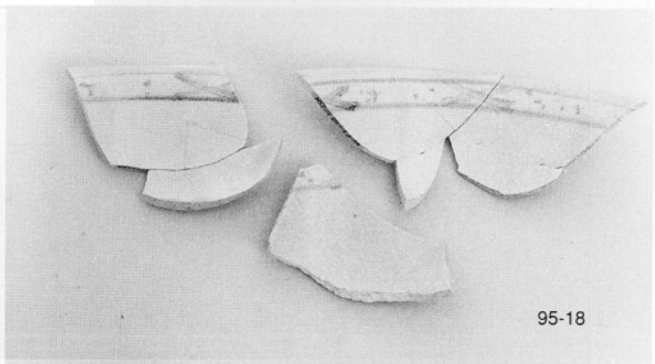
Ⅰ区出土石臼・瓦

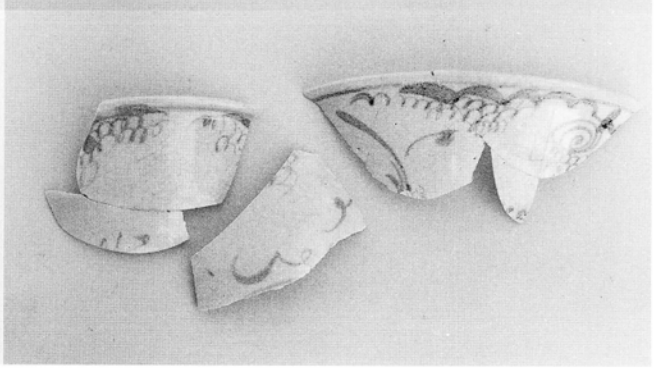
図版30

Ⅳ区遺構(1)出土遺物







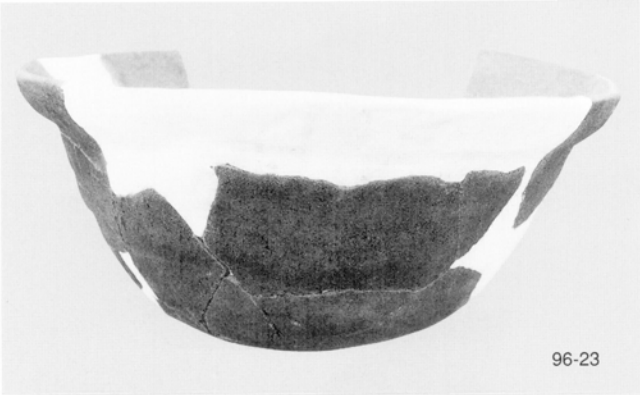


ＳＤ156(1)出土遺物

図版32

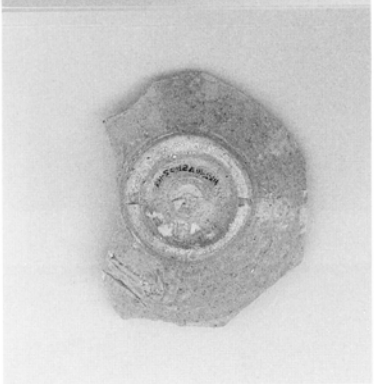
96-22

95-21


96-23

95-20

97-15

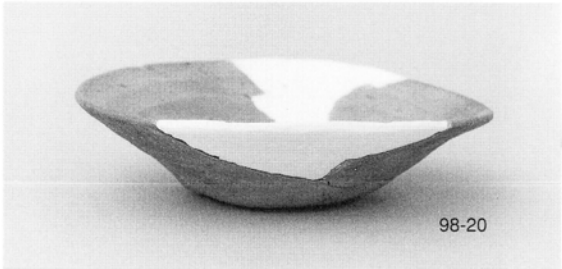


97-18

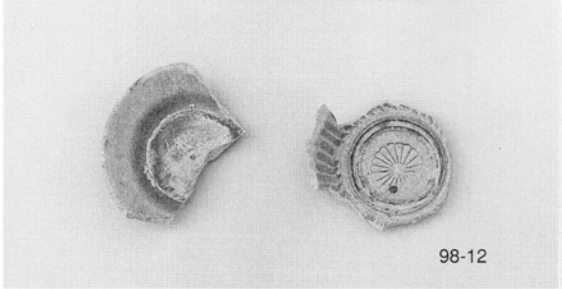
ＳＤ156(2)・Ⅳ区遺構(2)出土遺物

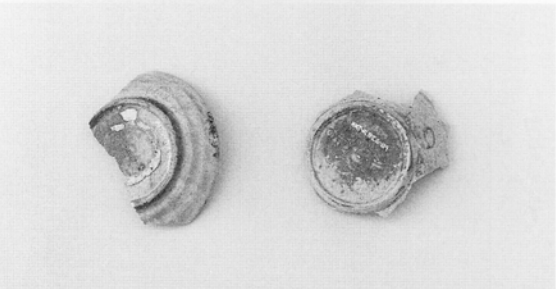
97-17

98-9


98-20

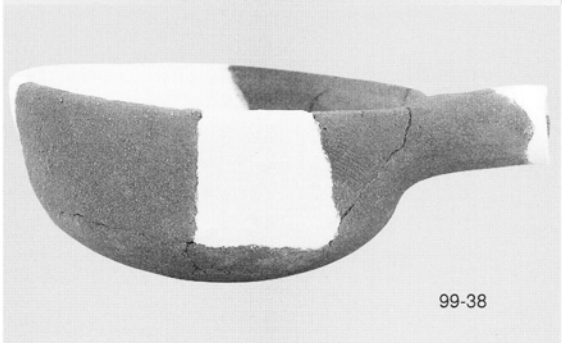
98-8


98-12



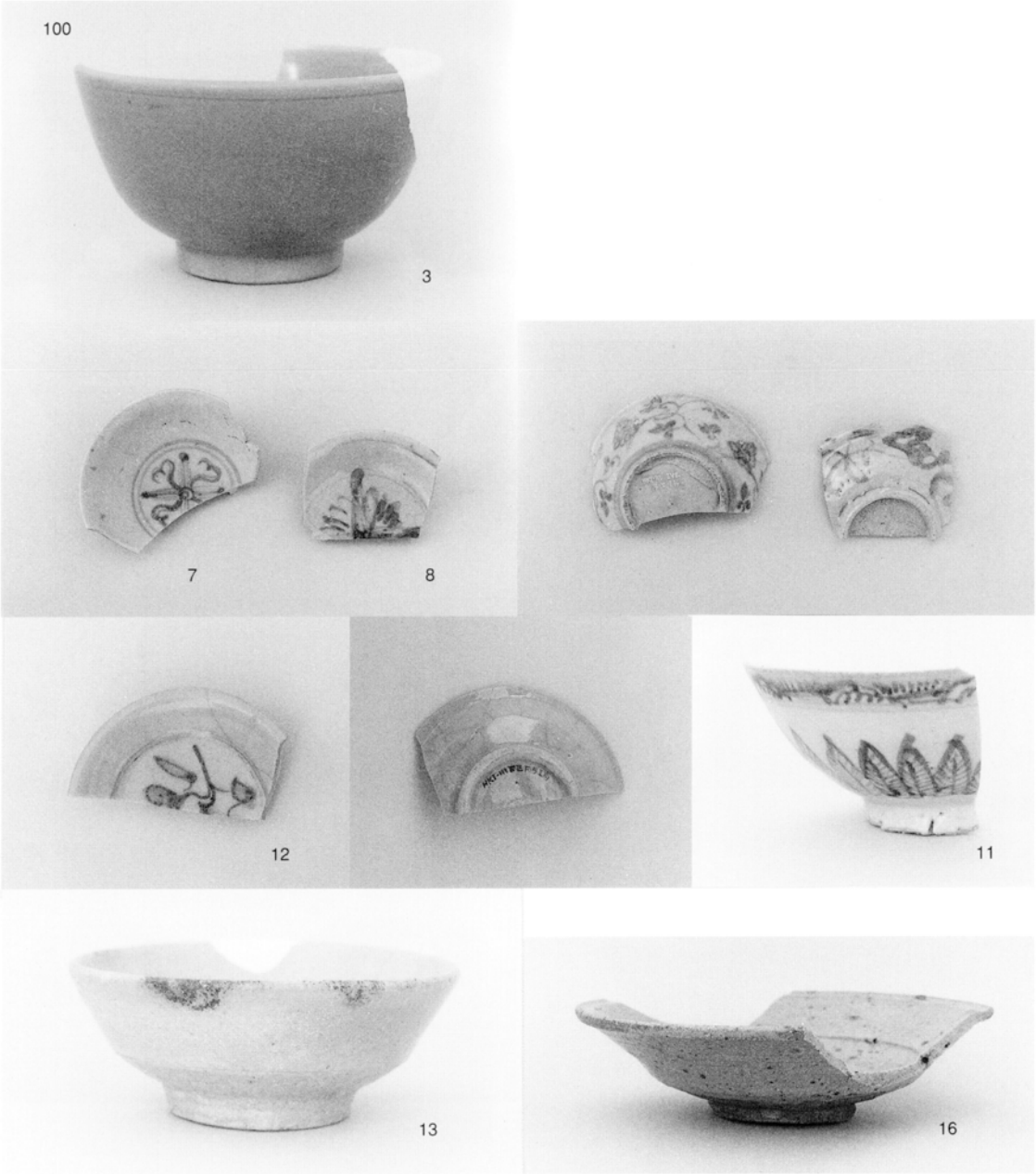
99-29

99-26

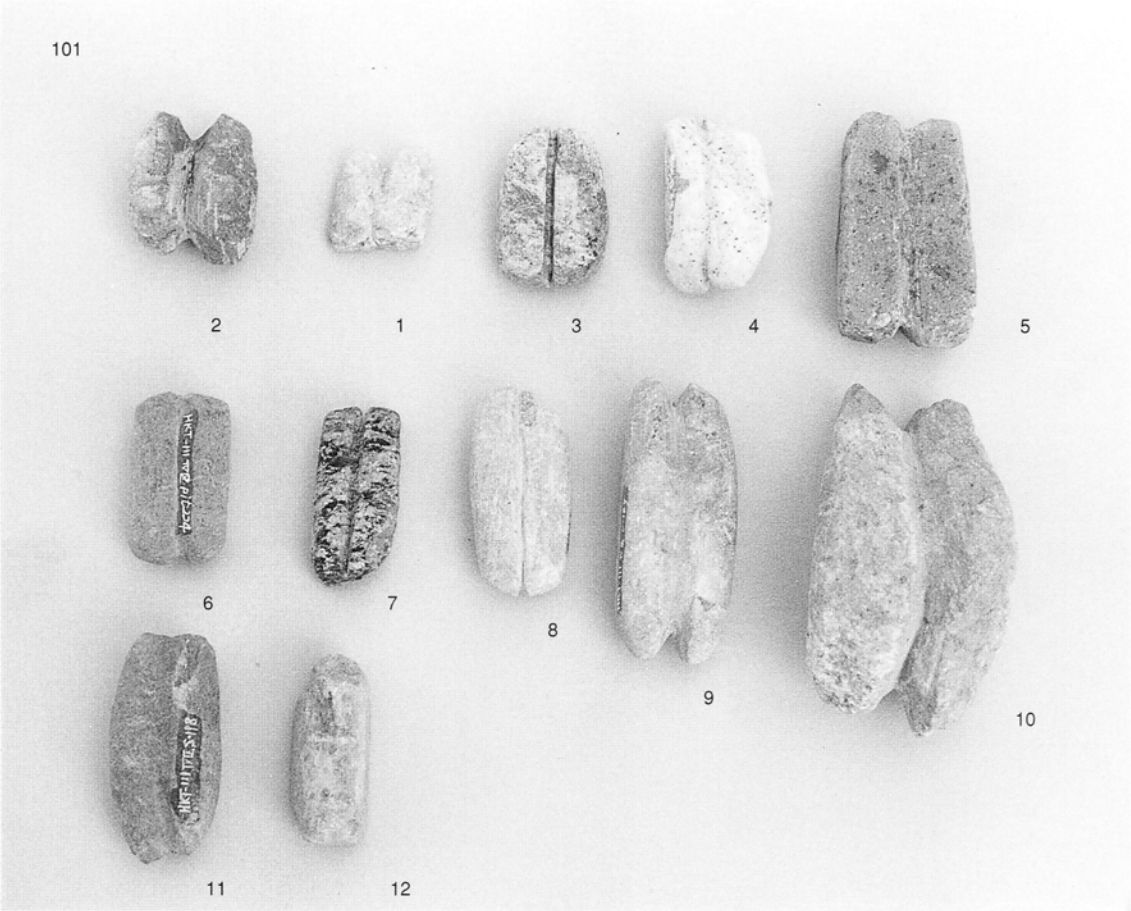

99-38

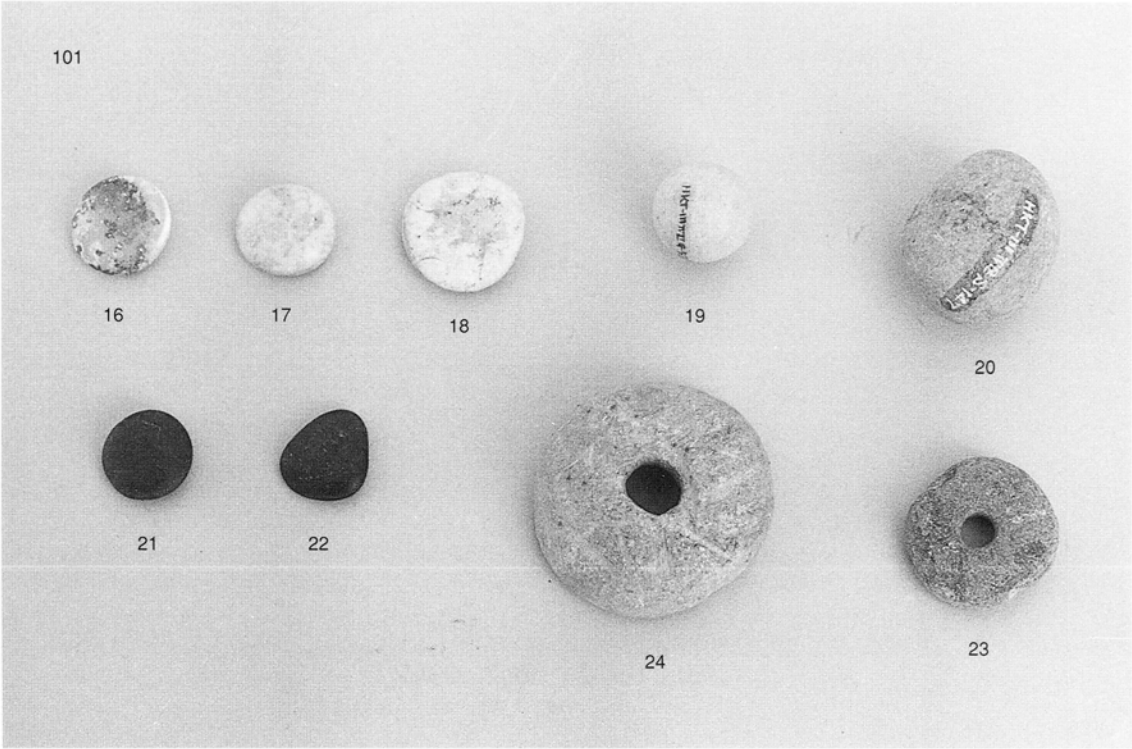
Ⅳ区遺構(3)出土遺物

図版34



Ⅳ区包含層出土石製品





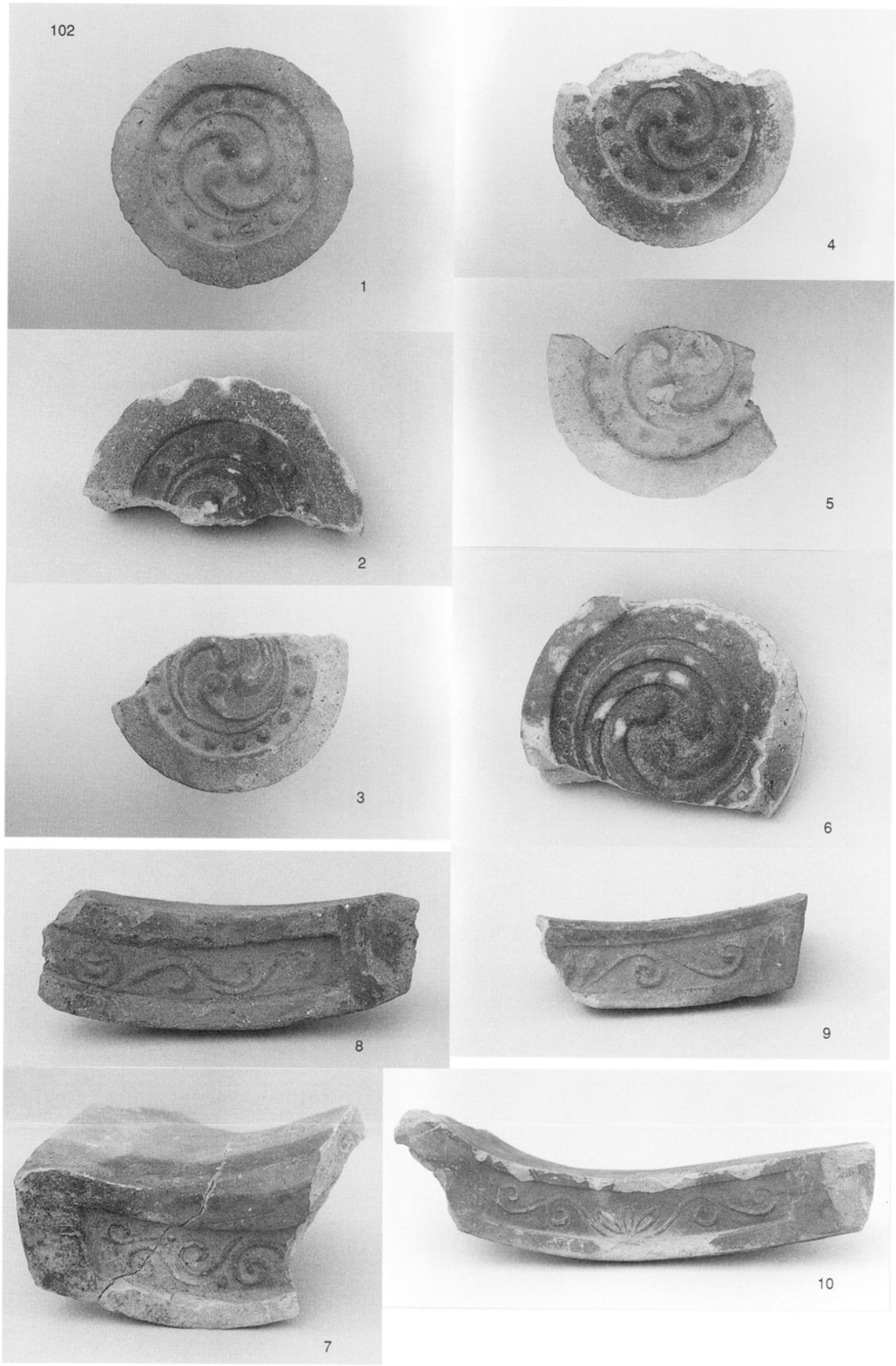
Ⅳ区出土石製品

25

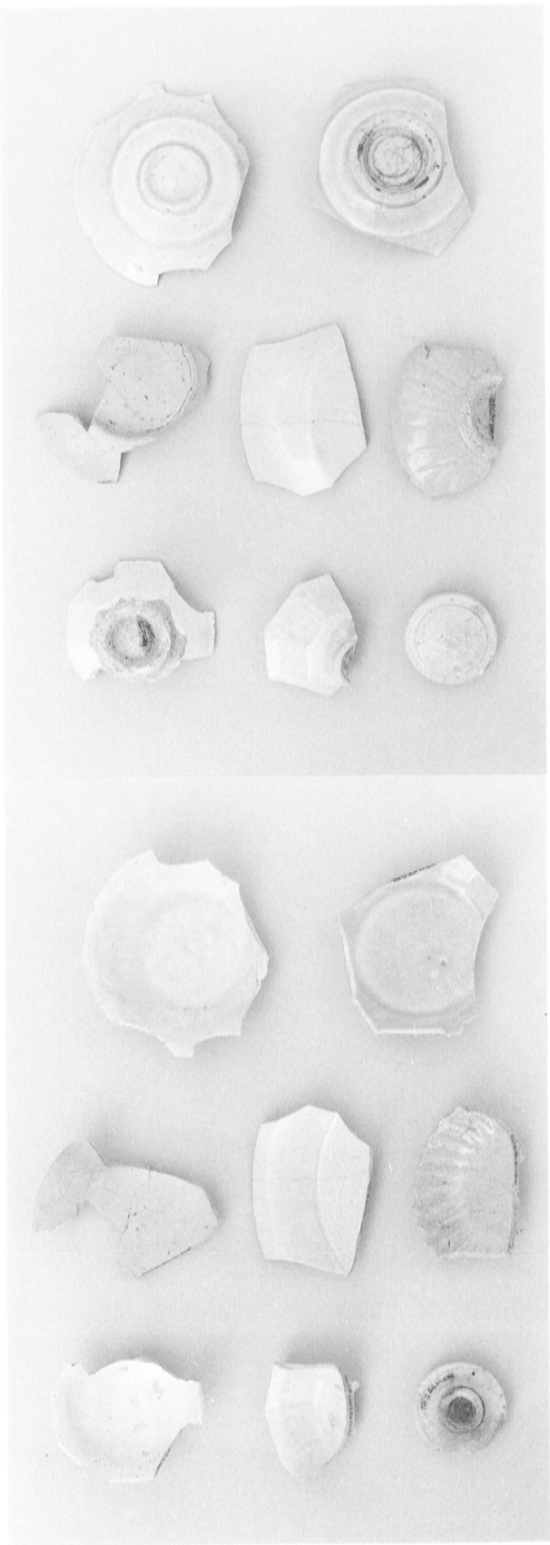
26

1

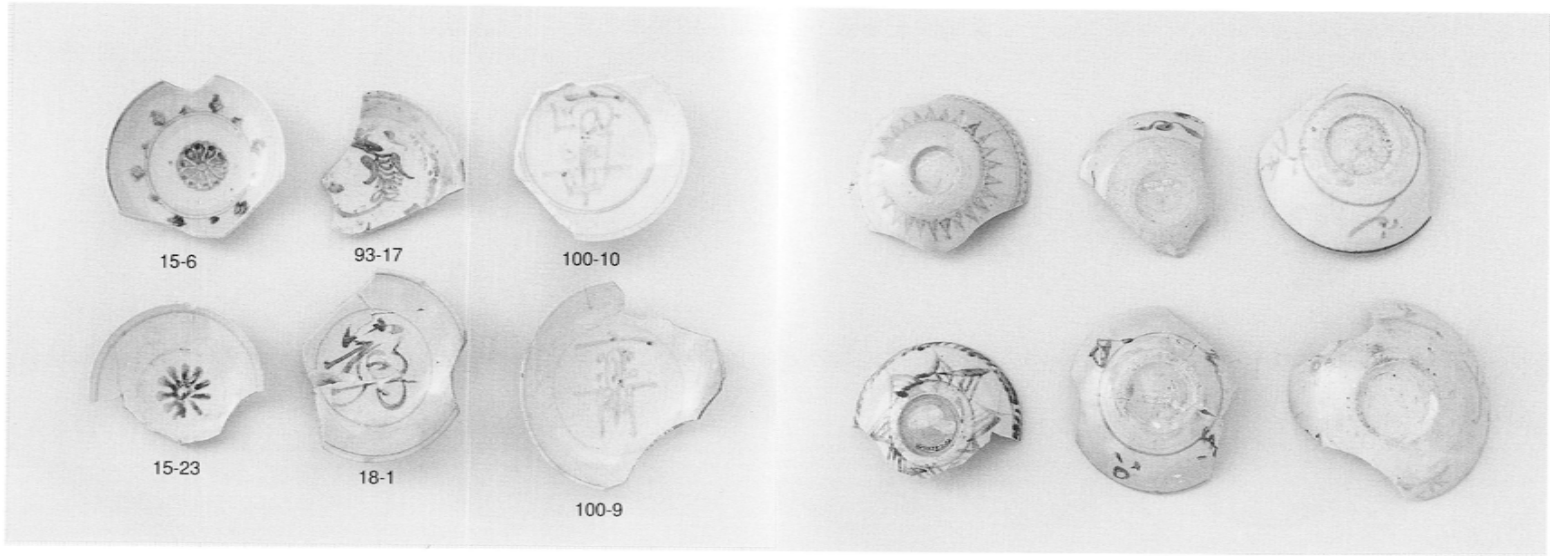
Ⅳ区出土石製品・土製品・金属製品

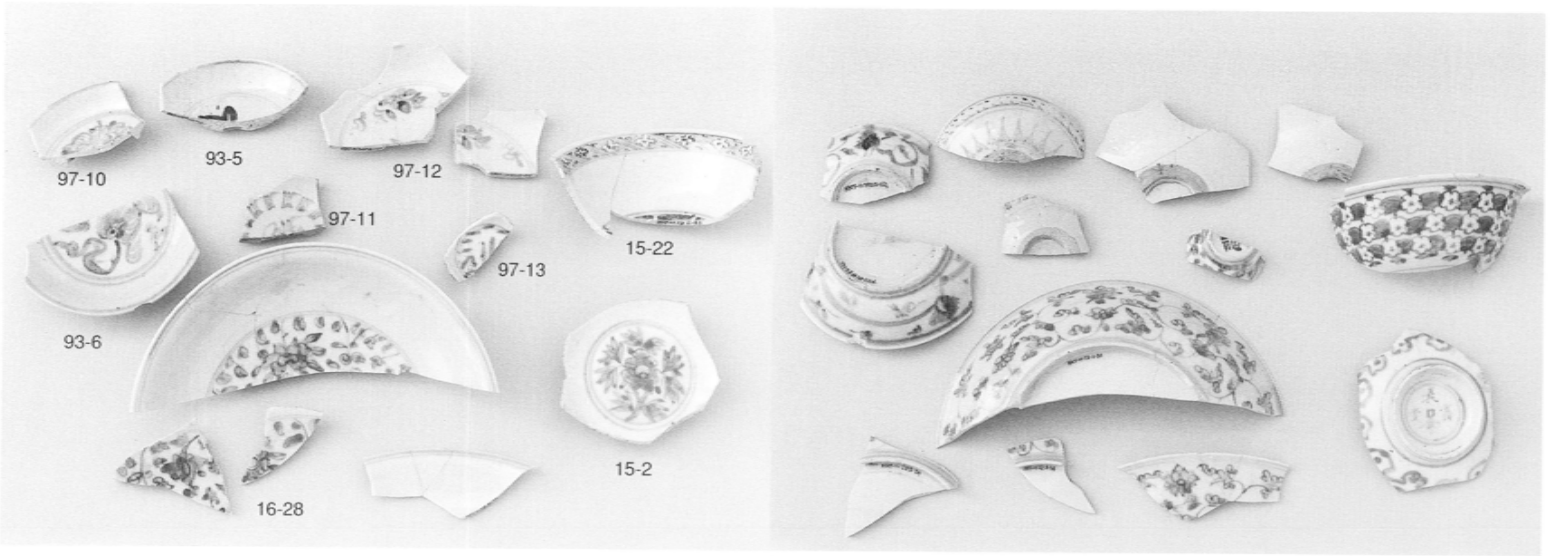


Ⅳ区出土瓦

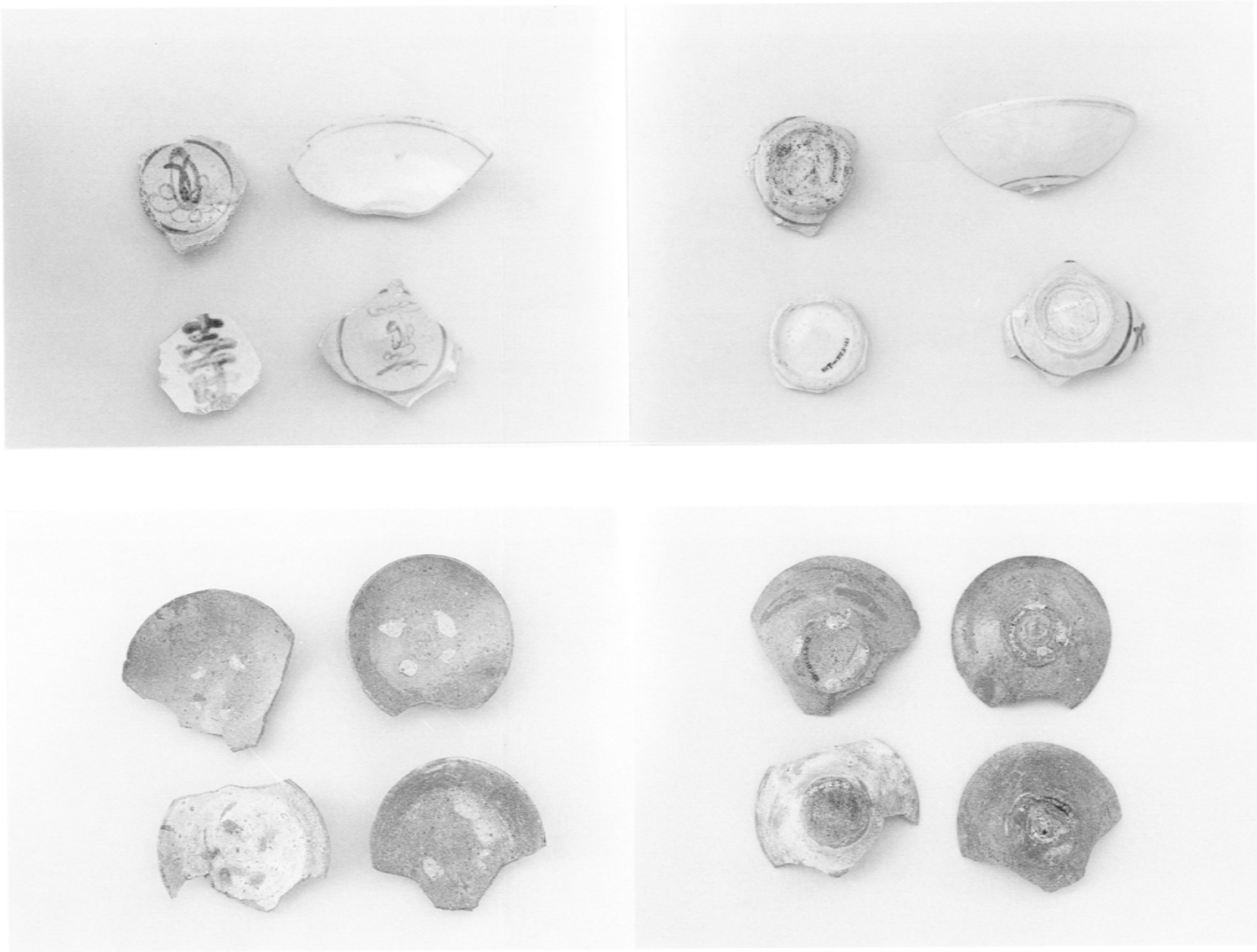


M区出土磁器


15-6
93-17
100-10
15-23
18-1
100-9

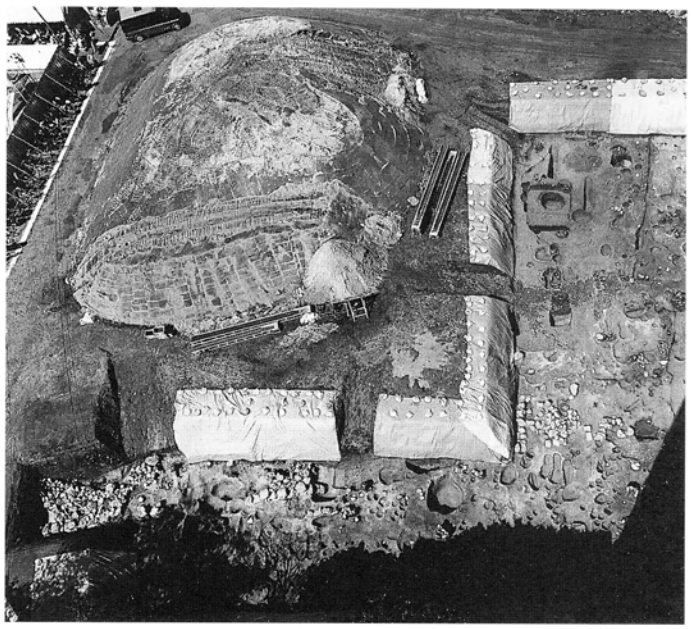

97-10
93-5
97-12
97-11
97-13
15-22
93-6
15-2
16-28

Ⅰ・Ⅳ区出土青花(1)



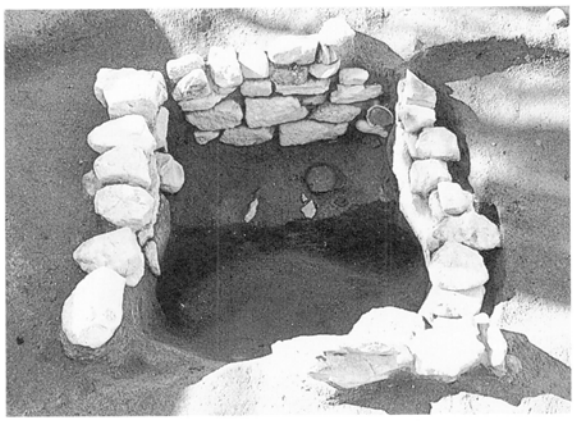
Ⅰ・Ⅳ区出土青花(2)・朝鮮王朝陶器

(1)　II区第１面全景（南東から）



(2)　II区第２面南西側（南東から）

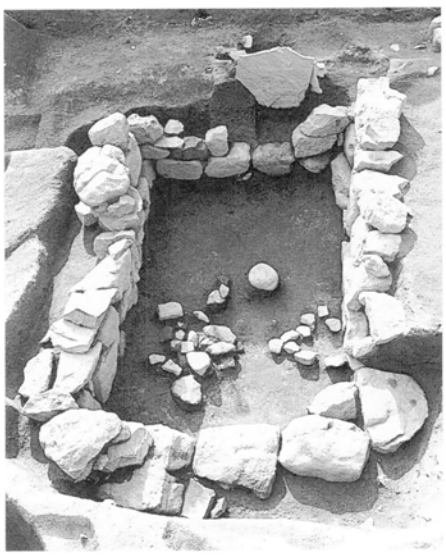
(3)　II区第２面北東側（南東から）



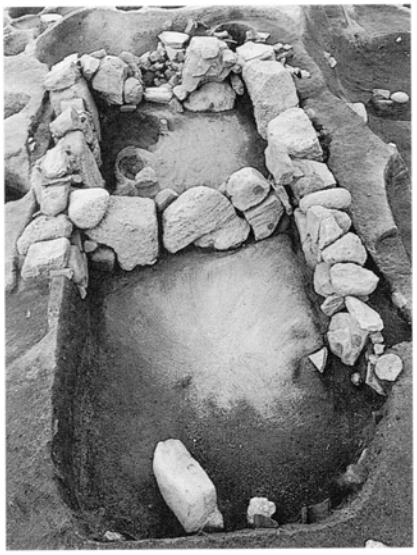
(1)　ＳＦ06（北東から）

(2)　ＳＦ56（北東から）

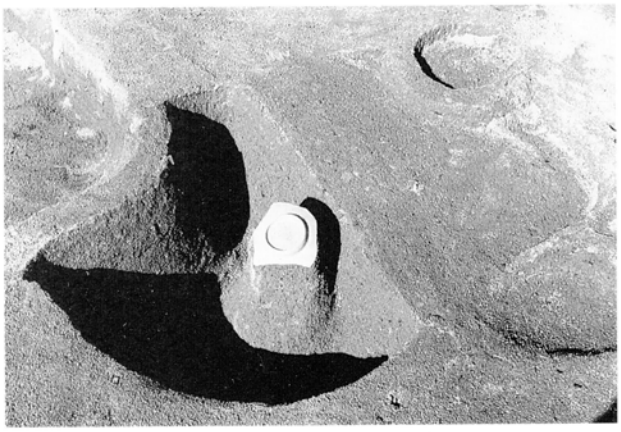
(3)　ＳＦ26（北西から）



(4)　ＳＦ27（北東から）



(5)　ＳＦ28（南東から）



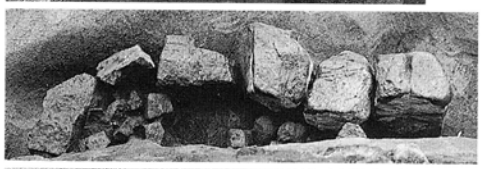
(6)　ＳＫ59（南から）

(7)　ＳＫ64（北西から）

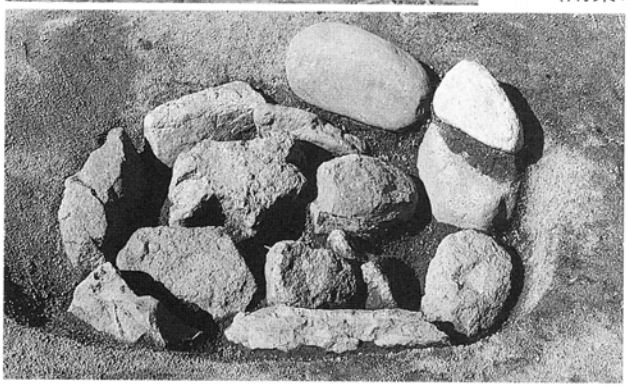
(8)　ＳＫ63（南から）

(1) ＳＦ793
（北東から）

(2) ＳＦ1019
（南東から）



(3) ＳＸ853
（南東から）



(4) ＳＸ1030（北西から）

(5) ＳＸ821
（南西から）

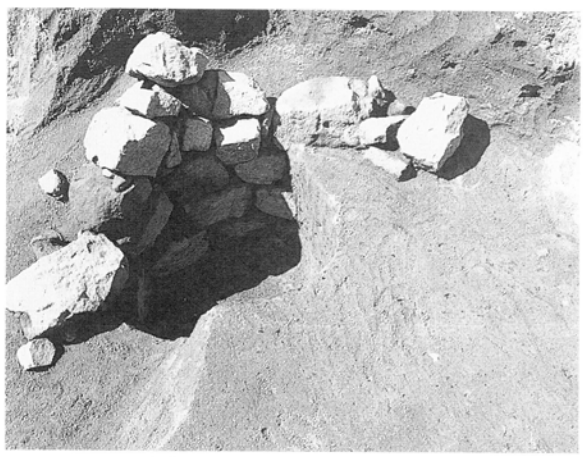
(6) ＳＸ816
（南西から）

(7) ＳＫ938（南西から）

(8) ＳＥ1083（南東から）

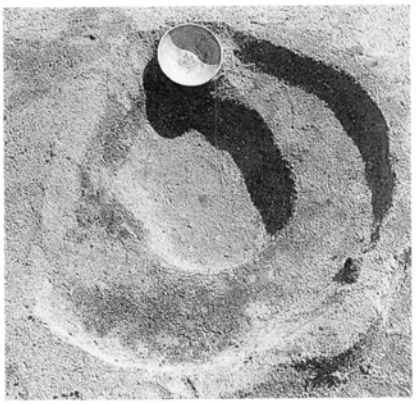
(9) ＳＥ1084（西から）

(10) ＳＥ811（北西から）



(11) ＳＥ1100（北から）

(1)　ＳＫ876（北から）



(2)　ＳＰ39（北西から）

(3)　Ⅱ区第３面Ｈ・Ｉ－９・10区（南から）

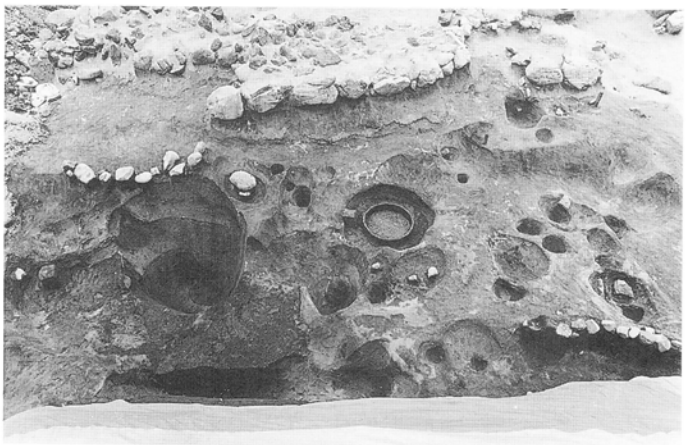
(4)　ＳＤ1071上面（南から）

(5)　ＳＤ1071（北から）

(6)　Ⅲ区第１面Ｄ－９・10区（北から）

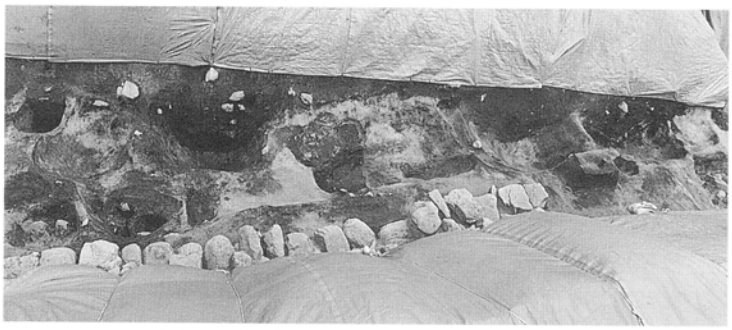
(7)　Ⅲ区第１面Ｄ－10・11区（北西から）

(8)　Ⅲ区第１面Ｃ－10区（北から）



(1)　Ⅲ区第２面Ｅ－10区（南東から）

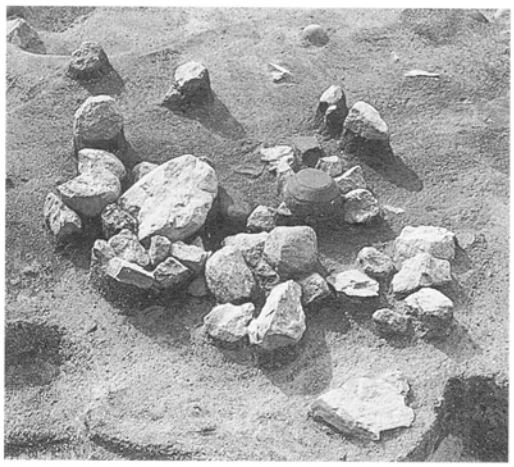
(2)　Ⅲ区第２面Ｄ－10・11区（南東から）



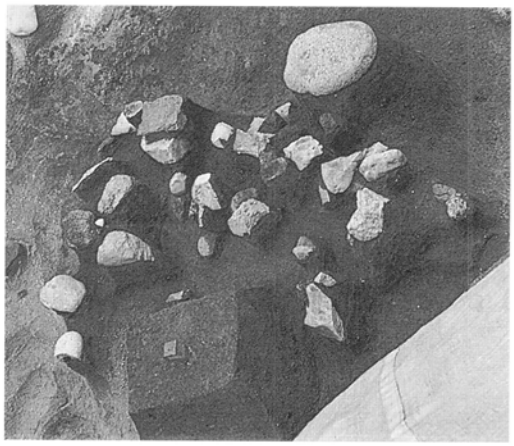
(3)　Ⅲ区第２面Ｃ－10区（北から）

(4)　Ⅲ区第２面Ａ・Ｂ－10区（南西から）

(5)　ＳＸ23（南西から）



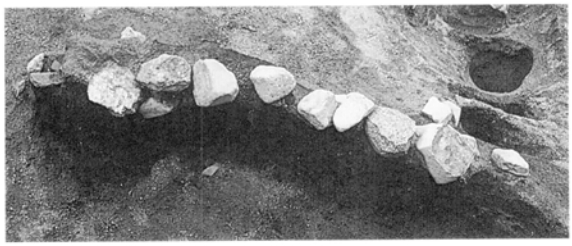
(6)　ＳＫ90（南から）



(7)　ＳＸ49（北から）

(8)　ＳＫ79（南から）

(1)　ＳＦ153（北東から）



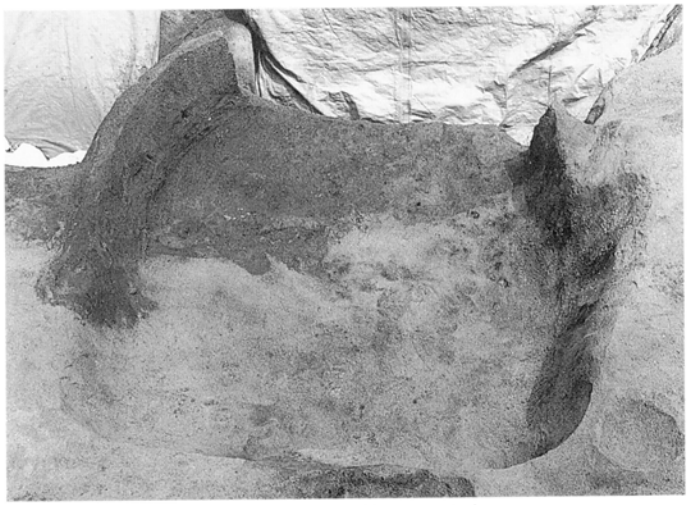
(2)　ＳＸ152（南東から）

(3)　ＳＫ81（北から）

(4)　ＳＥ27（東から）

(5)　ＳＫ107（北西から）

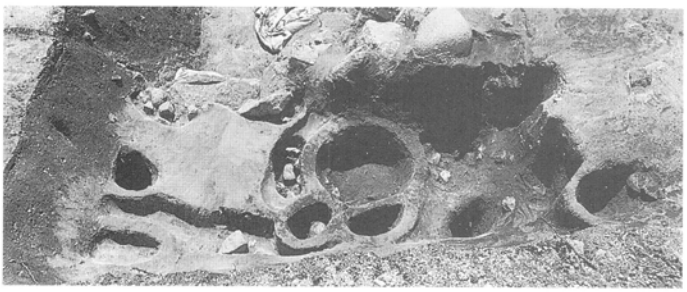
(6)　ＳＫ20（北西から）



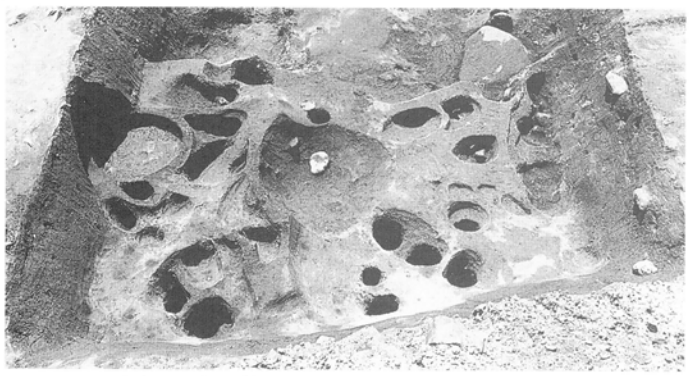
(7)　ＳＫ25（北西から）

(8)　ＳＫ148（東から）

(1)　III′区第１面全景（南西から）



(2)　III′区第２面Ｃ－９区（北西から）



(3)　III′区第２面Ｄ－９区（北西から）

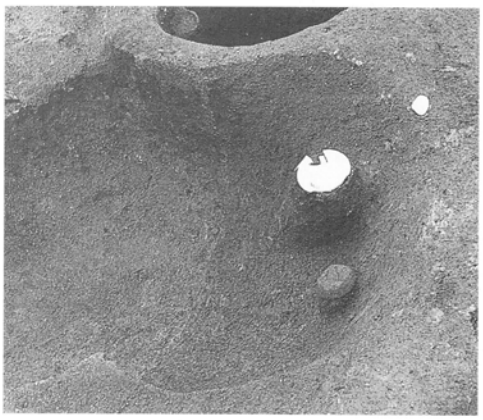
(4)　ＳＸ15（南から）

(5)　ＳＸ16（南東から）

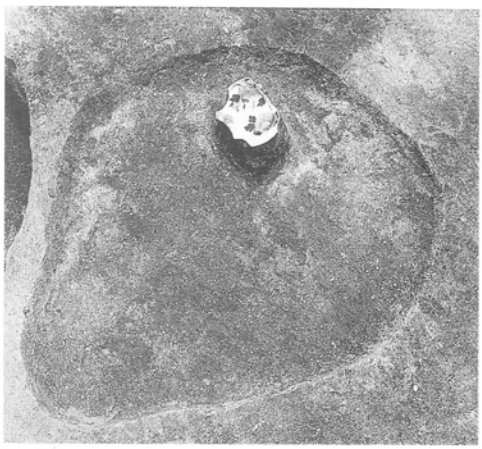
(6)　II′区第１面全景（南西から）

(7)　II′区第２面全景（南西から）

(8)　ＳＸ25（西から）



(9)　ＳＫ101（南西から）



(10)　ＳＫ22（西から）

(1)　ＳＦ64
（北西から）

(2)　ＳＦ64
（南西から）

(3)　ＳＦ62
（南西から）

(4)　ＳＸ86
（北東から）

(5)　ＳＫ65（北西から）

(6)　ｆ－ｆ′土層断面（南から）

(7)　ｇ－ｇ′土層断面（北から）

(8)　ｈ－ｈ′土層断面（北から）

(9)　ｉ－ｉ′土層断面（北から）

(10)　ｊ－ｊ′土層断面（南西から）

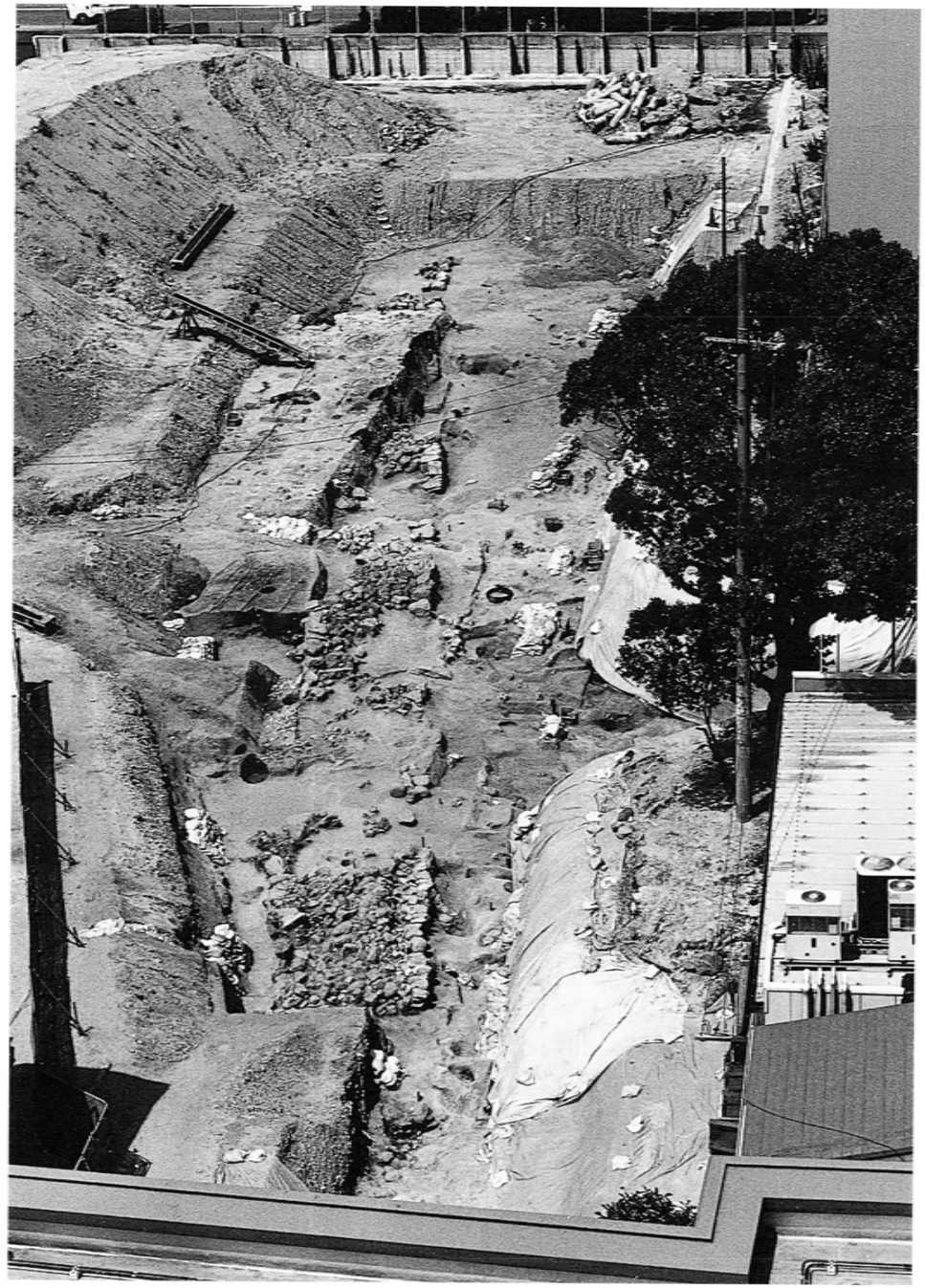
(11)　ｋ－ｋ′土層断面（北から）

(12)　ｌ－ｌ′土層断面（北から）

(13)　ｍ－ｍ′土層断面（北から）

(2)　石塁遺構と遠景（南西から）

(3)　石塁遺構（東から）



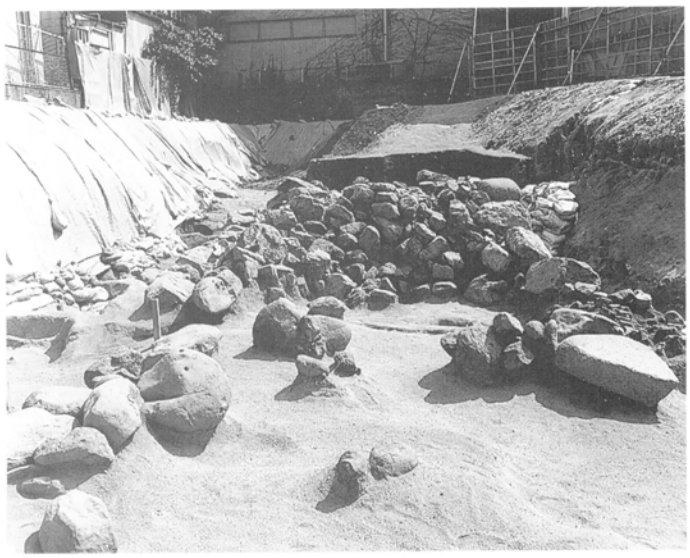
(1)　石塁遺構（南西から）

(1) 石塁遺構A（西から）

(2) 石塁遺構A（南東から）

(3) 石塁遺構A（南西から）

(4) 石塁遺構A階段状部分（北西から）



(5) 石塁遺構A（北東から）

(1) 石塁遺構A・B（東から）

(2) 石塁遺構B（北東から）

(3) 石塁遺構B（西から）

(4) 石塁遺構B石積状況（西から）

(5) 石塁遺構B（東から）

(1) 石塁遺構C・D・E（東から）

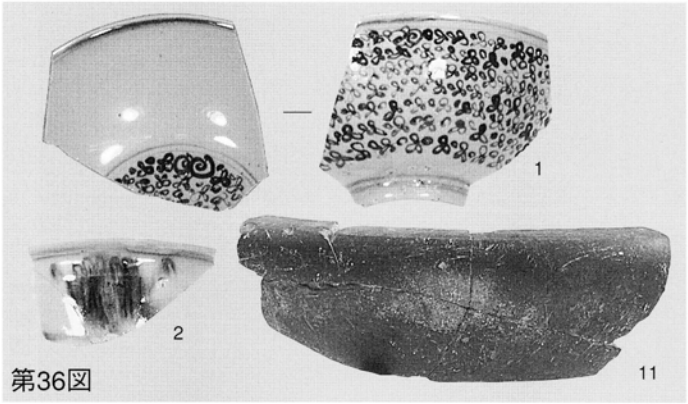
(2) 石塁遺構C・D・E（南西から）

(3) 石塁遺構C（南東から）

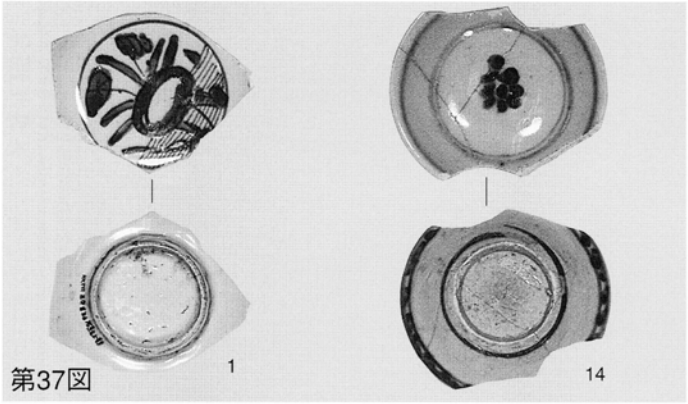
(4) 石塁遺構C（西から）

(5) 石塁遺構D（西から）

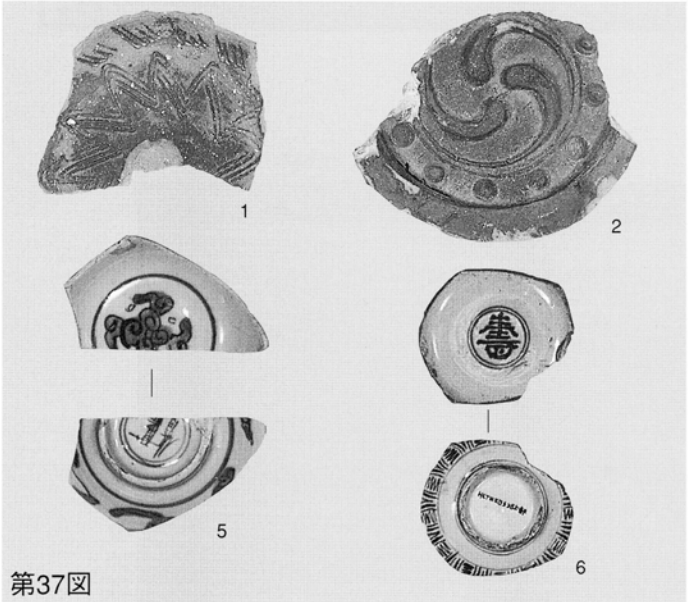
(6) 石塁遺構E（南東から）



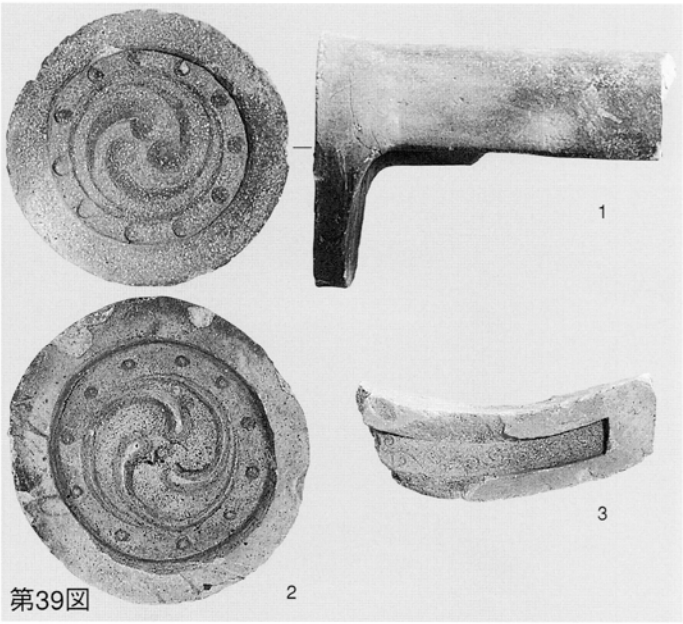
第36図



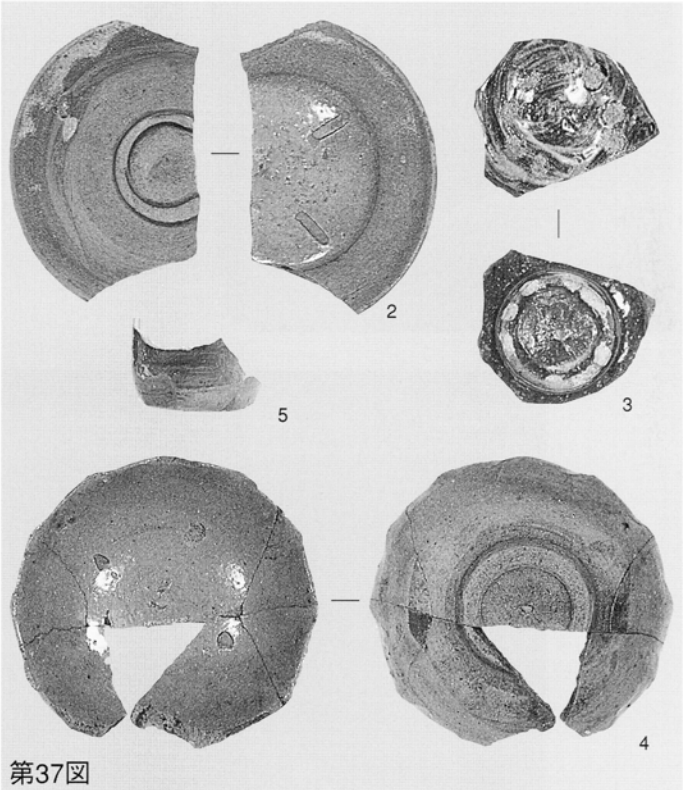
第37図



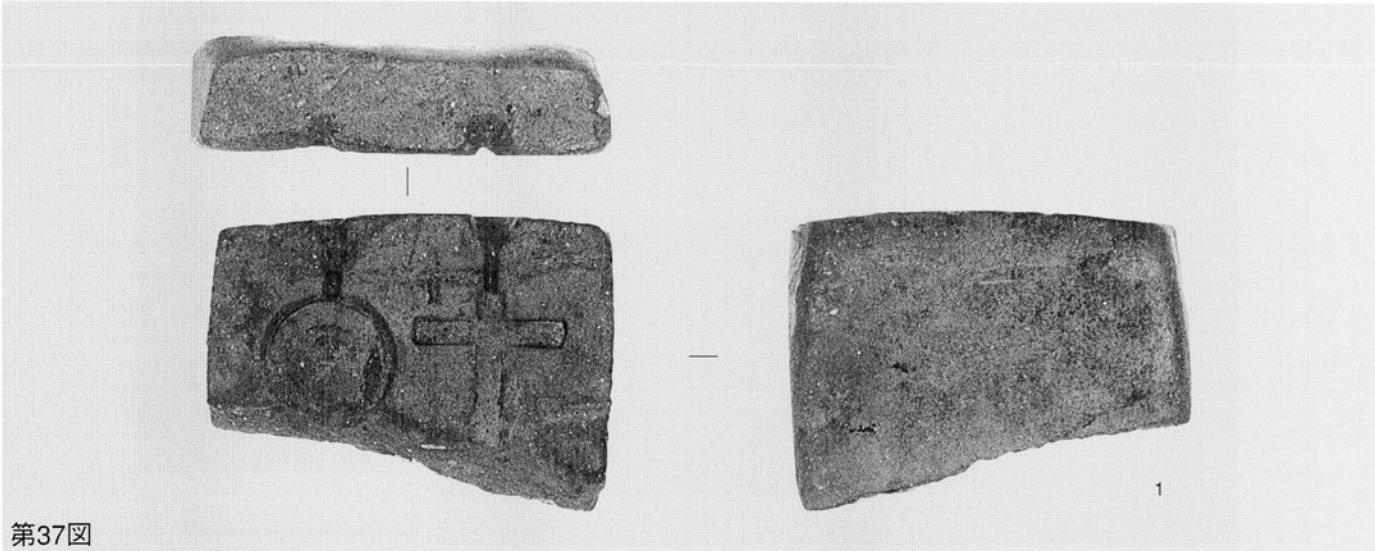
第37図



第39図



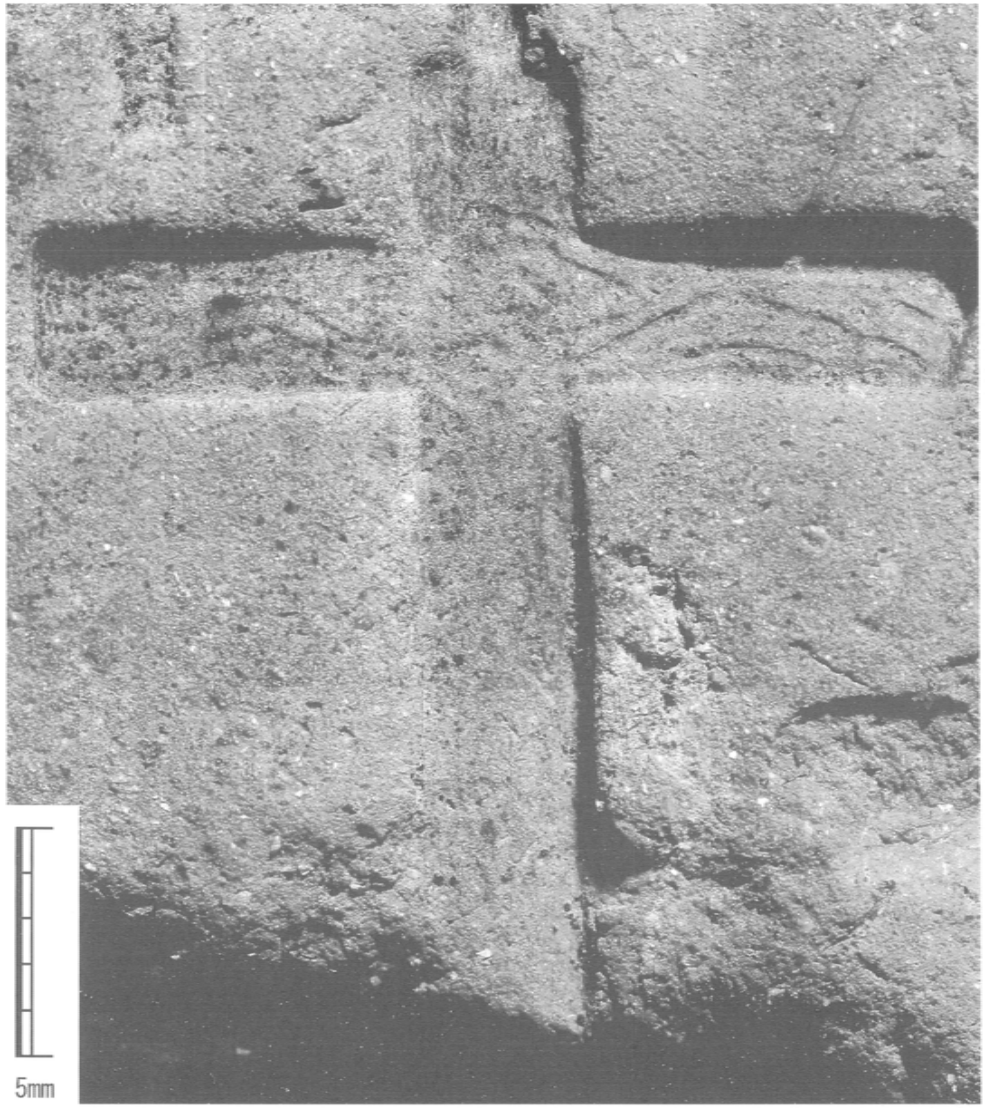
第37図



第37図

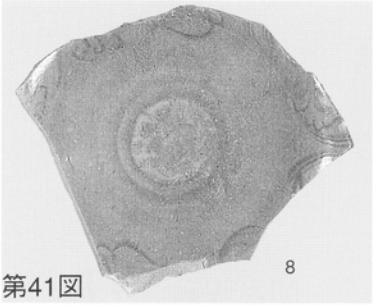
II区出土遺物(1)

メダイ・十字架鋳型　拡大写真

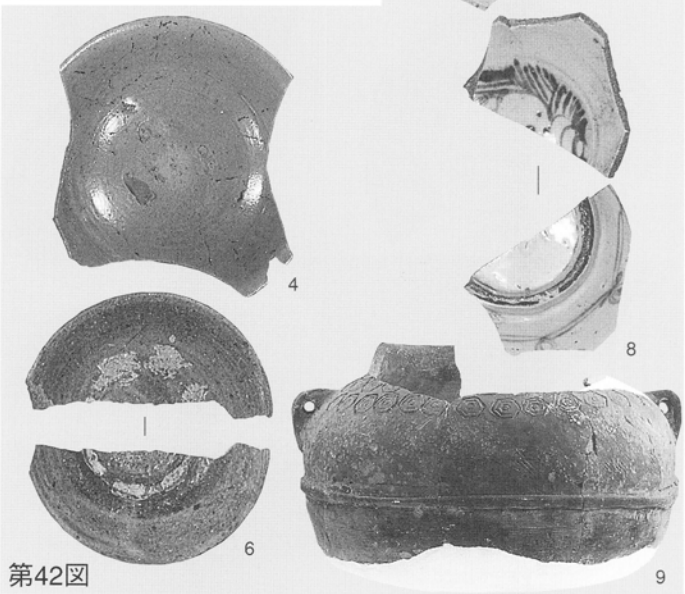


十字架部分　顕微鏡写真

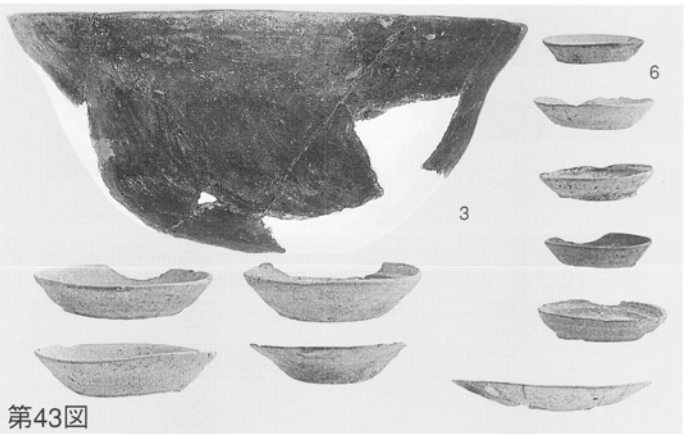
メダイ部分　顕微鏡写真



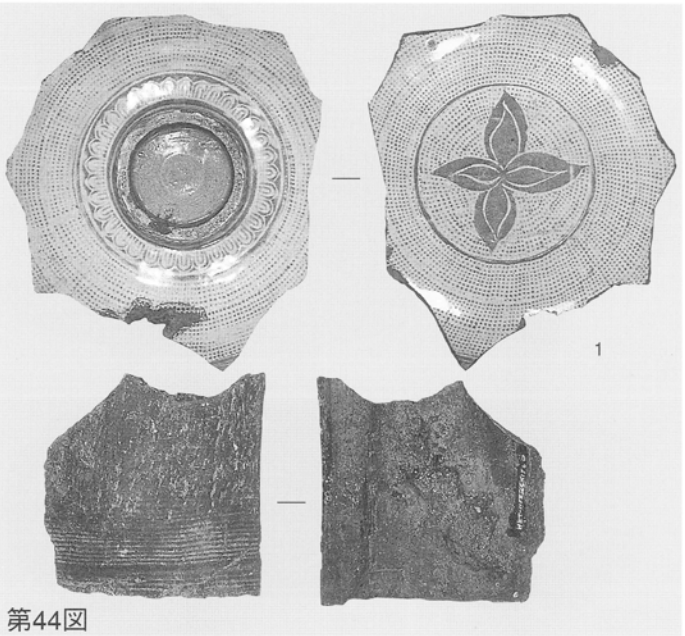
第41図



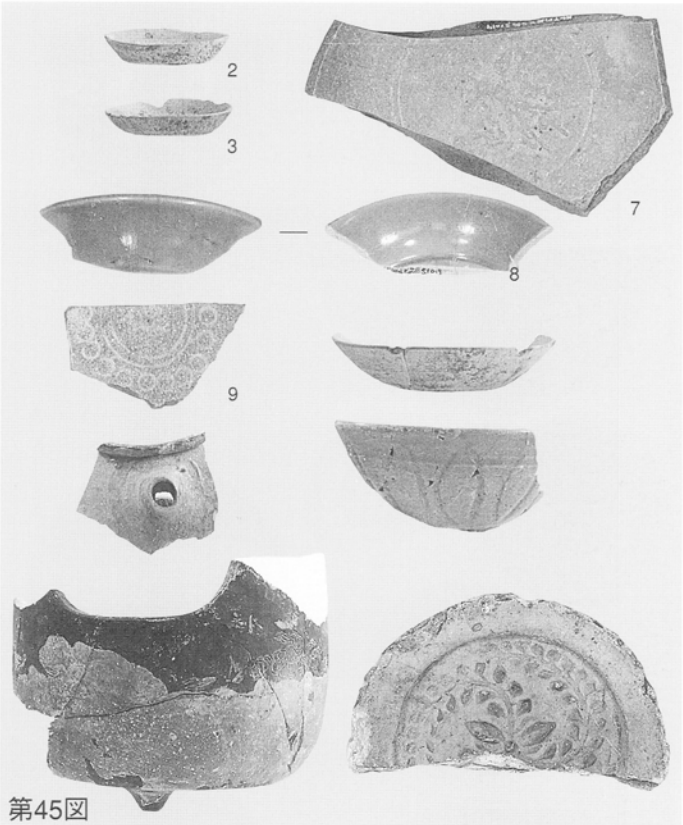
第42図



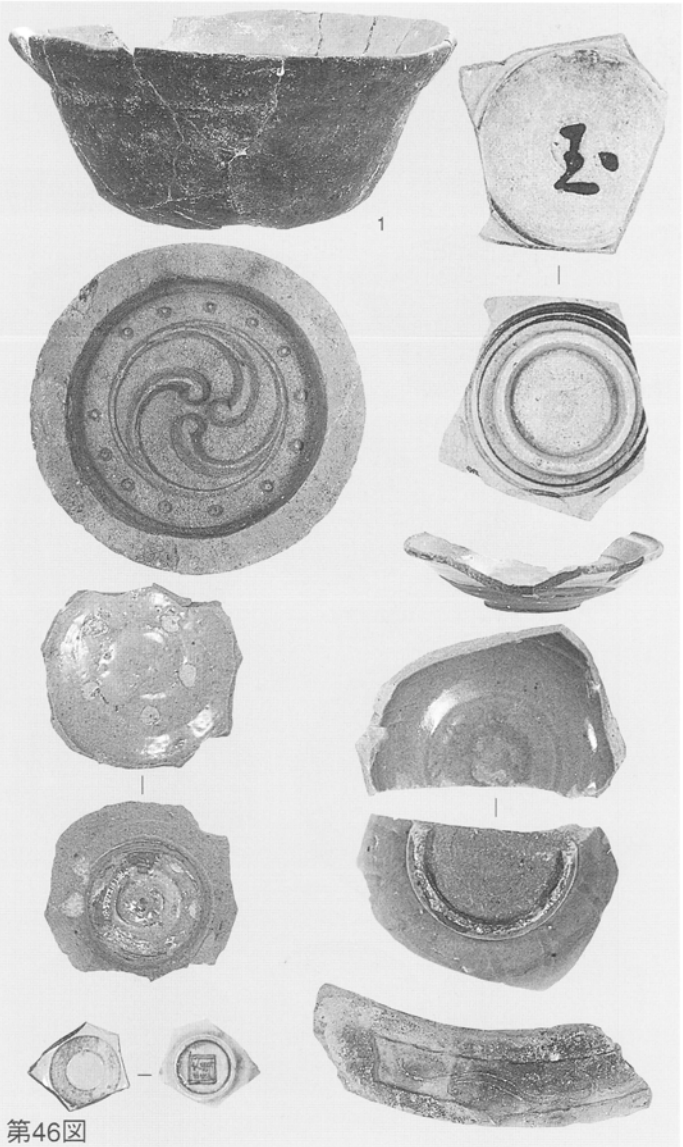
第43図



第44図

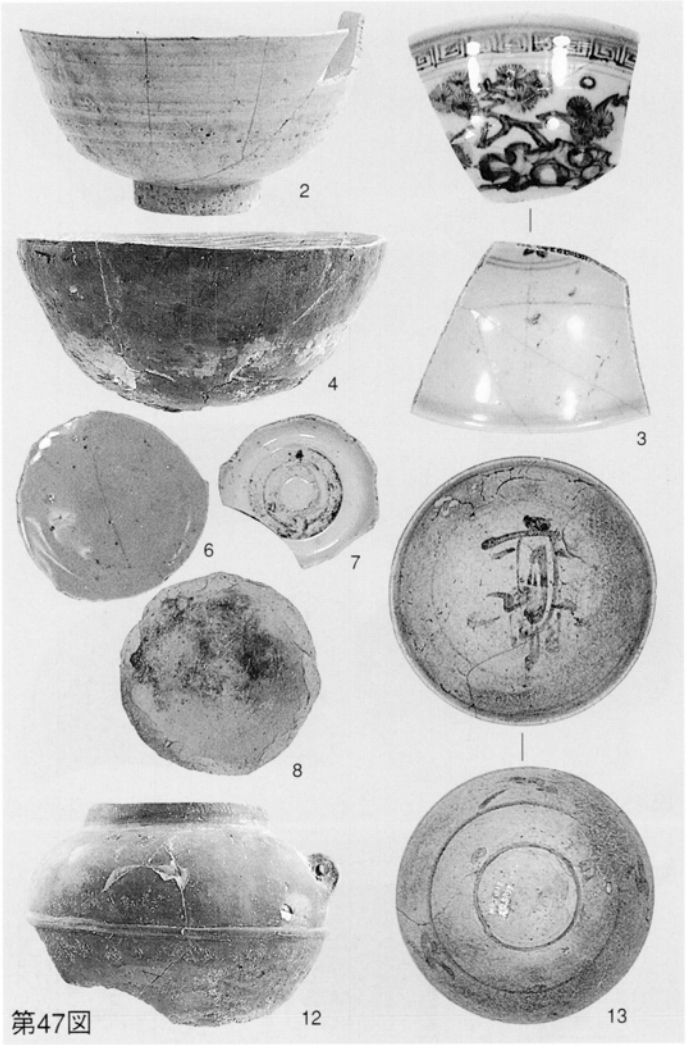


第45図

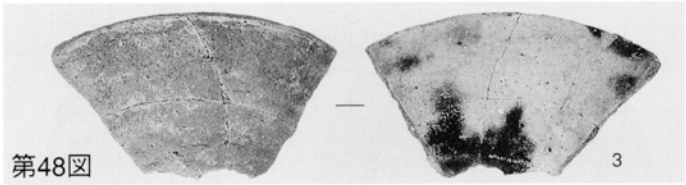


第46図

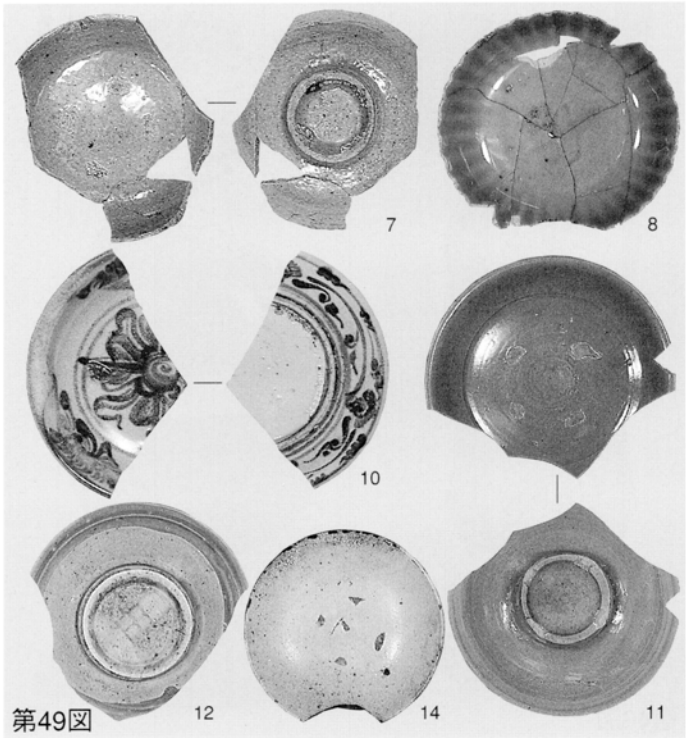
II区出土遺物(2)



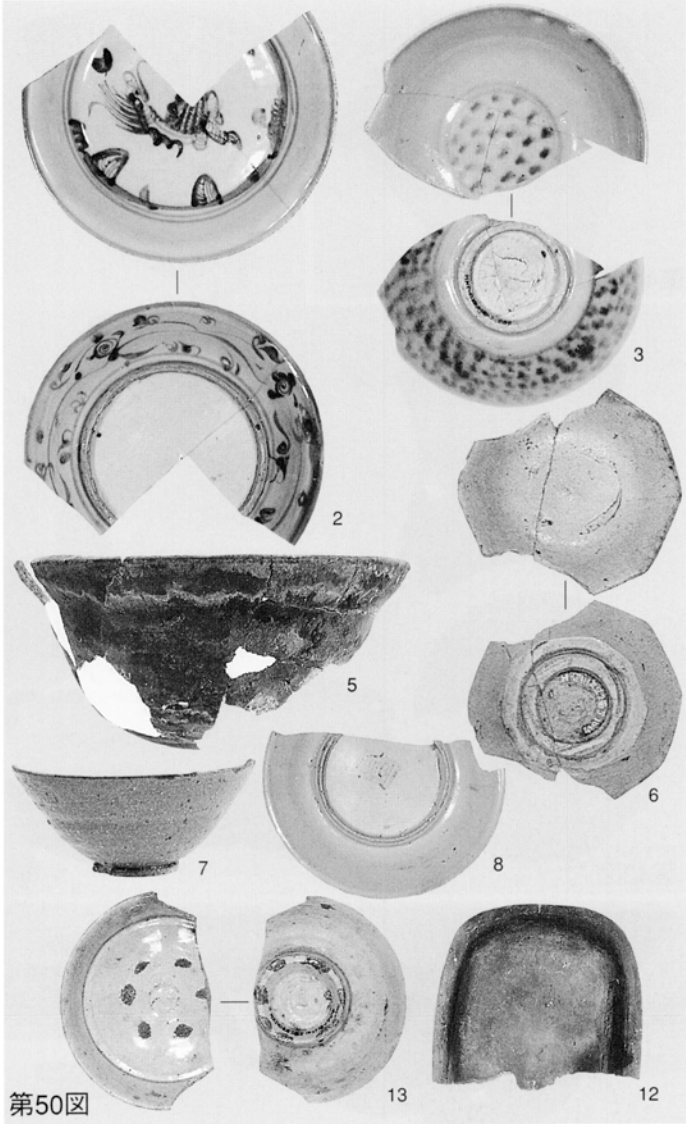
第47図



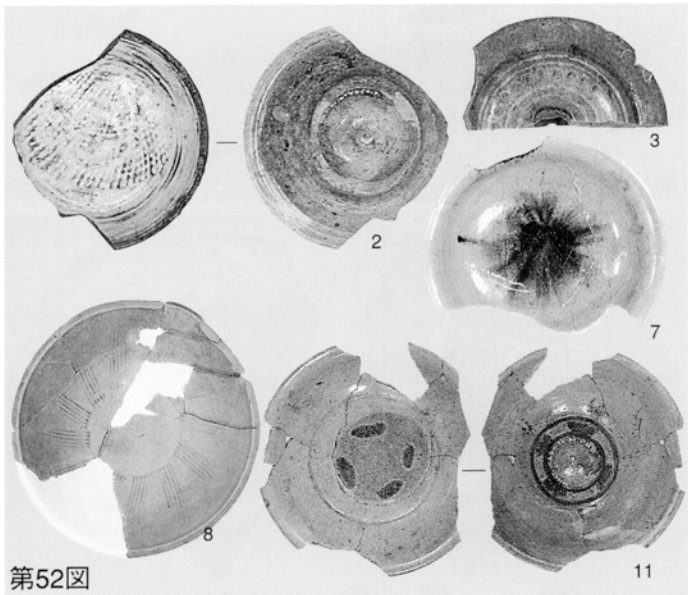
第48図



第49図

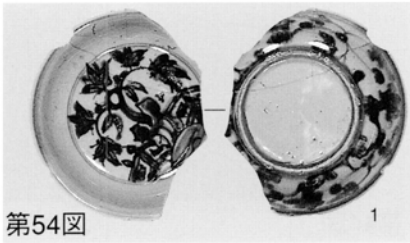


第50図



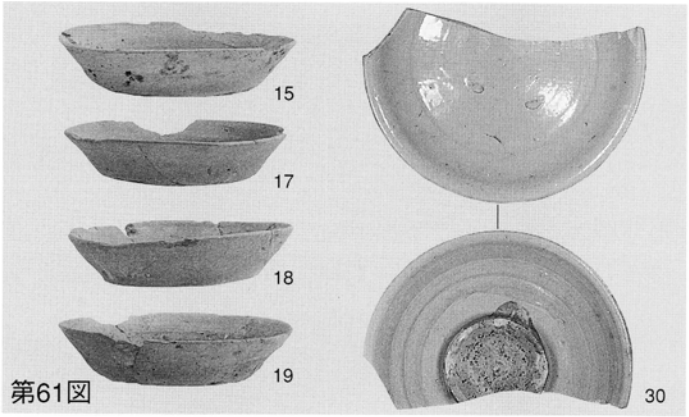
第52図

第53図

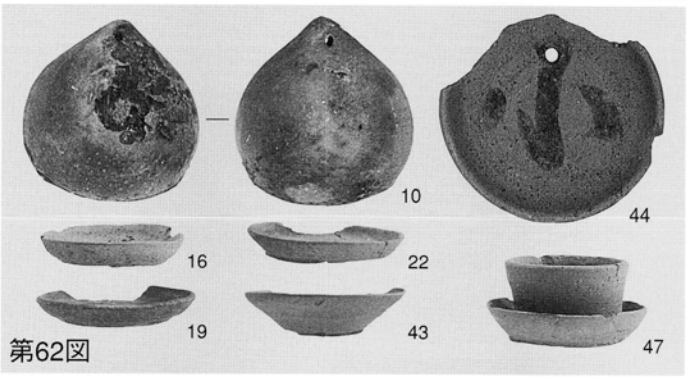


第54図

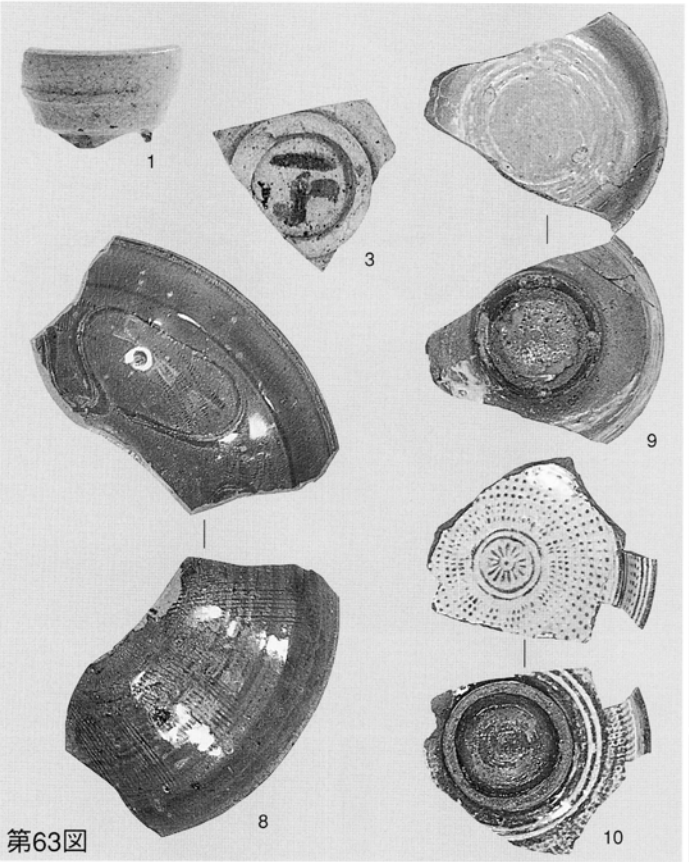
II区出土遺物(3)



第61図

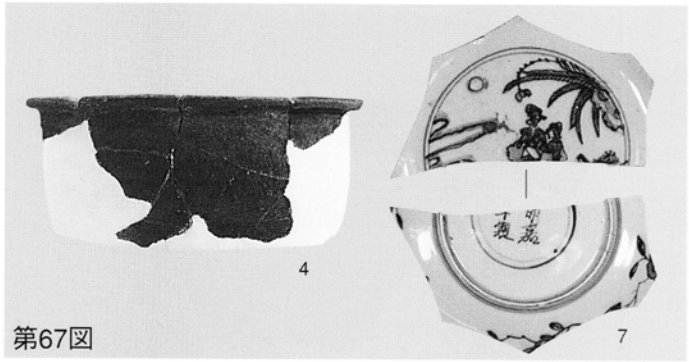


第62図

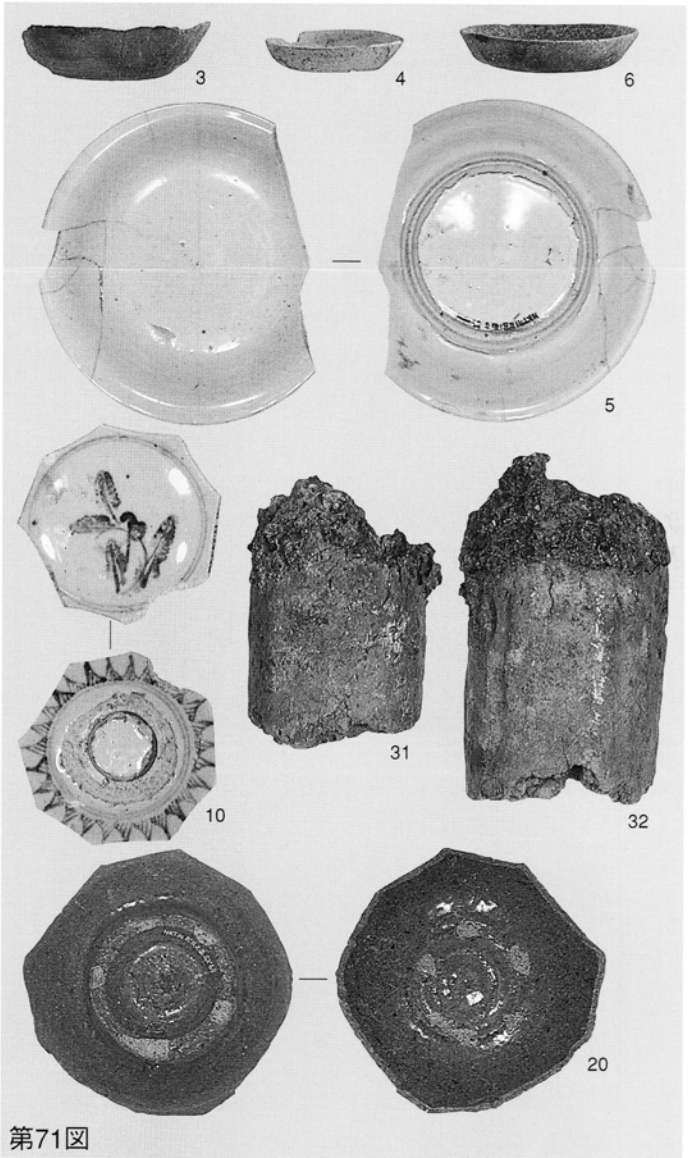


第63図

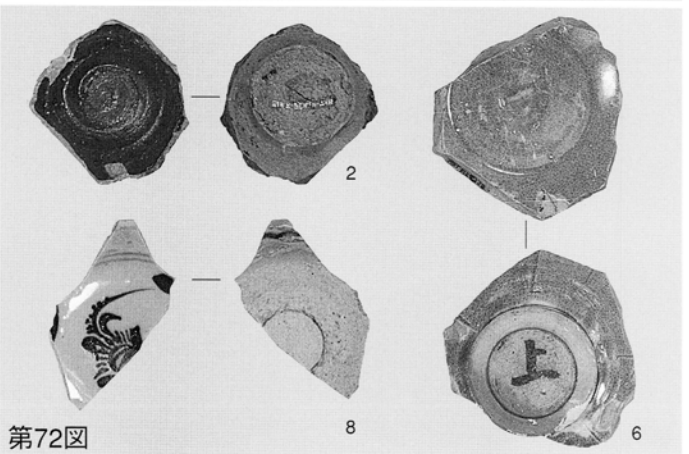
第66図



第67図



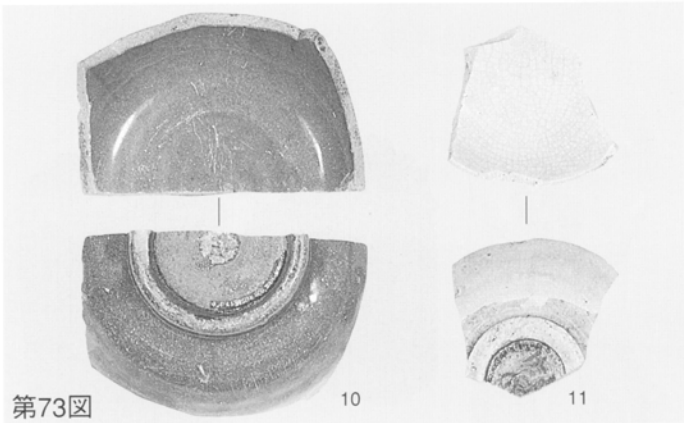
第71図



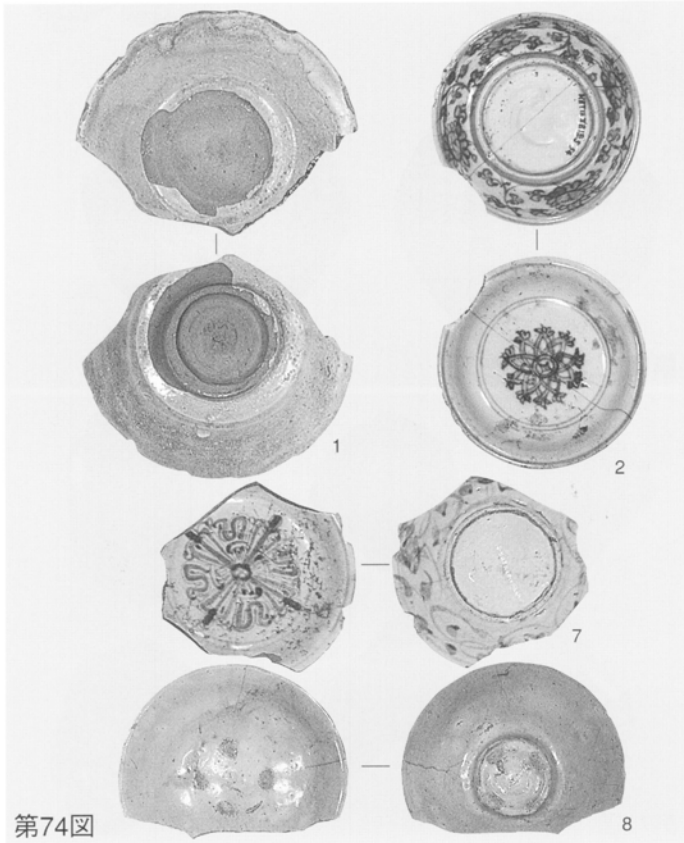
第72図

III区・III′区・II′区出土遺物

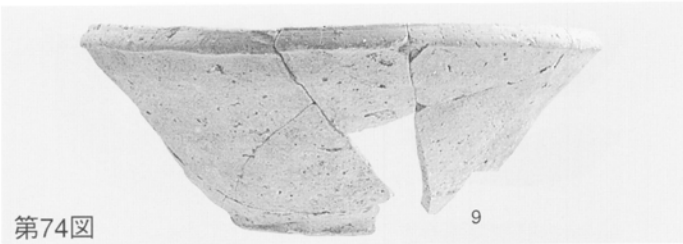
第72図



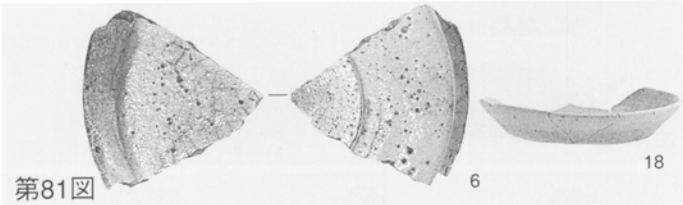
第73図



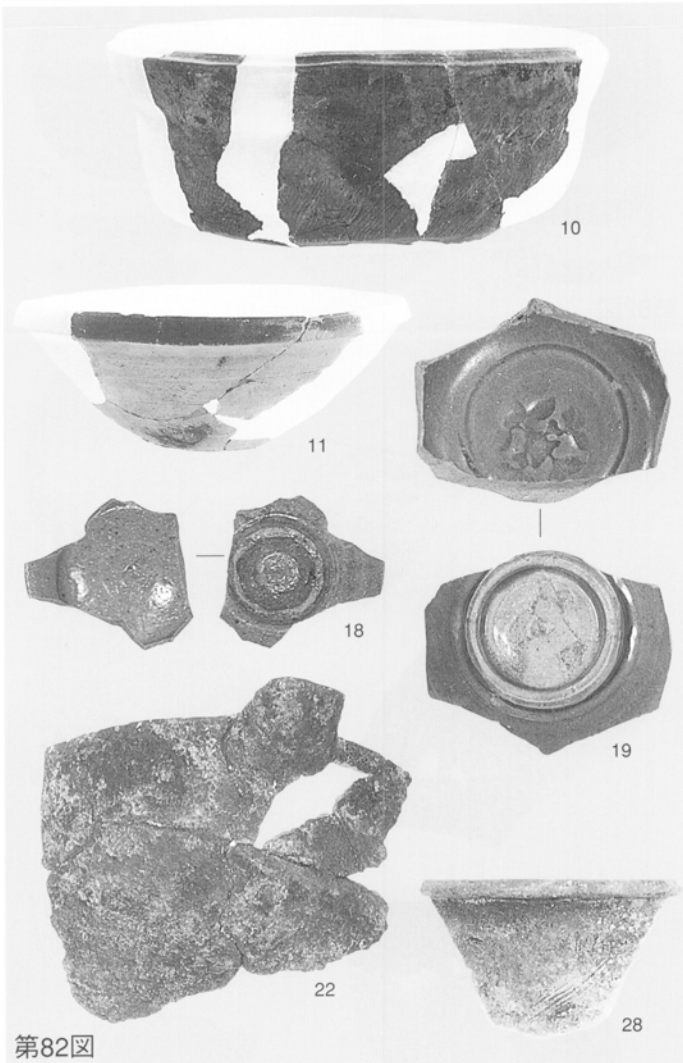
第74図



第74図



第81図



第82図

土錘

II´区・石墨遺構関係出土遺物

博　多　85

ー博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

2002年（平成14年）３月29日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　大野印刷株式会社

福岡市博多区榎田２丁目２番65号